岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 42

山陽自動車道建設に伴う
発掘調査

2

浅口郡鴨方町

◦益　坂・和田遺跡
◦益　坂・向原遺跡
◦地頭上・宮の脇古墳
◦益　坂・阿坂古墳
◦小坂西・沖の店遺跡

1981・3

岡山県文化財保護協会

文化課

和田遺跡 弥生第１号墓 玉類出土状況

沖の店遺跡 1号窯――土師器椀を生産

序

山陽自動車道は，大阪府吹田市を起点とし瀬戸内海沿岸の主要都市を経て，山口県山口市に至る延長470kmの高速自動車道であります。

建設省岡山国道工事事務所では，岡山県倉敷市～岡山県笠岡市間の建設を担当しています。この間の道路予定地内にある文化財（遺跡及び古墳等）を保存すべく，文化庁及び岡山県教育委員会と協議し，昭和54年度より岡山県浅口郡鴨方町地内の和田，向原，両名，大畔，沖の店遺跡及び宮の脇，阿坂古墳の記録保存をすべく発掘調査を実施したものです。

本書は，昭和54年度及び55年度に実施した調査結果を編集し，貴重な埋蔵文化財の実態を記録保存するものです。

この記録が古代から中世にかけての人々の生活等を解明するうえに貴重な資料になり，これらの調査記録は郷土の埋蔵文化財として，教育，学術のために広く活用されることを期待するものであります。

なお，この発掘調査及び本書の編集は，岡山県教育委員会に委託し実施したものであり，ここに関係各位の御尽力に対し深甚なる謝意を表すものであります。

昭和56年 3 月

建設省岡山国道工事事務所

所長　結　城　康　雄

序　　文

瀬戸大橋の工事が一昨年に着工され，7・8年後にはその容姿を表すことになると思われますが，それに併行して県南部の幹線道路の整備も推進されています。

このうち山陽自動車道の建設はすでに姫路～備前間の工事が着工され県内でも八木山インターチェンジ（備前市）を中心に工事が進められております。

岡山県教育委員会では，建設省岡山国道工事事務所より委託を受け昭和54年度からこの山陽自動車道の鴨方インターチェンジを中心として鴨方町内の発掘調査を二カ年にわたって行ってまいりました。

鴨方の背後にひかえる霊峰遙照山は，かつて厳蓮寺として古代から中世にかけて備中の山岳仏教の中心地として栄え，竹林寺山は現在天文台でにぎわっています。

中世の鴨方は室町時代細川氏が築城したと伝えられる鴨山城を中心に栄え，細川氏の菩提寺とされる長川寺も残されております。

このような由緒深い鴨方のほぼ中央を山陽自動車道が東西に縦断することになり，また，地頭上，益坂にかけてはインターチェンジも付設されることになりました。道路予定地からは和田遺跡の弥生時代の特殊器台，多量の玉類を持つ土壙墓群，沖の店遺跡の鎌倉時代の全国的にも珍しい窯址，室町時代の土器の数々などは，浅口郡内はもとより県下でも貴重な資料を提供しました。

本書はこれらの調査によって得た成果を報告するものであります。

発掘調査にあたっては，建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所，鴨方町役場，鴨方町教育委員会，地元各部落，山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員諸氏のご協力，ご援助を受けました。関係各位に厚くお礼申しあげます。

昭和56年　3　月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. この報告は山陽自動車道建設に伴い，建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所から委託を受け，岡山県教育委員会が昭和54・55年度に第1次および第2次の発掘調査を行った，浅口郡鴨方町益坂：和田遺跡，同地頭上：宮の脇古墳，同益坂：阿坂古墳，同小坂西：沖の店遺跡等の調査報告である。
2. 発掘調査は，昭和54年4月15日～12月20日・昭和55年4月15日～7月31日まで行い，文化課文化財保護主査伊藤晃，文化財保護主事浅倉秀昭が担当した。また，初年度百間川遺跡の報告と重なったため，10～11月の2ヵ月間，浅倉と文化財保護主事江見正己が交代し調査・整理に加わった。なお，初年度12月以降，2年次10月以降は整理作業を行った。
3. 発掘調査にあたっては，山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員，水内昌康，近藤義郎，西川宏，間壁葭子，西岡憲一郎，根木修，藤田憲司，鴨方町長小林芳郎，同開発課長渡辺義夫，同主幹清水佐一，同課長補佐佐藤圭一，同教育委員会教育長吉川忠雄，同事務局職員諸氏，同文化財保護委員石部貞樹らの指導助言，協力，援助を得，また発掘作業にあたっては地元部落を中心にして，初年度は，前田信一，勝田清一，中西比一，中西定夫，勝田熊二，江本鉄治，築山清，横山芳幸，小川初夫，遠山末一，近藤益二，石部房代，石部房子，横田おすえ，遠山幸子，横山喜久枝，前田春江，前田卓枝，秋田千鶴，小川幸，瀬尾トキエ，勝田きぬえ，渡辺真知子，2年次は，岡田智義，岡田孝雄，北村勝次，田中輝治，筒井康弼，中村享，西山保，福田定一，松原勉，向原隆範，横構鉄左エ門，横山秀夫，小野緑，落合久美子，団迫富久江，永原ツル子，長尾知恵子，西山玲子，早川精子，原文江，虫明水江，森原恭子，森原律子等の協力を得て行った。
4. 熱残留磁気の測定にあたっては，54年度，55年度2回にわたり島根大学理学部，時枝克安先生にお願いし，玉稿を頂いたので各遺構の後に掲載させて頂いた。
5. 本報告書の執筆・編集は伊藤・浅倉・江見が行い，石器の実測には平井典子，土器の実測には山本悦世，北村智子，宇垣匡雅，拓本採取には禰木早苗，遺物写真撮影は文化課職員井上弘によるものである。また，土器復元には近藤友子，坪井和江，森本耶須子，網沢靖枝の協力を得た。
6. 本書に使用した地形図（図2）は国土地理院発行の2万5千分の1地形図（笠岡）を複製したものである。
7. 本書に使用した方位は磁北を示し，レベルは海抜高である。
8. 出土遺物及び写真・実測図等は文化課分室（岡山市西古松265）において保管している。なお，沖の店遺跡の窯址は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター秋山隆保氏の指導により鴨方町において移築保存処置が取られ，同町郷土資料館建設予定があり，そこに展示・公開される予定である。

（表紙台字は禰木早苗嬢による）

目　　次

序　　文

例　　言

第1章　序　　説

第1節　発掘調査に至る経過……1

第2節　歴史・地理的環境……2

第2章　昭和54年度の調査

第1節　第1次調査の概略……4

第2節　第2次調査の概略……4

第3節　54年度日誌抄……4

第4節　和田遺跡の調査……8

（1）　和田遺跡の概略……8

（2）　A　調　査　区……9

（3）　B　調　査　区……22

（4）　C　調　査　区……43

（5）　D　調　査　区……44

（6）　石器，鉄器，古銭……46

（7）　小　　結……50

第5節　向原遺跡の調査……51

（1）　向原遺跡第1地点……51

（2）　尾小見屋敷跡……54

1）　井　戸　址……54

2）　出土遺物……55

（3）　小　　結……56

第6節　宮の脇古墳の調査……57

（1）　古墳の位置……57

（2）　墳丘の規模……57

（3）　内部構造及び遺物の出土状況……58

（4）　出　土　遺　物……60

（5）　小　　結……62

第7節　阿坂古墳の調査……63

（1）　古墳の位置……63

（２） 墳丘の規模と施設……63
（３） 石室の構造と遺物の出土状況……64
（４） 出 土 遺 物……68
（５） 阿坂古墳前庭部出土近世陶磁器類……72
（６） 阿坂調査区土壙……82

第３章 昭和55年度の調査

第１節 昭和55年度，第１次調査の概略……84
第２節 昭和55年度日誌抄……85
第３節 沖の店遺跡の調査……86
（１） １ 号 窯 址……87
（２） ２ 号 窯 址……93
（３） 柱穴群及び土壙……93
（４） ２区溝状遺構……96
（５） 出 土 遺 物……96
（６） 小 結
1）沖の店遺跡第１号窯の問題点…… 123
2）２区溝および４区包含層の出土遺物について…… 125

図 目 次

図 1 鴨方町位置図（1/20万）…… 1
図 2 山陽自動車道路線図及び周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 3
図 3 山陽自動車道路線図及びトレンチ配置図 （1/6,000）…… 5
図 4 和田遺跡内調査区（Ａ．Ｄ）及び宮の脇古墳（Ｅ）位置図 （1/2,000）…… 8
図 5 和田遺跡Ａ調査区Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図 （1/200）…… 9
図 6 和田遺跡Ａ調査区Ⅲ区遺構配置図 （1/200）……10
図 7 和田遺跡Ａ調査区弥生土壙平・断面図（1/20）……11
図 8 和田遺跡Ａ調査区弥生土壙出土遺物（1/4）……12
図 9 和田遺跡Ａ調査区近世土壙（1/20）及び出土遺物 （1/6）……14
図 10 和田遺跡Ａ調査区近世土壙（1/20）……15
図 11 和田遺跡Ａ調査区出土遺物Ⅰ―白磁・平瓦 （1/4）……16
図 12 和田遺跡Ａ調査区出土遺物Ⅱ―中世土器 （1/4）……17
図 13 和田遺跡Ａ調査区出土遺物Ⅲ―近世土器 （1/4）……19
図 14 和田遺跡Ａ調査区出土遺物Ⅳ―近世土器 （1/6）……21
図 15 和田遺跡Ｂ調査区遺構配置図 （1/400）……22

図 16　和田遺跡Ｂ調査区Ⅰ区遺構配置図　(1/200) ……23
図 17　和田遺跡Ｂ調査区弥生土壙墓群 (1/40) ……24
図 18　和田遺跡Ｂ調査区第１・５・６号土壙墓平・断面図 (1/40) ……25
図 19　和田遺跡Ｂ調査区第１号土壙墓玉類出土状況　(1/2) ……26
図 20　和田遺跡Ｂ調査区第１号土壙墓出土遺物（１）(1/4) ……26
図 21　和田遺跡Ｂ調査区第１号土壙墓出土遺物（２）(1/4) ……27
図 22　和田遺跡Ｂ調査区第１・３号土壙墓出土遺物（３）(1/2) ……28
図 23　和田遺跡Ｂ調査区第２号土壙墓平・断面図 (1/40) ……30
図 24　和田遺跡Ｂ調査区第３号土壙墓平・断面図 (1/40) ……30
図 25　和田遺跡Ｂ調査区第４号土壙墓平・断面図 (1/40) ……30
図 26　和田遺跡Ｂ調査区第７号土壙墓平・断面図 (1/40) ……31
図 27　和田遺跡Ｂ調査区第８号土壙墓平・断面図 (1/40) ……31
図 28　和田遺跡Ｂ調査区窯状遺構平・断面図 (1/60) ……32
図 29　地磁気永年変化図……33
図 30　和田遺跡Ｂ調査区Ⅱ区遺構配置図　(1/200) ……34
図 31　和田遺跡Ｂ調査区建物Ⅰ・Ⅱ断面図　(1/100) ……35
図 32　和田遺跡Ｂ調査区建物Ⅲ　(1/100) ……36
図 33　和田遺跡Ｂ調査区Ⅱ区土壙 (1/20) ……36
図 34　和田遺跡Ｂ調査区出土遺物（１）(1/4) ……38
図 35　和田遺跡Ｂ調査区出土遺物（２）(1/4) ……39
図 36　和田遺跡Ｂ調査区Ⅲ区遺構配置図　(1/200) ……40
図 37　和田遺跡Ｂ調査区Ⅳ区包含層出土遺物　(1/4) ……42
図 38　和田遺跡Ｃ調査区出土遺物　(1/4) ……43
図 39　和田遺跡Ｄ調査区出土遺物　(1/4) ……45
図 40　和田遺跡出土石器（Ⅰ）及び鉄器……46
図 41　和田遺跡出土石器（Ⅱ）……47
図 42　和田遺跡出土古銭　(1/1) ……48
図 43　向原第１地点（ＦⅡ）及び尾小見屋敷（ＦⅠ）位置図 (1/2,000)　……51
図 44　向原調査区第１地点 (1/200) 及び近世土壙　(1/20) ……52
図 45　向原遺跡出土遺物　(1/4) ……53
図 46　向原遺跡尾小見屋敷井戸址 (1/60) ……54
図 47　向原遺跡尾小見屋敷井戸址周辺出土遺物　(1/4) ……55
図 48　宮の脇古墳墳丘測量図　(1/200) ……57
図 49　宮の脇古墳発掘後全体図　(1/200) ……58
図 50　宮の脇古墳遺物出土状況図 (1/40) ……59

図 51　宮の脇古墳出土須恵器　(1/4) ……60
図 52　宮の脇古墳出土大刀　(1/4) ……61
図 53　宮の脇古墳出土装身具(1/2)(玉類は原寸)・棺具(1/2)及び中世遺物(1/4) ……62
図 54　阿坂古墳（G）及び阿坂調査区（X）位置図 (1/2,000) ……63
図 55　阿坂古墳墳丘測量図　(1/150) ……64
図 56　阿坂古墳墳丘石積平・側面図 (1/60) ……65
図 57　阿坂古墳墳丘断面図 (1/80) ……96
図 58　阿坂古墳石室平面図及び展開図 (1/60) ……67
図 59　阿坂古墳地形図（発掘後）(1/150) ……68
図 60　阿坂古墳石室内遺物出土状態図 (1/60) ……68
図 61　阿坂古墳出土遺物Ⅰ—土器　(1/4) ……69
図 62　阿坂古墳出土遺物Ⅱ—須恵器(1/4)・金環・鉄器(1/2)……71
図 63　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅰ……73
図 64　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅱ……74
図 65　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅲ……75
図 66　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅳ……76
図 67　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅴ……77
図 68　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅵ……78
図 69　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅶ……79
図 70　阿坂古墳前庭部出土近世遺物Ⅷ……80
図 71　阿坂調査区土壙 (1/20) ……82
図 72　阿坂調査区土壙出土遺物　(1/6) ……83
図 73　小坂東両名散布地地形図及びトレンチ配置図　(1/2,000) ……84
図 74　小坂東大畔散布地・小坂西沖の店遺跡地形図及びトレンチ
　　配置図　(1/2,000) ……84
図 75　沖の店遺跡遺構配置図　(1/300) ……86
図 76　沖の店遺跡1号窯平・断面図 (1/20) ……88
図 77　沖の店遺跡1号窯出土遺物（1）(1/4) ……90
図 78　沖の店遺跡1号窯出土遺物（2）(1/4) ……91
図 79　沖の店遺跡1号窯出土遺物（3）(1/4) ……92
図 80　沖の店遺跡2号窯平・断面図 (1/30) ……93
図 81　沖の店遺跡出土元祐通宝　(1/1) ……93
図 82　沖の店遺跡1.2号窯址地磁気永年変化図……95
図 83　沖の店遺跡2区溝状遺構平・断面図　(1/100) ……96
図 84　沖の店遺跡2区溝．4区包含層出土中世遺物（1）(1/4) …… 101

図 85　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（２）(1/4) …… 102
図 86　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（３）(1/4) …… 103
図 87　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（４）(1/4) …… 104
図 88　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（５）(1/4) …… 105
図 89　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（６）(1/4) …… 106
図 90　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（７）(1/4) …… 107
図 91　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（８）(1/6) …… 108
図 92　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（９）(1/6) …… 109
図 93　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（10）(1/6) …… 110
図 94　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（11）(1/6) …… 111
図 95　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（12）(1/6) …… 112
図 96　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（13）(1/6) …… 113
図 97　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（14）(1/6) …… 114
図 98　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（15）(1/6) …… 115
図 99　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（16）(1/6) …… 116
図100　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（17）(1/6) …… 117
図101　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（18）(1/6) …… 118
図102　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（19）(1/6) …… 119
図103　沖の店遺跡２区溝．４区包含層出土中世遺物（20）(1/6)および
　　中国陶磁器 (1/4) …… 120
図104　沖の店遺跡出土備前焼 (1/4)…… 121
図105　沖の店遺跡出土石器 (1/4) …… 122

図　版　目　次

図版 1-(1)　和田遺跡遠景左Ｂ－Ⅲ区・中央Ｂ-1・Ⅱ区・右Ａ区（南から）
　　(2)　和田遺跡遠景左宮の脇古墳・中央Ｂ－Ⅲ区（南から）
図版 2-(1)　和田遺跡Ａ区全景（北から）
　　(2)　和田遺跡Ａ－Ⅲ区弥生土壙（南から）
図版 3　　和田遺跡Ａ調査区中・近世遺構及び遺物
図版 4-(1)　和田遺跡Ｂ－Ⅰ区弥生土壙墓群（南から）
　　(2)　和田遺跡Ｂ－Ⅰ区第１号土壙墓（左）と第２号土壙墓（右）（南から）
図版 5　　和田遺跡Ｂ－Ⅰ区弥生土壙墓
図版 6-(1)　和田遺跡Ｂ－Ⅱ区窯状遺構（南から）
　　(2)　和田遺跡窯状遺構の熱残留磁気測定資料採集（北から）

図版 7-(1)　和田遺跡Ｂ－Ⅱ区（Ｔ-10）柱穴検出状態（北から）
(2)　和田遺跡Ｂ－Ⅱ区及びＢ－Ⅰ区全景（北から）
図版 8-(1)　和田遺跡Ｂ－Ⅱ区№50遺物出土状態（北から）
(2)　和田遺跡Ｂ－Ⅱ区№130遺物出土状態（南から）
図版 9　和田遺跡Ｂ調査区弥生第１・２号土壙墓出土遺物
図版10-(1)　和田遺跡Ａ調査区弥生土壙出土遺物
(2)　和田遺跡出土中世土器
図版11　和田遺跡出土白磁・青磁・緑釉
図版12　和田遺跡出土石器
図版13-(1)　和田遺跡出土かんざし・鉄器
(2)　和田遺跡出土古銭
図版14-(1)　向原遺跡第１地点全景（南から）
(2)　向原遺跡第１地点近世土壙（南から）
図版15-(1)　向原遺跡尾小見屋敷跡井戸検出状態（北から）
(2)　向原遺跡尾小見屋敷跡井戸掘り方検出状態（北から）
図版16-(1)　宮の脇古墳調査前全景（南から）
(2)　宮の脇古墳草刈り後全景（南から）
図版17-(1)　宮の脇古墳表土排除後全景（東から）
(2)　宮の脇古墳遺物出土状態（東から）
図版18-(1)　宮の脇古墳遺物出土状態近接（南から）
(2)　宮の脇古墳調査終了後全景（東から）
図版19　宮の脇古墳出土遺物
図版20-(1)　阿坂古墳草刈り後全景（北から）
(2)　阿坂古墳盗掘凹地（西から）
図版21-(1)　阿坂古墳全景（南から）
(2)　阿坂古墳全景（北から）
図版22-(1)　阿坂古墳全景（西から）
(2)　阿坂古墳石室内遺物出土状態（西から）
図版23　阿坂古墳出土遺物 (1)
図版24　阿坂古墳出土遺物 (2)
図版25　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅰ）
図版26　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅱ）
図版27　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅲ）
図版28　阿坂調査区近世土壙及び出土遺物
図版29-(1)　小坂東両名散布地トレンチ調査（東から）

(2)　小坂東大畔散布地トレンチ調査（南から）
図版30-(1)　小坂西沖の店遺跡全景（南から）
(2)　小坂西沖の店遺跡トレンチ調査（北東から）
図版31-(1)　沖の店遺跡1区調査中（南から）
(2)　沖の店遺跡1区1号窯検出状態（正面から）
図版32-(1)　沖の店遺跡1号窯発掘中（正面から）
(2)　沖の店遺跡1号窯発掘中（左側面から）
図版33-(1)　沖の店遺跡1号窯発掘後（正面から）
(2)　沖の店遺跡1号窯発掘後（左側面から）
図版34-(1)　沖の店遺跡2号窯検出状態（北から）
(2)　沖の店遺跡2号窯熱残留磁気測定資料採集（南から）
図版35-(1)　沖の店遺跡柱穴群（北から）
(2)　沖の店遺跡調査区全景（南西・正面から）
図版36-(1)　沖の店遺跡2区溝状遺構（東から）
(2)　沖の店遺跡2区溝内出土土器近接（南から）
図版37　沖の店1号窯出土遺物 (1)
図版38　沖の店1号窯出土遺物 (2)
図版39　沖の店1号窯出土遺物 (3)
図版40　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (1)
図版41　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (2)
図版42　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (3)
図版43　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (4)
図版44　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (5)
図版45　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (6)
図版46　沖の店遺跡2区溝・4区包含層出土遺物 (7)
図版47　沖の店遺跡出土中国製陶磁器他 (8)
図版48　沖の店遺跡出土石器及び古銭

第1章　序　　説

第1節　発掘調査に至る経過

山陽自動車道は昭和46年に基本計画が策定された。そしてその翌年にはルート決定，予定ルート周辺の文化財の分布状況についての協議が建設省で行われた。それに伴い県教育委員会は昭和47年に国庫補助を受け，岡山県遺跡保護調査団の協力を得て兵庫県境から広島県境に至るまで発表された路線を約500m幅内の分布調査を行った。その結果181ヵ所の遺跡が予定路線内に存在することが判明した。昭和48年には姫路～備前八木山インター間の路線発表，施工命令が出され，日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所と協議を重ね昭和52年に変更ルート上に発見された荒神屋敷遺跡の発掘調査を実施し報告書を刊行した。(註-1)

その後，昭和52年，広島（福山）～倉敷（玉島）間のルート決定が行われ，日本道路公団より委託を受けた建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所と協議を重ね昭和53年度中にほとんどの用地買収が行われた鴨方インターチェンジを中心とする鴨方町地頭上・宮の脇，益坂・和田地区の確認調査を昭和54年4月～6月にかけて実施し，引きつづいて和田遺跡，阿坂古墳，宮の脇古墳の発掘調査を実施した。

昭和55年度は，鴨方インターチェンジより西地域の鴨方町小坂東両名散布地，同じく大畔散布地，小坂西谷井に存する沖の店遺跡の確認調査を4月以降行い，引きつづき沖の店遺跡の発掘調査を実施し，7月末日第2次調査を終了した。

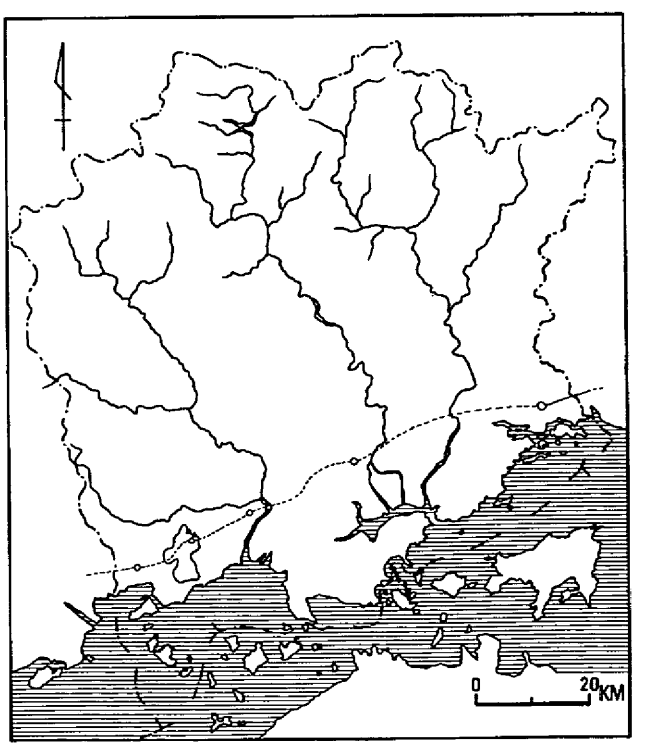


図1　鴨方町の位置（1/20万）

註-1.　岡山県教育委員会，「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」　1.備前市荒神社東遺跡，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 25. 1978年3月

第2節　歴史的地理的環境

霊峰遙照山をはじめ，竹林寺山，阿部山など400m 前後の山塊を背後にした鴨方は，南の竜王山をはじめとする山塊との間に出来た断層地帯に発達してきた町である。

これら山塊からの小渓流である阿坂川，本庄川，曲田川，杉谷川は鴨方川となって南流しさらに断層による窪地帯を東流して玉島湾に注ぐ。

山陽自動車道は益坂の谷南側を縦断し鴨山（加茂山）の北東麓から西麓をまわり，小坂西の南側を貫いて笠岡に至る。

これら谷合にも古代から永々と生産が行われ諸々の遺跡を残している。今回の調査で明らかになった旧石器時代の石器をはじめ，縄文時代後期の土器片の存在から生活拠点は今後の課題になるとしても，鴨方にもこの頃から生活が始まっていたことを示している。弥生時代前期には，木葉文の壺が出土したと伝えられる小坂東犬飼本谷遺跡があり，中期の遺跡としては阿部山・竹林寺山，竹林寺天文台などの山頂の 集落遺跡をはじめ 平野部にも点々と遺跡の拡がりを 見せて後期の遺跡へと 続いている。弥生時代終末から古墳時代の集落址の実態は，はっきりしないが，和田遺跡の弥生時代土壙墓群は特異な存在としてみることができる。六条院東鴻の巣山遺跡も同様なものかもしれない。古墳時代中頃から箱式石棺を持つ古墳は10数カ所，古墳時代後半期の横穴式石室を持つ古墳は約40カ所が知られている。宮の脇古墳，阿坂古墳の調査はこれらに加え具体的な資料を提供したといえる。

厳蓮寺は延喜式に名を留める蓮厳寺と同一寺院址と考えられ，遙照山に建立された平安時代から中世にかけての寺院址で，盛時には周辺山麓に幾多の坊を持っていたといわれている。

中世の遺跡は細川氏の居城であった鴨山城をはじめとする中世山城が5カ所見られ，中世の一つの拠点であったことがうかがえるのである。城址以外にも亀山焼等が出土する中世遺跡が数多く知られている。今回の和田遺跡あるいは沖の店遺跡の中世遺物はより具体的に鎌倉～室町時代の生活の歴史を明らかにしていくものと確信している。

また，江戸時代になると鴨方は岡山池田藩の支藩として陣屋が置かれ，陣屋町として発展した。尾小見屋敷の全容ははっきりつかめなかったが，幕末における一つの庄屋の例であり，阿坂古墳前庭部出土の遺物とともに近世遺物の一端も明らかになった。

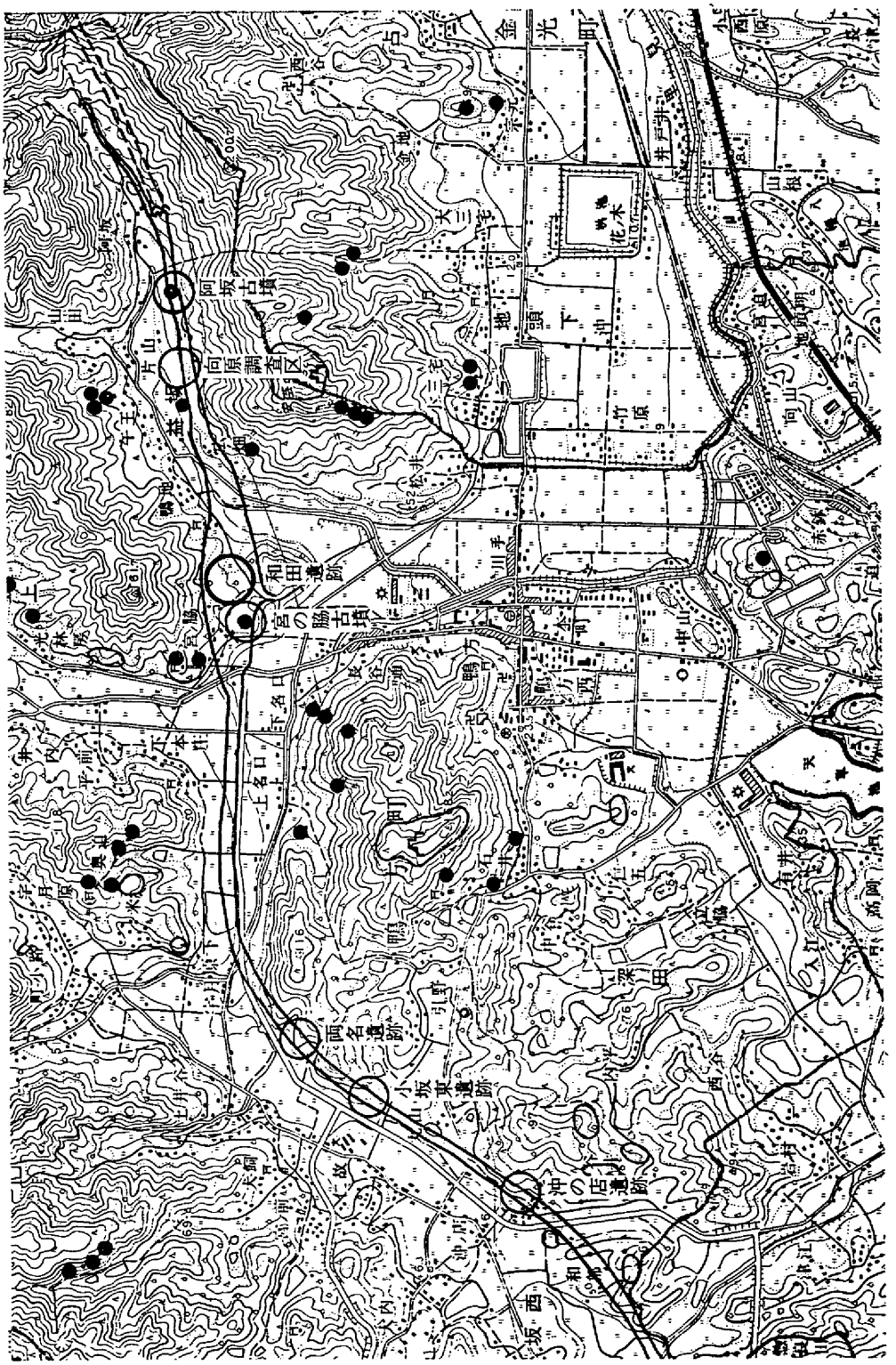


図２　山陽自動車道路線図及び周辺遺跡分布図（1/25,000）

第2章　昭和54年度の調査

第1節　第1次調査の概略

第1次調査は昭和54年4月から6月にかけて鴨方インターチェンジ予定地内の鴨方町地頭上・宮の脇，益坂・和田地区から幅2～3mのトレンチを入れ始め益坂阿坂トンネル付近までの約4km間に37本のトレンチを入れた。この結果，益坂・和田地区の丘陵上からは柱穴，亀山焼を埋甕とする土壙，中世～近世にかけての遺物，谷部分からは中世と思われる包含層が，向原地区では地元で言い伝えられている尾小見屋敷址からは井戸，近世遺物，阿坂地区では弥生・近世遺物等を検出し，6月末日終了した。

第2節　第2次調査の概略

第2次調査は当初から調査計画に上がっていた宮の脇古墳，阿坂古墳とともに和田地区2,300㎡を対称にして発掘調査を12月末日まで行った。その結果，和田遺跡B区（丘陵上）からは，近世の建物址，古代の炭焼窯と呼称されている窯，浅口郡下では初めての弥生時代後半の土壙墓群を検出することが出来た。また，宮の脇古墳は横穴式石室の石組みがほとんど抜き取られていたが掘り址から床面を推定することができた。阿坂古墳も中世～近世に盗掘に会っているとはいえ，北半部を土止め状の葺石で囲んでいる特異な様相を検出し，その他にも各地点から中世，近世の遺物を大量に検出している。

第3節　54年度日誌抄

4月1日～12日	調査準備
4月13日	発掘予定地視察
4月14日	器材運搬・トレンチ設定，対策委員会を現地で行う。
4月16日～5月9日	和田遺跡トレンチ掘り始める。T-1～14まで設定。
4月21日	和田T-6（谷）近世墓清掃・写真。
5月9日～11日	広畑，T-1・2設定掘り下げ。
5月10日～30日	向原，T-1・2トレンチ。尾小見屋敷跡設定，掘り下げ，以下T-10まで設定。
5月15日	向原，井戸周辺清掃。
5月28日	向原，T-10草刈り。T-4近世墓周辺拡張。

A:和田遺跡
A調査区

B;和田遺跡
B調査区

C;和田遺跡
C調査区

D;宮の脇古墳

E;1尾小見屋敷
2向原調査区

F;阿坂古墳

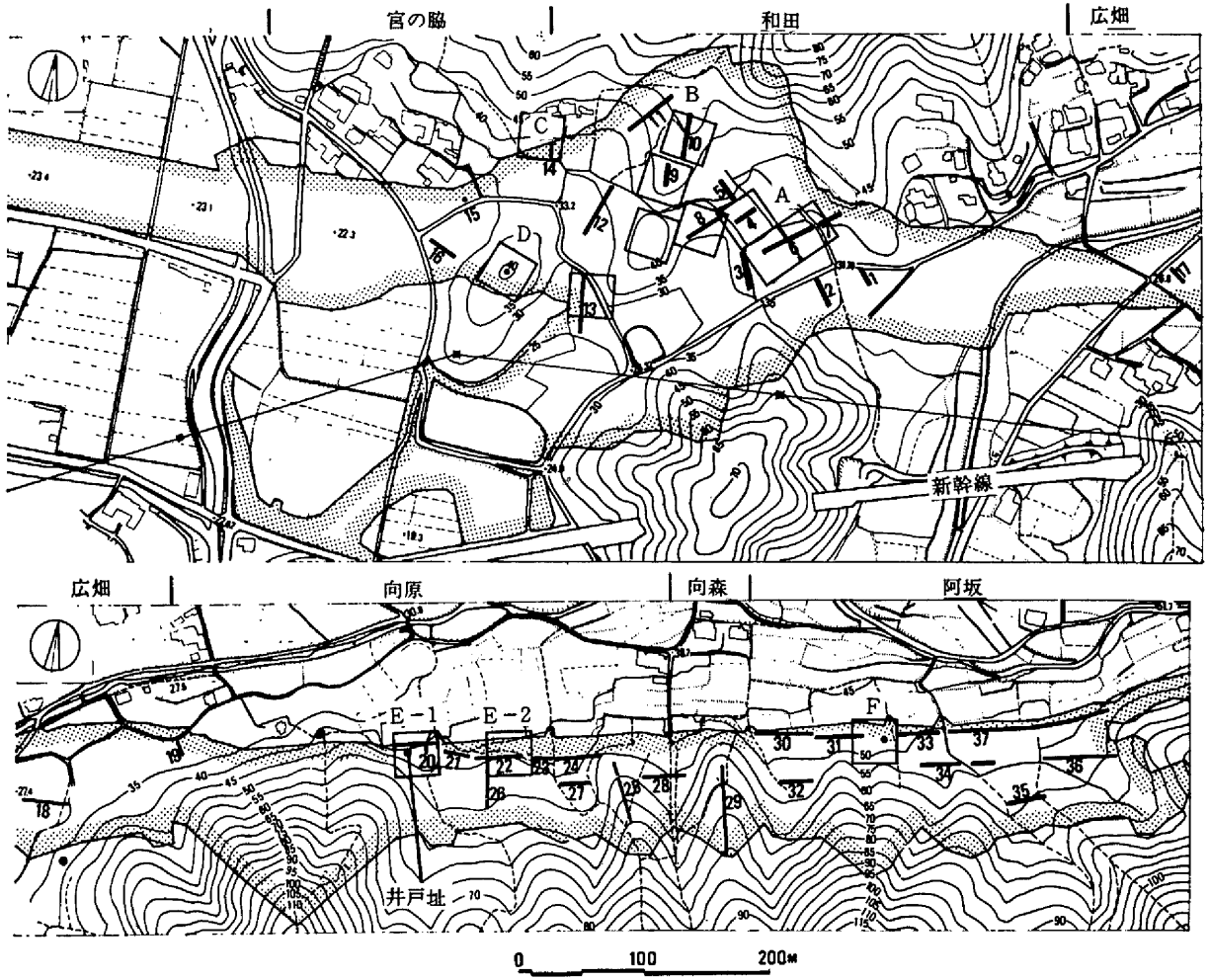


図3　山陽自動車道路線図及びトレンチ配置図（1/6,000）

昭和54年度の調査

5月30日～31日	向森，T-1設定，掘り下げ。
5月31日 ～7月25日	阿坂，T-1～8設定，掘り下げ。
6月1日	阿坂古墳，草刈り，写真。
6月8日	阿坂，T-2土壙実測。
6月25日 ～7月3日	向原，T-4，10拡張．掘り下げ。一次調査補足，本格調査の開始。
7月3日～10日	向原，T-4拡張（近世墓周辺）。T-10拡張，近世土器出土。
7月11日	向原から引越し，和田遺跡へもどる。
7月12日～20日	和田．B調査区掘り下げ。向原，実測，写真完了。
7月18日 ～8月2日	和田，B調査区Ⅱ掘り下げ開始。
7月19日	和田，B-Ⅰ掘り下げ完了，遺構検出。
7月31日	和田，B-Ⅱ特殊窯状遺構検出。
8月1日～2日	和田，B-Ⅱ斜面表土除去。C草刈り。
8月2日～3日	和田，C-表土除去。
8月6日	和田，B-Ⅱ表土剝ぎ，窯掘り下げ。A-Ⅲ草刈り。
8月7日	和田，A-ⅡⅢ草刈り。
8月8日～18日	和田，A-Ⅰ表土剝ぎ。
8月20日～25日	和田，A-Ⅱ表土剝ぎ。
8月28日	和田，B-Ⅰ・Ⅱ区遺構検出。
8月29日 ～9月3日	和田，B-Ⅱ柱穴掘り下げ。
9月5日～7日	和田，B-Ⅱ実測。B-Ⅰ土壙掘り下げ。
9月6日～12日	和田，B-Ⅰ土壙検出，掘り下げ。
9月13日～17日	和田，B-Ⅰ土壙掘り下げ，清掃，写真。
9月17日～28日	和田，B-Ⅲ清掃，遺物取り上げ。A-Ⅲ掘り下げ。遺物運搬。
9月18日	和田，B-Ⅰ土壙玉類実測，建物補測。B-Ⅱ遺物取り上げ。
9月19日	和田，B-Ⅰ・Ⅱ写真。
9月20日	和田，B-Ⅱ窯清掃，掘り下げ，土壙実測。宮の脇古墳，下草刈り。
9月21日	和田B-Ⅱ窯，実測写真。
9月25日～26日	宮の脇古墳草焼き，写真（発掘調前査）。
9月27日～29日	和田，B-Ⅲ草刈り，草焼き。宮の脇古墳地形測量。
9月29日	和田A-Ⅲ，遺構検出作業，江見・浅倉交代（2ヵ月間）。
10月1日	宮の脇古墳，杭打ち下草刈り。
10月2日～8日	宮の脇古墳，表土除去開始。写真撮影。和田，B-Ⅲトレンチ設定，表土除去（竹多し）。
10月9日～24日	宮の脇古墳主体部掘り下げ。

10月 9 日～17日　和田，Ｂ－Ⅲトレンチ掘り下げ続行。

10月18日　雨（台風20号接近）のため作業中止。

10月19日　台風20号上陸，テント倒れる。後かたずけ。

10月20日　台風後の後かたずけ，排水。

10月23日～26日　和田，Ｂ－Ⅲ表土除去。

10月25日　宮の脇古墳，石材抜き取り跡確認。

10月26日　宮の脇古墳，石室プランほぼ確認。

10月27日　宮の脇古墳，遺物案外残り良し。和田，Ｂ－Ⅲ清掃。

10月29日～11月 1 日　宮の脇古墳清掃。

10月29日～11月 9 日　和田Ｂ－Ⅲ区，清掃柱穴掘り下げ。

10月30日～31日　和田Ａ－Ⅳ区，拡張設定，草刈り。

11月 1 日～14日　宮の脇古墳，写真。和田Ａ－Ⅳ区掘り拡げる。

11月 5 日　宮の脇古墳，割り付け。

11月 7 日～ 8 日　阿坂古墳，地形測量（浅倉応援）。

10月 8 日～14日　宮の脇古墳，実測。

10月15日　阿坂古墳，トレンチ入れ始める。

10月16日　阿坂古墳，石室入口部から近世陶器が多量出土。

10月17日～27日　石室内掘り下げ。入口付近近世遺物採集。

10月26日～30日　阿坂古墳，墳丘石列清掃追求。

12月 1 日　阿坂古墳，石室床面近くから中世の焼きもの出土，中世に荒らされているらしい。

12月 3 日～15日　阿坂古墳，墳丘石積み実測。写真。ほぼ調査完了。和田遺跡Ｂ－Ⅳ区調査区掘り下げ。

12月17日～18日　阿坂古墳，最終地形測量。

12月19日　和田遺跡，あとかたずけ徹収作業。

第４節　和田遺跡の調査

（１）　和田遺跡の概略

本遺跡は，鴨方町益坂・和田に所在する。益坂は鴨方町の北東隅にあたり，北には遙照山の支脈である西知山及び竜王山が位置し，南には安芸守山の山塊が境する断層谷地形である。谷の中央部には細い阿坂川が貫流し，それは益坂・広畑で南に流れを変えて，名前も益坂川と改め，鴨方川へ合流する。和田は益坂の最も西端にある。北側は標高161ｍの竜王山，南側は標高60ｍの雁山があり，地形は東に傾斜している。峠を越えた西側は地頭上・宮の脇で，その境界線となっているのは，１本の幅30cmにも満たぬ溝である。現在ほとんど果樹園になっており，数軒の民家と墓地及び小さな池が１つあるだけの，閑散とした所である。

鴨方インターの位置決定後に行った分布調査により，土器の散布が広範に見られたため，トレンチ調査を行い，その結果和田遺跡は２カ所の遺構密集地と２カ所の遺物包含層があることが判明した。それを東からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ調査区と呼んだ。Ａ調査区では弥生後期，中世，近世の遺構・遺物，Ｂ調査区では弥生後期・古代・中世・近世の遺構・遺物，Ｃ調査区では中世・近世の遺物，Ｄ調査区では中世の遺物が検出できた。弥生後期の土壙墓群と，中世～近世の集落址が重複した遺跡である。

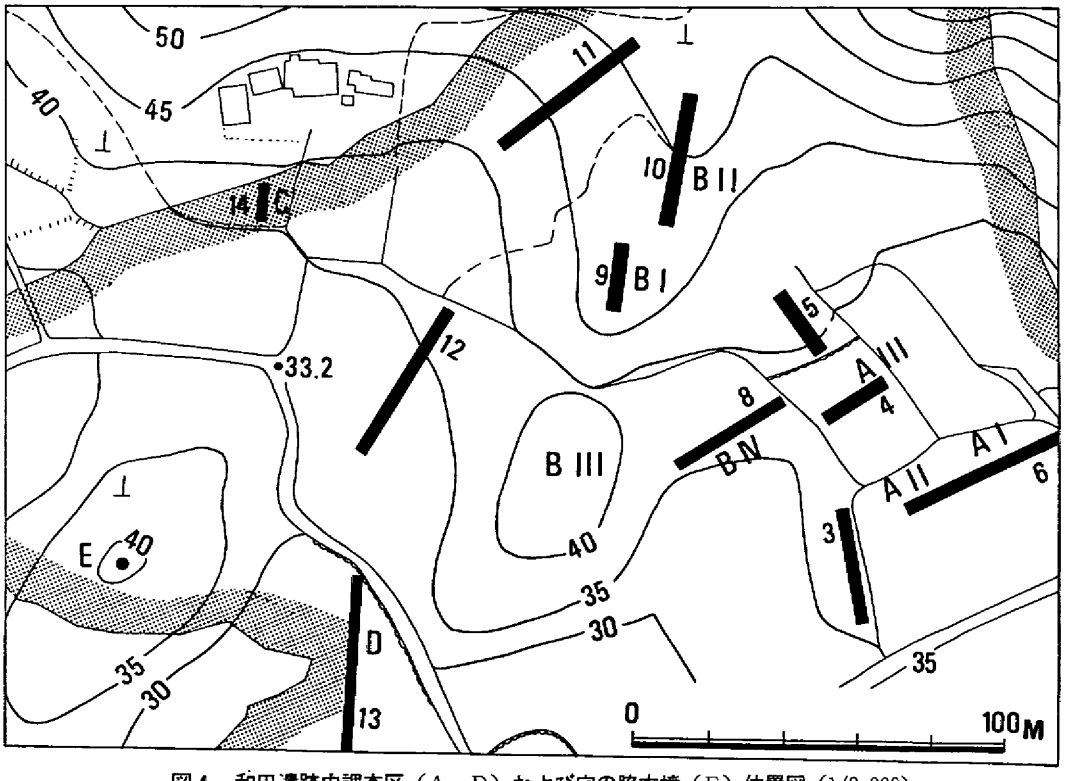


図４　和田遺跡内調査区（Ａ～Ｄ）および宮の脇古墳（Ｅ）位置図（1/2,000）

（2） A調査区（図4～6）

本調査区は和田遺跡の最も東に位置する。民家に囲まれた海抜30～40mの緩斜面の果樹園で1次調査におけるトレンチ4～7にあたっている。調査対象面積は東西50m・南北50mの2,500㎡であるが，民家の移転跡地や一般道路敷等の発掘不可能な所を除くと最終的に発掘した面積は約1,600㎡になっている。

発掘調査の順にⅢ区に細分した。Ⅰ・Ⅱ区ではトレンチ6で検出していた亀山焼大甕を伴う近世土壙2個と黄色粘土の入った円形土壙1個及び中世の柱穴を若干検出した以外には他の遺構は発見できなかった。Ⅲ区ではトレンチ4で中世～近世の柱穴が多数検出できていたため建物とそれに付属する土壙等の発見を期待した。結果は建物としてまとめることができなかったがさらに多くの柱穴と土壙が検出できた。即ち弥生土壙1個・中世土器溜り1ヵ所・近世土壙5個である。その他溝状あるいは方形を呈する深さ1m近い穴が規則的に並んでいるのは果樹栽培用の肥料穴である。

遺物は多量の土器と若干の石器が出土している。土器は弥生後期の壺・甕・高杯等が弥生土壙から10数点，中世では白磁の碗・皿・土師器の碗・皿・瓦質土器の甕・内耳鍋・羽釜・鉢等，近世では瓦質土器・土師質土器・陶磁器等が出土している。最も多いのは近世の土器である。平瓦も2点見られる。石器はサヌカイト製の打製石鏃・石錐の他に砂岩製の太形蛤刃石斧がある。（浅倉）

§1. 弥 生 土 壙

遺構 当土壙は袋状を呈すもので調査区中央部北方から検出された。平面形態は隅丸方形を呈し，検出面で一辺150cm，底部で一辺175cmを測る。土壙内は暗茶褐色粗砂が堆積しており，部分的に炭が混入していた。遺物は土壙中央からやや西よりにほぼ完形の甕形土器が，北東隅からは転落し，押し潰された状態で甕形土器及び長頸壺の口・頸部が出土している。一方，土壙全体には角礫とともに甕形土器片が散在していた。いずれにせよこれらの遺物は，土壙底部から約30cm程浮いた所から出土しており，当土壙放置後，転落あるいは廃棄されたものと考えられる。

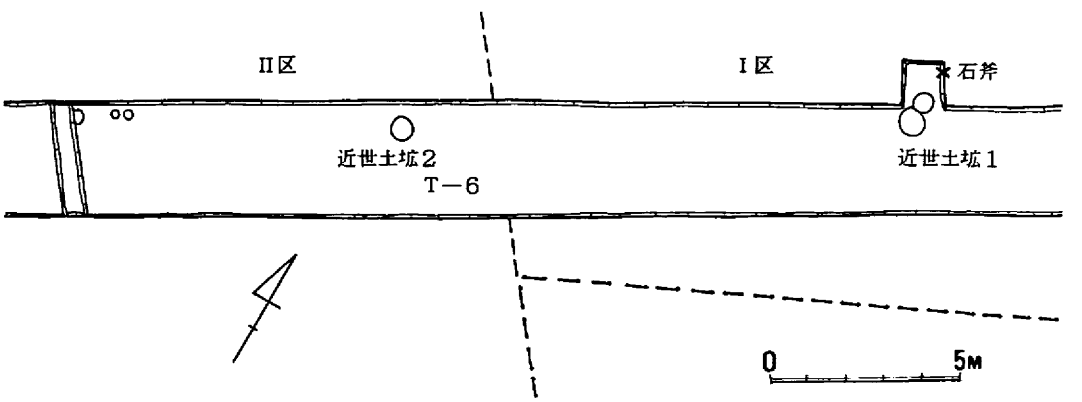


図5 和田遺跡A調査区Ⅰ，Ⅱ区遺構配置図（1/200）

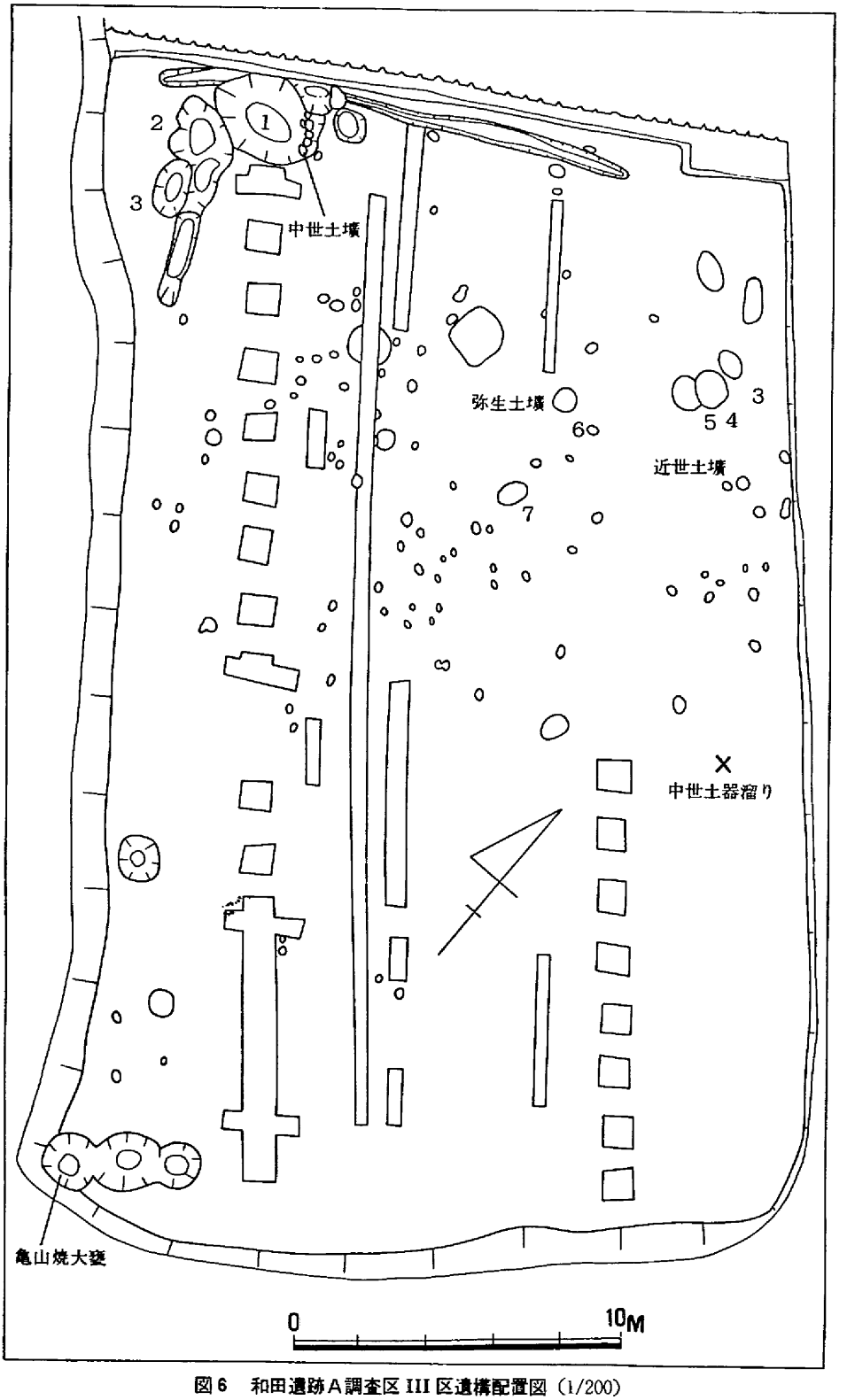


図6　和田遺跡A調査区 III 区遺構配置図（1/200）

遺物　壺形土器は1点出土している。1は口縁部がするどく外反し，端部は上下にやや肥厚し，端面は凹みを呈す。頸部はほぼ垂直に下がる長頸をもつもので，9条の沈線を施している。体部は「ハ」の字状に広がるものの，肩部はあまり張らない。体部上端に櫛状工具による刺突が廻る。口縁内外面は横ナデ，頸部は刷毛調整している。甕形土器2～9はいずれも口縁端部に拡張面をもち，端部は凹みを呈すものの，擬凹線をもつものはない。2・6の体部は肩部に最大径をもつ倒卵形を呈し，底部は平底である。外面は2が篦磨き，6が刷毛調整，内面は篦削りしている。7・8は口縁部が「く」の字状に外反し，端部は僅かに肥厚する。7は肩が張るやや胴長の器形である。底部は平底である。体部外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。9は8と同一個体と思われる。

以上，土器の特徴から当土壙は上東・鬼川市Ⅲ（註-1）の範中に入るものであろうか。なお，当調査区からは他に弥生時代の土壙は検出されていない。(江見)

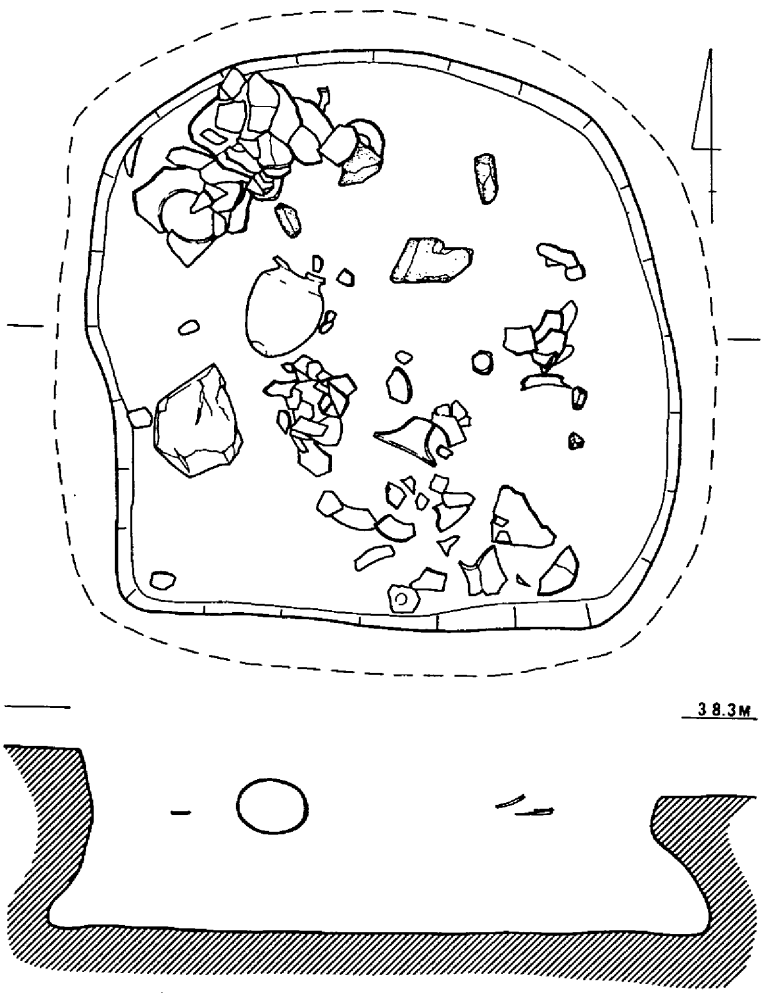


図7　和田遺跡A調査区弥生土壙平断面図（1/20）

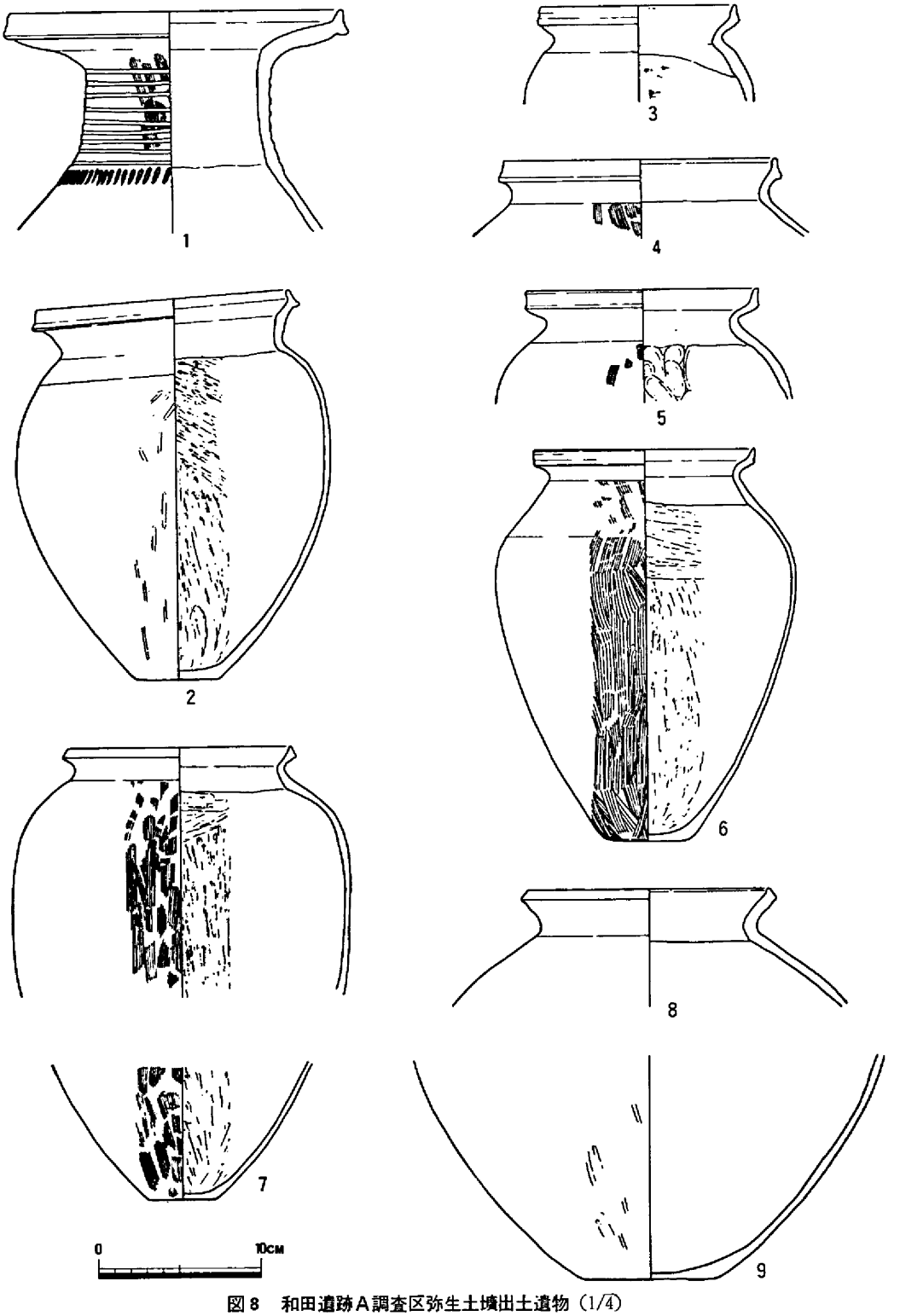


図8　和田遺跡A調査区弥生土壙出土遺物（1/4）

§2. 中 世 土 壙

調査区北西角に検出した3カ所の土壙がある。この土壙1は直径2.5m前後の不整円形で深さ120cmを測る。東側端に石垣状の積石を2～3段残している。土壙2，3も不整円形を成す。1からは羽釜が出土している。この北側に東西に幅60cm前後長さ15m，深さ15cm前後の溝がつづいている。中世柱穴群との関連から建物の何らかの付属置設として考えておきたい。

§3. 柱 穴 群

多数の柱穴が検出できたにもかかわらず建物をまとめることができなかった。大きいもので直径30cm，小さいもので直径10cmの円形を呈する。深さは1～20cm程度である。トレンチ4で試掘したP-1は白磁碗を伴い，P-2は土師器碗を伴い，P-3は古伊万里碗を伴った。その他A調査区全体の柱穴からは土師器皿の小破片しか出土していない。

§4. 近 世 土 壙 1（図9）

トレンチ6の東方で半分検出できたもので，拡張し全面を検出した。長径60cm・短径55cmのほぼ円形の掘り方に亀山焼の大甕が据えられている。大甕は底部全部と体部の約20cm程が残っているのみで口縁部は欠けている。この甕の中に銅製のかんざしが一本底に密着していた。この遺構は当初墓と考えていたが，次々と同様の遺構が散在して密集せず，近世陶磁器が周辺から大量に出土することから墓ではなく民家の付属施設すなわち便所か菜園のための肥料甕と考えた方が妥当であろう。

§5. 近 世 土 壙 2（図9）

トレンチ6の西方で検出できたもので，長径65cm，短径6,0cmのほぼ円形の掘り方に1と同様亀山焼の大甕が据えられている。1に比べて甕の底径が大きい。口縁部が内部に一部落下して残っていた。折れて垂れ下がった口縁部である。体部外面は格子目叩き・体部内面及び底部内外面は粗い刷毛目を施している。

§6. 近 世 土 壙 3（図10）

当土壙は調査区北東から検出されたもので，平面形態は85cm×65cmの楕円形を呈し，深さ10cmを測る。土壙内は暗茶褐色砂質土が堆積しており，中央から亀山焼の大甕片図-14-1が出土している。これは口径約60cmを測り，口縁部は大きく垂れ下がっていて，内外面とも横ナデしている。体部内面は粗い横刷毛，外面は粗い縦刷毛の後大きな格子目の叩きを施している。内外面とも黒褐色を呈し，3～5㎜大の礫を少し含む。

§7. 近 世 土 壙 4

土壙3の南から検出されたもので，平面形態は115cm×95cmの不整円形を呈し，深さ32cmを測る。土壙堆積層は2層に分かれ，上層は暗茶褐色砂質土が，下層は黄色砂質土が堆積していた。遺物は皆無であった。

§8. 近 世 土 壙 5

当土壙は土壙4に切られた状態で検出された。平面形態は径110cm前後の不整円形を呈すもので，深さ12cmを測る。堆積状況は土壙4と同様であったが，土壙北隅から火鉢が出土している。火鉢図13-12は口縁部と底部が直接には接合しないが，同一個体に相違ない三足火鉢である。口縁部はやや

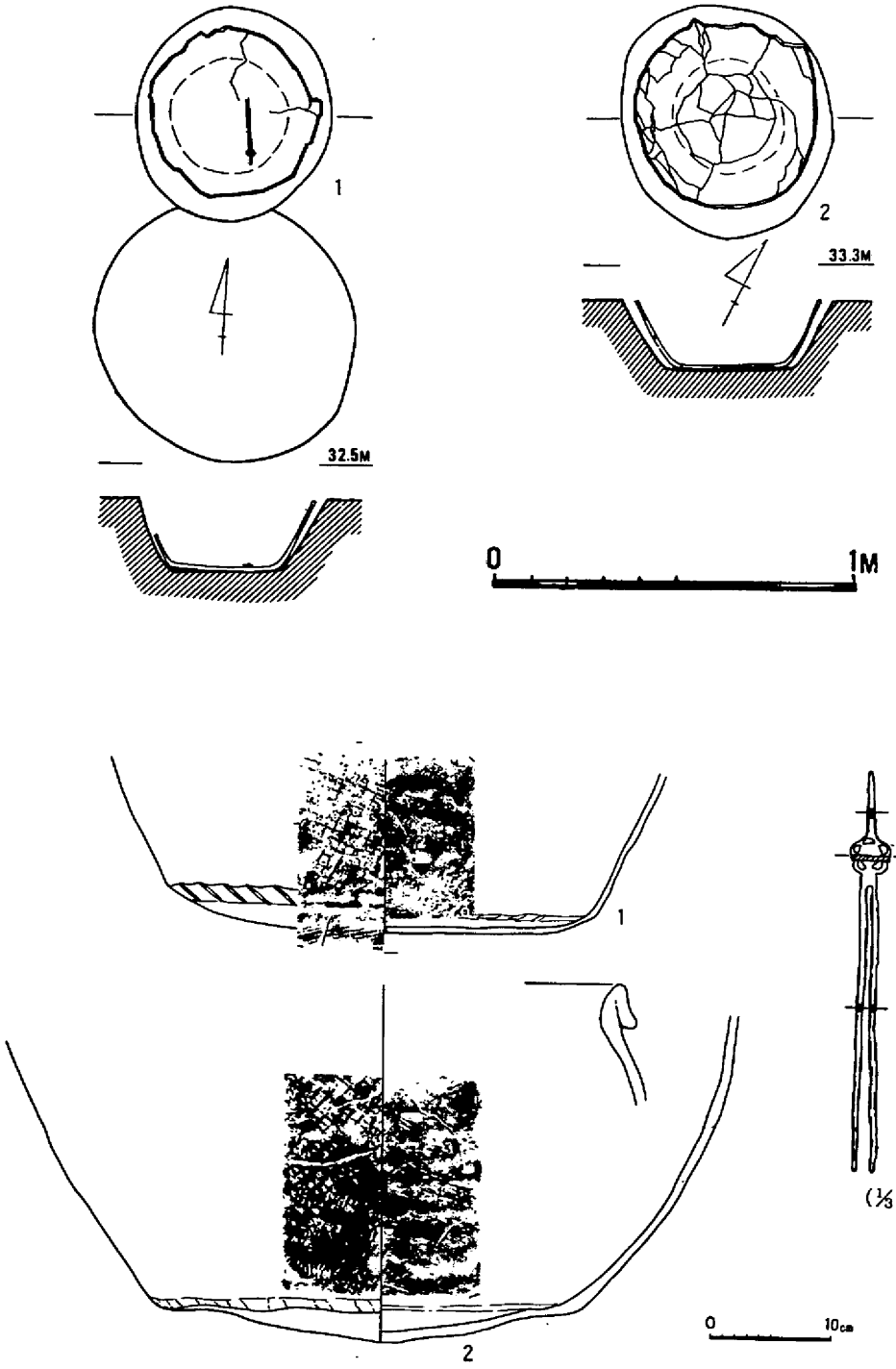


図9　和田遺跡A調査区近世土壙及び出土遺物（1/6）

肥厚し，上端を水平に作り，内側に伸びる。体部はゆるやかに内湾する。底部は下方にかなりふくらんでいる。足は三本あり，長さ4cm，厚さ7～1.5cmを測り，逆台形を呈する。器面調整は，口縁部上面が横ナデ，口縁内外面が刷毛目の後横ナデ，体部内面と底部内面及び底部外面が粗い横方向か斜方向の刷毛目，体部外面が比較的細かい一辺約4mmの格子目叩きである。焼成は非常に良好で硬い。0.5mm以下の砂粒しか含まない。色調は内外面とも灰黒色を呈する。口径は約40cm，器高は約38cm，最大径約43.2cm，底径は約30cmを測る。

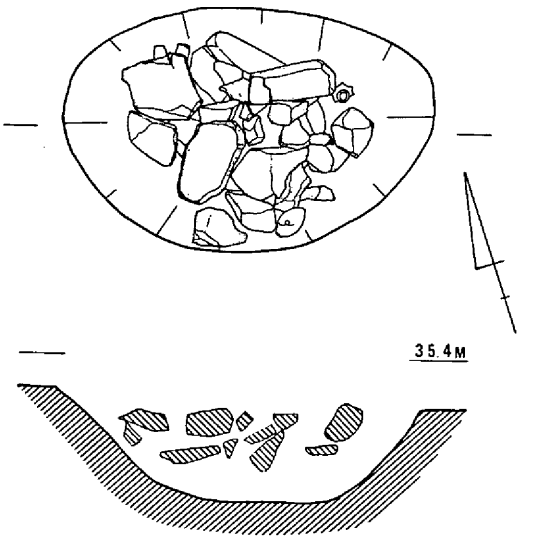


図10　和田遺跡A調査区近世土壙（1/20）

§9.　近世土壙6

平面形態は径70cm前後の不整円形を呈し，深さは2cmを残すのみであった。土壙内には黄色砂質土が堆積していた。

§10.　近世土壙7

平面形態は95cm×65cmの不整円形を呈すもので深さ25cmを残す。土壙内からは拳大～幼児の頭程の角礫と共に近世陶器片が出土している。

§11.　中世土器溜り

Ⅲ区の東の方に位置する。土師器の小皿が重なって20個検出できた。完形のものがほとんどで，全て粘土紐巻き上げ痕とヘラおこし痕が明瞭に残る。出土状況から見ると柱穴に埋納していたものと考えられる。この地点以南では砂層となり柱穴が検出できなかった。

§12.　出土遺物

白磁（図11-1～21）

A調査区では包含層及び柱穴から和田遺跡中最も多数の白磁片が出土している。碗・皿・壺の破片で中でも碗が目立つ。器形が判り，実測に耐え得るものが21点ある。そのうち口径が推定できるものが3点ある。1～8はやや内湾する体部とわずかに外反する口縁部をもつ碗である。見込みに細沈線を施すものと，さらに櫛描き文を施すものが見える。口径は16cm～18cmを測る。器壁は薄く，釉薬の色は白色・淡灰白色・淡緑色等を呈し，下地の色は白色・灰白色を呈す。9～12は口縁端をとがり気味にする碗である。見込みにいずれも細沈線を一本施している。釉薬の色調は緑がかった灰白色を呈す。13～16は口縁端部が肥厚して折り返しあるいは玉縁状になった碗である。器壁は前二者よりいく分か厚い。釉薬の色調は白色か少し緑色がかった灰白色である。17は碗の高台で13～16の口縁のものに付くと考えられる。底径は6.8cmを測る。底部外面と高台部分は釉がかからない。釉薬は淡灰白色を呈す。18～20は内湾する底部から約50度くらいの傾斜で立ちあがる短い口縁をもつ皿である。口

縁端部をとがらすものと少し内側に曲げるものがある。器壁は薄い。内底部には圏線状の沈線が見える。釉薬は黄白色，灰白色・白色を呈し，底部外面には施されていない。21は四耳壺の細片と考えられる。耳が欠けた痕跡が明瞭である。よく肩が張っている。内面には施釉していない。釉薬の色調は青色がかかった灰白色を呈する。1～12は白磁碗Ⅰ類，13～17は白磁碗Ⅱ類，18～20は白磁Ⅲ Ⅰ類に分類できる。(註-2)

平　瓦（図11—22・23）

2点出土している。凹面は布目，凸面は縄目の叩きを施している。22は土師質で3㎜以下の砂礫をを多含し，23は須恵質で4㎜以下の砂礫を多含する。23の布目から見て一枚造りと考えられる。

土師質土器（図12—1～30）

中世土器溜り出土の小皿，柱穴出土の椀以外には実測できるようなものがほとんどない。そこでここではそれらの土器も一緒に説明したい。1～20は中世土器溜り出土の小皿である。完形及び完形に近いものが15点ある。すべて「の」の字状に粘土紐の痕跡が残り，ヘラおこし痕が明瞭である。底部内面は大きく盛り上がる。器壁は比較的厚い。口径は8～9㎝，器高は1.5～1.8㎝，底径は6.5～7.2㎝を測り，色調は黄白色・淡茶褐色を呈し，1～3㎜大の砂礫を多含する。21～24はⅢ区包含層出土の皿である。21はほぼ完形品で底部に板目が残る。黄褐色を呈する。21はヘラおこしした黄白色の土器で1～20と比較すると少し薄手である。23はヘラおこし後ナデる。24はヘラおこしで，口径は約12㎝を測る。25は一見椀の高台風の酒杯である。黄褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を多含する。26～30は椀である。26はトレンチ4のP-2から出土した。内湾する体部から口縁部は外上方にまっすぐ伸びる。底部はヘラおこしする。高台は1㎝以上あり貼り付けている。体部外面下半が指オサエするほか丁寧

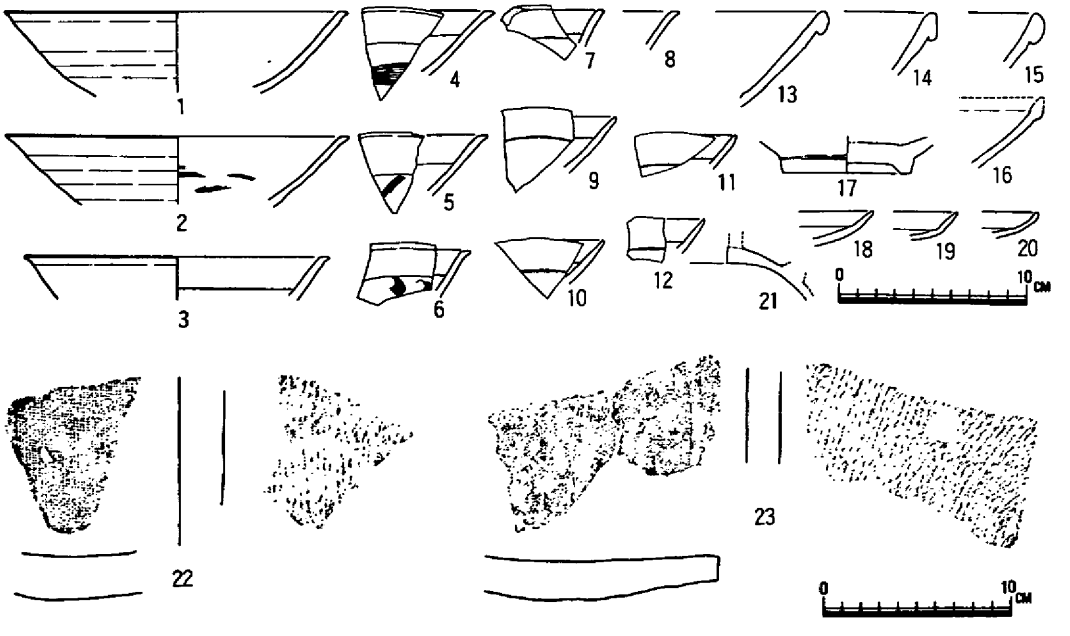


図11　和田遺跡A調査区出土遺物Ⅰ—白磁・平瓦（1/4）

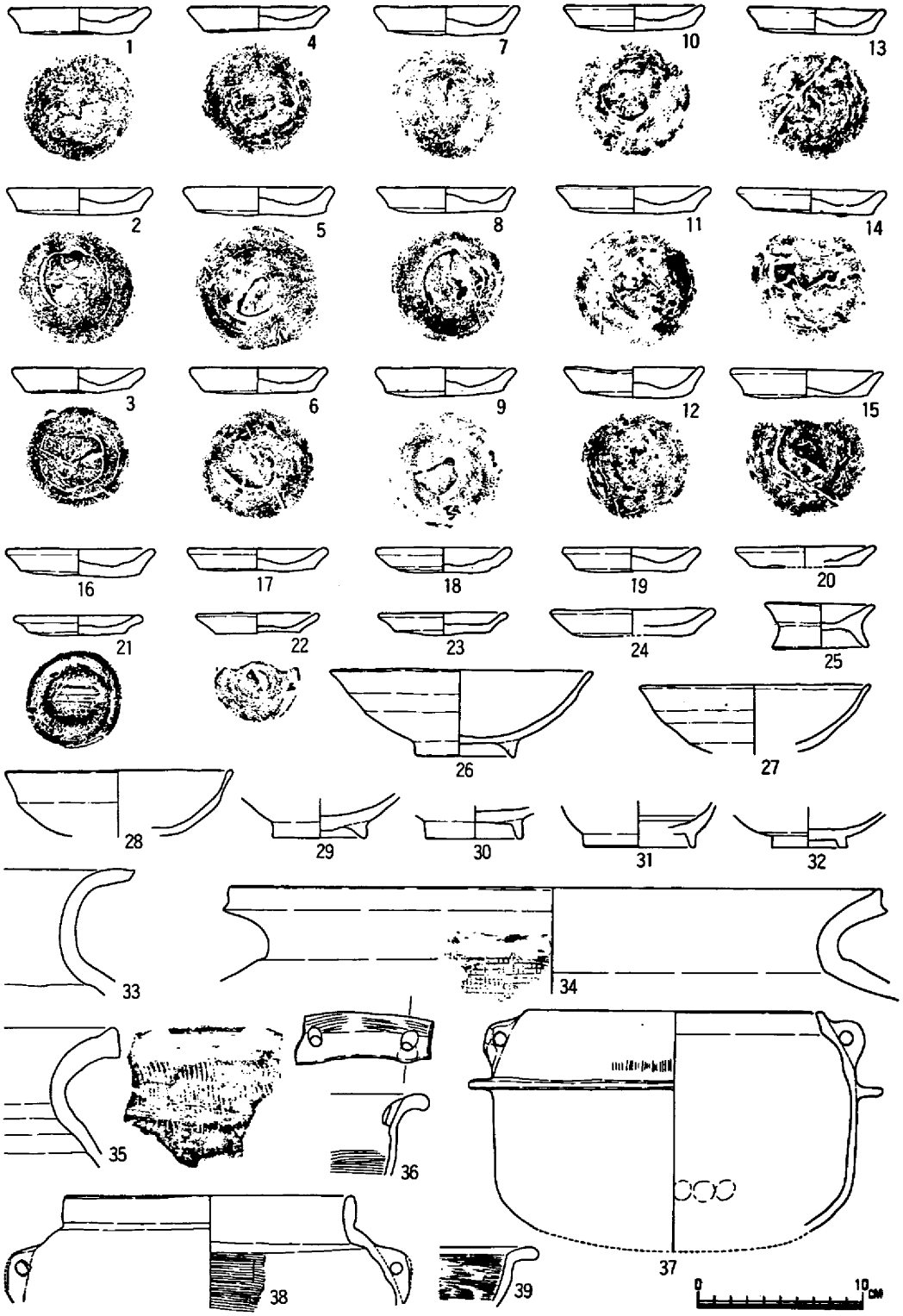


図12　和田遺跡A調査区出土遺物II—中世土器（1/4）

なヨコナデ調整を施している。口径16cm，底径６cm，器高5.2cmを測る。27は口縁部が少し外反する。器面表は滑らかに研磨されている。砂粒をほとんど含まない。口径は約14cm位で，色は黄白色を呈する。28は口縁部と体部の境が明瞭で，体部外面は指オサエの粗い調整である。色調は黄白色で，胎土中に３mm大の細礫を多含する。29・30は貼り付け高台の破片である。

陶磁器（図12—31～33・図13—２～９）

中世～近世の陶磁器はかなり多量に出土している。伊万里系と思われるものが最も多い。31は高台付の天目壺である。生地は灰褐色を呈し，釉薬の色調は黒褐色で，内面には施釉されていない。32は緑色釉が内面にのみかかっている磁器碗で，内側底部には幅１cm程無釉の帯が見られる。生地は淡茶褐色を呈する。33は壺の口縁部である。直立する頸部から大きく外反する口縁部を持ち，端部をわずかにつまみ出す。焼成は非常に良好で，外面には緑色の自然釉が流れ落ち，体部内面は赤色を呈している。丹波あるいは越前地方の所産か。２は伊万里系と思われる染付の小碗である。酒杯か神様にそなえる碗か。青味がかった白色の釉に，染付は青色である。３は鉄釉の鉢で，白色と茶色の縞紋様を表わす。口縁端を丸く作る。４は緑色釉の施釉された鉢で，口縁部は玉縁を呈する。５は玉縁というより角縁というほうが適当な口縁をもつ鉄釉の鉢である。６は須恵器のような灰色を呈する陶器の擂鉢である。口径24cm，器高10.2cm，底径約９cmを測る。口縁端部を肥厚して端外面に２本の凹線文を施している。体部外面下半はヘラ削りし，内面にはほとんど全面に条線を施す。備前焼であろうか。７は備前焼擂鉢で口径31cmを測る。口縁端外面に２本の凹線文を施し，体部内面の条線は全面に行わず少し間隔があいている。赤褐色を呈し，砂粒を少し含む。８も同じく備前焼擂鉢で，口径は34cmを測る。条線は７本が一単位で間隔をもって施している。片口が付く破片である。赤褐色を呈し，１mm以下の砂を少し含む。９は備前焼擂鉢の底部片で，底径は14cmを測る。条線が６本で一単位になる。底外面には板目痕が残っている。茶褐色を呈し，0.5mm 以下 の砂を 多量に含む。

瓦質土器（図12—34～39・図13—10～12・図14—１・２）

中世～近世のいわゆる亀山焼と称している焼き物が多量に出土している。須恵器のようによく焼けしまったものから土師器のように赤色・黄色に近い軟質のものまで認められる。器種には甕・内耳鍋・羽釜・土鍋・三足火鉢・擂鉢等がある。34は白色～灰白色を呈した甕で，口径40cmを測る。外反する口縁の端部は凹面を作る。体部外面は一辺３mmの細い明瞭な格子目叩きを施し，内面は丁寧なナデ調整を行っている。35は外反する口縁の端部に凹面を作る甕で，口頸部外面に粗い縦方向の刷毛目を施している。灰黒色～暗褐色を呈し，１mm以下の砂を少し含む。36は内耳鍋の内耳部分の破片である。「く」の字状に外反する口縁の端部は丸く収める。幅２cm程の内耳に一対の直径６mm程の円孔を上方から下方に貫通している。口縁部付近は横ナデ，体部内面は横方向の粗い刷毛目，体部外面は粗い指オサエを行う。外面にはススが付着している。いろりにつり下げて使用したものであろう。37は羽釜である。底部を欠く。口径は18cmを測る。一対の耳が口縁直下に付く。つばは厚さ６mm，幅1.5cmで口縁下５cmの所を一周する。口縁は上端に水平な面を作る。器面の調整は，つばの上方が縦の粗い刷毛目であること以外良く判らない。つばから下は，ススの付着が著しい。38も羽釜である。口縁部は短く垂直に立ち上がって，端部は丸く収める。一対の耳を持つ。器面調整は，口縁部内外面が横ナ

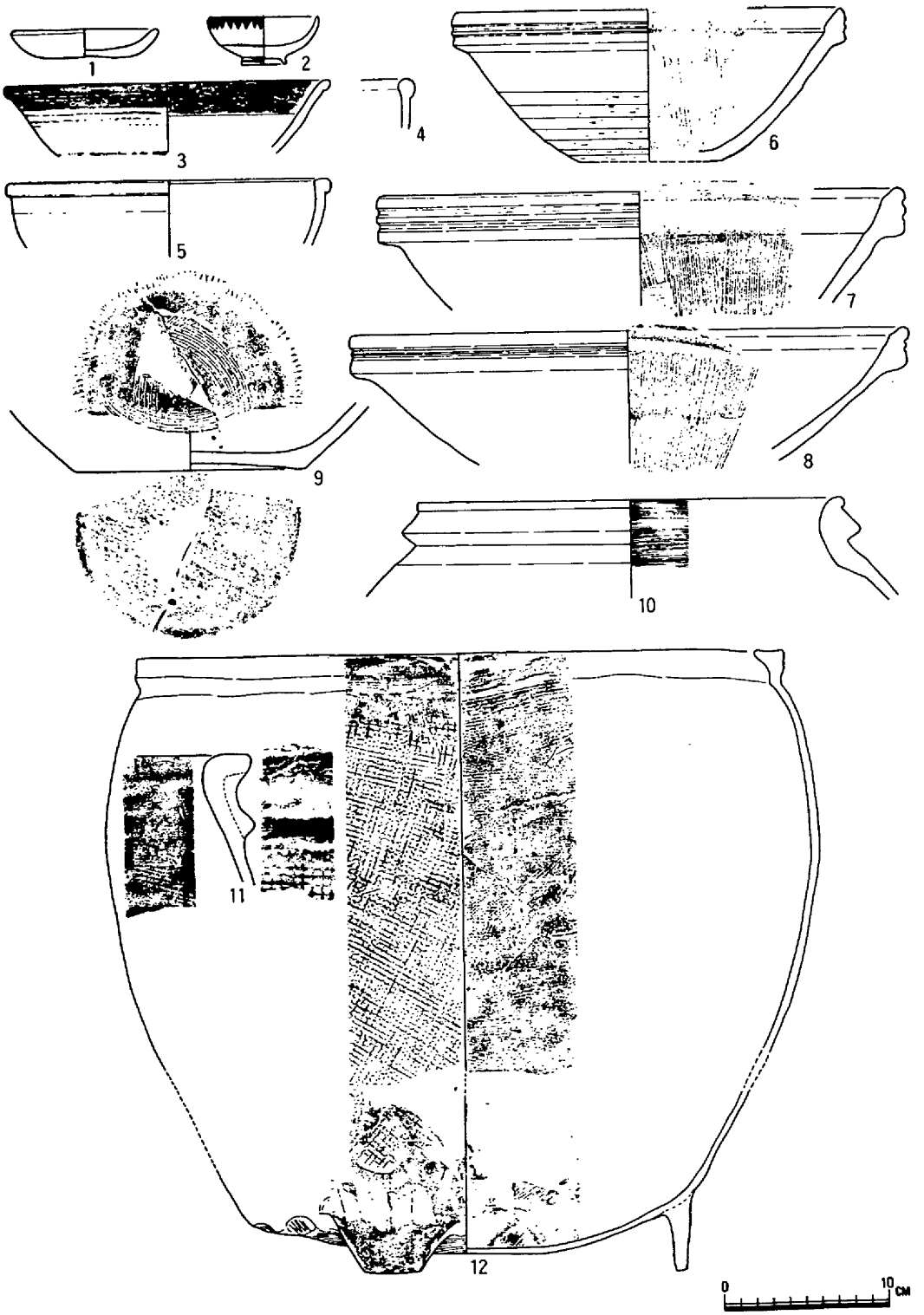


図13　和田遺跡A調査区出土遺物 III—近世土器（1/4）

デ，体部外面が粗いナデ，体部内面が粗い横方向の刷毛目である。色調は，体部外面が灰黒色，体部内面が茶褐色を呈している。胎土中に砂粒をほとんど含まない。39は土鍋の破片と思われる。内耳鍋の口縁部の可能性もある。「く」の字状に外反する口縁部を丸く収める。口縁部，体部の内面は非常に細い横方向の刷毛目，外面は粗いナデ調整を施している。色調は黒褐色を呈し，胎土中に1㎜以下の砂粒を多量に含む。10は甕の口縁部細片である。口径は約25㎝を測る。口縁部は肥厚し，折れ曲って垂れ下がり，さらに上端部は外に折れ曲っている。内面は細い横方向の刷毛目，外面は不明である。色調は外面が暗灰色，内面が灰褐色を呈する。胎土中に直径3㎜以下の細礫及び砂粒を少し含んでいる。11は大甕の口縁部細片である。口径は測ることができない。口縁部は大きく折れ曲り，直下に粘土板を貼り付けて口縁に厚みを増している。上端部は水平に作っている。器面調整は，内面が粗い横方向の刷毛目，外面が比較的大きな格子目叩きを施している。色調は黒褐色を呈する。胎土中には1.5㎜以下の砂粒を多量に含む。

A－Ⅲ南端の畑コーナに置かれた肥料甕（図14-2），これは調査当初から口縁部を露出させていたもので，最近まで肥料甕として使用されていたものであるが，一つの参考資料として提示しておきたい。これは地元の古老によれば江戸末～明治中頃前後まで紺甕として使用されていたものであり，それを譲り受け肥料甕として埋めたとのことである。口径67㎝，器高84㎝，胴廻り最大径70㎝を測る。口縁外部直下に一本の凸帯が巡るが，これは口縁を折り返しその上下をなでることにできたものである。

凸帯以下は叩きしめの格子目が全面に見られる。内面はなでによる仕上げである。黒褐色～褐色を呈する亀山焼の叩き手法と同一であるが，江戸時代後半まで亀山焼が存続するのかどうか，むしろ大原焼（註-3）との関連を考えた方が適当かも知れない。（浅倉）

（註-1）「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集』岡山県教育委員会 1974

（註-2）亀井明徳「九州出土の宋・大代陶磁器の分析」『考古学雑誌』第98巻第4号 1973

（註-3）隣町の里庄町大字里見字大原で現在も一軒だけ焼成されている。土師器～瓦質系の焼物で，近世に始まったとされているがはっきりしていない。

1885年（明治18）刊の「府県陶器沿革陶工伝統誌」（農務局，工務局共編）によれば一里見村ハ工人三百五十余名ニシテ其窯モ亦十一ケ所アリーと書かれ当時の大原窯は中国地方では最も盛んな窯場であったと思われる。製品としては火鉢，風呂（ふろ）くど，焜炉（こんろ），かまど，茶釜，火消し壺，行火（あんか），焙烙（ほうろく），胡麻炒り（地元では手甲羅と呼んでいる），土鍋，土瓶，タコ壺，ハゼ壺，イイダコ壺，土錘，宝殿灯籠などを生産していたという。「里庄町誌」昭和46年刊。亀山焼との関係等は今後の究明に待ちたい。

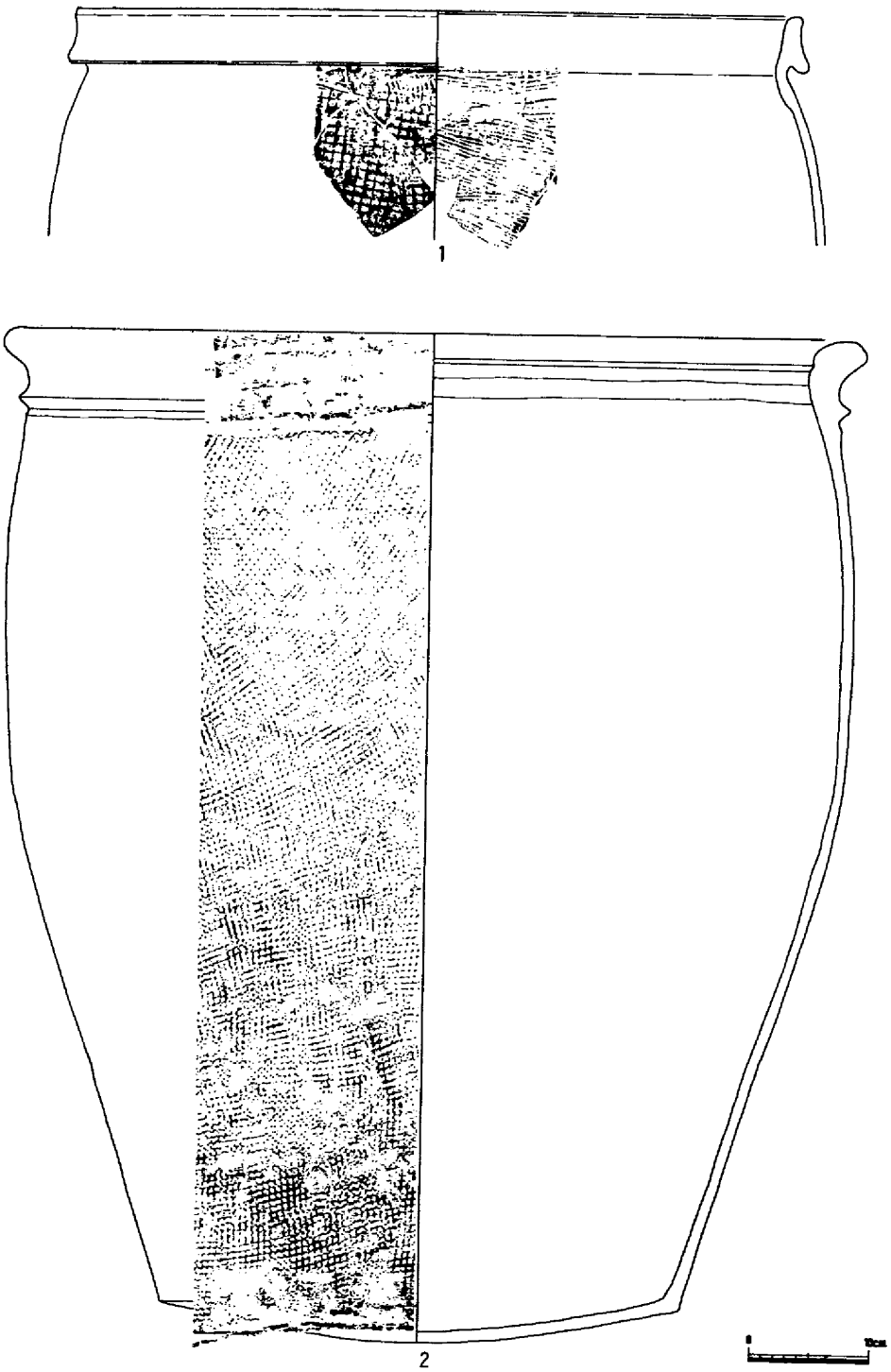


図14　和田遺跡A調査区出土遺物IV 近世の土器（1/6）

（3） B 調 査 区（図4）

本調査区は和田遺跡の中央部に当る。竜王山の支脈で舌状に南北に細く長く伸びる丘陵上と東の谷部とで構成される。トレンチの8～11にあたっている。丘陵は柿等の果樹園になっている所と，竹林になっている所があった。調査終了時点での本調査区の総発掘面積は約1,300㎡になっている。

便宜的に発掘の順番通りにこの調査区をⅣ区に区分した。トレンチ9を試掘した三角形の土地をⅠ区，トレンチ10を掘った長方形の部分をⅡ区として，それらと近世以降に道の切り通しで隔てられた南側の竹林となっている丘陵上をⅢ区，Ⅲ区とA調査区の間の谷でトレンチ8を掘った平坦地をⅣ区と呼称した。

Ⅰ区では弥生後期の土壙墓群が検出できた。遺物は特殊器台と玉類を伴っている。その北には中世の溝状遺構が2本あり，さらに北には近世の掘立柱建物が検出できた。その建物の周辺には，中世～近世の柱穴群と大形の近世土壙が1個検出できた。

Ⅱ区では，平坦部には無数の中世～近世の柱穴群と同じく土壙群が密集して検出できた。そしてほぼ中央部に建物を2棟分まとめることができた。近世建物である。ここはかつて，石部家の古屋敷と呼ばれ，幕末から明治初年頃に火事にあい現在居住している西下段へ移転したと言われ墓だけが残っている。その他にも建物をまとめる努力をしたが，成功しなかった。この区の西端の緩斜面では，窯状遺構が1基検出できた。

Ⅲ区では中世～近世の柱穴群が，北方と西方に片寄って検出できた。時期不明の土壙もいくつか検出した。かつてぶどう畑であったために肥料溝を南北に3本入れている。

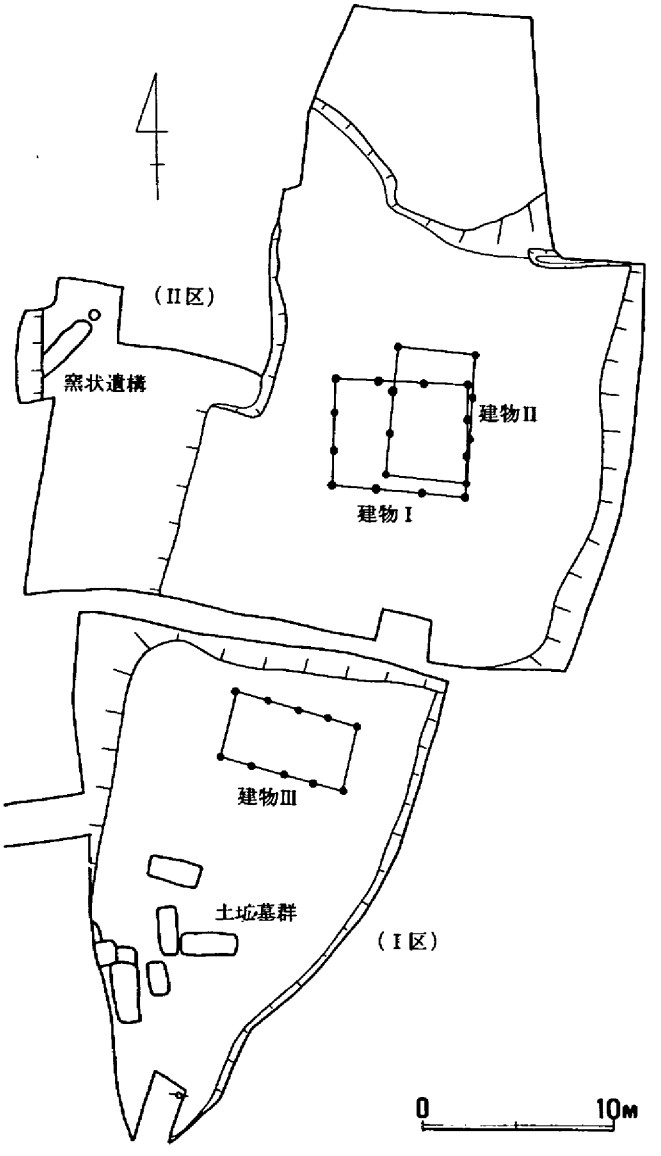


図15 和田遺跡B調査区遺構配置図（1/400）

Ⅳ区は遺構は全く検出されなかった。

遺物は弥生式土器が．弥生土壙群から若干出土し，更に玉類も出ている。中世の遺物としては，土器が土師器・須恵質土器・緑釉陶器・白磁・青磁・瓦質土器・備前焼等がある。近世の遺物としては，土器が土師器・瓦質土器・古伊万里等があり，鉄製の毛抜きも出土している。これらの遺物は，Ⅰ区の弥生土壙，Ⅱ区の柱穴・土壙，Ⅳ区の包含層からの出土が大半である。特にⅣ区包含層からは，中世土器のほとんどすべての種類が出土している。また，Ⅱ区の土壙には後で説明するが，古銭が大量に入っているものもある。土器の器種には次のようなものがある。すなわち，椀・皿・甕・擂鉢・内耳鍋・土鍋・壺・羽釜・高杯等が見られ，更に石臼も出土している。

以下遺構の説明を古い順に，弥生土壙墓群・竪状遺構・溝状遺構・掘立柱建物・土壙群と行ってい

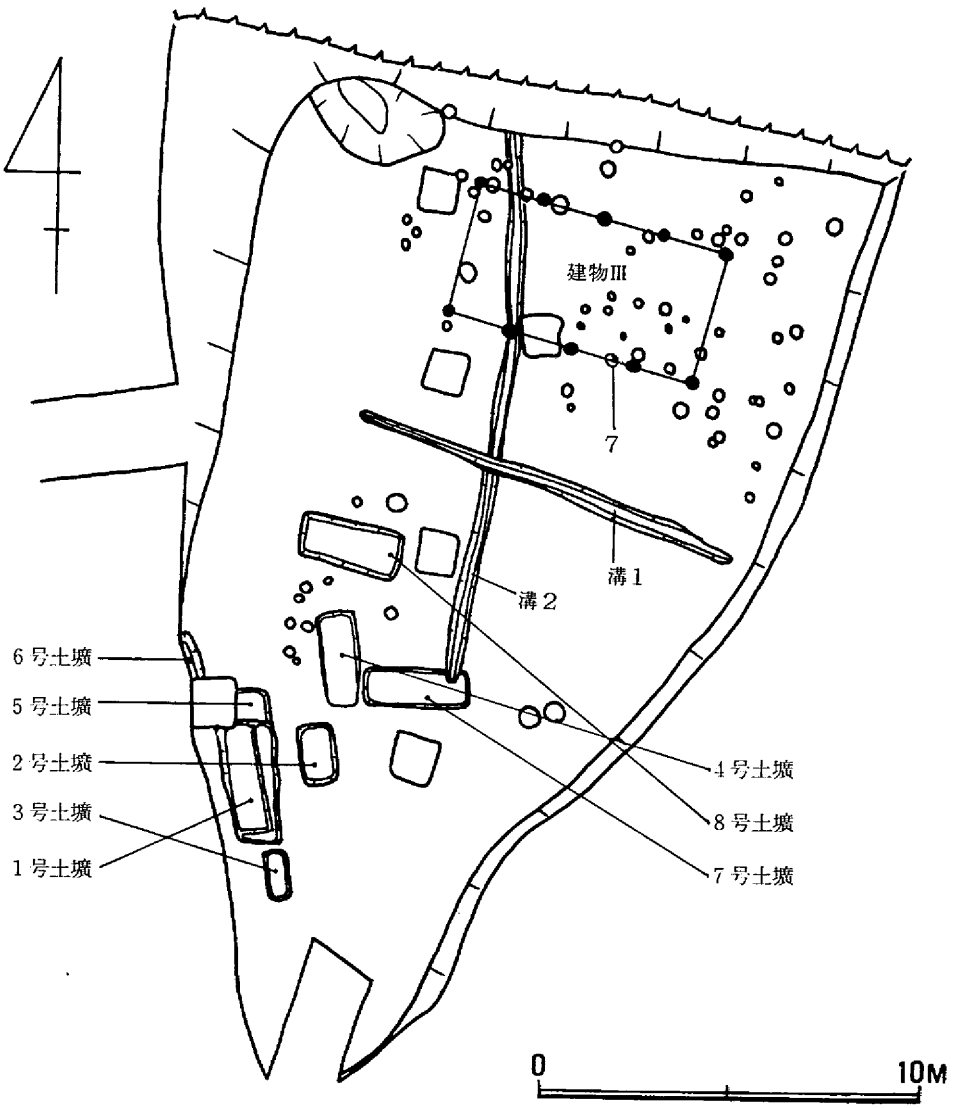


図16　和田遺跡B調査区Ⅰ区遺構配置図（1/200）

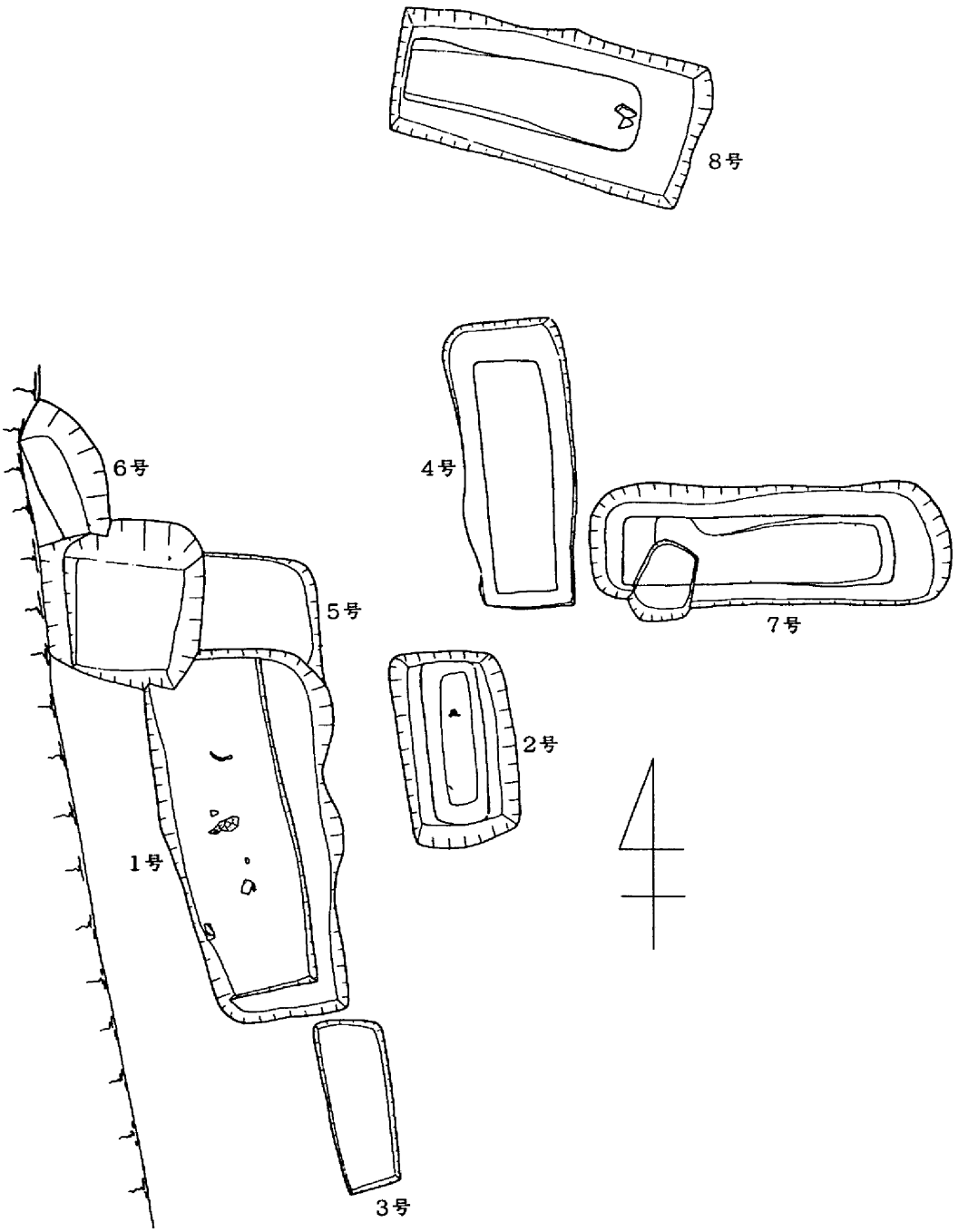


図17　和田遺跡B調査区弥生土壙墓群（1/40）

きたい。そして次に，Ⅳ区包含層出土遺物について説明を加えて行きたい。（浅倉）

§1. 弥生土壙墓群

第1号土壙墓

土壙墓群の中では最大の大きさを持つ。ほぼ南北方向の主軸で掘り方最大幅160cm，長さ325cm，現存の深さは北側で75cm，南側で55cmを測る。土壙内は東側に幅20cmと高さ15cmの段をつくり，棺床を掘り下げている。棺床の幅 90cm，長さ 290cm，深さ15cmと測る。床面は青白色粘土を2～3cm敷きつめている。部分的に朱の痕跡も見られた。埋土上部より図20，21の特殊器台の破片が3個体分出土している。又，床面からは勾玉3，管玉7，水晶3，ガラス玉26個が一連状態で出土している。

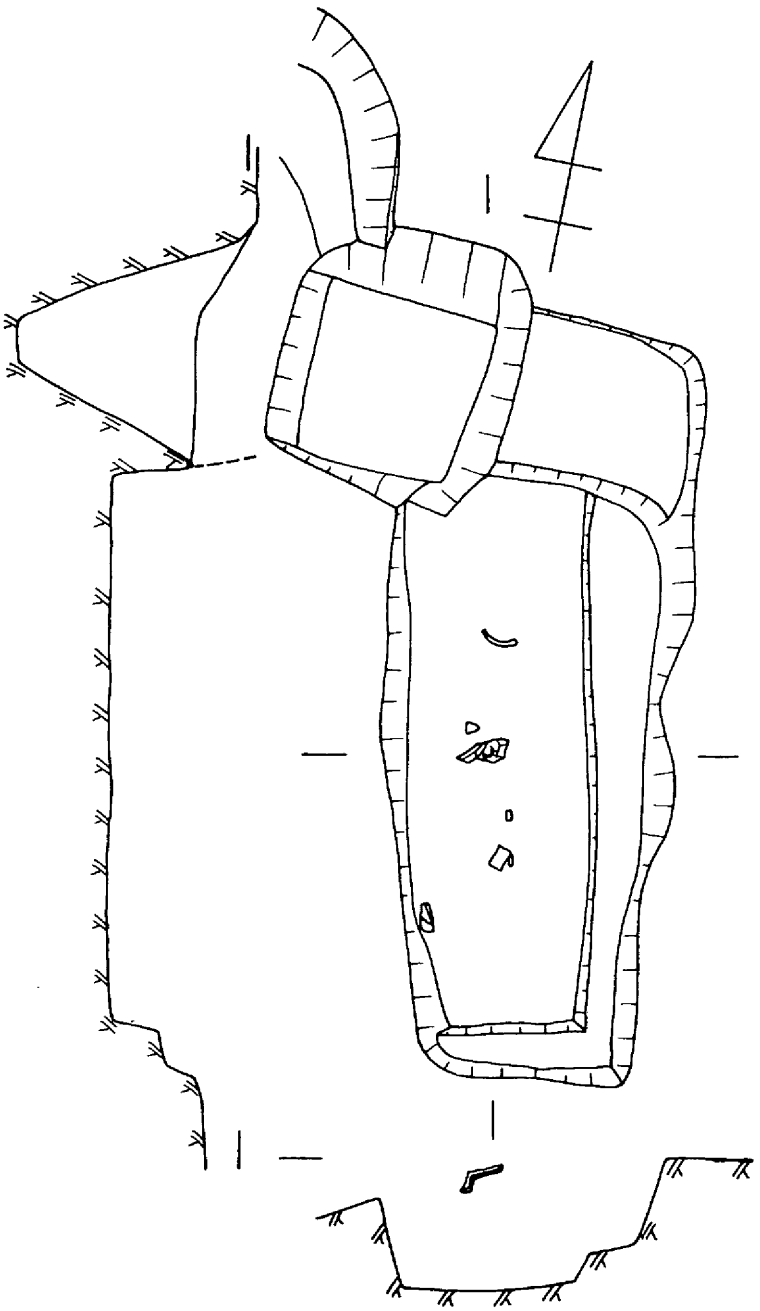


図18　和田遺跡B調査区第1・5・6号土壙墓平・断面図（1/40）

出　土　遺　物

土器片はすべて第1号土壙埋土内より検出したものである。1は特殊器台口縁の受口部で口縁部と剝離した状態である。2～5は，間帯と文様帯部分で，内面は立方向の篦削りを行う。

6は脚部である。裾部外面は篦磨きを行う。脚部はわずかに外に開く。乾燥時にひび割れをしたのか幅6cmの範囲で補修

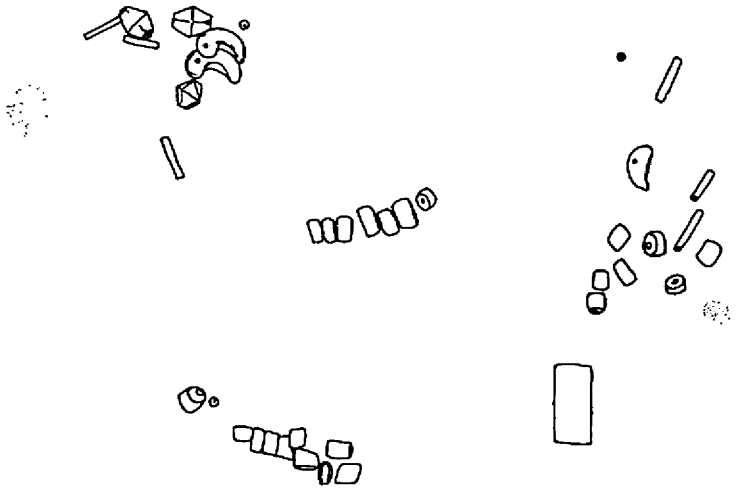


図19　和田遺跡B調査区第1号土壙墓玉類出土状況（1/2）

を行っている。1～6は同一個体と考えられ胎土は黄褐色を呈する。

7は別個体で脚部から第4間帯，第4文様帯までの破片で，筒部内面は縦方向の篦削りを行う。裾端部に4条の沈線を廻らし，脚部はわずかに内傾する。胎土は茶褐色を呈する。

8・9は，今までの2個体とは異なり，いわゆる，特殊器台の胎土で雲母片を含み，表面に丹塗りを行い薄手の作りのものである。胎土は茶褐色を呈する。

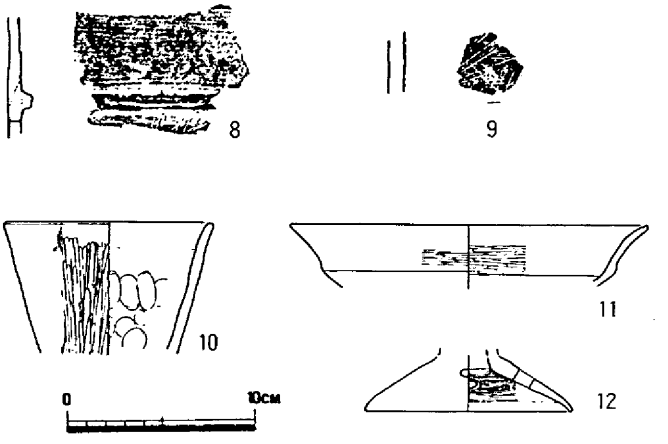


図20　和田遺跡B調査区第1号土壙墓出土遺物（I）（1/4）

10は，壺形土器口縁部片で玉ねぎ状の体部と高杯の脚状のものを持つものと思われる。外面は縦方向の篦磨き，内面は指頭圧痕，口縁部に横なでを行う。外表面は丹塗りを行っている。胎土は淡褐色を呈する。

11は高杯の口縁部は斜め外方に開き，端部を丸く収める。杯部は浅く皿状になる。内外面とも丁寧な横方向の篦磨きを行っている。

12は「八」の字状に伸びる脚裾部で四孔を穿つものと思われる。外面は磨滅のためよく判らないが内面は刷毛調整を行う。

第2号土壙墓

第1号土壙墓に併行してすぐ東側につくられている。1号土壙に比較すると$\frac{1}{2}$程の小型である。幅

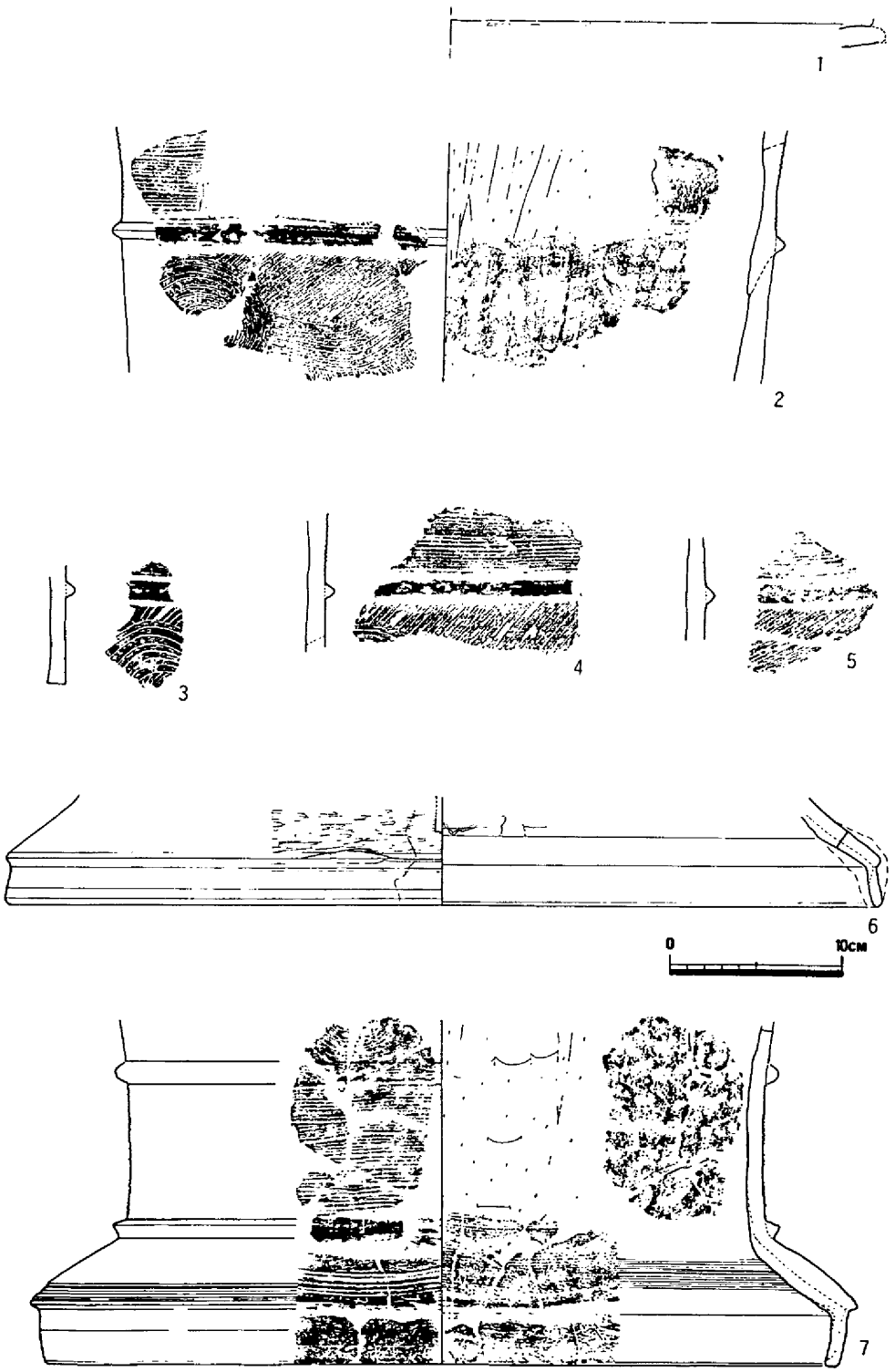


図21　和田遺跡B調査区第1号土壙墓出土遺物（2）(1/4)

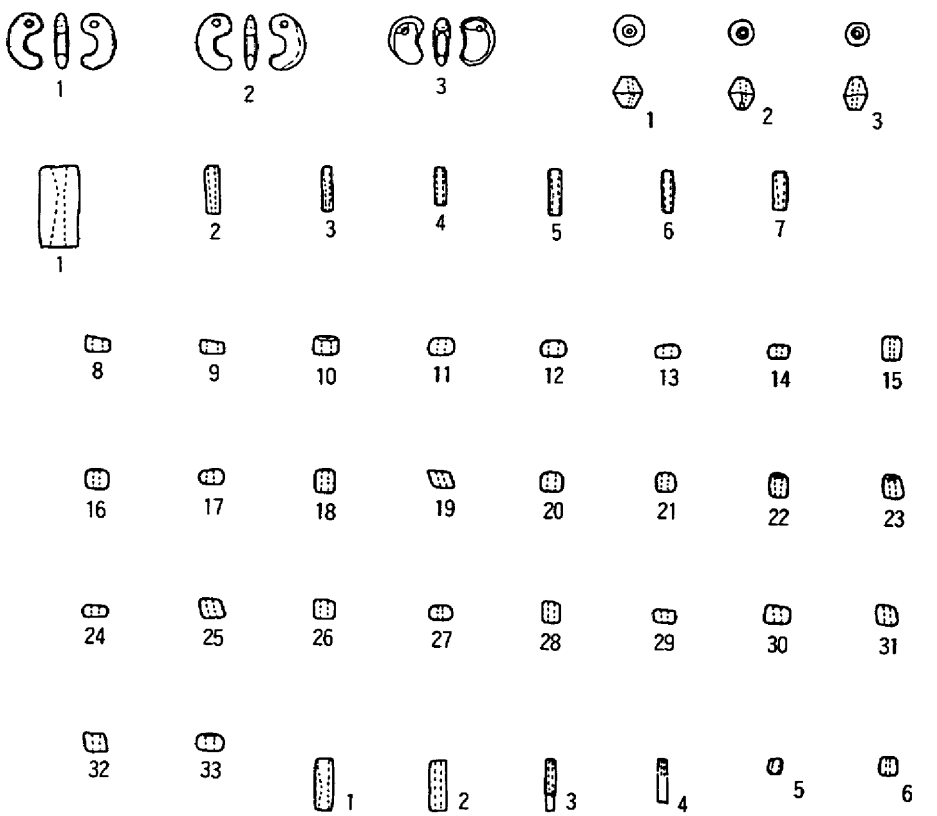


図22　和田遺跡B調査区第1，第3一土壙墓出土遺物 (3) (1/2)

第1表　和田遺跡B調査区第1号壙出土玉類計測表

項目 / 番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径 (mm) (図の上)	孔径 (mm) (図の下)	重さ(g)	原材	色彩	備考
勾玉 1		14.5	(左)1.4	(右)1.6	0.5	質の悪い硬玉	白色	両側穿孔
2		14.7	〃 1.9	〃 1.7	0.5	〃	淡青白色	
3		12.2	〃 1.5	〃 1.0	0.6	硬玉	黄緑色～淡黄緑色	
水晶玉 1	8.0	8.1	1.3	1.0	0.6	水晶		両側穿孔
2	6.5	8.0～8.4	1.6	1.1	0.4	〃		全体に丸味をもつ，両側穿孔
3	6.1	8.6	1.5	8.0	0.4	〃		
管玉 1	10.2	11.2	3.8	3.8	4.0	碧玉	暗緑色	両側穿孔
2	3.7	12.5	1.7	1.0	0.2	緑色凝灰岩	灰緑色	
3	2.7	12.0	1.4	1.2	0.1	〃	暗灰緑色	両側穿孔
4	3.5	9.8	1.4	1.2	0.1	〃	灰緑色	〃
5	3.3	12.4	1.7	1.6	0.2	〃	淡灰緑色	〃
6	2.8	11.2	1.3	1.3	0.1	〃	〃	
7	3.8	10.2	2.0	1.5	0.2	〃	〃	

番号＼項目	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm) (図の上)	孔径(mm) (図の下)	重さ(g)	原材	色彩	備考
小玉 1	5.7～6.1	3.3～4.5	2.6	2.6	0.2	ガラス	藍色	(図22-8)
2	6.3～6.7	3.0～3.8	2.7	2.7	0.2	〃	〃	
3	5.7～7.0	5.0	2.3	2.3	0.2	〃	〃	
4	6.1～7.0	4.9	2.0	2.0	0.2	〃	〃	
5	6.5～6.8	4.1～4.4	2.4	2.3	0.2	〃	〃	
6	6.8	3.4～4.1	2.0	2.2	0.2	〃	〃	
7	6.0	4.0	19.5	16.5	0.2	〃	〃	
8	(上)(中・下) 5.3～5.4	6.5	1.4	1.3	0.2	〃	〃	
9	5.0～6.3	5.1	1.8	1.8	0.2	〃	〃	
10	6.5～7.3	3.9	1.5～1.9	1.4～2.1	0.2	〃	〃	
11	5.8	6.1	1.8	1.8	0.3	〃	〃	
12	5.2～6.1	4.2～4.7	1.8～2.3	1.8～2.2	0.2	〃	〃	
13	5.9	5.2	2.0	2.0	0.2	〃	〃	
14	5.5～5.8	5.1	1.8	1.8	0.2	〃	〃	
15	4.8～5.2	5.8	1.3～1.9	1.2～1.5	0.2	〃	〃	
16	5.3～6.1	5.5～6.2	1.1～1.8	1.4～1.8	0.3	〃	〃	
17	6.5～6.8	3.0～3.9	1.5～2.1	1.7～2.0	0.2	〃	〃	
18	6.0～6.9	5.0～5.3	2.0	2.3	0.3	〃	〃	
19	5.3～5.6	5.0	2.1	2.0	0.2	〃	〃	
20	5.7～6.5	4.1	1.5～1.8	1.5～1.8	0.2	〃	〃	
21	5.3	5.0～6.0	1.8	1.7	0.2	〃	〃	
22	6.2	3.4～3.7	2.0	1.7	0.2	〃	〃	
23	7.1	4.5～5.0	2.0	2.0	0.3	〃	〃	
24	5.9	5.2～5.6	1.6	1.6	0.3	〃	〃	
25	6.7～7.2	4.2～4.7	2.5	2.2	0.3	〃	〃	
26	6.0	5.1	2.3	2.3	0.3	〃	〃	(図22-33)

第2表　和田遺跡B調査区第2号土壙墓出土玉類計測表

番号＼項目	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm) (図の上)	孔径(mm) (図の下)	重さ(g)	原材	色彩	備考
管玉 1	4.6	13.5～13.9	3.0	2.4	0.4	緑色凝灰岩	淡灰緑色	両側穿孔
2	4.5	13.5	1.7	1.3	0.4	〃	〃	
3	2.6	現存 9.7	1.1	1.1	0.1	〃	〃	
4	2.5	現存 4.6	1.0	7.5		〃	淡灰緑～淡緑白色	
小玉 1	3.6～3.9	3.5～3.9	1.3～1.8	1.2～1.7	0.1	ガラス	淡青色(みずいろ)	半分(欠)
2		4.9	1.1		0.1	〃	〃	

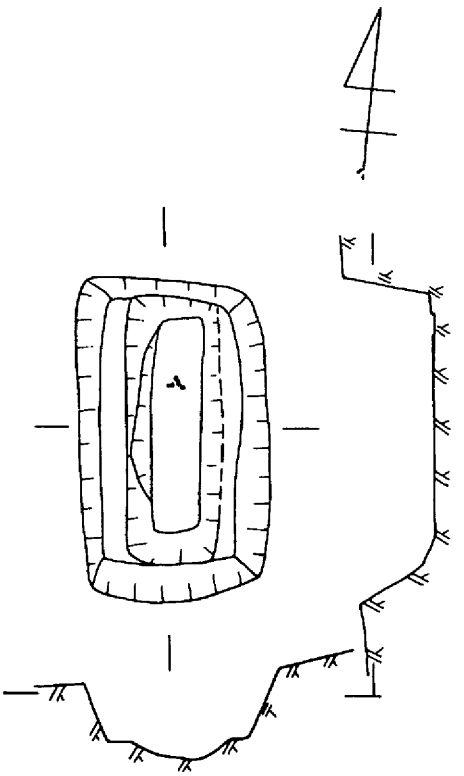


図23　和田遺跡B調査区第２号土壙墓平・断面図（1/40）

98cm，長さ174cm，深さ35cm，棺床幅50cm，長さ140cm，深さ７cmと測る。棺床内は粘土を敷きつめ部分的に極めて薄く朱の散布しているのが見られた。棺床北部より管玉３，ガラス玉３個が出土している。

第３号土壙墓

第１号土壙とほぼ同一方向で南北に主軸をもつ。幅55cm，長さ150cm，現存深さ20cmの小型のものである。土壙内からの出土遺物は見られない。

第４号土壙墓

第２号土壙の北側に南北方向につくられ，南側では掘り方痕跡も数センチしか残存していなかった。掘り方幅98cm，長さ150cm，深さ８cm，棺床幅60cm，長さ204cm，深さ２cmを残すのみ

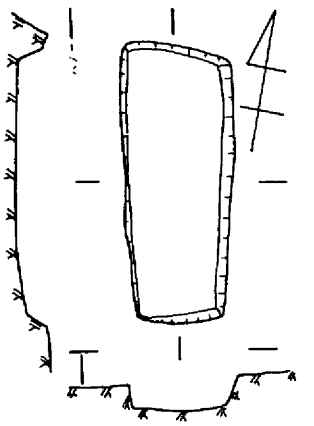
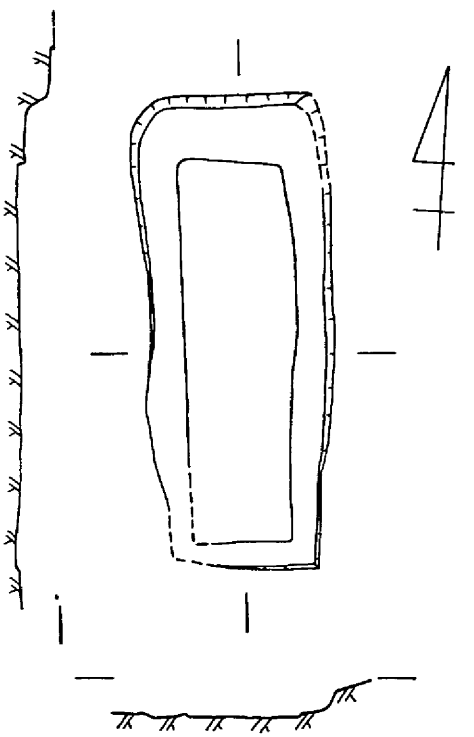


図24　和田遺跡B調査区第３号土壙墓平・断面図（1/40）



25図　和田遺跡B調査区第４号土壙墓平・断面図（1/40）

である。部分的にしか検出できなかったが棺床全体に粘土を敷きつめていたと思われる。土壙内からの出土遺物は見られない。

第5号土壙墓

深さ20cm前後を残すのみで西側は崖面で，南側は現代土壙により削られ全体ははっきりしない。

第6号土壙墓

第1号土壙のすぐ北側に第1号土壙と切り合う状態で検出されたが，当初第1号土壙の延長と考えていたため，第1号土壙との前後関係がはっきりしない。これも西側を新しい土壙に切られ全体を見ることはできない。

第7号土壙墓

第4号土壙のすぐ東側につくられている。今までのものとは異なり主軸は東西方向である。土壙掘り方幅100cm，長さ300cm，深さ25cm，棺床幅60cm，長さ236cm，深さ5cmを測る。棺床全体を2～3cmの灰色ぎみの粘土を敷きつめている。部分的に朱が認められた。出土遺物は見られない。

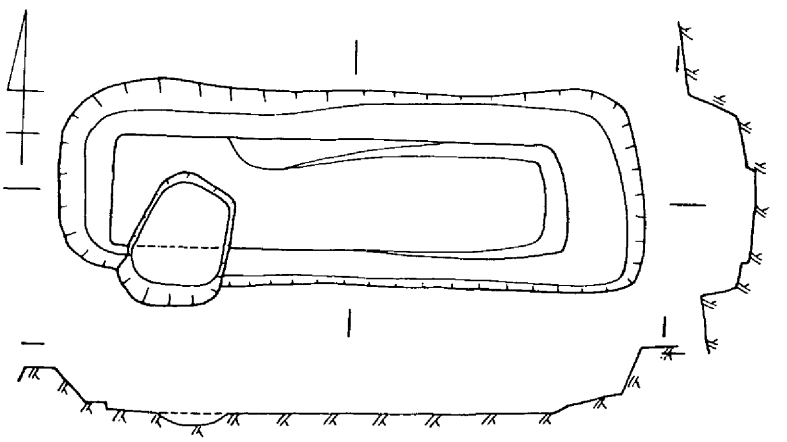


図26　和田遺跡B調査区第7号土壙墓平・断面図（1/40）

第8号土壙墓

第4号土壙の北側に，第7号土壙と同じく主軸をほぼ東西方向につくられている。土壙の掘り方幅120cm，長さ275cm，深さ35cm，棺床幅60cm，幅203cm，深さ3cmを測る。棺床全体に2～3cmの灰色を帯びた粘土を敷きつめている。東側に2個の角礫を置き枕石としている。（伊藤）

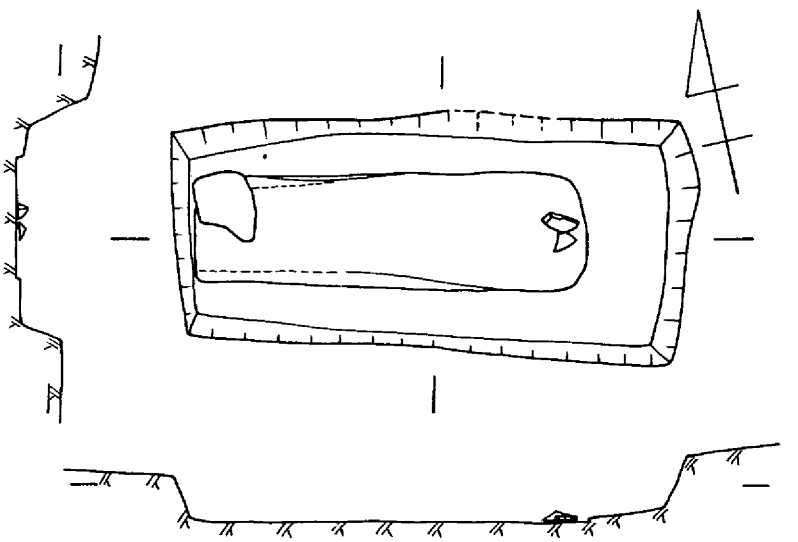


図27　和田遺跡B調査区第8号土壙墓平・断面図（1/40）

§ 2. 窯状遺構（図28）

Ⅱ区の西端緩斜面に位置する。Ⅱ区の柱穴等のある遺構面から約２m下がった所である。尾根の等高線とほぼ平行な主軸を持っている。全く何の遺物も伴わない遺構である。煙突と窯体で構成される。

法量は，現存の全長が4.5m，深さ＝壁の現存高が40cm・煙突の掘り方直径約70cm・煙突の内法直径20cm・煙道の高さ 30cm・煙道の長さ25cm・窯体の現存床面の長さ 3.2m・窯体の現存床面の幅１m・窯体床面の傾斜角度３度を測る。

煙突の構造は，まず直径70cmの穴を掘り下げ，その中に一辺 20cm～10cmの角礫を小口を内側にして，馬蹄形に積み重ねている。石もその間をつめている土も，赤色に焼成を受けている。床面は灰褐色で，コンクリートのように焼けしまっている。現存の深さは約30cmある。

窯体は，床面の一部と東側の壁が残っているだけで，天井は削り取られている。床面は灰黒色～灰色でよく焼けしまっている。壁表面も同様であるが，やや焼きが甘いようである。花崗岩の風化土層を掘り込んで，床面などはほとんど岩盤である。壁を観察すると，厚さ５～７cm程が黄色を呈し，レンガ状に剝離する。更に外側25cmの幅が変色している。須恵器の窯と同じような温度を受けていることを示している。西側の床面を観察すると，２カ所に黄色を呈する所がある。更にその中の煙突に近い方には，黄色の外方が橙色を呈している。これはこの場所に何らかの施設が付属していたことを示している。これはこれまでの類例からすると横口が開口していた痕跡であると思われる。

すなわちこの窯の構造は，岡山県北で数例，全国的に10数例を数える，横口をいくつも有する炭窯といわれている窯である。（註-4）

（浅倉）

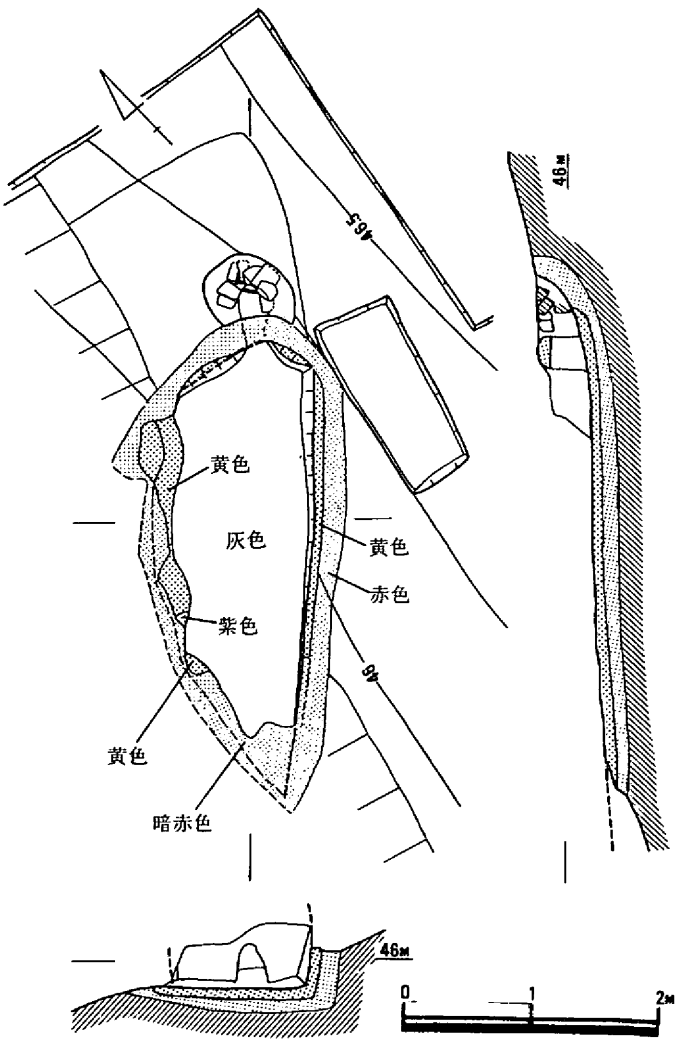


図28　和田遺跡Ｂ調査区窯状遺構平・断面図（1/60）

§3. 熱残留磁器による古窯跡の年代決定

（1） 遺跡名　和田遺跡窯跡

（2） 所　在　岡山県浅口郡鴨方町益坂和田

（3） 測　定

良く焼きしまった窯底から20個の試料を採取した。これらのうち良好な形状のもの18個について，熱残留磁気の方向を測定した。測定された磁化ベクトルのまとまりは非常に良く，危険率5％の誤差角は1.2°という小さい値となった。

Im	（平均伏角）	55.4°
Dm	（平均偏角）	12.9°W
$\alpha 95$	（誤差角）	1.2°
K	（信頼度係数）	839
N	（測定試料数）	18

（4） 年代決定

$\alpha 95$より伏角および偏角の誤差を求めるとそれぞれδIm ＝1.2°，δDm＝2.1°となる。地磁気の伏角，偏角の永年変化図の上に，上でもとめられた(Im，Dm)を十字線で，(δIm，δDm)を楕円で記入する。図より，和田遺跡窯跡の年代は720±20A.D.と推定される。(時枝克安)

地磁気永年変化図は次の文献による。

Hirooka, K.1971, Archaeomagnetic study for the past 2000 years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci.Geol. Mineral., 38, p. 167-270.

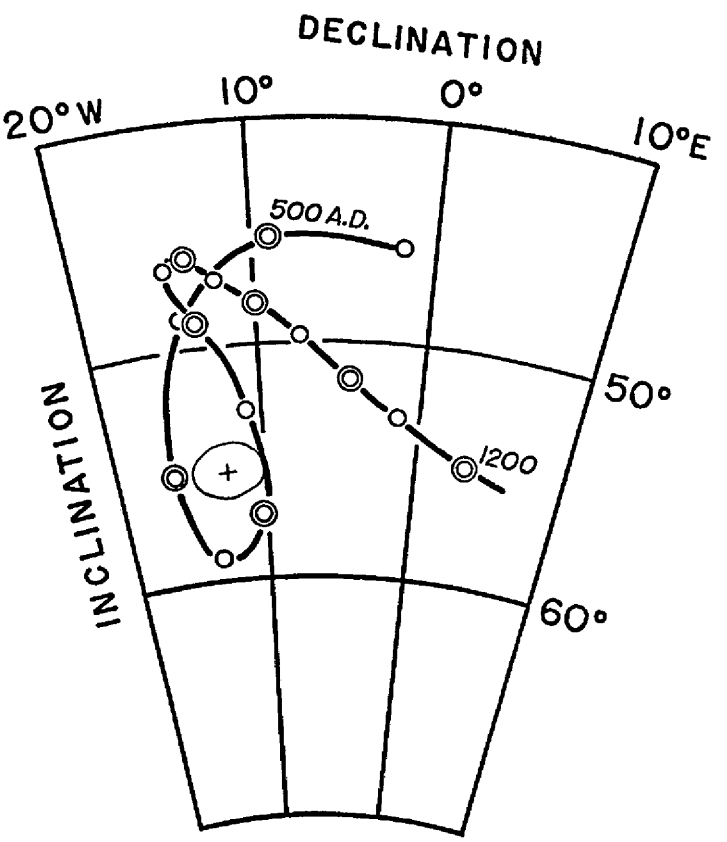


図29 地磁気永年変化図

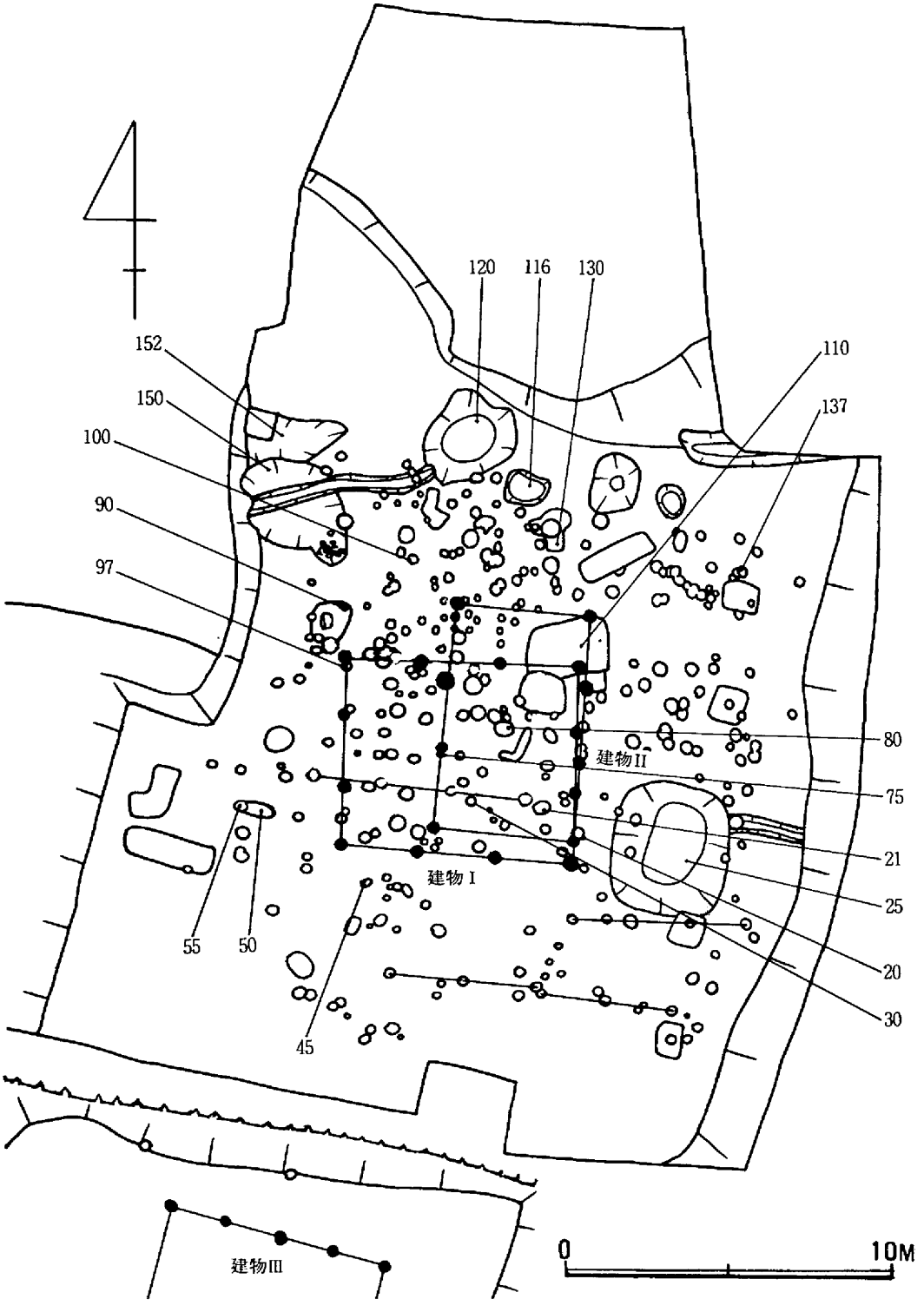
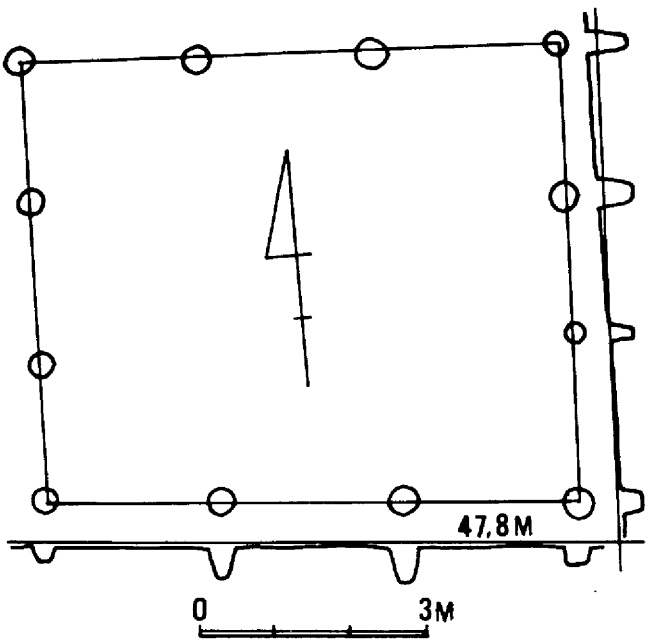


図30　和田遺跡B調査区II区遺構配置図（1/200）



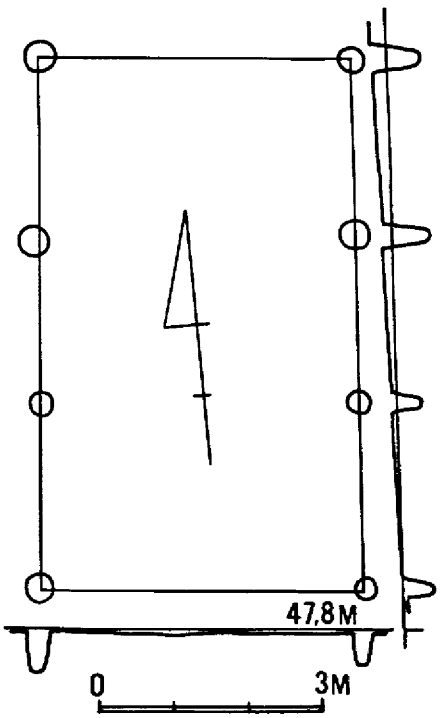


図31　和田遺跡B調査区建物I・II平断面図（1/100）

§4.　溝状遺構（図36）

I区に2本，十文字に検出した。溝1は現存長10.5m・幅50cm・深さ10cmを測る。遺物は，土師質土器の皿が2点出土している。図36-12は，口径12cm・器高2cm・底径9cmを測る。13は，口径13cm・器高1.7cm・底径10cmを測る。底部は指オサエする。溝2は，溝1と建物Ⅲに切られ，現存長14.5m・同幅40cm・同深さ10cmを測り，ほぼ南北にのびる。

§5.　建　物　群

（図30～32・34・36）

建物Iは，II区中央部に位置する東西3間・南北2間の掘立柱建物である。柱穴の大きさは，直径30～40cm・深さ20～50cmを測る。柱間は，東西2.4m・南北2.0mを測る。この建物は，東側が西側より少し長い歪んだ長方形を呈している。遺物は，柱穴から土師質土器の皿が2点出土した。図34-1は，口径8.4cm・器高1.6cm・底径6.0cmを測る。図34-2は，口径10cm・器高1.5cm・底径7.3cmを測り，底部は指オサエする。

建物IIは，建物Iと同じ位置に重複する。南北に長い掘立柱建物である。南北3間・東西1間あり，柱間は南北2.4m・東西4.2mを測る。柱穴の大きさは，直径25～40cm・深さ40～70cmを測る。遺物は土師質土器の皿が2点出土している。図34-3は，口径9.6cm・器高1.6cm・底径7cmを測り，底部は上げ底を呈し，指オサエを行っている。図34-4は，口径11.7cm・器高1.6cm・底径8.2cmを測る。口縁部はわずかに外反し，底部は指オサエする。遺物から見て，建物IIは建物Iよりもわずかに古いように思われる。

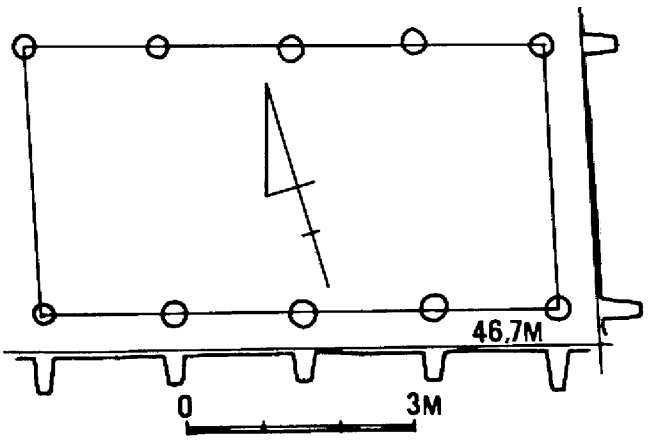


図32　和田遺跡B調査区建物III（1/100）

建物 Ⅲは，Ⅰ区の北方に位置する。東西４間・南北１間の長方形建物である。柱穴の大きさは直径30～40cm・深さ35～55cmあり，柱間は東西1.8m・南北3.6mを測る。遺物は土師質土器の皿が４点出土している。図36－７～10である。７・８は同じ柱穴から出土した。口縁部はヨコナデし，底部は指オサエする。淡茶褐色～茶褐色を呈し，砂礫を多く含む。

§ 6.　土壙群（図30・33～36）

No－７はⅠ区にある柱穴で，直径30cm・深さ30cmを測る。遺物は，図36-11の瓦質土器・内耳鍋の破片が出土している。内耳は幅２cmあり，直径８mmの円孔を有す。内面は横刷毛，外面は縦刷毛を施す。

No-20はⅡ区中央部にある柱穴で，直径30cm・深さ45cmを測る。遺物は図34－５と６の２点が出土している。５は土師質土器の小皿で，６は国産の白磁皿である。

No-21はNo-20のすぐ西にある柱穴で，直径40cm・深さ30cmを測る。「開元通宝」が一枚出土。

No-25は建物Ⅰ・Ⅱの東にある長方形の土壙で，長辺４m・短辺3.5m・深さ43cmを測る。図34-26

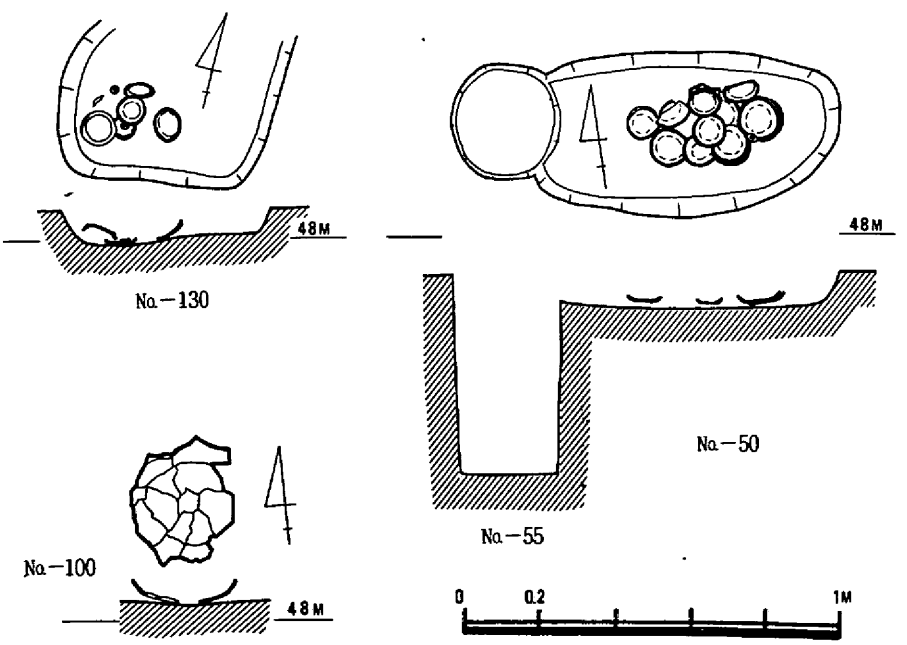


図33　和田遺跡B調査区II区土壙（1/20）

～32の7点の遺物が出土している。26は土師質土器の小皿，27は白色釉のかかった磁器，28は瓦質土器の鉢，29は瓦質土器の擂鉢，31は備前焼の壺，32は白色釉のかかった磁器碗である。

No.-30はNo.-21の両側にある柱穴で，直径30cm・深さ30cmを測る。図34-7・8の土師質土器・皿が2点出土している。7は口径10cm・器高1.9cm，8は口径14cm・器高2.4cmを測る。

No.-45は建物Ⅰの南側にある柱穴で，直径25cm・深さ30cmを測る。遺物は，図34-9・10の2点が出土している。9は土師質土器の小皿で，口径8cm・器高1.7cm・底径6.2cmを測り，底部は指オサエを行う。10は青磁の碗の細片で，外面に雷文が施されている。

No.-50は建物Ⅰの西方にある楕円形の土壙で，長径85cm・深さ8cmを測る。遺物は，図34-11～25の15点の土師質土器の他，33枚の古銭が共伴している。土師質土器は，小皿5点とやや大きめの皿10点に分かれる。小皿は，口径8.0～9.0cm・器高1.4～1.6cm・底径5.3～6.0cmを測る。大皿は，口径10.2～10.6cm・器高1.9～2.2cm・底径8.5～8.7cmを測る。口縁部は丸く作り，器壁が厚い。底部は指オサエのままで，指頭圧痕が明瞭に残っている。古銭は，「開元通宝」・「至道元宝」・「祥符元宝」・「天禧通宝」・「皇宋通宝」・「至和元宝」・「嘉祐元宝」・「治平元宝」・「熙寧元宝」・「元豊通宝」・「元祐通宝」・「元符通宝」・「大定通宝」・「至大通宝」・「洪武通宝」・「永楽通宝」が見える。

No.-55はNo.-50の西に接している柱穴で，直径30cm・深さ53cmを測る。遺物は古銭が3枚出土している。「開元通宝」・「咸平元宝」・「景祐元宝」である。

No.-75は建物Ⅱの西側の柱穴に接した柱穴であり，直径32cm・深さ60cmを測る。遺物は図34-33・34の2点が出土している。33は土師質の皿，34は古伊万里の染付酒杯である。

No.-80は建物Ⅱの中央部にある柱穴で，直径40cm・深さ58cmを測る。遺物は図34-35・36の2点が出土している。35は土師質土器の小皿で灯明皿として使用したもの。底部に板目が認められる。36は鉄製の毛抜きである。長さ7.6cm・厚さ2mm・幅5mmを測る。

No.-90は建物Ⅰの北西にある柱穴で，直径20cm・深さ24cmを測る。遺物は図34-37が1点出土している。土師質土器の小皿で完形品。口径6.9cm・器高1.4cm・底径5.4cmを測る。

No.-97は建物Ⅰの北西隅の柱穴に接した柱穴である。直径30cm・深さ47cmを測る。遺物は図34-38が1点出土している。瓦質土器の三足鉢で，口縁端上面を水平に作り，体部内外面刷毛目を施している。灰黒色を呈し，3～5mm大の礫を含む。口径30cm・器高18cmを測る。

No.-100は建物Ⅰの北方にあり，図34-39の瓦質土器が据えられたような状態で検出した遺構である。掘り方は検出できなかった。この土器は三足を持っており，内面は粗い刷毛目，外面は格子目叩き，底部も粗い刷毛目を施している。

No.-110は建物Ⅱの北東隅にある長方形土壙で，長辺2,5m・短辺1,6m・深さ33cmを測る。出土遺物は図34-40～43の4点の土器と，古銭が3枚である。40は瓦質土器の手鍋の破片，41は瓦質土器の土鍋，42は瓦質土器の鉢，43は鉄釉を施した碗である。古銭は「景祐元宝」・「皇宋通宝」・「寛永通宝」が見える。

No.-116はⅡ区北部にある不定形な土壙で，長さ1,3m・幅1,2m・深さ20cmを測る。遺物は瓦質土器

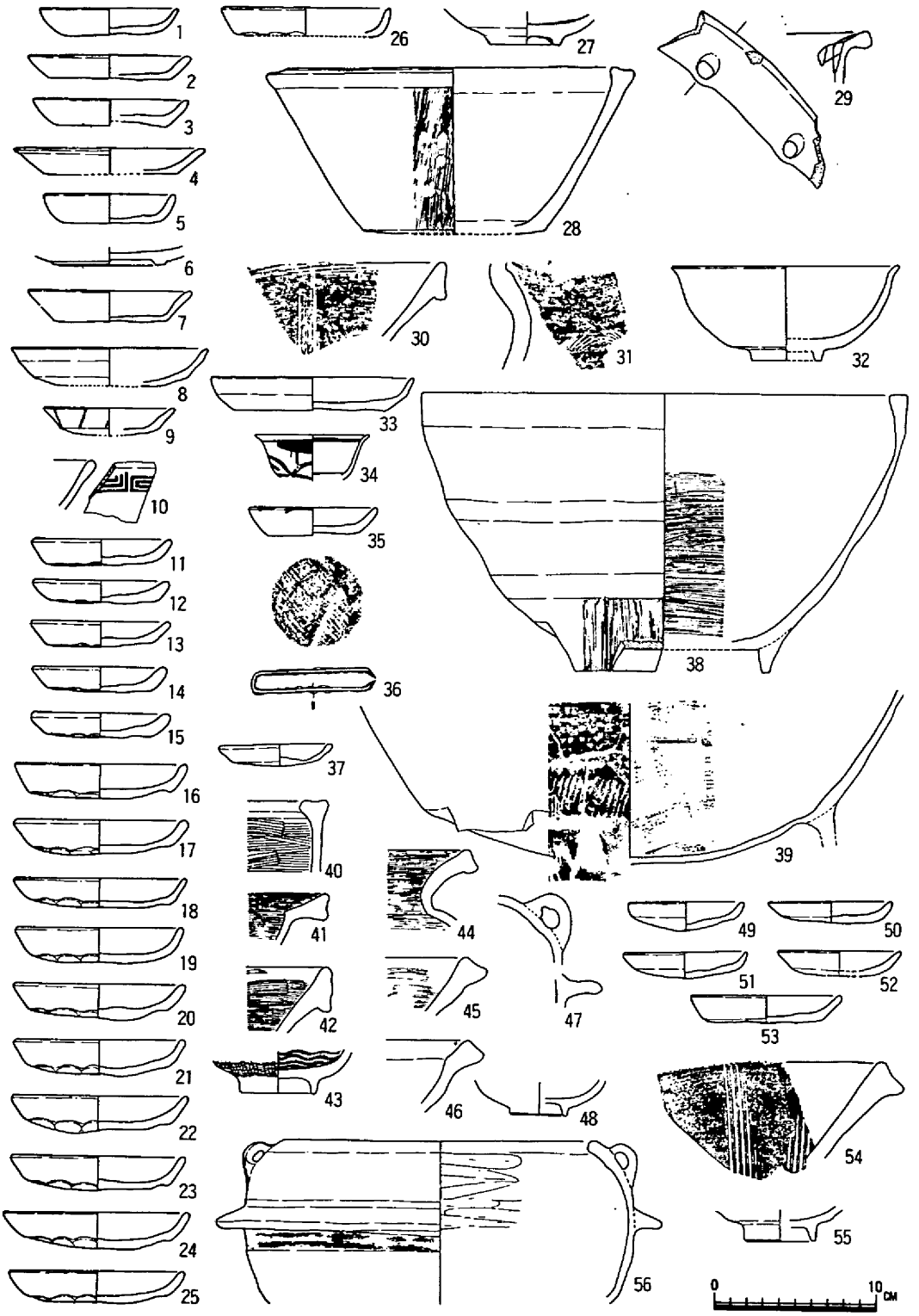


図34　和田遺跡B調査区出土遺物(1)(1/4)

の擂鉢で，No.-137出土の擂鉢と同一個体であった。

No.-120はⅡ区北方にある不定形な大形の土壙で，径が2.7m・深さ1.0mを測る。この土壙から流れ出したと考えられる溝を伴う。溝は幅60cm・深さ20cm・長さ6mある。出土遺物は図34-44～48の5点ある。瓦質土器は甕と鉢と羽釜で，他は緑灰色釉を施した磁器碗である。

No.-130はNo.-116の南にある正方形土壙で，一辺55cm・深さ8cmを測る。図34-49～53の土師質土器・皿5点と「寛永通宝」を7枚共伴している。49～52は全面指頭ナデしていて，ややとがり底を呈する小皿である。53は少し大き目の皿で，底部を指オサエしている。

No.-137はⅡ区の北東部に位置する柱穴で，直径30cm・深さ42cmを測る。建物は図34-54・55の2点が出土している。54は瓦質土器の擂鉢，55は黄色釉の施釉された磁器碗である。

No.-150はⅡ区北西部に位置する不定形な大形の土壙で，径2.7m・深さ70cmを測る。遺物は図36-1～6の6点が出土している。1は土師質土器の皿，2・3は瓦質土器の土鍋，4は同じく擂鉢，5は同じく内耳鍋，6は古伊万里と考えられる染付の大皿である。

No.-152はNo.-150の北に接している，不定形な大形の土壙である。遺物は図34-56の瓦質土器・羽釜が出土している。灰褐色を呈し，3mm以下の砂礫を多量に含んでいる。約$\frac{1}{3}$残存する。

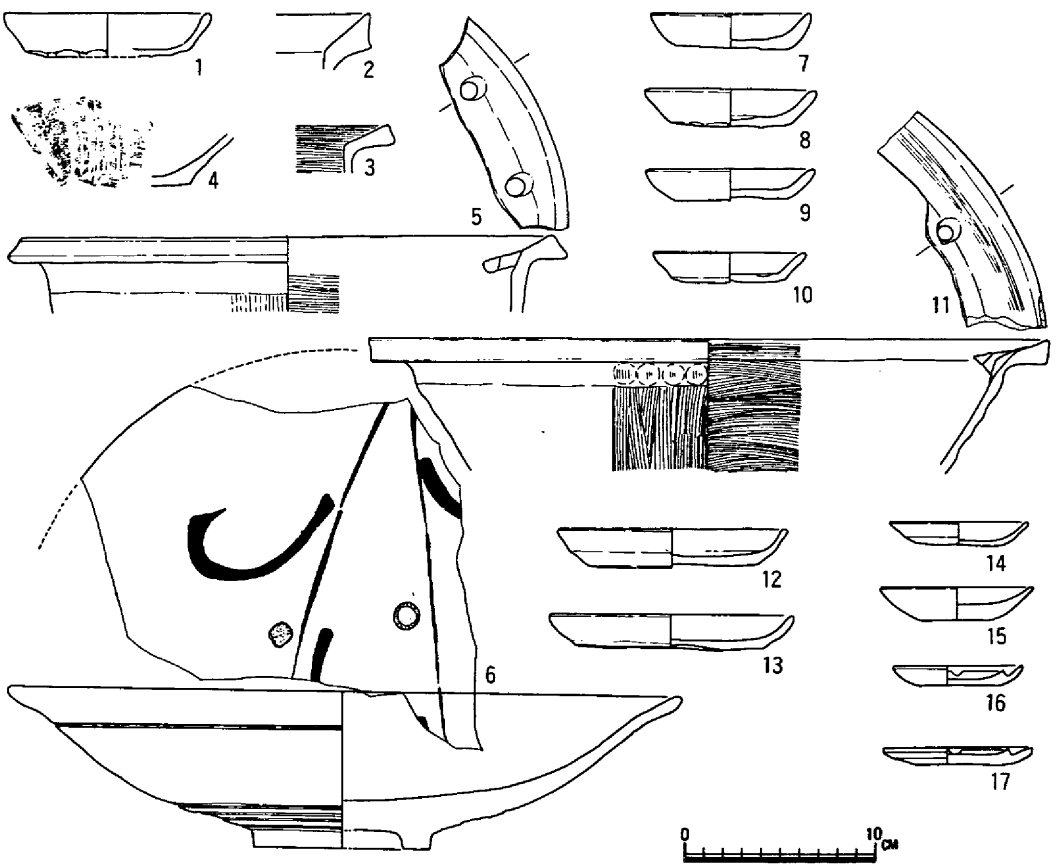


図35　和田遺跡B調査区出土遺物(2)(1/4)

図36　和田遺跡B調査区 III 区遺構配置図（1/200）

§7. Ⅳ区包含層出土遺物（図37-1～35）

1は土師器の甕形土器で，外反する口縁端は内傾する面をなす。体部は外面に刷毛目が残る。

2は須恵器の甕形土器で，外反する口縁端は内傾して凹面を作る。体部外面は平行叩きを施す。

3は土師器の椀で，高台は貼り付け，器面は丁寧な研磨を施している。

4は白磁の碗で，口縁部は玉縁を呈する。釉薬はわずかに緑色を帯びた灰白色である。

5は白磁の碗で，高台は1cmある。釉薬はわずかに緑色を帯びた灰白色で，底部外面は無釉。

6は白磁の碗で，高台は5mmしかない。釉薬はわずかに緑色を帯びた灰白色である。

7は緑釉陶器の碗で，須恵質である。2mm大の石英粒を含んでいるが，全体に良質粘土を使う。

8は土師器の椀で，口径10.5cm・器高4.2cmを測る。器壁は薄く，貼り高台は小さく低い。

9は土師器の椀で，口径10.9cm・器高3.4cmを測る。8と同様，雑な作りである。

10は土師器の椀で，口径10.5cm・器高3.8cmを測る。底部を凹ませて，高台の役割を持たせている。

11・12も同じくへそ椀と呼ばれているものである。11の口径は10.2cm，12は10,0cmを測る。

13は土師器の小皿で，口径7cm・器高1.3cmを測る。底部は丸い。全面ナデ仕上げを行っている。

14は土師器の小皿で，口径10cm・器高1.7cmを測る。底部は13より丸い。粗いナデ仕上げを行う。

15は備前焼の壺で，口縁部は玉縁を呈している。外面には緑色の自然釉がかかっている。

16は備前焼の甕と考えられる。口縁部は，ただ肥厚して丸く作っている。内面に横刷毛を施す。

17は須恵質土器の鉢で，口径は約20cmある。口縁端部はやや肥厚し，外傾する面を作る。

18は須恵質土器の鉢で，口径は約26cmある。口縁端部は肥厚して上方にのび，丸く収める。

19は須恵質土器の鉢で，口径は約25cmある。口縁端部は肥厚して上下にのび，上端は丸く収める。

20は瓦質土器の擂鉢で，口縁部は下方へのびる。内面に粗い条線があり，外面は刷毛目を消す。

21は瓦質土器の擂鉢で，底部は平底である。内面に6本で一単位の条線を施し，外面は粗い刷毛。

22は瓦質土器の甕で，外反する口縁の端部は外傾する面を作る。体部外面に細い格子目叩き。

23は瓦質土器の鉢で，外反する口縁の端部は肥厚し，外傾する凹面を作る。内外とも粗い刷毛目。

24は瓦質土器の鉢で，口縁端部は凹面を作る。口縁部内外面は横ナデ，体部は内面粗い刷毛目。

25は瓦質土器の内耳鍋で，内耳の幅は2.5cm・長さ12.5cmを測る。円孔の直径は8mmを測る。

26は瓦質土器の羽釜で，つばの幅2.2cm・厚さ7mmを測る。内面は細い横刷毛，外面は不明。

27～29は瓦質土器の鉢で，口縁端部は凹面を作る。内面は横刷毛，外面は縦刷毛の後横ナデ。

30は土師質土器の壺形土器で，口縁部はほぼ直立し，端部は外傾する面を持つ。口径は19cmを測る。口縁部内面と体部内面は横方向の刷毛目，体部外面は縦方向の粗い刷毛目である。

31は土師質土器の土鍋で，口縁部は外反して，端部は丸く収める。全体に丁寧な作りである。

32は陶器の土鍋で，口縁部は外反し，端部を面取りしている。内外面とも横ナデする。

33は古伊万里の染付磁器碗で，内外面ともに青色の文様を施している。

34は古伊万里の染付磁器碗で，見込みに円圏線と花模様を青色で施している。

35はは磁器の壺で，茶色の釉を施している。下地の色は黄褐色である。外面には凹線文風の横線が何本も描かれている。底部はヘラ削りされ，削り高台になっている。（浅倉）

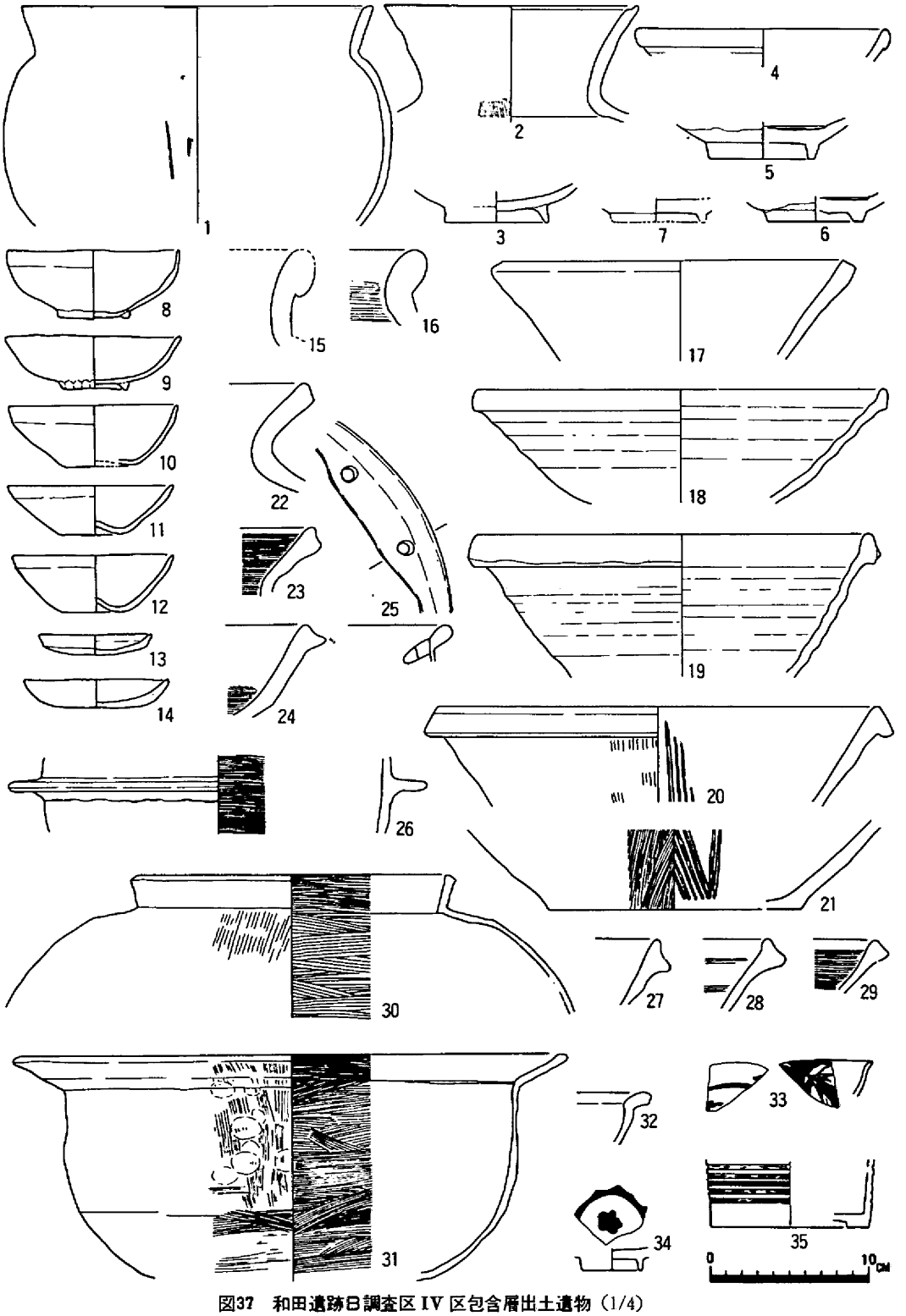


図37　和田遺跡B調査区IV区包含層出土遺物（1/4）

（4） C 調 査 区（図4・38）

本調査区は，和田遺跡の最も西側にあたる。民家の間の柿の木畑である。トレンチの14によって，遺物包含層が確認されていた。遺構は全く検出できず，遺物が少々出土している。16点を図示した。

1は土師器の台付椀形土器で，ほぼ完形に近い。口径12.0cm・器高8.0cm・底径9.0cmを測る。口縁部・体部は内湾し，口縁端部はとがっている。脚は大きく外下方に広がる。外面は縦刷毛を施す。

2は土師器の小皿で，底部は糸切りを行っている。口径8.5cm・器高1.7cmを測る。

3は土師器の椀で，断面三角形の貼り付け高台を持つ。底部は糸切りと思われる。

4は土師質土器の皿で，底部は指オサエを行う。口径は13cm・器高は2.0cmを測る。

5は須恵質土器の壺で，口縁部は直立し，端部がわずかに外反する。

6は瓦質土器の擂鉢で，口縁端部は肥厚して上下にのびる。内面は横刷毛，外面は縦刷毛。

7は瓦質土器の擂鉢で，口縁端部は肥厚して下方にのびる。

8は瓦質土器の鉢で，内湾する体部から外反する口縁部に続く。端部は外傾する凹面を作る。

9は8と同じ作りの鉢で，口縁端部の器壁が少し薄い。

10は土師質土器の土鍋で，器壁は薄く，外反する口縁の端部は外傾する面を作る。

11は瓦質土器の鍋で，ほぼ直立する口縁部の端部は内・外に圧迫されてのびる。

12は瓦質土器の鍋で，口縁部と体部はやや内傾し，端部は水平に作る。口径は16cmを測る。

13は瓦質土器の内耳鍋で，内耳の幅は約2cmを測る。2個の円孔の直径は8mmを測る。

14は瓦質土器の甕で，平底の底部である。内面は粗い横刷毛，外面は格子目の叩きである。

15は瓦質土器の羽釜で，ほぼ全容がわかる程度の土器である。口径は16cm・器高は17cm・つばの外径は26.2cm・体部最大径は23.8cm・耳の高さ1.5cm・耳の穴の直径6mm・つばの幅1.6cmを測る。

16は磁器の染付茶碗である。器壁が極めて薄い。染付の色は青色である。古伊万里であろう。（浅倉）

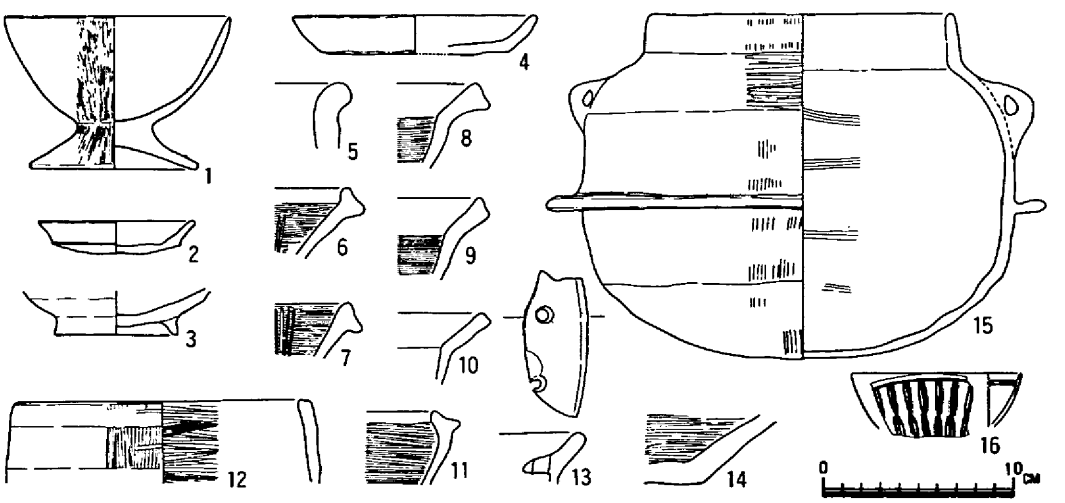


図38 和田遺跡C調査区出土遺物（1/4）

（5） D 調 査 区（図4・39）

本調査区は，B調査区Ⅲ区の西側に位置する。トレンチ13の拡張区にあたる。遺構は2～3本の柱穴がトレンチで検出されたが，拡張した部分には全く発見できなかった。遺物は図39に示す様に，緑釉陶器・土師器・青磁・瓦質土器・平瓦・陶磁器等の古代末～近世のものが34点以上出土している。

1は緑釉陶器の椀で，釉は高台まで及んでいる。白色を呈する土師質の土器である。垂直によくのびた高台は，端部が角張っている。器壁は厚い。0.5㎜以下の砂粒を少し含む。

2は土師器の小皿で，赤色～黄色を呈し，2㎜以下の砂を多く含む。口縁部・体部は横ナデ。底部はやや上げ底で，ヘラ切りしている。

3は土師器の台付小皿で，ほぼ完品である。高台は貼り付けで，高さ1.1㎝ある。口径9㎝・器高2.5㎝・底径5.8㎝を測る。淡赤褐色を呈し，2㎜以下の砂粒を多量に含む。

4は土師器の椀で，口径15㎝・器高5㎝・底径6.5㎝を測る。口縁部はわずかに外反し，体部は内湾する。高台は断面ほぼ三角形である。底部はヘラ切りと思われる。黄褐色を呈する。

5は土師器の椀で，口径14㎝・器高4.8㎝・底径5.6㎝を測る。口縁部・体部は内湾する。

6は土師器の椀で，口径16㎝・器高4.9㎝・底径7.8㎝を測る。形態は5と同じようである。

7・8は土師器椀の高台部分である。いずれも貼り付けで，外下方にのびて，端部を丸く収める。

9は青磁椀で，ゆるやかに外反する口縁部である。内面に沈線を描いている。

10は青磁碗で，口径13㎝を測る。ゆるやかに外反する口縁を持ち，無文である。

11～13は瓦質土器の土鍋で，口縁端部は肥厚し，外傾する面を作る。面の大きさはそれぞれ異なる。

14は須恵質土器の鉢で，口縁端部の外傾する面は，やや凸面をなす。

15は瓦質土器の擂鉢で，内面に細い条線が数本見える。口縁端面は大きな凹面をなす。

16・17は瓦質土器の鉢で，口縁端面は凹み，その大きさは異なる。

18・19は瓦質土器の内耳鍋で「く」の字に外反する部分に，内耳を貼り付けている。

20・21は平瓦片で，凹面が布目，凸面が縄目の叩きである。瓦の幅は22㎝・厚さ2･3㎝・長さは不明である。21の布目の状態から，一枚造りであることが判る。

22～25は土師質土器の小皿で，22が上げ底の他は平底である。いずれも指頭ナデ仕上げを施す。

26は備前焼の灯明皿である。幕末～明治のものであろう。切り込みは3ヵ所ある。

27は伊万里系の皿か茶垸の蓋である。外面が青色釉，内面は白色釉に青色の染付けを施している。

28は伊万里焼の湯のみである。やや緑色を帯びた透明釉に，文様は淡青緑色の藤のつるであろう。

29は伊万里系の湯のみである。白色釉に，青色の染付けを施す。

30は唐津系の緑色の透明釉をかけた椀で，外面下方は施釉されていない。

31は鉄釉を施した鉢で，口径20㎝を測る。外面は茶色と白色の縞文様をなしている。

32は鉄釉を施した鉢で，口縁部を丸く作る。外面には何本もの沈線文があり，内面は光沢がある。

33は鉄釉を施した鉢の口縁部細片である。外面には粗い横方向の刷毛目を施す。

34は瓦質土器の鉢で，外面に浮き彫りされた，トゲのある草の文様が珍しい。（浅倉）

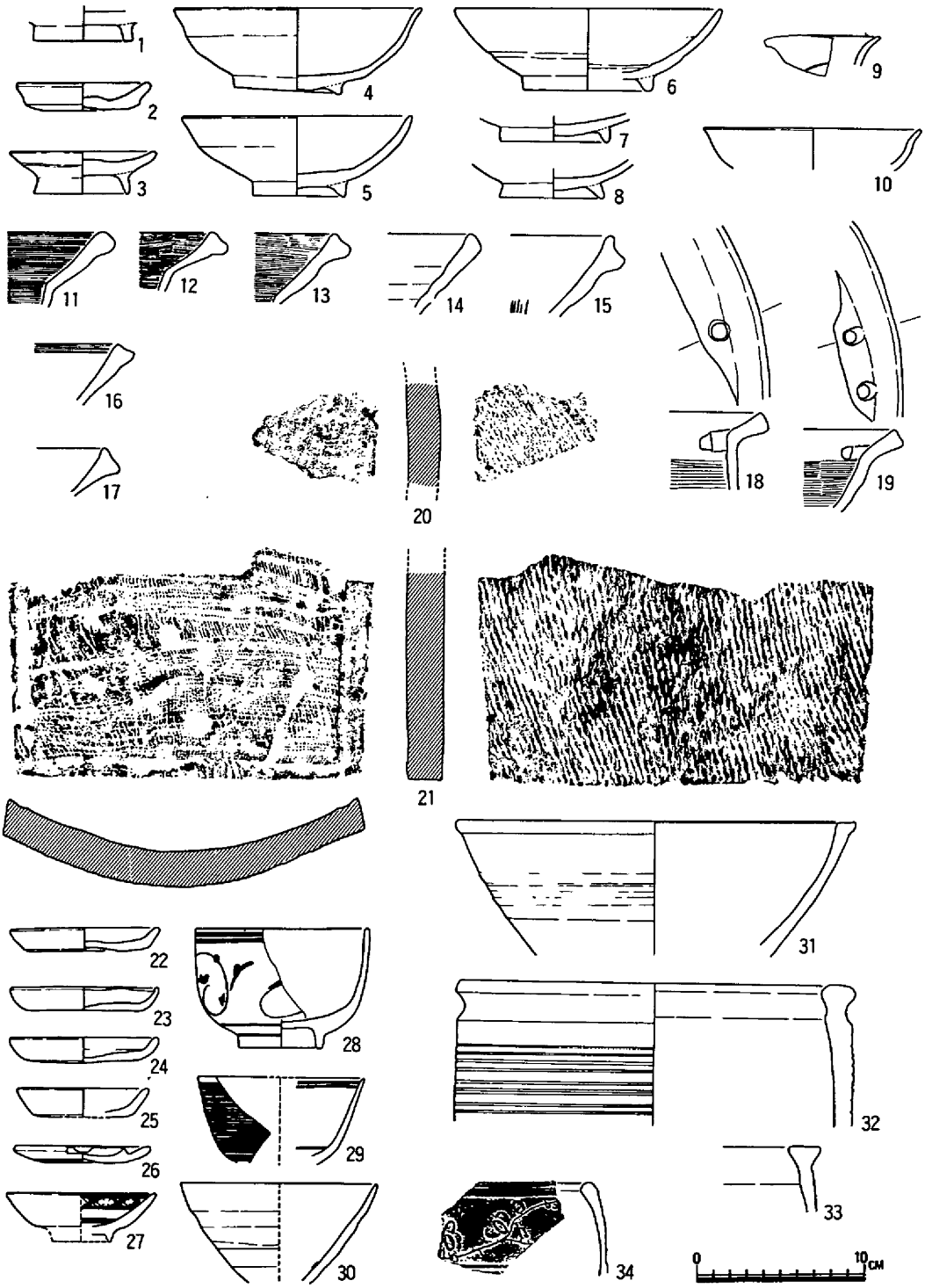


図39　和田遺跡D調査区出土遺物（1/4）

（6） 石器・鉄器・古銭（図40～42）

和田遺跡全区から，土器以外に若干の石器・鉄器・古銭が出土している。遺構に共伴するものが多いが，トレンチで出土したものと表面採集されたものもある。

石器は，旧石器のポイントと思われるものから，縄文時代の石錐・石匙・石鏃・石斧，そして中世の石硯・砥石，近世の石臼まである。合計13点を数える。図40-1はハリ質安山岩に近い石で，有舌尖頭器の可能性が大きい。2はサヌカイト製の石錐である。3はサヌカイト製の石匙である。4はサヌカイト製の凹基式石鏃。5は同じく凹基式石鏃。6もサヌカイト製平基式石鏃。7は同じく凹基式石鏃。8は花崗岩系の石の磨製石斧でである。9は緑色片岩製の石硯。10は硬質砂岩製の大形の砥石。11・12は硬質砂岩製の小形砥石。13は粘板岩製の砥石である。図41-1は花崗岩製の上臼。2は同岩製下臼。3は集塊岩製の上臼。4は花崗岩製の下臼である。石臼はいずれも八分画で，横打込式である。

鉄器は，中世～近世のものと考えられる。鏃先・釘・彫刻刀・刀が出土している。合計4点を数える。図40-14は鏃先，15は釘，16は彫刻刀，17は刀である。

古銭は，合計20種類で，59枚が出土している。後に一覧表を掲げた。判読にかなり苦労を伴うほどさびつきが多く，しかも磨滅が著しい。出土地を一番に持って来たのは，これらの古銭がほとんどB調査区の遺構から出土していることを示したかったためである。古銭が使用されたのは，寛永通宝が江戸中期以降，その他がそれ以前の室町後半頃と考えることができる。（浅倉）

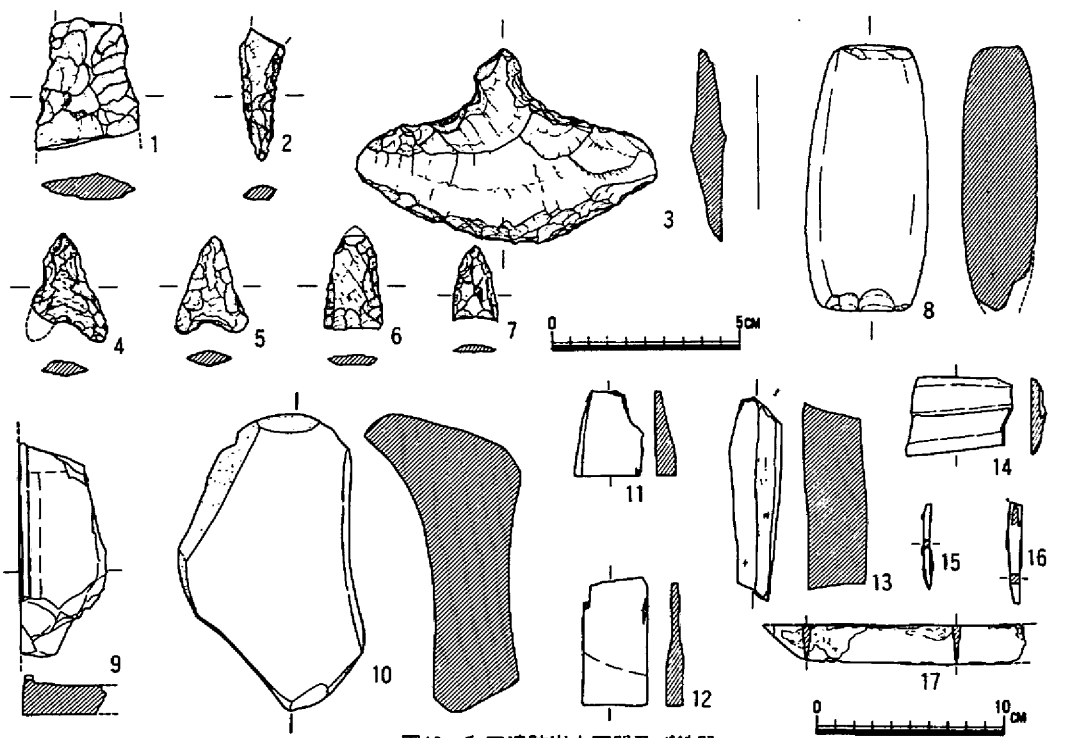


図40 和田遺跡出土石器及び鉄器

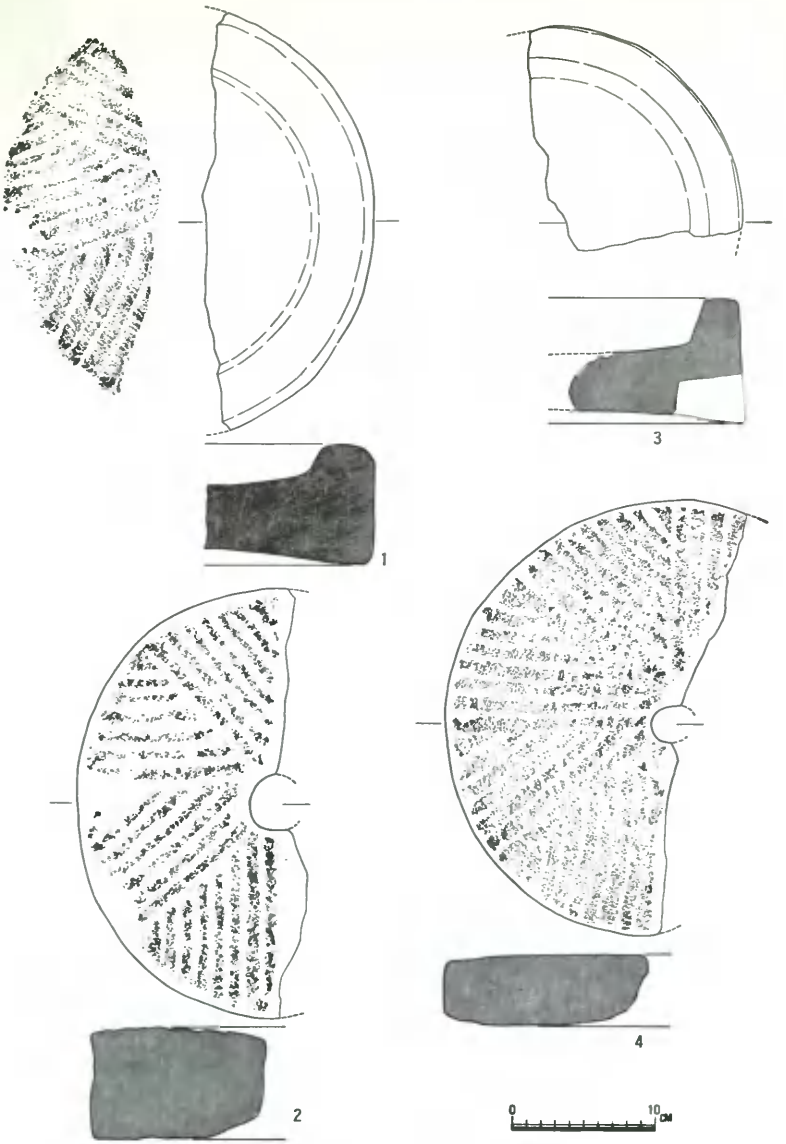
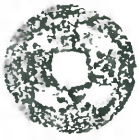


図41 和田遺跡出土石器II—石臼 (1/4)

1,開元通宝


2,至道元宝

3,咸平元宝

4,祥符元宝

5,天禧通宝

6,景祐元宝

7,皇宋通宝

8,至和元宝

9,嘉祐元宝

10,治平元宝

11,熙寧元宝

12,元豊通宝

13,元祐通宝

14,元符通宝

15,政和通宝

16,大定通宝

17,至大通宝

18,洪武通宝

19,永楽通宝

20,寛永通宝

図42 和田遺跡出土古銭 (1/1)

表3　和田遺跡出土古銭一覧

出土地	図番号	銭種	国名	初鋳	西暦	数
B-Ⅱ-21	1	開元通宝	唐	武徳4年	621	1
B-Ⅱ-50	1	開元通宝	唐	武徳4年	621	2
B-Ⅱ-50	2	至道元宝	北宋	至道元年	995	1
B-Ⅱ-50	4	祥符元宝	北宋	大中祥符元年	1008	2
B-Ⅱ-50	5	天禧通宝	北宋	天禧2年	1018	2
B-Ⅱ-50	7	皇宋通宝	北宋	宝元2年	1039	1
B-Ⅱ-50	8	至和元宝	北宋	至和元年	1054	1
B-Ⅱ-50	9	嘉祐元宝	北宋	嘉祐2年	1057	1
B-Ⅱ-50	10	治平元宝	北宋	治平元年	1064	1
B-Ⅱ-50	11	熙寧元宝	北宋	熙寧元年	1068	3
B-Ⅱ-50	12	元豊通宝	北宋	元豊元年	1078	4
B-Ⅱ-50	13	元祐通宝	北宋	元祐8年	1093	3
B-Ⅱ-50	14	元符通宝	北宋	元符元年	1098	1
B-Ⅱ-50	16	大定通宝	金	大定18年	1178	2
B-Ⅱ-50	17	至大通宝	金	至大3年	1310	1
B-Ⅱ-50	18	洪武通宝	明	洪武元年	1368	4
B-Ⅱ-50	19	永楽通宝	明	永楽6年	1408	1
B-Ⅱ-50		不明				3
B-Ⅱ-55	1	開元通宝	唐	武徳4年	621	1
B-Ⅱ-55	3	咸平元宝	北宋	咸平2年	999	1
B-Ⅱ-55	6	景祐元宝	北宋	景祐元年	1034	1
B-Ⅱ-110	6	景祐元宝	北宋	景祐元年	1034	1
B-Ⅱ-110	7	皇宋通宝	北宋	宝元2年	1039	1
B-Ⅱ-110	20	寛永通宝	日本	寛永13年	1636	1
B-Ⅱ-129	20	寛永通宝	日本	寛永13年	1636	2
B-Ⅱ-130	20	寛永通宝	日本	寛永13年	1636	7
B-Ⅱ-150	1	開元通宝	唐	武徳4年	621	1
B-Ⅳ	7	皇宋通宝	北宋	宝元2年	1039	1
T-6	15	政和通宝	北宋	政和元年	1111	1
T-6	20	寛永通宝	日本	寛永13年	1636	7
和田	1～20	合計20種			合計	59

（7） 小　　結

和田遺跡は，山あり谷ありの広大な遺跡である。更に弥生時代から近世の遺構が検出されるという困難さがあり，この遺跡を一つにまとめることは非常に困難である。したがって各調査区毎に，まとめを試みてみたい。

A調査区は，遺構としては，弥生土壙，中世土壙，中世～近世の柱穴，近世土壙がある。遺物としては，旧石器の有舌尖頭器，縄文時代の各種石器，弥生後期の土器，平安時代の土師器・平瓦，宋代の白磁，室町時代の瓦質土器と土師器，近世の陶磁器及びかんざし・石臼等が出土している。遺構の数及び種類は，あまり多くない。遺物の数量も少ない。しかし，遺物の種類は，極めて多い。特に目立つのが宋代の白磁の多さである。普通の遺跡ではせいぜい２～３点を数えるだけであるのに対して，このA調査区だけで破片にして30～40片ほどある。実測の点数では21である。かなり有力な名主層がいたに違いない。

B調査区は，遺構としては，弥生土壙墓群，窯状遺構，中世～近世の建物群・土壙群・溝状遺構がある。遺物としては，弥生後期の土器・玉類，平安時代の縁釉陶器・土師器，宋代の白磁，室町時代の土師質土器・瓦質土器，唐～明代の古銭，近世の陶磁器・寛永通宝，中・近世の石器・鉄器類等がある。この区では，特に注目されるのは弥生時代後期の土壙墓群である。この土壙墓群は，特殊器台と玉類を共伴する。玉類は，楯築遺跡のものに非常に似ている（註-5)。特殊器台は在地のものと運びこまれたものがある（註-6)。次に注目したいのは，窯状遺構の発見である。これは，熱残留磁気測定によると，A.D.720±20年という結果を得た。このデータは今後貴重な資料となるだろう。既にこの種の窯は県内で14例知られている。時期がかなりはっきりしているのは岩倉遺跡(新見市)(註-7)しかなかった。今一つ興味深いのは，近世の建物が掘立柱建物であるということである。一般の農家は，おそらくわら屋根で掘立柱の建物であったことがわかる。

C調査区は，遺構は全くなく，遺物は中世～近世の瓦質土器・土師質土器，陶磁器等が少量ある。場所としては，地頭上・宮の脇と益坂・和田の境目の所である。その点では中世では極めて重要な位置であったに違いない。しかし，単なる中・近世の遺物包含層であった。

D調査区は，遺構としては２～３個の柱穴しか検出できなかったが，平安時代～江戸時代まで連続して出土している。トレンチを少し拡張し，遺物がかなりの量出土しているが，遺構は確認できなかった。緑釉陶器・平瓦・土師器・青磁・瓦質土器・備前焼・伊万里系土器等が出土している。

（浅倉）

（註-4） 多くの発掘報告者が炭窯説を採用している。

（註-5） 近藤義郎「楯築遺跡」『山陽カラーシリーズ３』山陽新聞社1980

（註-6） 宇垣匡雅氏の教示による。

（註-7） 「岩倉遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・14』岡山県教育委員会1977
脱橋後，兼康保明氏が考古学研究108号に全国的類例を集められ白炭焼成窯としている「古代白炭焼成炭窯の復元」1981.3.

第5節　向原遺跡の調査

本遺跡は，「鴨方町益坂向原に所在する。安芸守山北麓で，阿坂川を望む舌状台地にある集落跡である。地目は畑，立地は山腹。出土品は須恵器・土師器片があり，現状は半壊」（註-1）とされている。トレンチをかなり密に入れたところ，2カ所の遺物包含層が確認された。東の方は，亀山焼を伴う近世土壙も検出された。これを第1地点とする。西の方は，元この地方の庄屋をしていたという尾小見氏の屋敷跡である。以下2つに分けて記述して行きたい。

（1）　向原遺跡第1地点

トレンチ調査によって，亀山焼を伴う近世土壙を1個検出していたため，約200㎡拡張した。しかし，近世遺物が大量に出土するにもかかわらず，全く遺構が見られない。遺物を単に投棄されたものか，あるいはこの場所に礎石建物があったのか判定できない。この亀山焼土壙の用途も定かでない。掘り方は，土器に対して少しゆとりをもっている。直径40cm・深さ20cmを測る。図45-26が，近世土壙に伴っていた亀山焼の三足鉢である。体部は高さ約13cm程残存している。体部内面は斜めの刷毛目，外面は格子目の叩きを施す。底部は丸底であり，内外面とも刷毛目を施している。

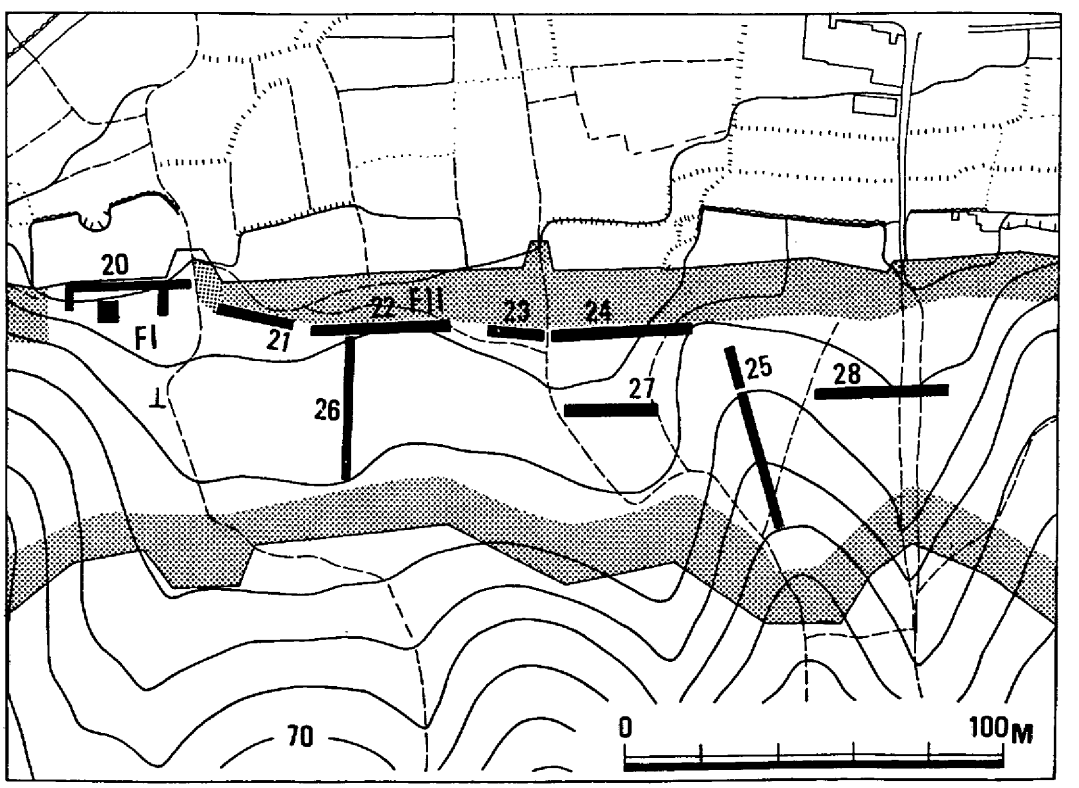


図43　向原遺跡第1地点（FII）及び尾小見屋敷（I）位置図（1/2,000）

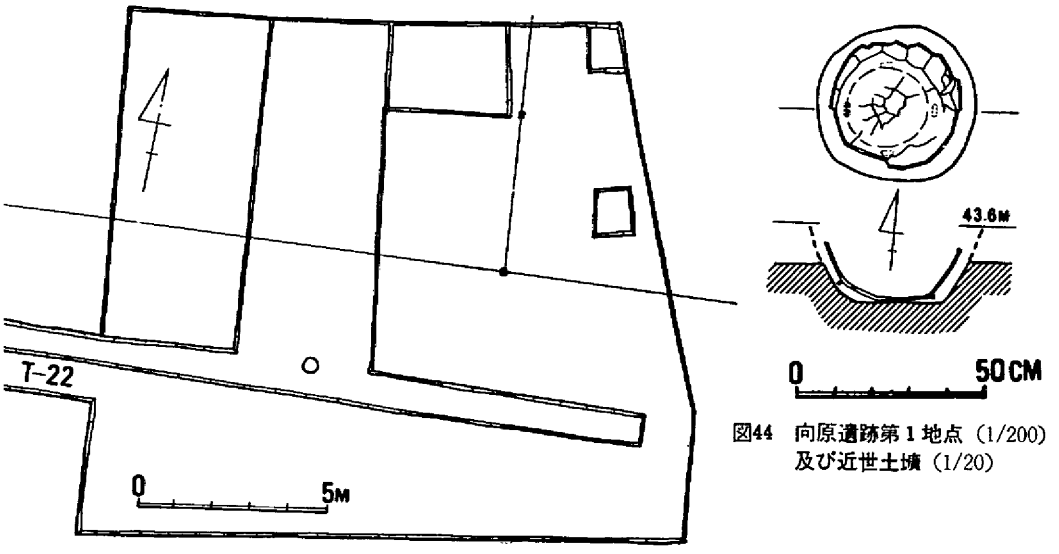


図44　向原遺跡第1地点（1/200）
及び近世土壙（1/20）

以下この第1地点出土の遺物と，1次調査で出土した周辺の遺物も含めて図45に図示したので，順に説明を加えて行きたい。

1は縄文後期の口縁部細片で，波状口縁を呈する。凸帯文と竹管状工具による文様を施している。黒褐色を呈し，3㎜以下の砂礫を極く多量に包含している。T－22出土である。

2は縄文式土器の底部破片である。極端な上げ底を呈している。文様・調整は，表面が磨滅して全く判らない。暗茶褐色を呈し，3～5㎜大の礫を多く含む。

3は弥生中期の壺形土器である。大きく外反する口縁は肥厚して上下に拡張し，端外面には3本の凹線文を施している。口径は約20cmを測る。黄褐色を呈し，1㎜以下の砂を多く含む。

4は甕形土器で，口径21.5cmを測る。「く」の字状に外反する口縁部を持ち，口縁端面に凹線文を施し，体部との境に指頭圧による刻み目のついた凸帯を貼り付けている。内面は丁寧なナデ。

5は甕形土器で，口径15cmを測る。口縁端部は内上方にのび，端面に凹線文を施している。体部外面は縦方向の細い刷毛目，内面はかなり上部までヘラ削りしている。

6は甕形土器で，口径約12cmを測る。口縁端部は上下に肥厚してのびる。端面には凹線文を施す。体部最大径はほぼ中央にある。体部内面はナデ，外面は細い縦方向の刷毛目である。

7は直口壺形土器で，口径約12cm・体部最大径約17cmを測る。口縁端部はやや内傾する凹面を作る。凹線文とヘラ状工具による刺突文で表面を飾る。体部外面は，刷毛目及びヘラみがきを併用する。

8は弥生後期の甕形土器で，口径約14cmを測る。外反する口縁の端部は上下に拡張する。体部内面のヘラ削りは頸部まで及んでいる。体部外面は刷毛目か。

9は弥生終末期の甕形土器底部で，平底をやっと残している。外面刷毛調整を行う。

10は土師器の甕形土器で，口径は約16cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し，端部を丸く収める。口縁部内外面は刷毛目，体部は調整が判らない。

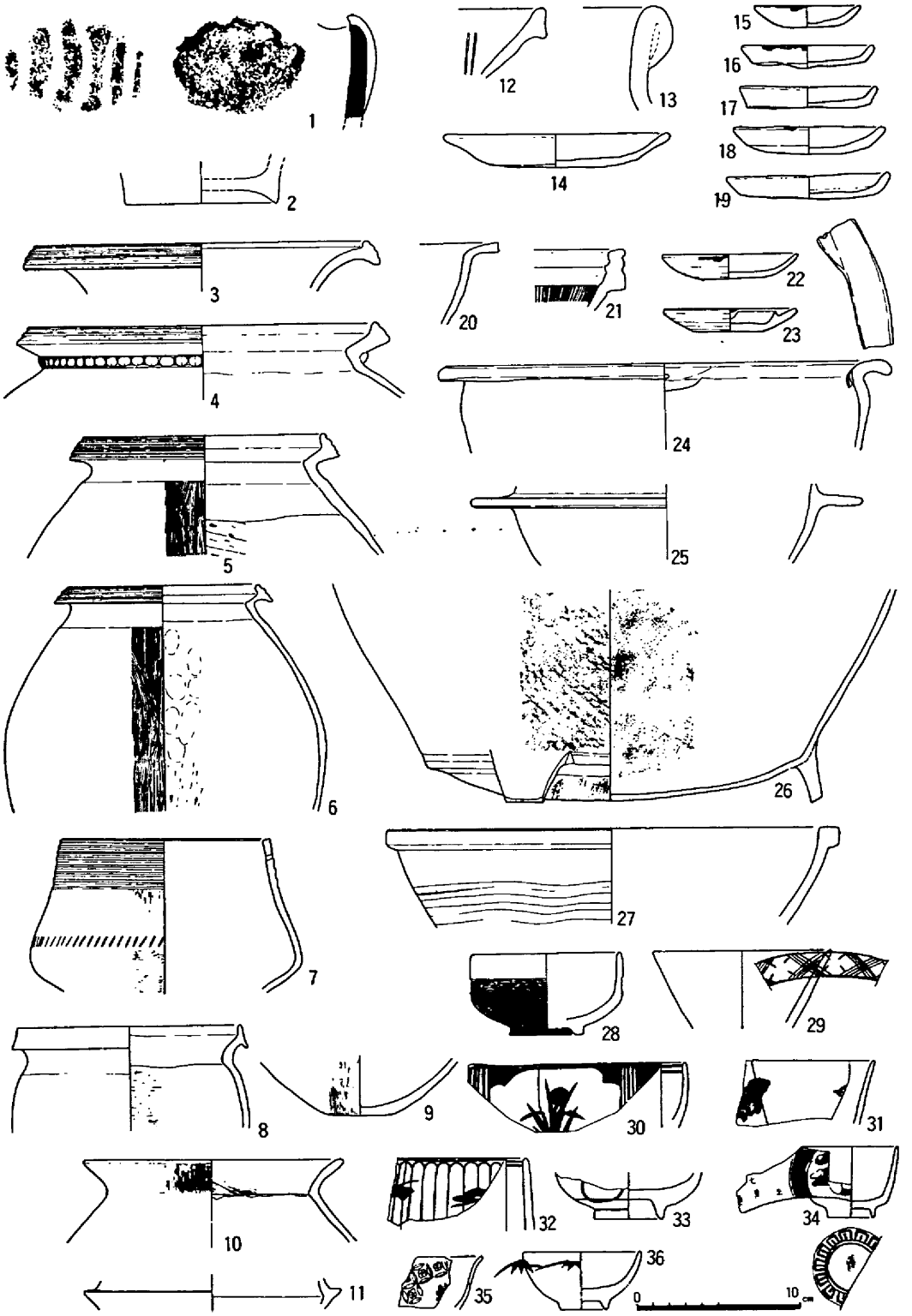


図45 向原遺跡出土遺物 (1/4)

11は須恵器の杯身の細片である。受部は水平にのびる。立ち上がりは途中で欠けている。
12は瓦質土器の擂鉢で，条線がやっと見える程の細片である。灰黒色を呈する。
13は備前焼の壺で，口縁部が玉縁を作る。内外面とも赤褐色を呈し，光沢を持つ。
14は土師質土器の皿で，口径は14cm・器高２cm・底径10cmを測る。暗褐色を呈する。
15～19は土師質土器の小皿で，灯明皿として使用された痕跡が残っている。
20は瓦質土器の土鍋で，外反する口縁の端部に凹面を作る。内面は細い横の刷毛，外面はオサエ。
21は備前焼の擂鉢で，条線は全面に描かれている。暗茶褐色を呈する。
22は備前焼の灯明皿で，外面の下半はヘラ削りし，底部は回転糸切りを行っている。
23は備前焼の内側に土手のある灯明皿で，口径8.2cm・器高1.4cm・底径４cmを測る完品である。
24は瓦質土器の内耳鍋である。口径約27cmを測る。内耳の幅は１cm弱である。
25は瓦質土器の羽釜である。つばの外径約24cm・つばの幅2.5cmを測る。
26は前述したので略す。
27は鉄釉の鉢である。口縁部は角ばっている。外面は白色と茶色の縞模様を施している。
28～36は，染付の茶碗類である。ほとんど伊万里系の焼き物と思われる。
以上尾小見屋敷跡以外の向原遺跡全体から出土した遺物を見て来た。縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世・近世の遺物が含まれている。

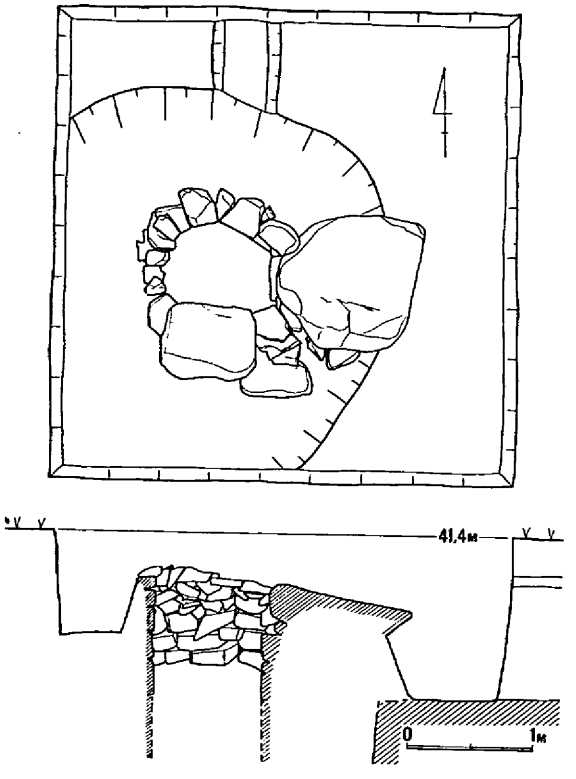


図46　向原遺跡尾小見屋敷井戸址（1/60）

（２）尾小見屋敷跡

路線は屋敷地南側を井戸址，墓地を貫く形で通過するため建物址は検出できなかった。

１）井戸址

尾小見氏が使用したと言い伝えられていた古井戸で，現在は荒畑の中で草に覆われて，目印が無ければ全くどこにあるか判らない程であった。調査は目印の木を中心にして3.5m四方を発掘した。

井戸は，約40cm程掘って全容を現わした。更に地表から1.3m掘り下げた所で花崗岩の岩盤が露出し，井戸の掘り方が検出できた。

掘り方は直径約3.2mを測る。井戸の深さは約6.5mあった。井戸は円形に石組みされている。井戸内径は1.9mを測る。使用されている石は花崗岩の角礫で，下部へ行く程大きい。大きなもので一辺50cm位あり，小さな

もので一辺20cm程である。最上部には，東側と南側に大石を据え付けている。東の石は，１ｍ×１ｍ×40cmの平石である。洗い場であろうか。

2）出土遺物

井戸の周辺からは，沢山の灯明皿片が出土し，屋敷跡と言われる北の一段低い畑に入れたトレンチからは，かなり多くの瓦片・陶磁器片・かんざし等が出土した。以下少々図に説明を加えたい。

1は，口径６cm・器高1.6cm・底径３cmを測る土師質土器の，灯明皿である。口縁はやや内湾する。

2は，口径８cm・器高1.5cm・底径７cmを測る土師質土器の灯明皿である。口縁はやや外反する。

3は，口径８cm・器高1.8cm・底径６cmを測る土師質土器で，灯明皿である。

4は，口径８cm・器高1.4cm・底径６cmを測り，上げ底の底部を有する土師質の灯明皿である。

5は，口径8.3cm・器高1.8cm・底径７cmを測り，底部が丸くなる灯明皿である。

6は，口径８cm・器高1.5cm・底径６cmを測り，口縁端部が少し肥厚する灯明皿である。

7は，口径8.5cm・器高1.5cm・底径８cmを測り，口縁部がほぼ直立する土師質の小皿である。

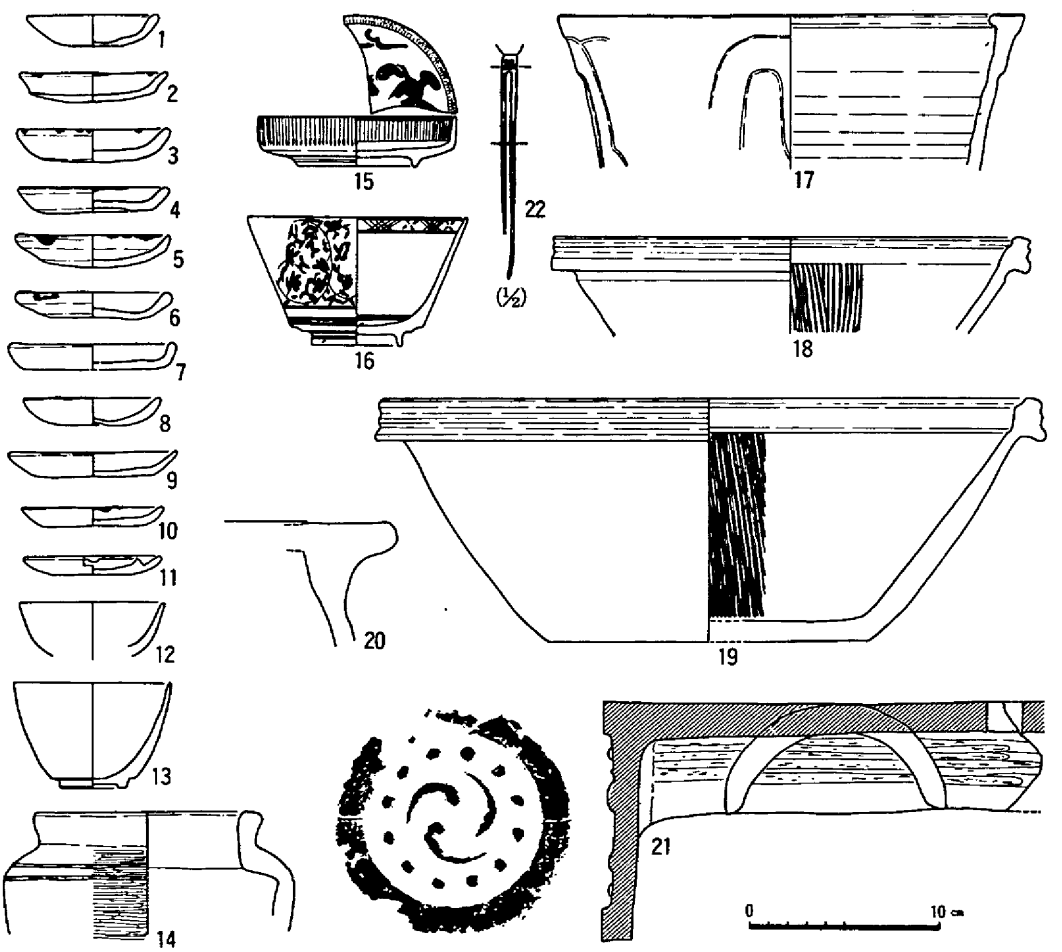


図47　向原遺跡尾小見屋敷井戸地周辺出土遺物（1/4）

8は，口径7cm・器高1.5cm・底径5cmを測り，底部が少し凹む土師質の小皿である。

9は，口径9cm・器高1.3cm・底径6.5cmを測り，底部は指オサエする土師質の皿である。

10は，口径7.5cm・器高1.1cm・底径5.5cmを測る土師質の灯明皿である。

11は，口径7.5cm・器高1cm・底径4.2cmを測り，内土手を持つ備前焼の灯明皿である。

12は，口径7.6cmを測る白色釉の磁器碗である。文様は無い。

13は，口径8.4cm・器高5.6cm・底径3.5cmを測る黄褐色の地に透明な釉をかけた磁器碗である。

14は，口径10cmを測る瓦質土器の壺で，肩部に2本の沈線を施している。

15は，口径10.5cm・器高2.6cm・底径6cmを測る青色染付の白磁皿である。文様は雲と松か。

16は，口径11.6cm・器高6.8cm・底径4.7cmを測る青色染付の白磁碗である。外側の文様は藤か。

17は，口径21cmを測る磁器の鉢で，釉薬は緑色を帯びた透明なものである。

18は，口径24cmを測る備前焼の擂鉢で，内面全面に条線を施しているが，8本で一単位と判る。

19は，口径34cmを測る備前焼の擂鉢で，内面全面に条線を施している。条線の単位は不明。

20は，口径が50cm以上ある大甕で，内面が赤褐色，外面が暗茶褐色を呈する。

21は，軒丸瓦である。中心に三つ巴文，その周囲に珠文を12個巡らし，外縁は素文である。巴の頭部は大きくて丸い。尾部は次の巴の頭部にやっと届く程で，短い。

22は，銅製のかんざしで，飾りの柄の部分が欠けている。

（3） 小　　結

向原遺跡の調査では遺構らしきものといえば尾小見屋敷跡に付属する古井戸と，亀山焼を伴う近世土壙だけであった。遺物を見ると縄文式土器・弥生式土器・須恵器・中世土器・近世土器と，かなり時代の幅がある。今回の調査での成果は，尾小見屋敷が江戸時代後半に始まり幕末に途切れていることから（註-2）屋敷跡と井戸址周辺から出土した遺物の時期が限定できるということになる。ここで出土している備前焼擂鉢・軒丸瓦・土師質土器・陶磁器など江戸後半期の一括資料となるであろう。

尾小見氏の墓地は，南側へ山を登り，数m行った所にある。この墓地も山陽自動車用地に入っているため移転される。墓石に刻まれた文字を記録に残しているので，かなり尾小見氏の系図が解明できるものと思う。（浅倉）

（註-1）岡山県遺跡地図（第一分冊）岡山県教育委員会1973

（註-2）古老の話と墓碑による。

第6節　宮の脇古墳の調査

（1）古墳の位置

宮の脇古墳は鴨方町地頭上塚段(つかんだん)に所在する。当古墳は東に入り込んだ益坂の谷と北の本庄谷との出口にあたる。墳頂部の標高40m（水田との比高は15m）程の低丘陵上に位置する。当古墳は本調査するにあたっての事前の分布調査によって新たに確認されたものであるが，土地の古老の話によると，この古墳は明治年代，北西にあたる日吉神社の石段を築くために，大きな石を持ち去ったということであった。古墳周辺は最近まで畑地であったらしく，丘陵上は比較的平坦な面をなしており，古墳部分は周囲より80cm程高く残っている程度であった。また，畑地の区割のためか，北～西～南の部分には石列が見られた。

（2）墳丘の規模

墳丘は前述の盗掘及びその後の畑地の開墾などから，盛土は全く認められず，表土を剝いだ時点で地山が露出する状態であった。調査後の地山の等高線から観察すると，38.6mコンタまで自然地形とは異る。一方，墳丘北東部に幅1m前後の溝が検出されている。この溝は墳丘側に一部掘り込み線が

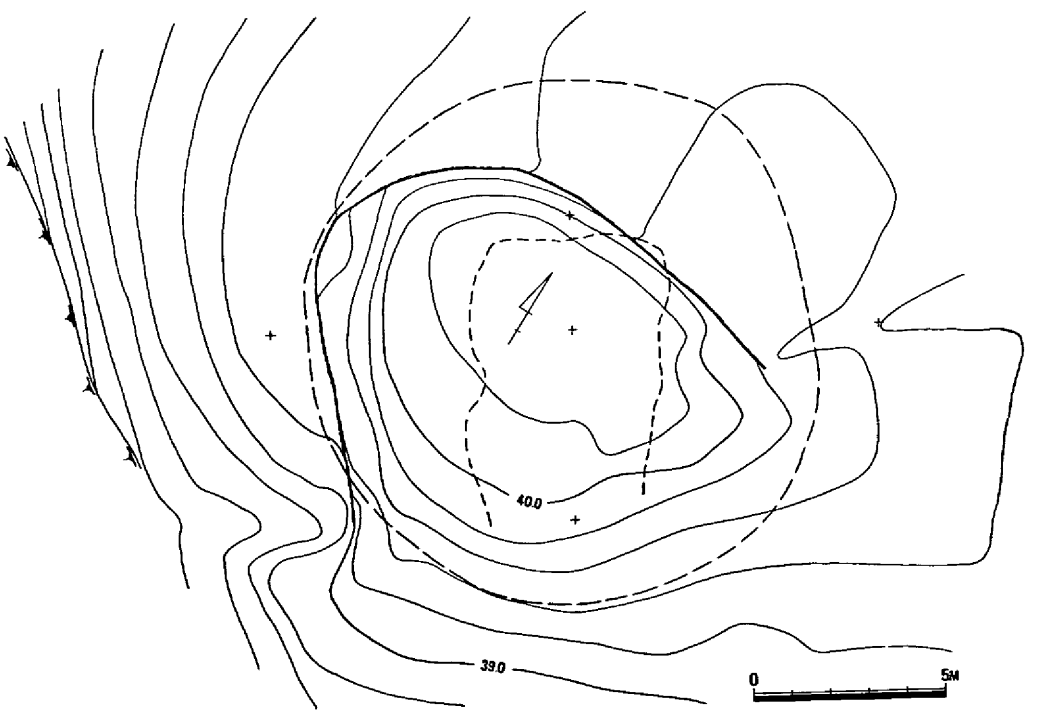


図48　宮の脇古墳墳丘測量図（1/200）

入るものの反対側の立ちあがりは不明瞭である。なお，溝北隅からやや浮いた状態で中世遺物が出土している。以上の事柄及び後述する石室規模から想定すれば，当古墳は直径14m前後の円墳ではないかと考えている。

（3） 内部構造及び遺物の出土状況

古墳の内部構造は古老の話から予想していた横穴式の石室であった。しかし，天井石を始め奥壁・側壁等悉く抜き去られており，奥壁及び側壁の裏込めに使用されたと考えられる小礫が，僅かに散在する程度であった。

石室の掘り方は幅約５m，現存長約7.4mを測り，平面形態は長方形を呈す。深さは残りの良い奥壁部分で1.2mを測る。側石の抜き取り部分の残存形態から，側壁には長さ１m前後の石材が使用されていたものと推定される。玄室は側壁痕跡から最大幅1.8m，現存長5.4mを残す。床面は奥壁部分が高く，羨道方向に約20cm程下がっている。なお，床面には貼り床の部分が認められた。

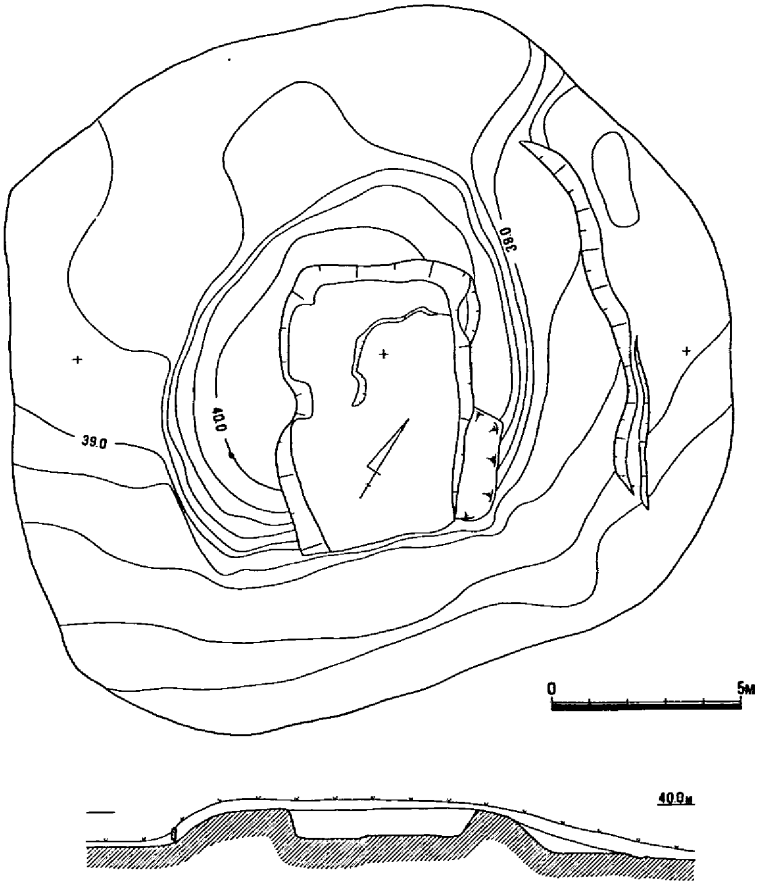


図49 宮の脇古墳発掘後全体図 (1/200)

石室内上層からは古墳時代遺物の他，中世の土師質土器片，近代の陶磁器片などが攪乱された状態で出土したが，玄室床面から10cm程の下層部分においては古墳時代遺物のみであった。出土した須恵器は，南東隅から比較的まとまった形態で出土しており，特に平瓶は口縁端部を欠損するものの原位置を保っていた。他に土器片数点も出土している。東隅からは鞘尻が棺台に立てかけるような状態で出土しており，その周辺には大刀の破片が散在していた。これは本来側壁に立てかけていたものが攪乱にあったためであろう。他に装身具である銅釧，銀環，ガラス玉，棺具である棺釘等が出土している。なお，棺台に使用されたと思われる偏平な石材及び棺釘遺物の配置状況等から棺数を把握することに努めたが，実体は明らかに出来なかった。

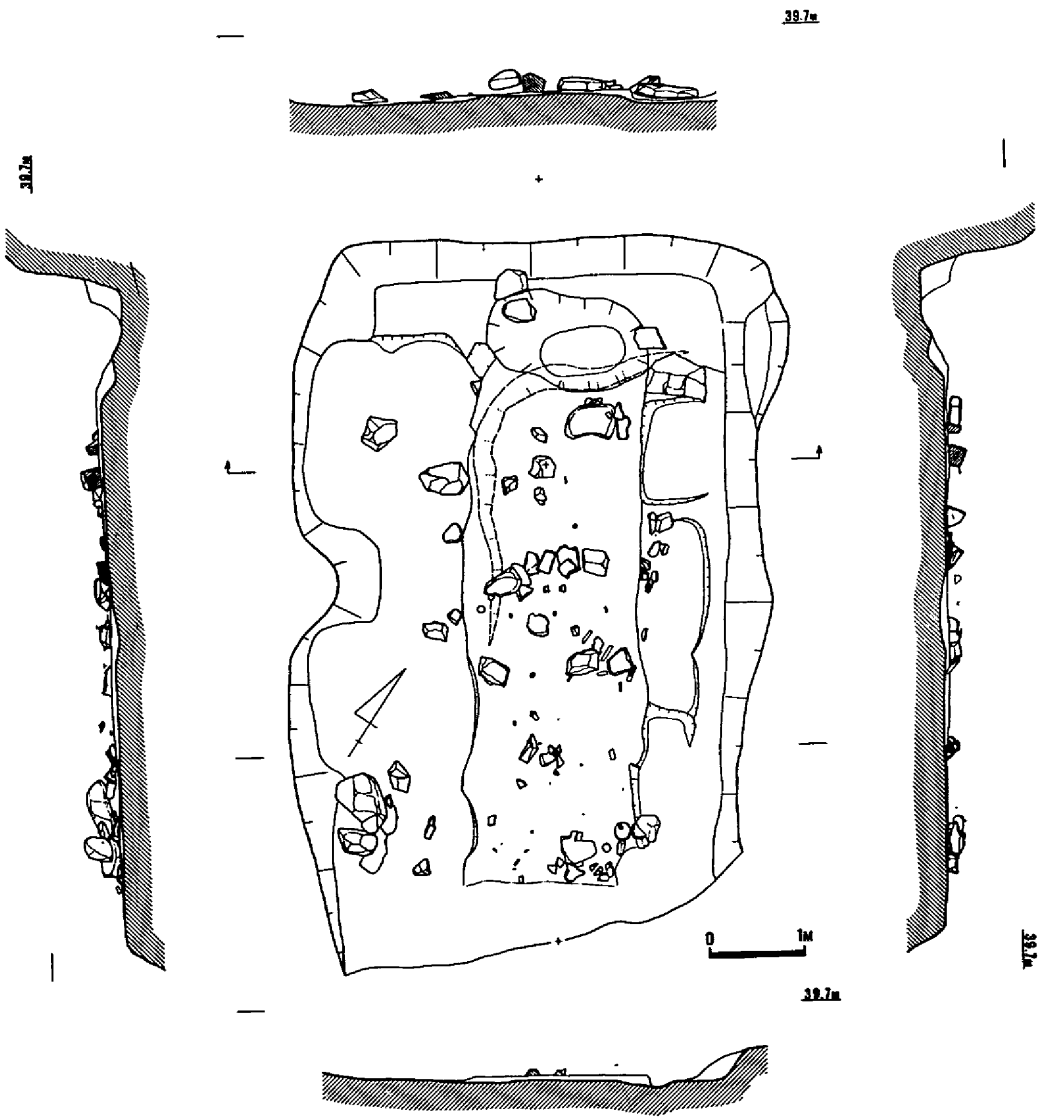


図50 宮の脇古墳遺物出土状況図 (1/40)

（4） 出 土 遺 物

須 恵 器

杯蓋１，２はいずれも灰白色を呈す。口縁部径13.0cm，高さ4.2cmを測る。口縁端部は丸く収めており，口縁立ち上りと天井部との境は明瞭でない。天井部は僅かに篦削り調整しており他は横ナデ調整である。ロクロは右回転である。胎土中に１mm前後の砂粒を含み，焼成はやや不良である。

杯身３は口径9.4cm，高さ4.2cmの比較的小型のものである。暗灰色を呈す。口縁部はやや内傾して立ち上がるものの，端部は若干外反し，丸く収めている。底部は篦起し成形されており，その方向は左である。他は横ナデ調整している。胎土中に１mm以下の砂粒を含み，焼成は良好である。

高杯４は小型の小破片で，暗灰色を呈す。脚裾部に１条の沈線が巡る。残存する部分はいずれも横ナデ調整している。胎土中に１mm以下の砂粒を僅かに含み，焼成は良好である。

高杯５は小型の杯部に長い脚部をもつもので，口径10.7cm，器高12.2cmを測る。杯部は口縁端部を丸く収め，口縁及び立ち上がり部分の２カ所に稜線が走る。杯内外面は横ナデ，底部は篦削りしている。ロクロの回転方向は右廻り。脚部は脚柱部に２条の浅い沈線を施し，端部はシャープな稜線が走る。灰色を呈し，胎土中に1.5mm前後の砂粒を含むとともに，雲母が溶解したのか１mm前後の黒っぽい気泡が付着している。

平瓶６は口縁端部が欠損しているが，口縁部はやや外方に立ち上がりをもつものであろう。体部は総じて丸く，底部は広い面をもつ。体部最大径18.5cmを測る。口縁部から体部にかけては横ナデ調整，底部は篦削り調整している。ロクロの回転方向は右廻りである。灰色を呈し，胎土中に１mm以下の砂粒を含む。焼成は良好である。

甕７は大型甕の小破片である。口縁端部は下方にやや拡張し，沈線を巡らしている。口縁部には２カ所に２条の沈線を巡らし，その間に櫛描波状文が施されている。灰色を呈し，胎土中に１mm以下の砂粒を含む。焼成は良好である。なお，石室内からは他に土師器片・須恵器片もいくつか出土しているが，いずれも実測不可能な小破片であった。

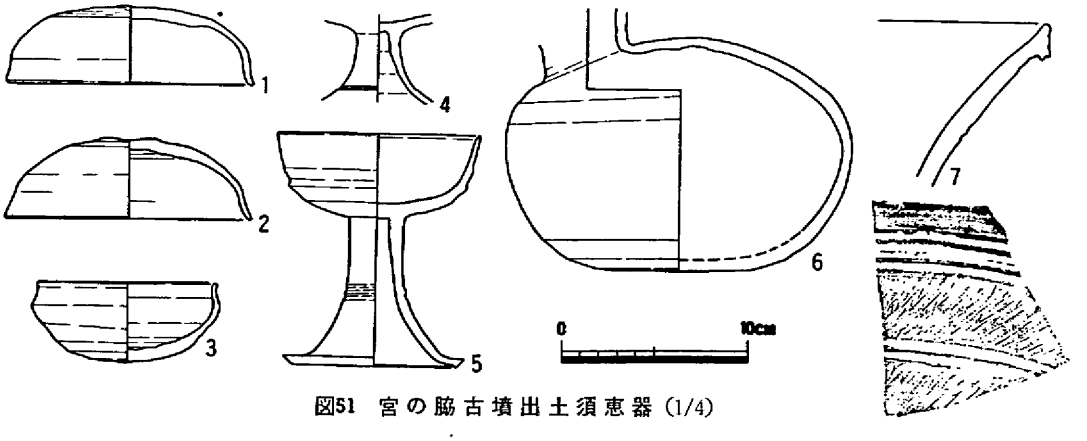


図51 宮の脇古墳出土須恵器 (1/4)

武　　具

大刀1は平造りのやや内反りするもので，茎・鐔・脛巾・刀部が残っていた。刀部は全体に錆脹れが激しい。切先は磨滅のためか，やや内反する。茎には目釘穴が2カ所あり，その両方共に長さ2.2cm，幅0.6cmの角釘が打ち込まれた状態であった。鐔は一部欠損するものの断面到卵型を呈す。

大刀2は刀部の一部で1と同様平造りである。切先は1と比較しややまるい。

3，4は柄につく貴金具と考えられるものでいずれも銅地金張りの，厚みは1.5mm後の非常に薄いものである。

5は出土状態から鞘尻付近と思われるもので，3，4同様銅地金張りが施されている。

6は用途不明の鉄器である。出外面とも丸く，内面には木質痕が認められた。小破片で外面は錆脹れが激しいことから断定は避けるが，柄頭の一部ではないかと考えている。

装　身　具

銅釧1は銅地に金張りである。直径7.4cmのほぼ正円を呈す。断面四角形を呈し，径0.5cm，重量15.5gを測る。

銀環2，3は鉄芯に銅地銀張りで，いずれも銀箔の残りはよくない。2は直径3.5cm，9.35g，3は直径2.6cm，28.3gを測る。ガラス玉4～6はいずれも藍色を呈す。4は直径1.52cm，高さ1.31cm，孔の径0.25cmを測る。5は直径0.45cm，高さ0.39cm，孔の径0.2cm，6は直径0.5cm，高さ0.29cm，孔の径0.11cmを測る。

棺　　具

鉄釘が7本出土しているが実測可能であったのは6本である。いずれも破片で断面四角形を呈す。

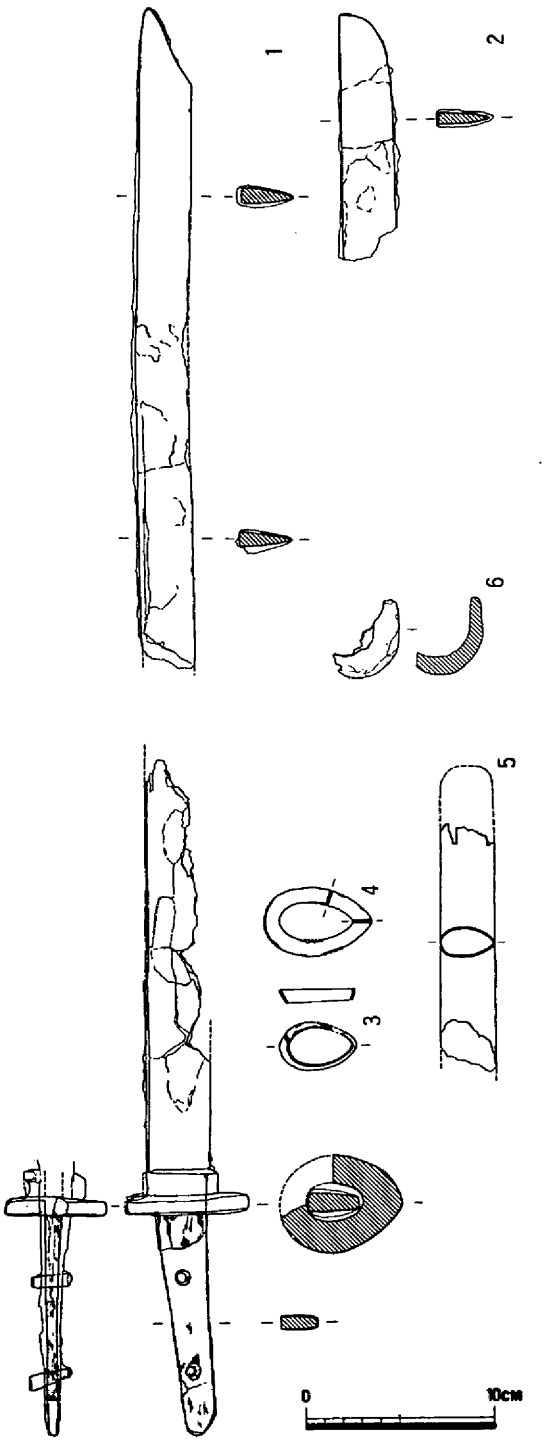


図52　宮の脇古墳出土大刀（1/4）

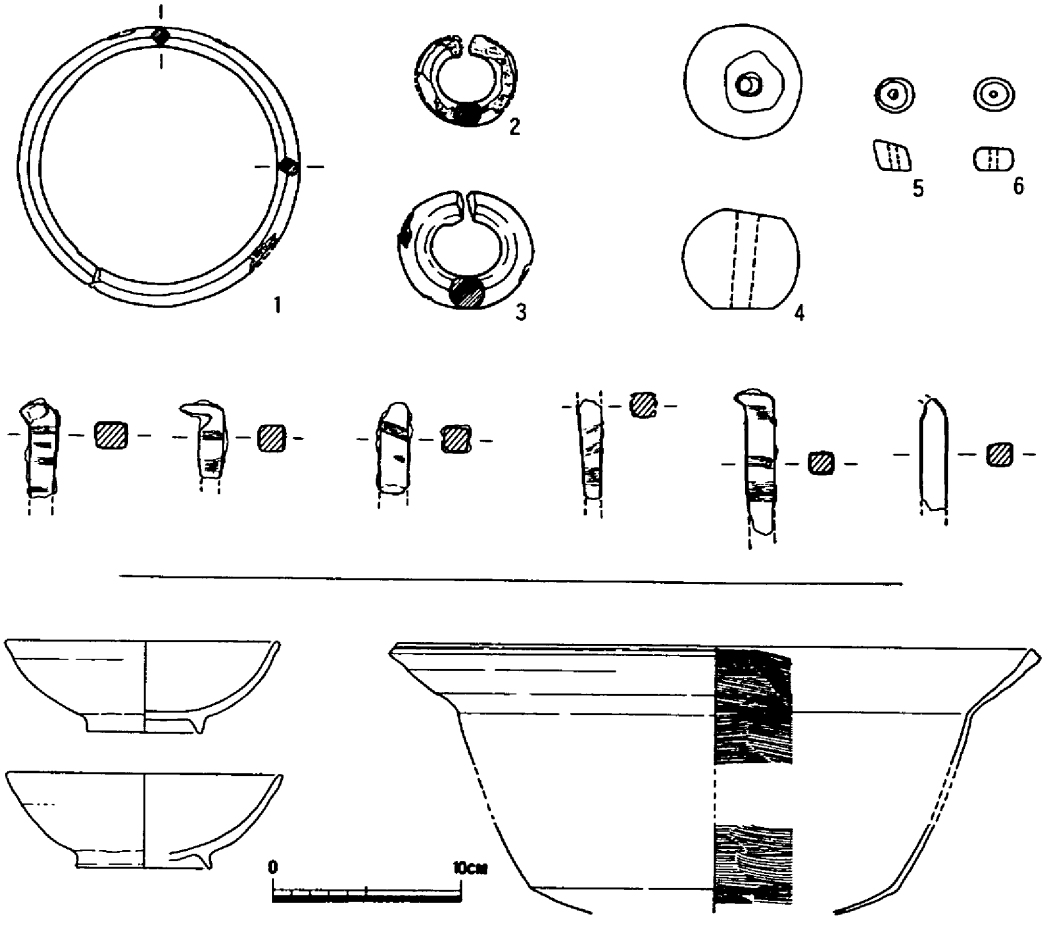


図53　宮の脇古墳出土装身具(1/2)(玉類は原寸)・棺具(1/2)及び中世遺物(1/4)

中世遺物

中世遺物は石室内及び墳丘裾部から出土している。1，2いずれも土師質の椀であるが，2は内面黒色の土器である。3は淡褐色を呈す鍋形土器で，器壁は非常に薄い。内面は刷毛調整を施すが，外面は全体に厚く煤が付着している。

（5）小　　結

宮の脇古墳は古老の言い伝えから既に全壊しており，中からは何も出て来ないであろうと言われていた。確かに石室の石材は見事と言う他はない程に抜き去られていた。しかしながら調査の結果，古墳は横穴式石室を有するもので，中世以降に一度は攪乱を受けていることが判明すると共に，石室規模もほぼ原形を復元することが出来た。また，玄室床面からは土器を始め武具・装身具など僅かながら出土しており，中でも銅釧は県下で2例目の出土例である。以上，当古墳は遺物の編年観から，6世紀後半から7世紀にかけて幾度かの追葬が行われたことが判明した。(江見)

第7節　阿坂古墳の調査

（1） 古 墳 の 位 置

阿坂古墳は鴨方町益坂阿坂に存する。阿坂は遙照山から派生する分離丘陵に囲まれた谷ふところにあたり，古墳は安芸守山の東端北麓につくられている。阿坂川が谷中央を西流するがこのあたりでは最奥部に近く川幅も２m程で流量も余り多くない。益坂の部落ももうこの奥には10軒近くを残すのみで峠（現在は大規模農道のトンネル）を越えれば金光町阿坂に至る。

急峻な南側山塊が終り阿坂川の河岸まで幅50m程の緩やかな斜面を作っている。古墳は丁度その変換点に築造されている。現在はほとんどは山林となっているが北端部は開墾により畑地にされ，東端部は旧地主であった中西家等の墓地になっている。古墳の北端を旧（近世）道路が東西に通じている。墳頂部の標高は47.6mである。地元古老の話によれば，明治後半期にこの古墳の天井石等を利用して付近の水車小屋の土台，阿坂川の護岸石に使用したといわれ，現況もコ状に凹み，西に開口する横穴式石室が存在したことをうかがわせていた。

（2） 墳丘の規模と施設

調査前の地形測量では，先述したように石室に使用された石の一部が近代に転用されたといわれ，西に開口してコ字状に凹んでいたが，直径10m，高さは南側の山麓部は緩斜面を削り取っている様で40cm前後である。北側は一部が畑で削り取られているが現状で3.5m程の高さを残している。

調査後の地形測量図から墳丘を復元すれば，直径12m前後に収まるものと思われる。

墳丘南側は斜面をわずかに削り取っているが，溝状にはならず東西に下がっている。石室センター

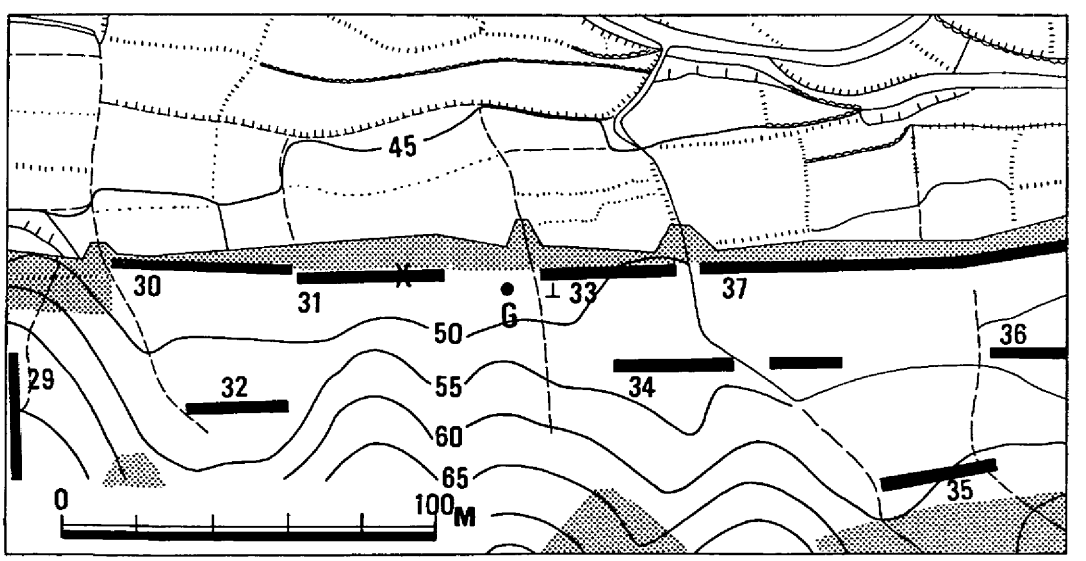


図54　阿坂古墳（G）及び阿坂調査区（X）位置図（1/2,000）

より南3.2mの所で1段目を1.8m行った所で2段目の石室構築のための掘り方を行っている。奥壁背後は10cm程の段差があるだけである。北側はほぼ自然地形を踏襲している。南側はその掘り方部分までを版築状に盛り上げているが，東側は地山面から50cm近く，北側で1m近く版築状に盛り土を行い，その墳端部に土止め状に石を積み重ね，さらに盛土を行っていたようである。土止め状石列は石室入口北側部分から奥壁背後の墳端近くまで行われている。広い所では幅2m近く残存している。石は大きなものは幅60～70cm，厚さ40～50cm大のものから拳大の結め石までが含まれている。

（3） 石室の構造と遺物の出土状況

内部主体は横穴式石室で無袖式である。石室全長は7.7mを測り，幅は奥壁部床面で1.3m，中央部1.7m，入口で1.2mを測り，わずかに胴ぶくらみの形を呈す。奥壁基部の石は南側に大き目の幅1m高さ1.5mの石を，北側に少し小さ目の幅40cm，高さ1mの石を立てている。南側壁は横口積みにし8石並べ，基底石のみ残存し，部分的に2～3段残存している所もある。入口付近の2石は立てている。北側壁は9石並べ，基底石のみ残存し，部分的に2～3段残存している。

石室内は中央部付近まで中・近世に基底部の石が見える程荒され，内部で焚火をした痕跡も見受けられた。中央付近から奥壁にかけては棺台になると考えられる石が何カ所か見られたが整然とした形では残存していない。出土遺物は須恵器，金環，鉄鏃などが出土しているが，そのほとんどが遊離あるいは攪乱された状態で出土している。

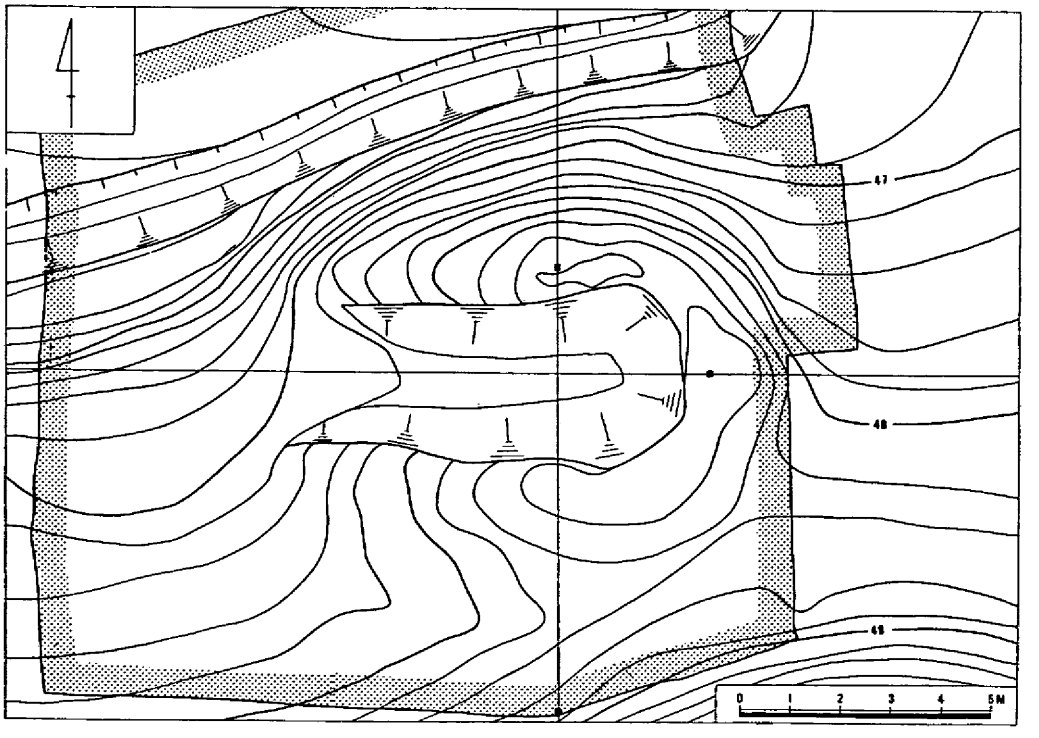


図55 阿坂古墳地形図（発掘前）(1/150)

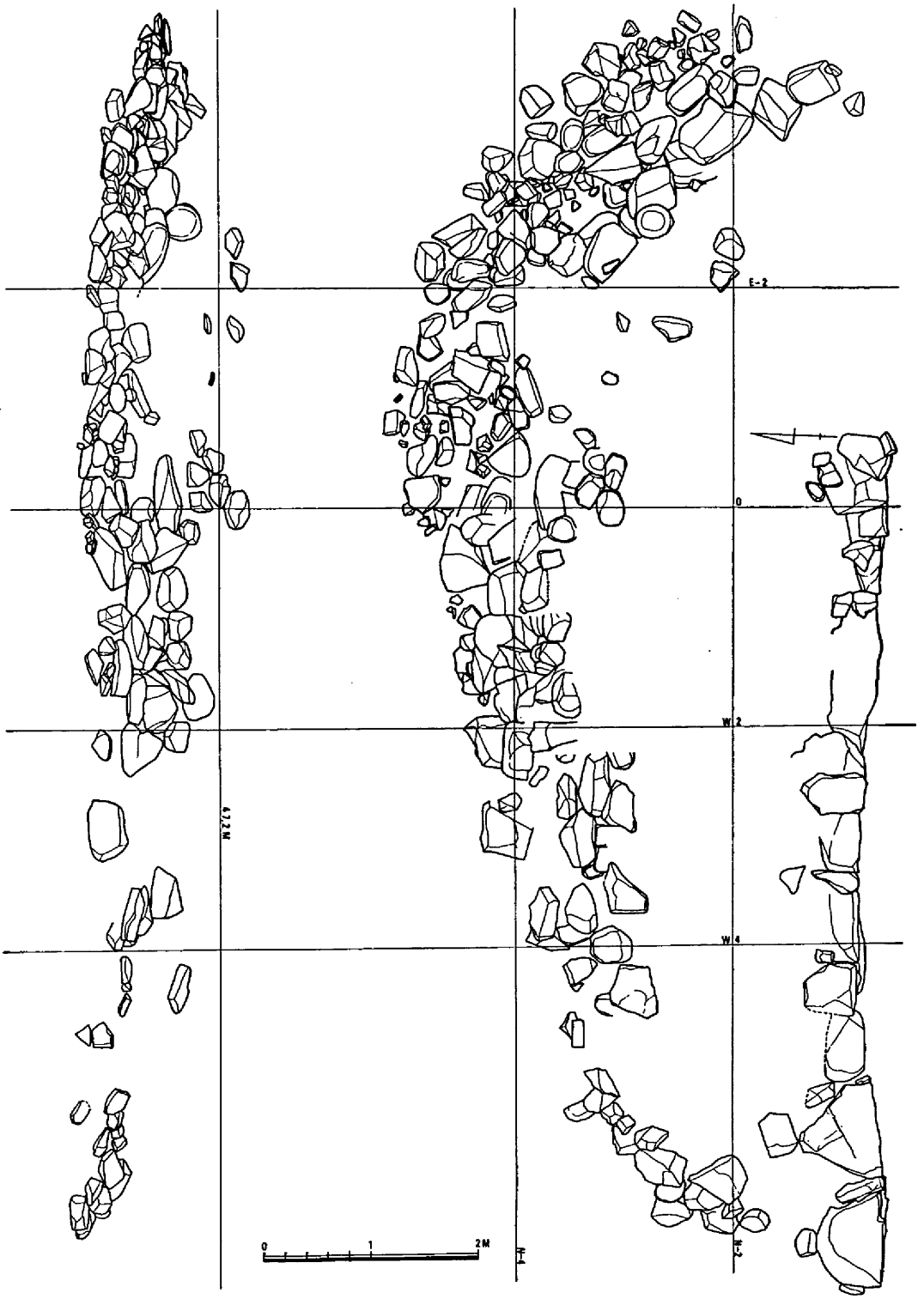
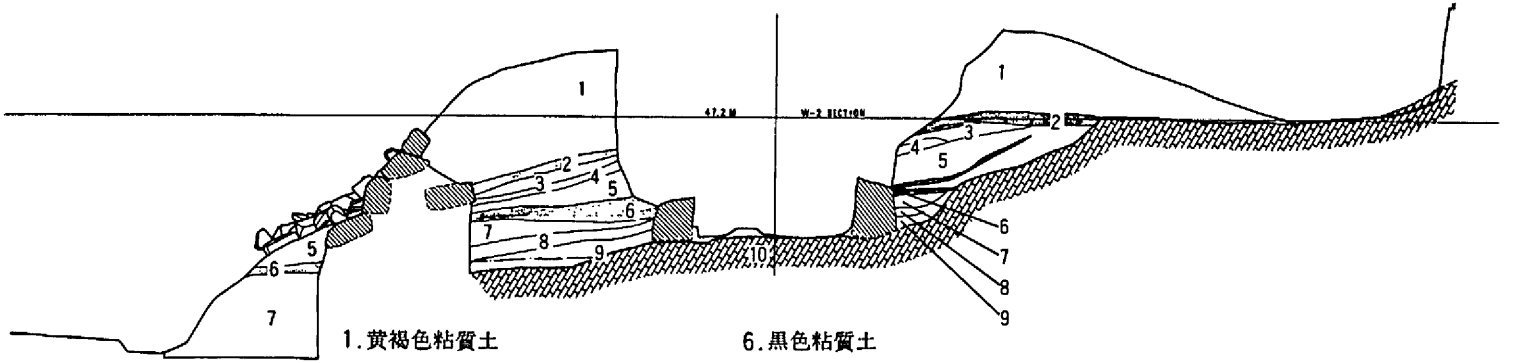
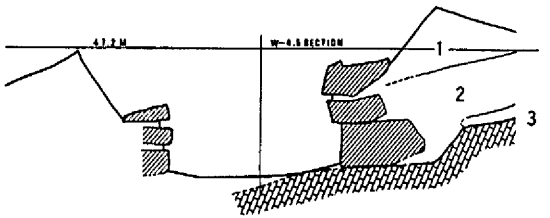


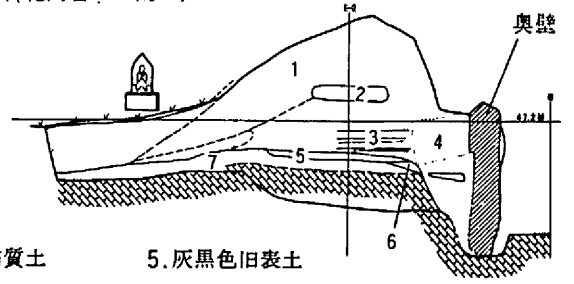
図56　阿坂古墳墳丘石積平・側面図 (1/60)



1.黄褐色粘質土
2.黒色粘質土
3.黄褐色粘質土
4.淡褐色粘質土
5.黄褐色粘質土
6.黒色粘質土
7.黄褐色粘質土
8.灰褐色砂質土(弥生後期土器包含層)
9.灰褐色砂質土(弥生後期土器包含層)…非常に硬い
10.黄色地山(花崗岩ばい乱土)



1.黄褐色粘質土
2.黄褐色粘質土＋黒色粘質土
3.黒色旧表土



1.黄褐色粘質土
2.淡灰黒色粘質土
3.版築層
4.非常に硬い
5.灰黒色旧表土
6.漆黒色包含層
7.黄褐色粘質土

図57 阿坂古墳墳丘断面図 (1/80)

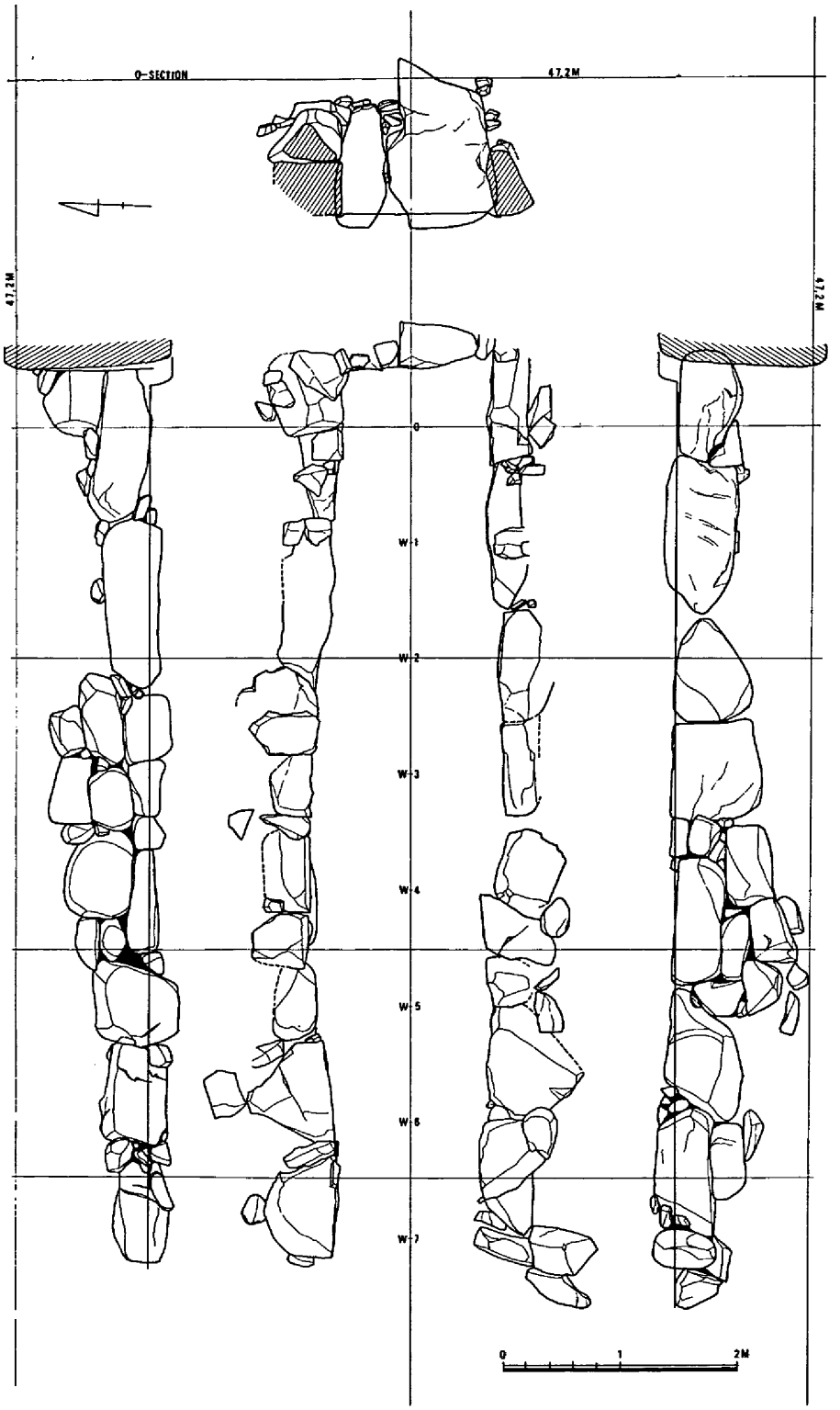


図58　阿坂古墳石室平面図及び展開図（1/60）

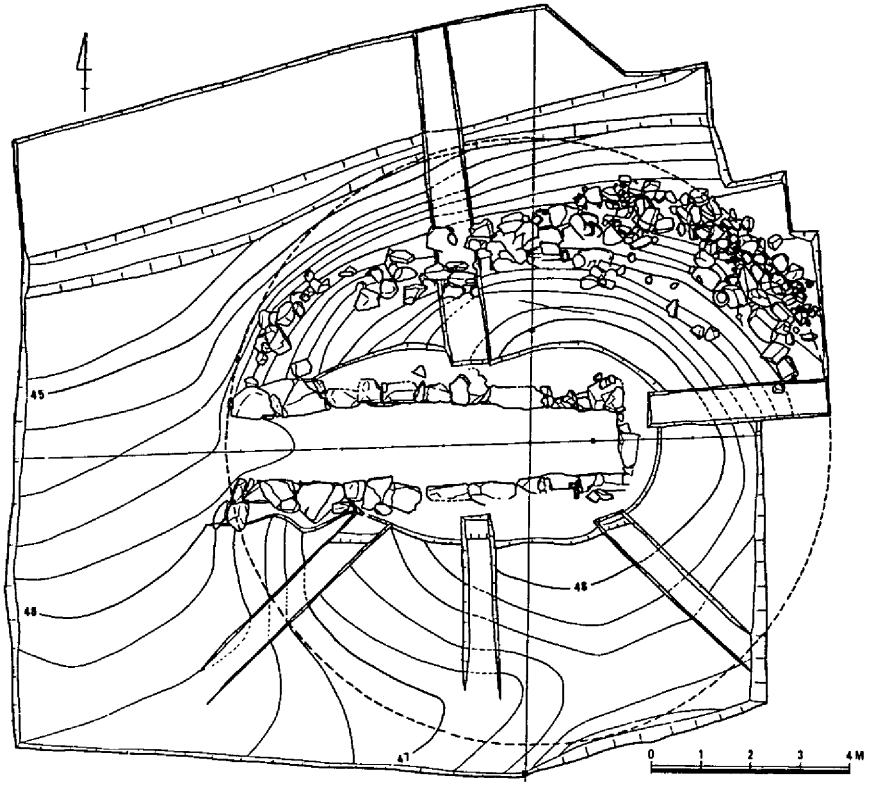


図59 阿坂古墳地形図（発掘後）(1/150)

（4） 出 土 遺 物

§1. 須 恵 器

杯蓋，杯身（1・2）は石室入口付近の撹乱土層により出土したもので，蓋の口径12.4cm，器高4cmを測る。口縁部は2cmあり，ほとんど垂直におり，端部がわずかに外に開く。天井部中程まで時計廻りの篦削りを行う。天井部と口縁部をわける稜は短く甘い。½程の破片である。杯身は，口径9cm，器高4.6cmを測る。口縁部たちあがりはわずかに内傾し1.8cmをはかり，端部は稜を持つ。受部は水平に近く0.3cm突出し端部を丸く収めている。体部中程より篦削りを行う。¼程の破片である。両者

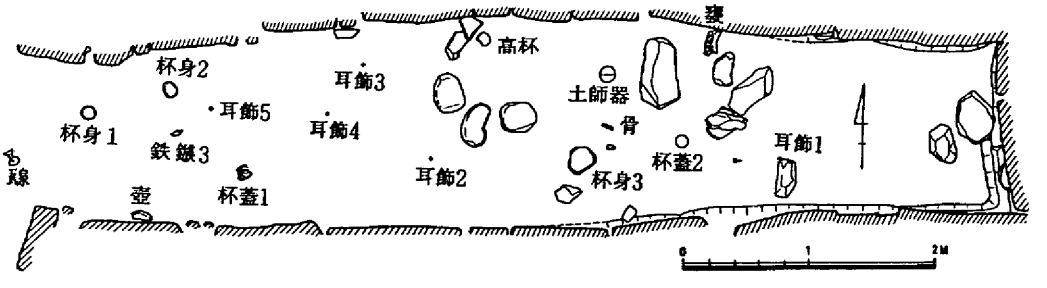


図60 阿坂古墳石室内遺物出土状態図 (1/60)

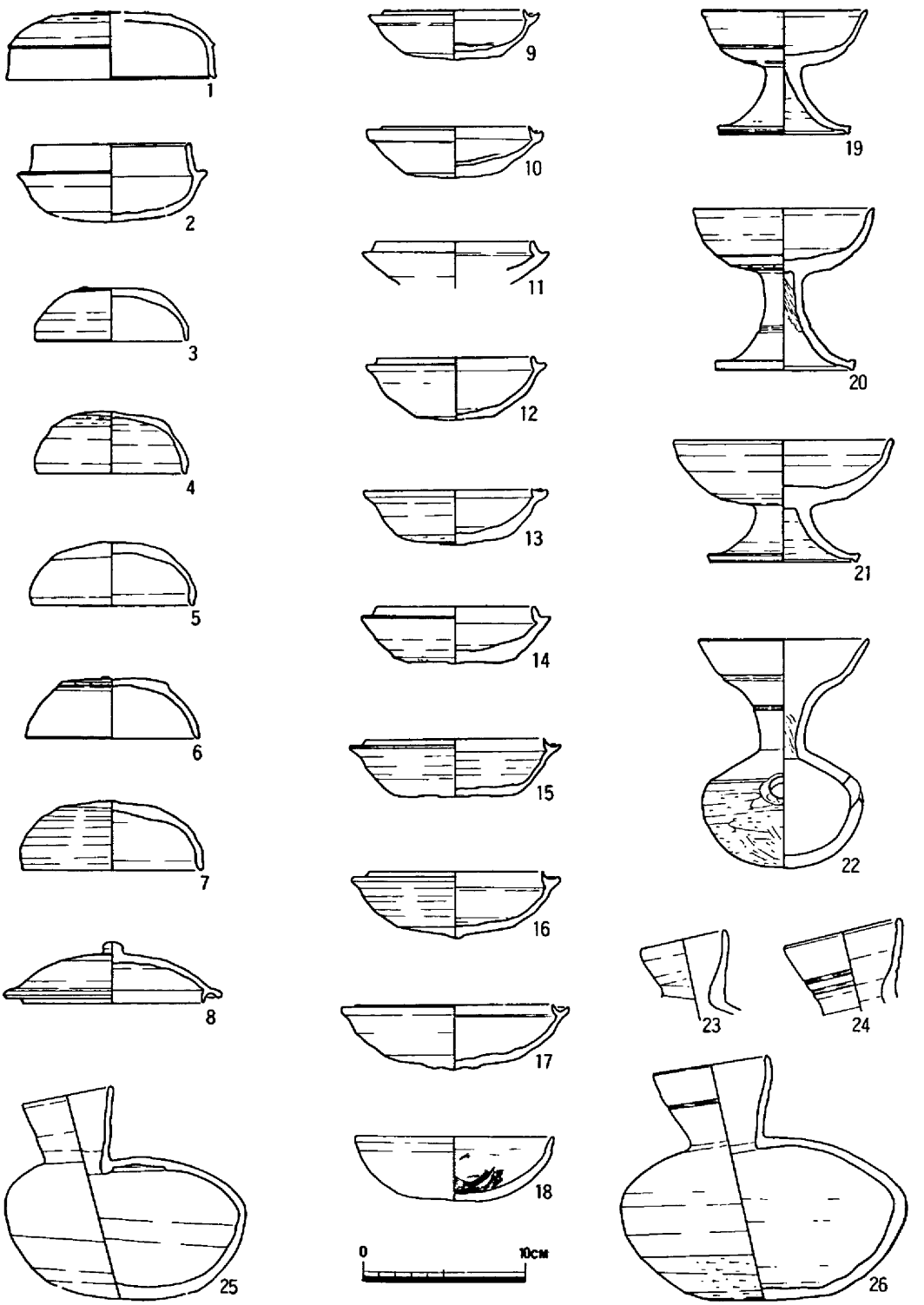


図61 阿坂古墳出土遺物(I)—土器 (1/4)

共青灰色で良く焼成されている。この古墳の築造の時期がこの段階まで溯ることは古墳の石室構造からも考えることはできない。

杯蓋（3～7）は口径9cm（3・4）～11.4cm（7）—少し歪んでいる—，器高3.3cm（3）～4.2cm（7）を測る。篦状工具により回転台から引き離したままのもの（3・5・7）と天井部の肉厚になった部分を篦削り（時計廻り）を行うもの（4・6）がある。4・6が石室内より，他は石室入口付近攪乱土より出土している。8は歪みが激しいが天井部中央に乳頭状の宝珠を持つ杯蓋で，口径13cm器高3.7cmを測る。内面にかえりをもち，口縁部より0.5mm程伸びる。天井部中程まで篦削りを行う。

杯身（9～17）は口径8.4cm（9）～12cm（17），器高3cm（9）～4cm（16・17）までのものが見られる。口縁部立ちあがりは0.6～0.7cmでそりながら内傾する。13のみは，立ちあがりが受部端と同一の高さである。篦状工具により回転台から切り離したままのものがほとんどで，13・14がわずかに肉厚の所を部分的に篦で削り取って調整している。12，13，15，16は歪みが激しい。18は土師質の杯（埦）で口径12cm，器高4cmを測る。全体に赤褐色を呈する。外面は剝離のため不明であるが，内面は細い刷毛調整を行う。口縁部はなでによってわずかに凹みがつき，端部を丸く収める。

高杯（19）は口径10cm，器高7.5cmを測る。口縁は外に開き端部は丸く収め，体部中程に沈線が1本巡る。八の字状に開いたしっかりした脚部を持つ。20は口径10.8cm，器高9.8cmを測る。口縁はわずかに内湾しながら上方にのびる。杯部下半は篦削りを行う。脚部は18より長く，中央に1本沈線を巡す。21は口径13cm，器高7.5cmを測る。19・20より杯部が大きく脚部が短や肉厚である。

甕（22）は，体部が球形をなし，ラッパ状に拡がる口頸部を持つ。口径10.2cm，頸部最小径2.7cm，器高13,8cm，体部最大径9.8cmを測る。体部肩に沈線を1本巡らし，それより下部は手持による篦削りで調整を行う。頸部中央に1本，口頸堺に2本の沈線を巡らす。円孔を穿った時の粘土が体部内に取り残されている。

平瓶（23～26）は扁平な体部を持ち，体部上面の中心から離れた所に口縁部を付ける。25は上面開口部を円版でふさいでいるが26にはそれが見られない。26体部下半に篦削りを行っている。

甕（27～30）は口径18～24cmでわずかに外に開く口縁部をもつ。体部外面には細い格子叩き，内面は青海波文が残る。

◦鉄　　器

鉄鏃が3本出土したのみで，刀等は残片も出土していない。1・2は先端部が丸味を持った広根式3は逆台形になる広根式の鉄鏃である。

◦装　身　具（金環）

1～4の金環が4個と図示できなかった1点計5点が出土している。すべて銅地金張りである。

1は直径2.3cm，現在の重さ6.25g，2は直径2.3cm，現在の重さ6.7g，3は直径2.1cm，現在の重さ5.3g，4は直径2cm，現在の重さ6.2gを測る。（伊藤）

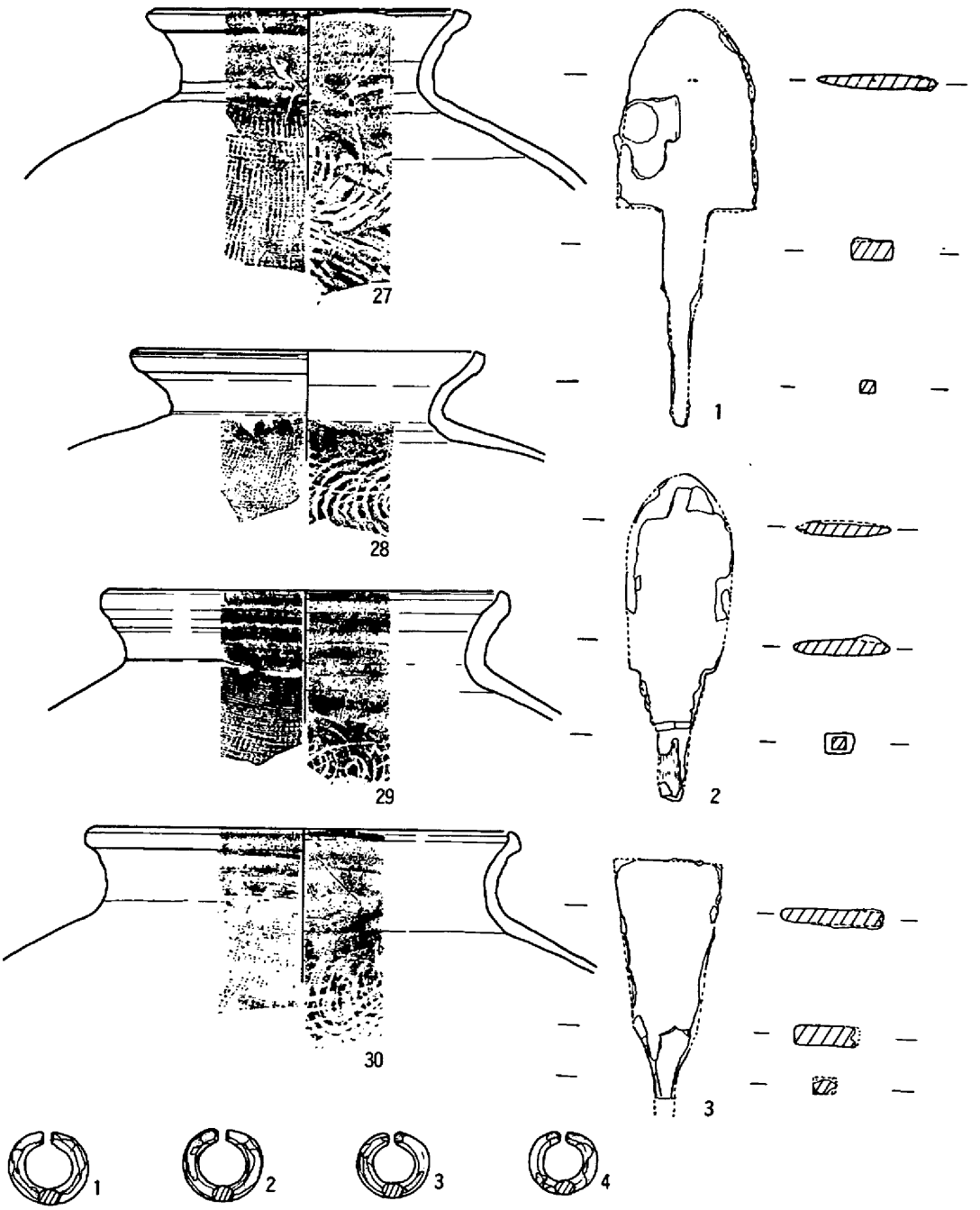


図62　阿坂古墳出土遺物II—須恵器(1/4)・金環・鉄器(1/2)

（５） 阿坂古墳前庭部出土近世陶磁器類

阿坂古墳を調査中，入口付近から前庭部にかけて夥しい近世陶器類が古墳の須恵器と混在する形で出土したため西へ拡張したが西へいく程量は少なくなり，古墳前庭部に一括して投棄されたものと思われる。出土遺物は，京焼系磁器，伊万里焼系磁器，唐津焼系陶器，生産地がはっきりしない磁器系焼物，備前焼，在地土師器が含まれるので順次その概要を記し紹介しておきたい。

京焼茶碗（図63-1～11）

口径９cm，高さ5.5cm前後のもので，白っぽい胎土に透明の釉をかけ灰白色，淡黄白色あるいは緑がかった灰白色を呈す。全体に貫入が見られる。体部下半に鉄釉による草文を描いている。８，９は丸味をもち無文と思われる。10，11は口縁部がわずかに外に開き，緑がかった灰白色を呈す。

伊万里盃（ちょく＝ちょこ）（図63-13～17，27）

口径5.5cm，高さ２cm前後の小形品（27）から口径９cm，高さ４cm前後になるもの（16）が含まれる。無文のものと紺色に抽象化された絵を一面にあるいは部分的に描く。

伊万里茶碗Ａ（図63-12）

口径8.6cm，高さ4.4cmで，白濁色を呈し発色の悪い紺色で松が描かれている。

伊万里茶碗Ｂ（図64-16）

口径7.6cm，高さ5.8cmの謂所筒茶碗である。胎土は白色で透明の釉がかかり，貫入が見られる。外面は松を内面口縁にそって菱形の幾何学的文様を手描きによって行っている。見込みには変形花文を施している。

伊万里茶碗Ｃ（図63-18，25，6）

口径９～11cm，高さ4.7～5.4cmの小形の茶碗である。白色～灰白色を呈し，紺色の抽象化された文様（18，25），網目文（図64-31）がある。

伊万里茶碗Ｄ（図63-19，23，24，26）

口径12cm，高さ6.4cm前後で灰白色～灰色を呈し，茶碗Ｅに比べ厚ぼったい感じがする。紺色無文のもの井切・菊文様・〇印などの文様がある。

伊万里茶碗Ｅ（図64-28～30，32～34，36，37）

口径11cm，高さ6.5cm前後で白色を呈し，Ｄに比べ薄手で文様も１つの文様を連続的にくり返し行っていくもので紺色も発色がきれいである。35は図柄が36と同じであり，36に伴う蓋と考えられる。

伊万里くらわんか碗（図64-38～41）

口径11cm，高さ６cm前後を測る。胎土は白色で外面は淡緑色～淡緑白色，内面は灰白色を呈し，内面口縁に紺色～灰褐色の４本の斜格子＋×の文様を，見込みに２本の線と中央に変形花文を入れる。41の外面は抽象的文様で内面には文様がない。

伊万里皿（図63-20～22）

口径12cm，高さ3.5cm前後を測る。白色の胎土で透明の釉が畳付，見込みの重ねた部分の内外0.5cmが薄くなる以外はほとんど全面にかかる。口縁内面に２条の線と斜格子状に紺色の文様を手描により

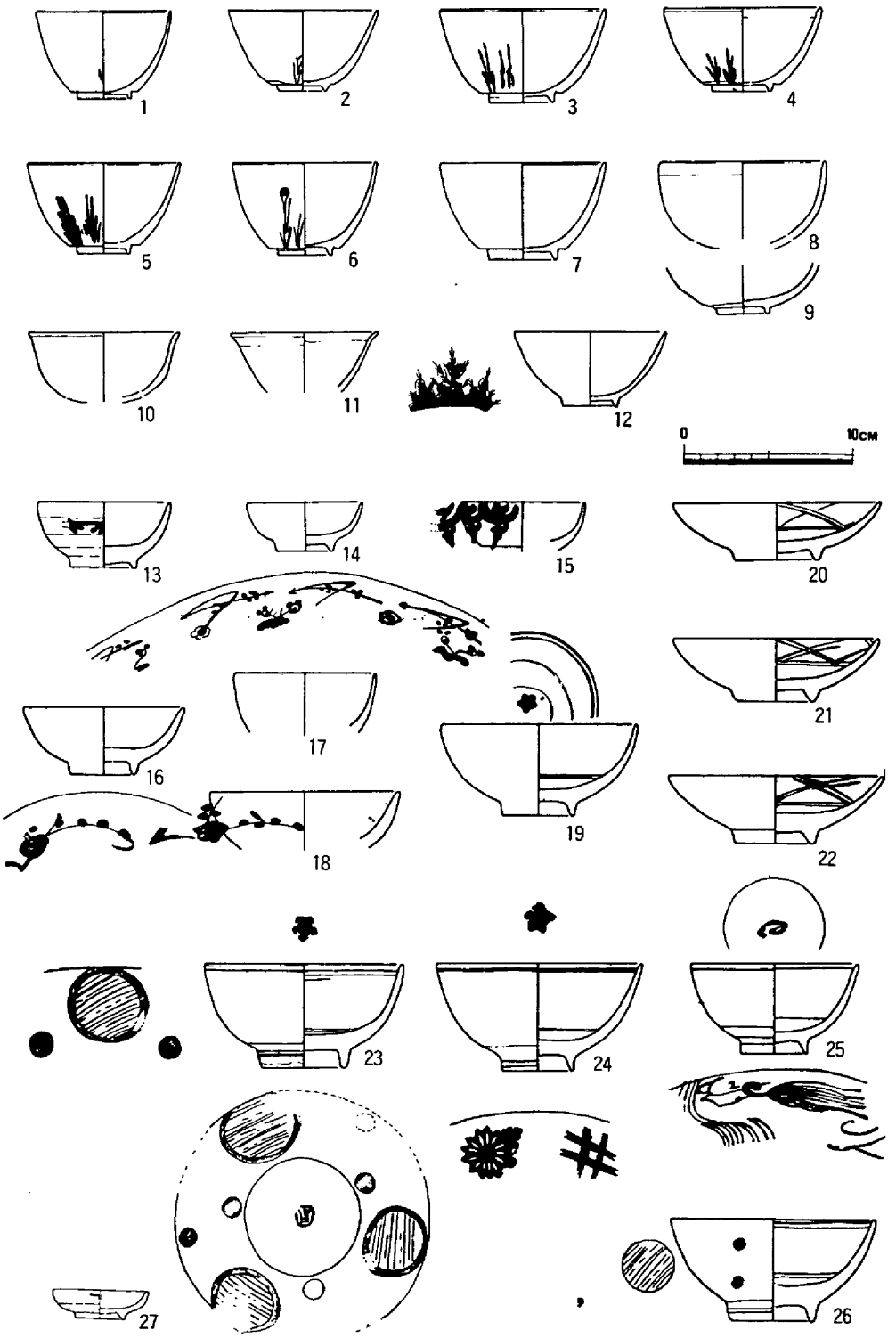


図63 阿坂古墳前庭部出土近世遺物（I）

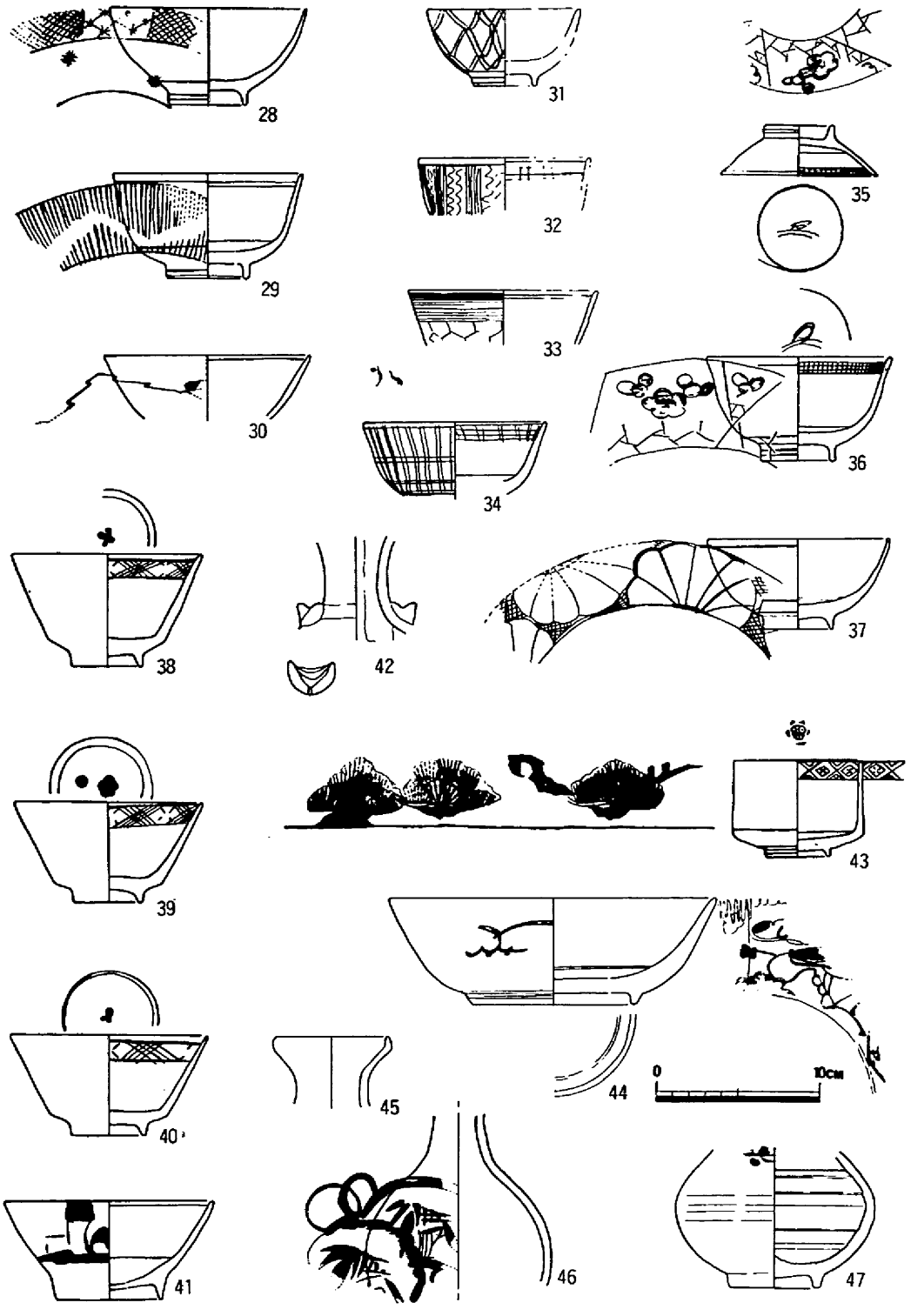


図64　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（II）

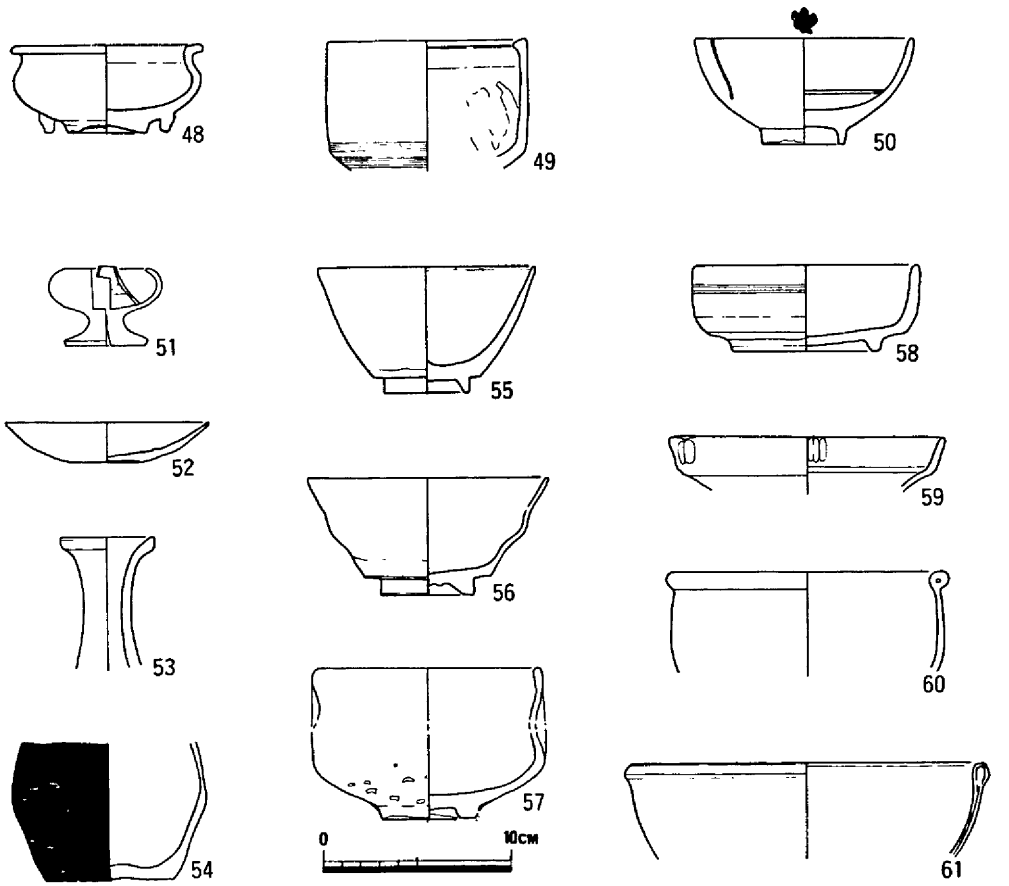


図65　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅲ）

描いている。

伊万里大皿（図64-44）

口径19.4cm，高さ6.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し透明の釉がかかる。内面は複雑な幾何学的文様を施し外面は単純な文様を手描きによって描いている。

伊万里徳利（図64-45～47）

45は口縁部小破片で白色の胎土に淡灰白色の釉がかかる。46は体部の破片で外面に紺色で笹状のものを描いている。47は底部および下半部で破片が胴部最大径12cm，高台径5cmである。3片とも少しずつ釉調が異っている。

伊万里香炉（図65-48）

口径外法10cm，高さ4.8cmを測る。三本の獣足が付くが効を果していない。胎土は白色で灰白色の釉がかかる。内側は口縁部のみが全体にかかる。

他の伊万里，49は胎土が灰白色を呈し外面および内面の一部に淡緑白色の釉がかかる。50の茶碗は，淡黄白色の胎土で外面は淡濁緑黄色を内面は乳灰（黄）色を呈する。見込みに紺色の変形花文と2本の線が入る。51の灰燭（ひようそく）は淡灰褐色の胎土に明るいおうど色の釉が底部以外全面にかかる。内部に

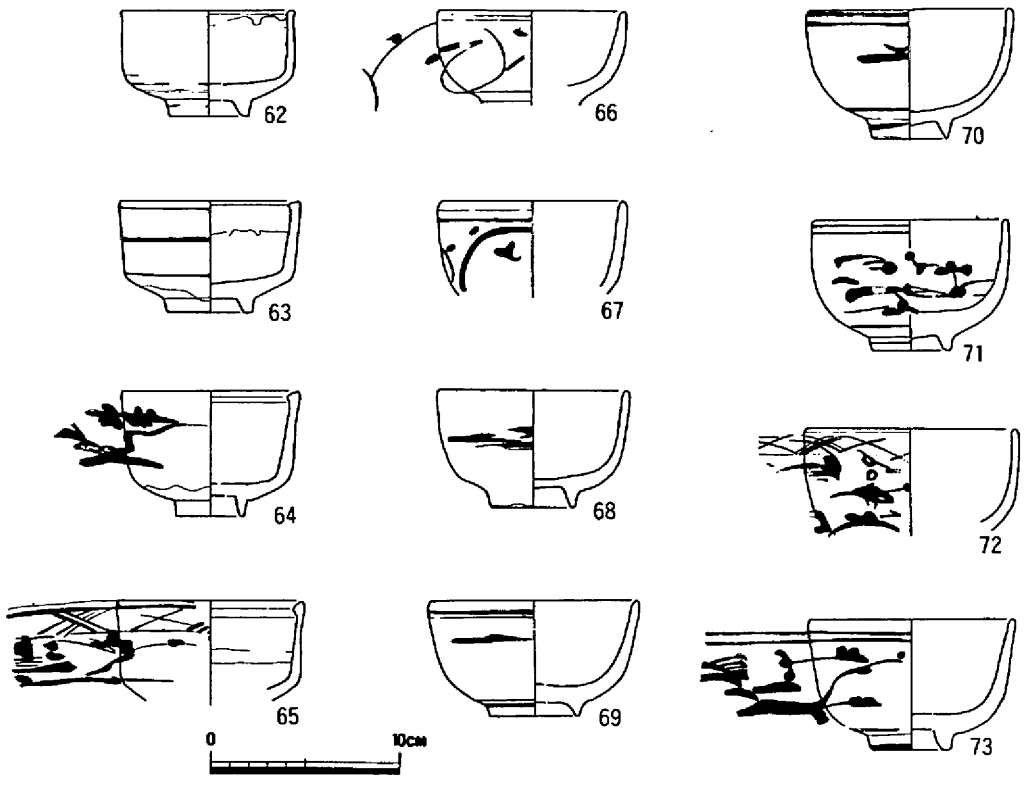


図66 阿坂古墳前庭部出土近世遺物(Ⅳ)

下部を半裁された灯心立てがつく。底部は糸切りを行う。52の皿は白黄色の胎土に上面のみ緑がかった淡灰色の釉がかかる。見込みに3個のとちん跡が付く。53は徳利の口頸部で全面に褐色の釉がかかる。54は胎土が灰色で外面のみ茶褐色の釉がかかる。54は胎土が灰色で外面のみ茶褐色の釉がかかる。55・56は淡灰(黄)色の胎土に白濁色の胎土に白濁色の釉が内外面にかかる。55は直線的にのびるが,56は体部中程で屈曲する。57は褐色を呈する,謂所飴釉を施す。胎土は灰白色を成す。体部中程を何カ所か指で押え変形させている。58の平碗は赤褐色の胎土に濁黄色の釉が畳付け,および底部以外にかかる。体部中程に2本の沈線が巡る。59は口縁が六角をなし鉢状のものと思われる。胎土は灰色で淡縁灰色の灰釉をかけている。60・61も同じ胎土,釉調を成し,口縁は玉縁をなす。両者とも鉢と考えられる。

唐津系茶碗A(図66-62～65)

口径8.5cm,高さ6cm前後で底部から口縁がほぼ垂直にたちあがり,端部をわずかに内側につまみ出す特徴を持つ。暗灰色から赤褐色の胎土を成し,明るい透灰(青～緑)色の釉が外面の口縁たちあがり部分全体と内面口縁部近くのみにかかる。無文のものから紺色の線が巡るもの,口縁外面に斜格子文を入れ,抽象的な絵を描いているものなどがある。

唐津系茶碗B(図66-66～73)

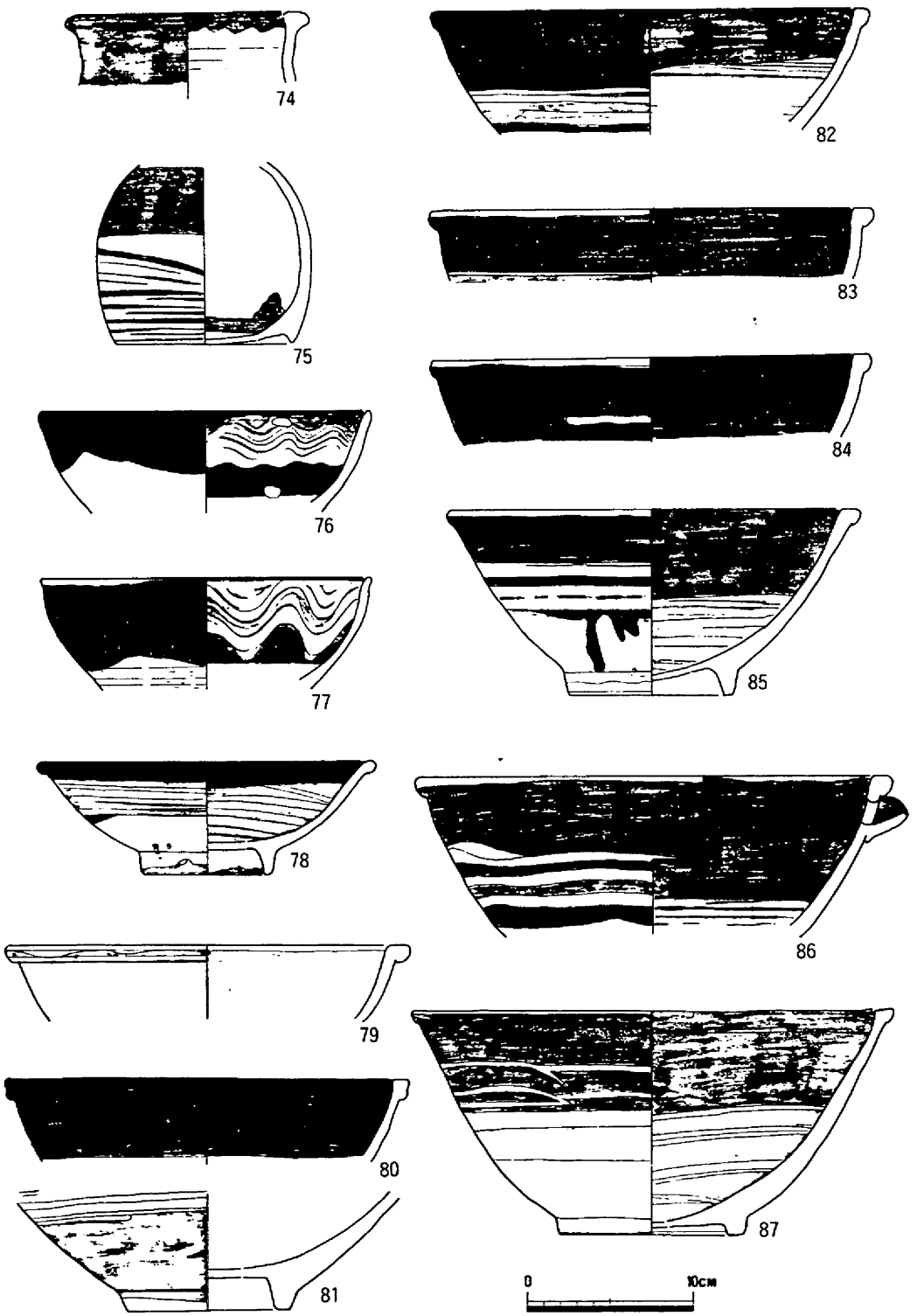


図67 阿坂古墳前庭部出土近世遺物（V）

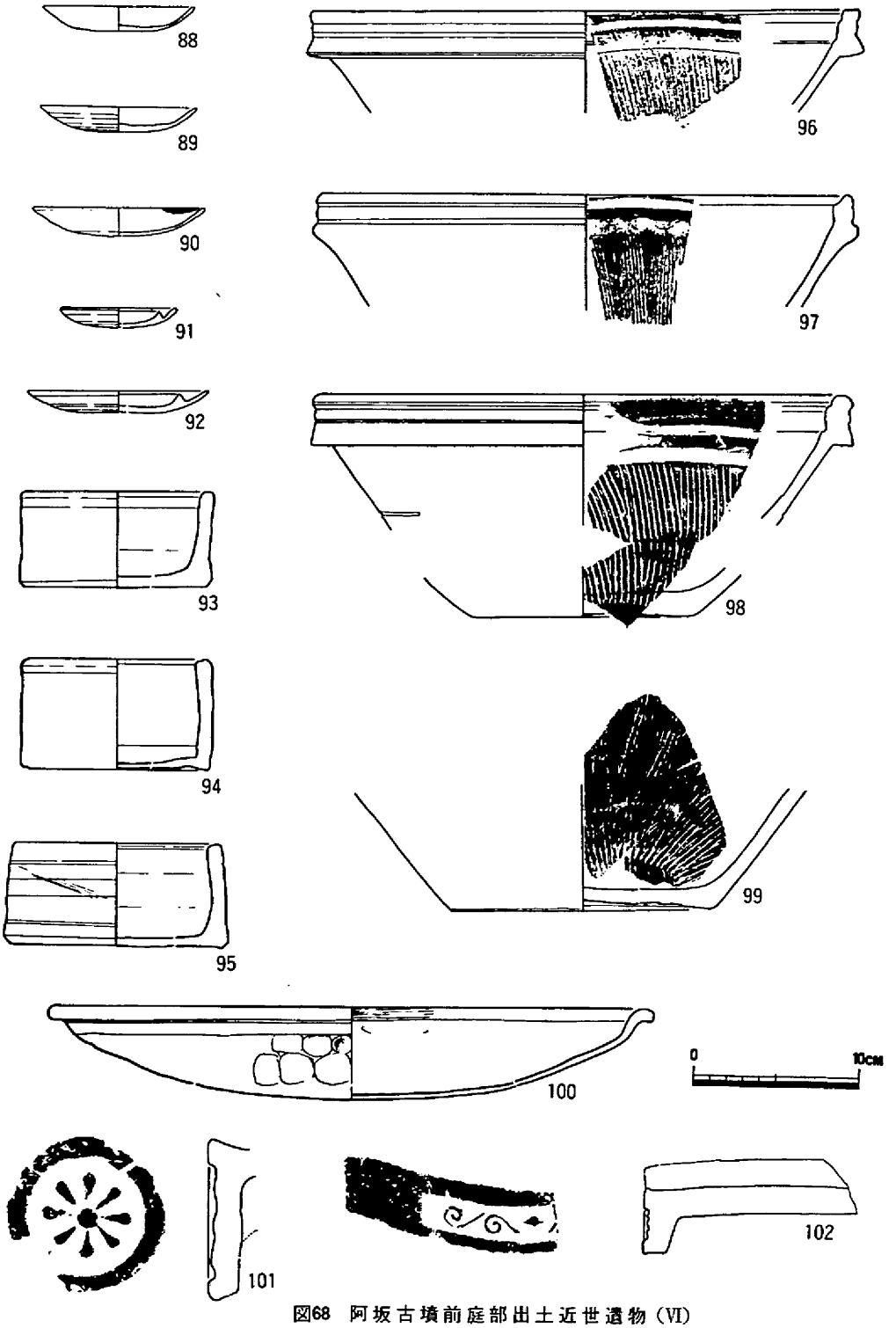


図68　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（VI）

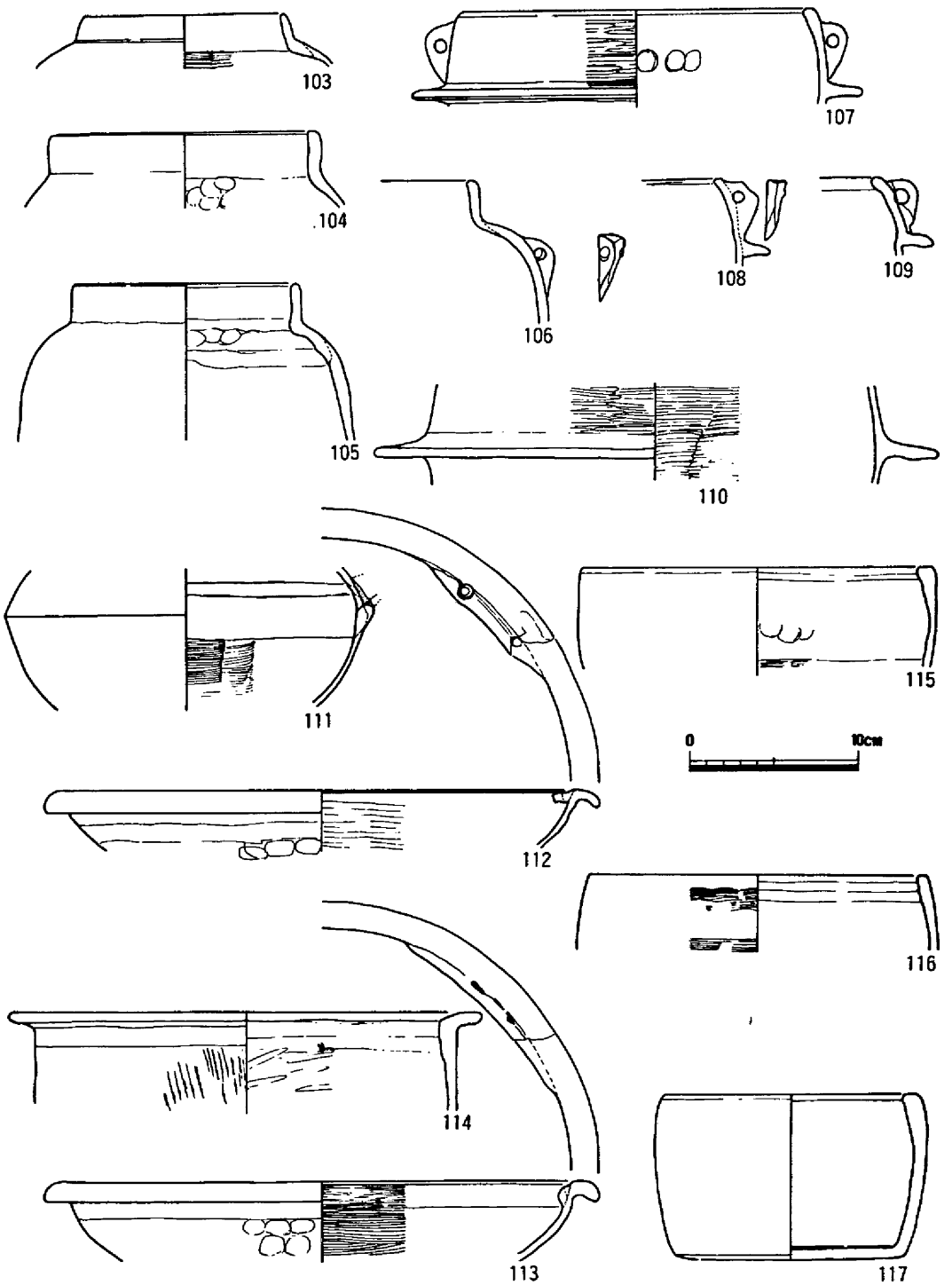


図69 阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅶ）

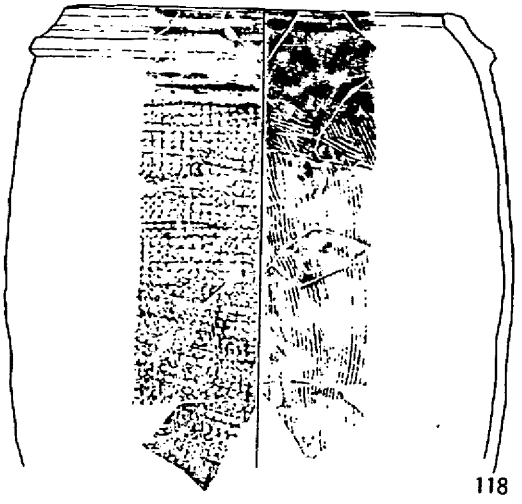
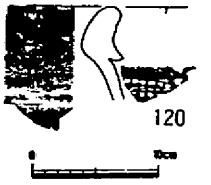


図70　阿坂古墳前庭部出土近世遺物（Ⅷ）



Aに比べ丸味を持った茶碗でAより少し大振りのものが多い。口径8～10cm，高さは7cm前後である。胎土釉薬はAに同様であるが，畳付け以外全面に釉を施す。文様も単純なものから複雑なものまでが存在する。

唐津系壺（図67-74）

口縁部のみの破片で口径12cmを測る。胎土は灰黒色を呈し外面に濁黄緑色ぎみの釉をかけている。

唐津系徳利（図67-75）

体部下半の破片で胴部最大径13cmを測る。灰黄色の胎土に外面上半部に灰黄緑色を呈し，下半部にはさらに白色釉を二度掛けしている。

唐津系鉢A（図77-76～78）

口径20cm，高さ7cm前後の浅鉢である。76は口縁部が上方に伸び端部を丸く収める。77はわずかに外に開く。78は玉縁状になる。胎土は灰色～灰褐色を呈し，褐色の釉がけを行い，さらに白釉を波状文状にあるいは平行に施している。

唐津系鉢B（図67-79～87）

79は小片であるが復元口径22cm，口縁端部を折り曲げ上端が水平になる。胎土は淡赤褐色で口縁水平端面以外に白濁色の釉がかかる。80は復元口径22cm，口縁部を折り曲げ台形状になし，上面を水平にしている胎土は白色を呈し内外面とも黄褐色の釉がかかり，下半部はさらに白色釉をかけている。82・84も同様の胎土・釉調を示す。83は胎土が青灰色を呈する関係か，釉調も少し黒ずんでいる。

85は口径22.2cm，器高11.2cmを測る。胎土は灰色～淡灰色を呈す。外面は上半部は暗茶褐色，下半部は茶褐色，体部中程に，白～淡黄白色に幅1cm程で二条巡らせている。内面は淡黄茶褐色釉をかけたあと下半部にはさらに白色（生地の胎土の関係から黄白色を呈すが）釉を施す。

86は口径26cmを測る。口縁上端に注口を持つ。他のものも小破片であるのでわからないが，この様な注口を持つものと思われる。胎土は淡赤褐色を呈し，外面上半部には灰褐色，注口下に白色の釉を波状あるいは平行に施している。内面は茶褐色釉後さらに下半部に白色釉を平行に施している。

87は口径26.5cm，器高13.6cmを測る。胎土は淡赤褐色を呈し，外面上半部は灰白色釉後，幅0.5cm前後の3条の白釉を施す。下半部は赤褐色の鉄釉状の釉がけ後さらに黄灰色の釉をかけている。内面は灰白色釉後さらに下半部のみ白釉を平行に施している。

備前灯明皿（図68-88～92）

口径8.6～10cm，器高1.5～1.7cmの赤褐色を呈する小皿である。90には灯心のこげたあとが見られる。91，92は内側に凸帯を持つ。

備前鉢（図68-93～95）

口径10～11cm，器高6cm前後の鉢である。焼成地の備前では大窯（西，南，北）のみで数多く見られ匣として使用されているといわれている。

備前擂鉢（図62-96～99）

口径30cm，器高14～15cmを測る。赤褐色～暗茶褐色を呈し，口縁外面には二条の凹線が巡る。

96，97，99の内面は鋭い櫛状工具により，98は少し太めの工具により9本単位の条線を内面全体に施している。備前焼では他に徳利の小破片がある。

土師質土器，羽釜A（図69-103～106，110）

全体を見れるものがないが，球形の体部からほぼ直立して立ちあがる口縁を持つ。体部中央に鍔，肩部に一対の取手耳を持つ。口径は11.5～15cmと個体差が著しい。瓦質の短片も多く見られる。

土師質土器，羽釜B（図69-107～109）

鍔から内傾する口縁部を持ち，一対の取手耳がつく。110の口径は20cmを測る。

土師質土器，内耳鍋（図69-112，113）

鉢状の体部から「く」の字状に折れ曲る口縁部を持ち，口径30cmを測る。内側に一対の取手がある。この取手には穴が2カ所穿たれ釣り下げられる様にしているのが普通であるが，113の場合は穴が貫通せずその役目を果していない。また，内耳部分のみが残る破片の中には穴の穿たれていないものも存在する。図示した点数は少ないが，土師質土器の中では量的にはこの鍋が圧倒的多数である。

土師質土器，鉢（図69-115～117）

口径13cm，器高10cm前後の小形品117と，口径19cm前後の中形品115，116が存在する。

その他の土師質土器

111は土師質というよりむしろ瓦質といっていい，注口土器になるものと思われる。114は小形の甕形土器，図68-100は焙烙である。口径34cm，復元器高5.5cmを測る。外面は押圧痕が残り，内面は刷毛調整を行っている。図70-118～120は甕で118は口径28cm，器高は50cm内外と思われる。胴部最大径40cmを測る。口縁は内傾する。外口縁部外面下に1本の凸帯が巡る。外面は格子目叩き，内面は縦方向の強い条線により調整が行われている。120は小片であるが「く」の字状に折れた口縁をさらに折り曲げている。外面は格子目叩きである。

同時に瓦類が出土している。図68-101は軒丸瓦で直径21cm，中房の廻りに8葉の菊花文が取り付く。102は軒平瓦で左側半分のみである。幅27～28cm前後と思われる。単純化された唐草文を施す。他に平瓦，丸瓦が多数ある。

以上が，阿坂古墳前庭部から出土した土器類であるが，整理期間等の関係で掲載することのできなかった磁器，陶器，土師器もあるが，概要は理解していただけるものと思う。それではこれらがいつ頃生産，使用，一括投棄されたものであろうか。生産地は不明なものも多いが，京都，九州，備前，在地など各地のものが含まれている。京焼から見てみれば，これは18世紀に入って生産され始められたといわれ（註-1），肥前を中心とした伊万里，唐津系の土器群もおおむねこの時期のものと見ることができる。在地土器は別にしても一番近在の備前焼はどうであろうか。灯明皿，鉢（匣），擂鉢，どの器種を見ても大窯（室町時代後半～江戸時代後半）で焼成されたものである。さらに擂鉢の器形あるいは内面に施される各線は鋭い櫛状工具によって全面に施されることなどからみれば18世紀以降の所産と考えられる。

また，在地の土師器にしても後述する沖の店遺跡の中世一括遺物とは異り全く新しい様相を呈している。例えば内耳鍋の所で述べたようにここで出土する鍋は釣り下げられるべく付けられた内耳が形態のみを残し，実用にはなっていないという所などにも見られる。

伊万里，唐津系の焼物に対しては不明の点が多いけれども，以上の様な諸点からこれらは18世紀代に生産使用され，それ以降に投棄されたものと考えたい。（伊藤）

（6） 阿坂調査区土壙

1）遺　構（図71）

この遺構はトレンチ31の東方で検出した，ほぼ長方形を呈する土壙である。長辺120cm・短辺90cm・深さ45cmを測る。褐色の砂礫層を掘り込み，厚さ6cmでほぼ全面に黄色粘土を貼り付けている。水漏れを防ぐためであろうか。その上層は黄褐色の砂混り粘土，最上層は周辺と同じ褐色砂である。この褐色砂の中に，大形の甕の破片がほぼ一個体分混入していた。この土壙が使用目的を終了したため，土器と共に埋められたものであろう。この土器と共に古伊万里の破片も混じっていることから，時期は江戸時代の中に入るものと考えられる。そしてこの土壙の用途は，水分の漏れを防ぐという構造と，水の便の少々悪い場所であるということから，水槽の可能性が大きい。

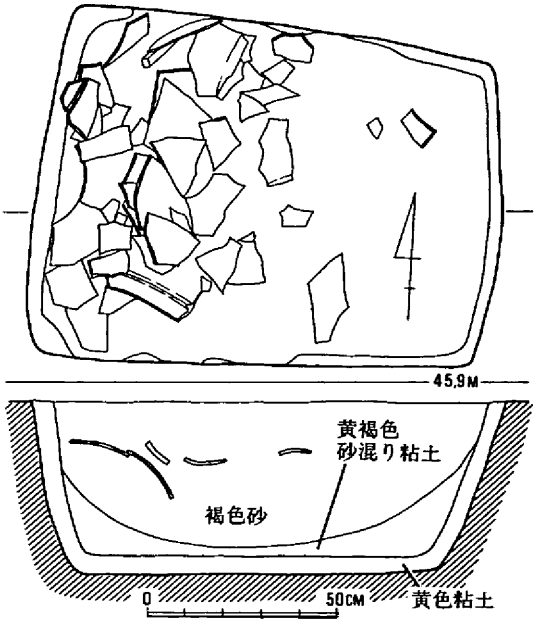


図71　阿坂調査区土壙（1/20）

2）遺　物（図72）

1は，前述した土壙内出土の大甕である。口径68cm・器高77cmを測り，底部の平面はニワトリの玉子形を呈し，断面は下方にふくれている。

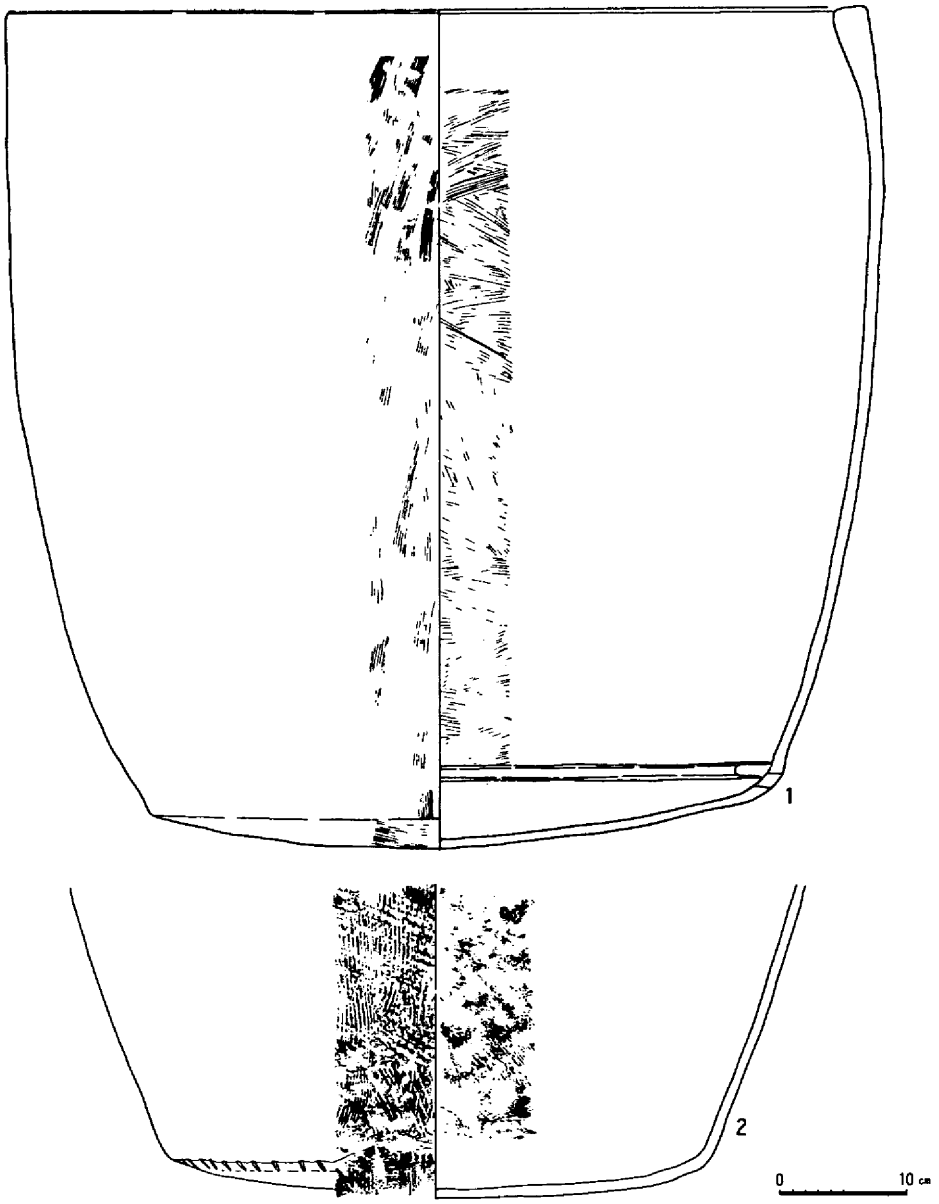


図72 阿坂調査区土壙出土遺物 (1/6)

体部と底部の境目にあたる内面には，幅２cm程のつばが全周している。そしてつばの直下には，直径１cm弱の円孔が１個開けられている。この大甕の用途は，何かを蒸すことにあったようで，底部外面にはススが付着している。２は，付近から出土した大甕の底部である。(浅倉)

(註-1) 同志社大学鈴木重治氏の教示による。その他この時期伊万里土器を扱い参考にさせてもらった文献には下記のものがある。佐々木達夫・花江.「動坂遺跡」動坂貝塚調査会，1978.

第3章　昭和55年度の調査

第1節　昭和55年度，第1次調査の概略

昭和55年度は鴨方インターチェンジ以西の鴨方町小坂東両名地区の中世散布地を4月15日から始め，引き続いて，小坂東大畔（おおぐろ）の中世散布地，小坂西谷井に所在する沖の店中世散布地の確認調査を5月15日まで実施した。両名散布地は4本，大畔散布地では2本のトレンチを入れたが，遺構を検出できず，遺物も極めて少く第1次調査のみで終了することになった。沖の店散布地には8本のトレンチを入れたがトレンチから大量の中世土器等を検出したため引き続いて第2次調査を実施し，古代末～中世初頭と思われる土師器埦を焼成した特異な窯址，14世紀から16世紀頃と考えられる大量の中世土器を検出した。

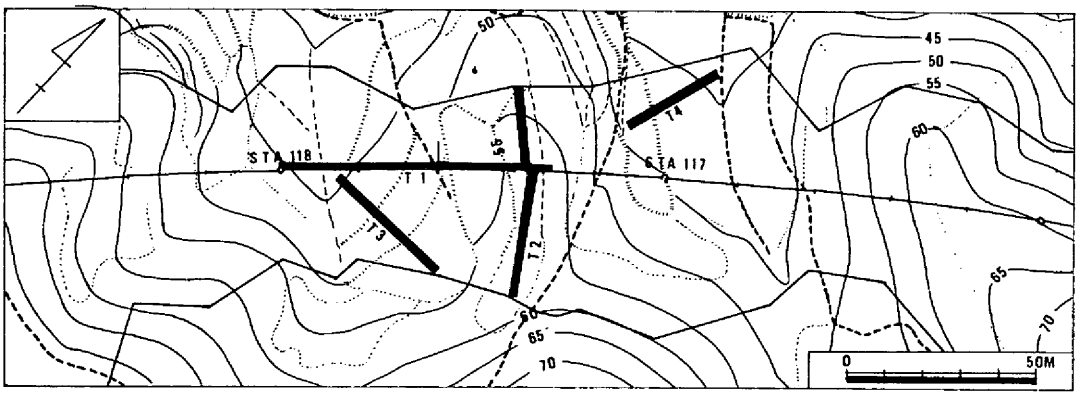


図73　小坂東両名散布地地形図およびトレンチ配置図（1/2,000）

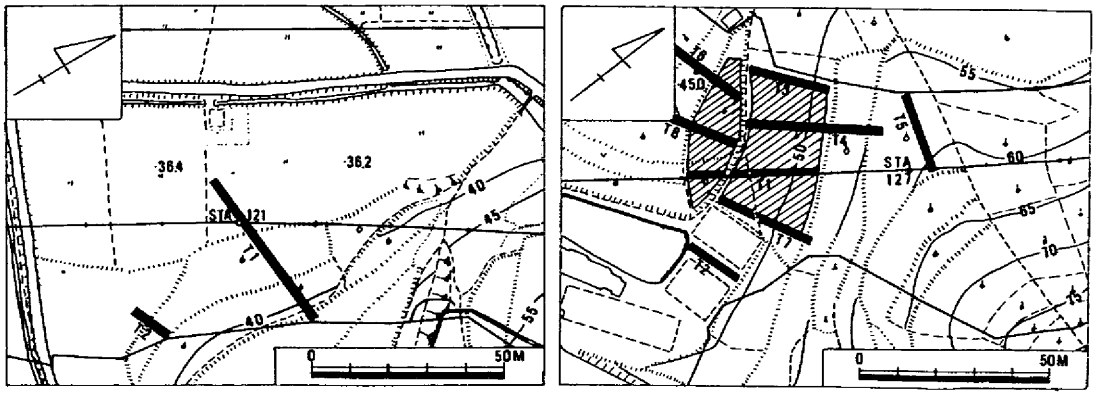


図74　小坂東大畔散布地・小坂西沖の店遺跡地形図およびトレンチ配置図（1/2,000）

第2節　沖の店遺跡(昭昭55年度)日誌抄

4月1日～6日　発掘調査の準備。
4月7日　発掘予定現地視察。
4月12日　対策委員会を現地で行い発掘予定地を廻る。
4月15日～22日　鴨方町小坂東両名散布地のトレンチ設定，調査を行う。
4月22日～24日　両名散布地を終了し，器材を小坂東大畔(おおぐろ)散布地に確認調査を開始する。
4月24日～5月15日　大畔散布地を終了し，器材を小坂西沖の店散布地に運搬し確認調査を開始する。
5月10日　現地にて対策委員会を開催する。
5月15日　沖の店T-8掘り下げを終了し，第一次調査を終了する。
5月20日～30日　沖の店，本格調査開始。小農道以南表土除去（1区）
5月30日　窯状遺構検出。
6月3日～4日　1区発掘。
6月5日～19日　2区発掘開始。
6月11日～30日　3区発掘開始。
6月13日　2区，溝内土器出土状態写真，取り上げ，1区写真。
6月17日～20日　2区，溝検出作業。
7月3日～29日　4区，発掘。1区1号窯精査。5区発掘，2号窯精査，写真。
7月15日　3，4区発掘，遺構検出，柱穴多数。1号窯清掃，写真，割り付け。
7月16日～18日　1号窯，実測。柱穴掘り上げ。
7月17日　2号窯，清掃，実測。
7月28日　全体清掃，写真。
7月30日　対策委員会を現地で行い発掘終了を報告する。
7月31日　島根大学理学部時枝克安先生に1，2号窯の熱残留磁気の測定を行って頂く。
8月10日～14日　町により，1号窯移築作業が行われる。

第３節　沖の店遺跡の調査

沖の店遺跡は，鴨方町小坂西字谷井に存する。西に開ける平野を見おろす緩斜面の標高44～48mに位置する。現況は畑，果樹園となっていた。昭和47年度に行った分布調査においては遺跡として確認されていなかったが，昭和53年路線決定がなされてから行った分布調査段階で中世を主体とする土器の散布が見られ，鴨方インター以西では両名，大畔両散布地とともに確認調査が必要であることを建設省に申し入れていた。昭和55年４月から行ったトレンチによる確認調査においても，各トレンチから大量の出土遺物を見，５月から７月一杯かけ約1,200㎡を掘り拡げた。その結果，２区の溝状遺構，４区包含層から大量の中世土器を，また平安時代終末～鎌倉時代初頭に位置付けられる土師器を焼成した特異な窯址などを検出したが，平坦部（幅５～６m）で検出した柱穴群はまとまりがつかない。以下，検出した遺構，遺物を概述したい。（伊藤）

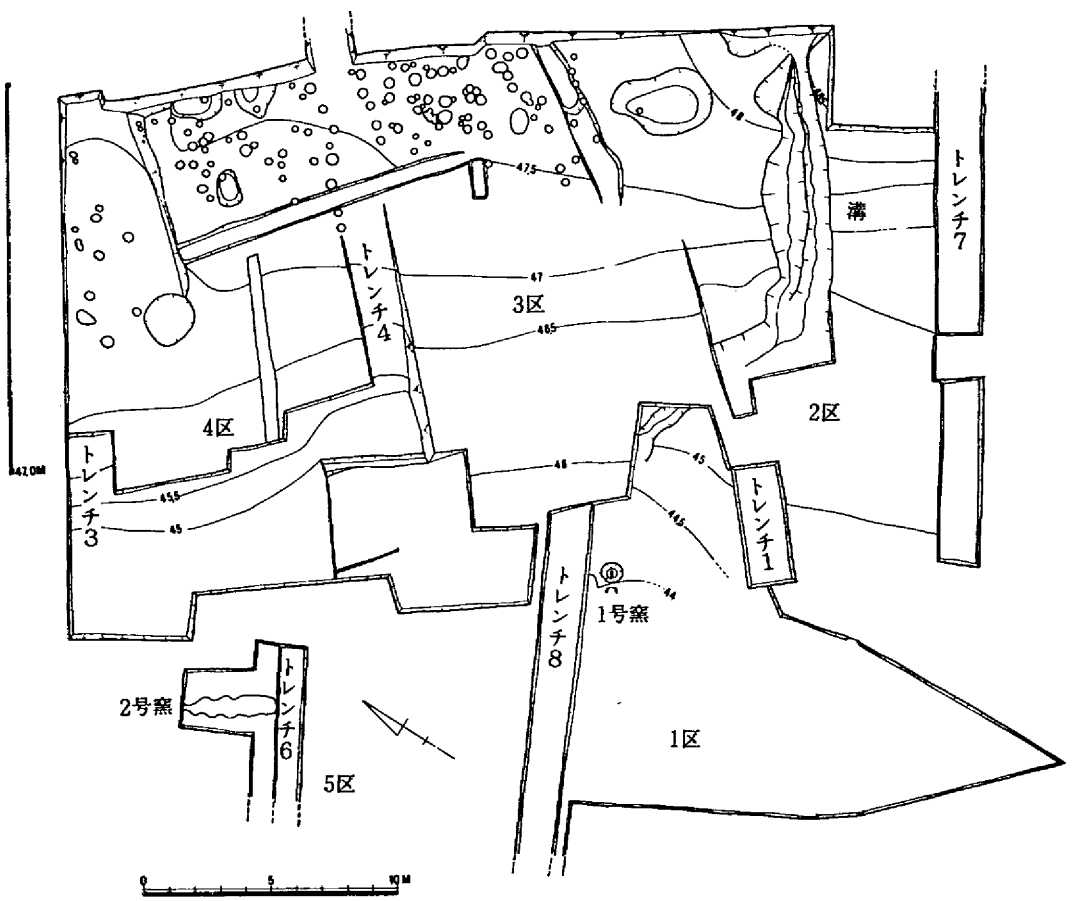


図75　沖の店遺跡遺構配置図（1/300）

（1） 1 号 窯 址

1）遺 構（図76）

1号窯址は，本遺跡の1区の北端に位置する。1区は，ほとんど遺物が出土せず，トレンチ8の東約1m，表土下1.5m程の所で，完形に近い土師器椀が大量に出土した。そしてその土器溜りを呈している場所から約1.5m程北側には，焼土の輪が半分程露出した。1m近くの段差がありこの2つの物が有機的に結合するものだとは思いもよらなかった。この付近は花崗岩の風化した真砂・砂礫が堆積した土層のため，乾燥するとスコップが立たない。そのため，雨の日の後に精査を行った。その結果，土器溜りは灰原であり，焼土の輪は焼成室であり，その間に焚き口が検出された。

この窯の構造は，先に述べたように，焼成室と焚き口と灰原から成っている。焼成室は，床面が平坦で，焚き口の方に少し傾斜している。床面の形はやや楕円形を呈していて，長径53cm・短径43cmを測る。床面の中央には床面に密着して，長さ34cm・高さ14cm・幅12cmの角礫が据えてある。壁は床面から垂直に約20cm上り，そこから外反して少しずつ内湾する。壁は床面から，最高70cm・最低60cm現存する。検出面での焼成室の大きさは，長径95cm・短径85cmあり，平面形は楕円形を呈する。焚き口は，検出面での高さ22cm・上幅45cm・最大幅52cm・床面幅46cmを測る。焚き口の端から焼成室の最も奥の壁までの長さは，水平で100cm・床面の長さ105cmを測る。床面の傾斜角度は，9度である。焚口の天井幅は，37cmを測る。灰原は，長さ110cm・幅約45～75cmで，少し凹みを持って末広がりに広がっている。壁面は厚さ5～20mmが赤黄褐色を呈して，レンガのように剝離する。その外周約3～5cmは暗赤褐色に被焼成している。

2）出土遺物（図77～79）

遺物としては，土師器椀が圧倒的に多く，実測できるものが47点あった。その他小皿も生産していたようで，6点ある。そして杯と考えられるものが1点，更に平瓦1点，甕4点が見える。これらの遺物は平瓦と甕が焼成室内で，土師器椀がほとんど灰原で発見されている。以下椀については表にし，まとめて何点か特徴あるものだけ説明を加えたい。平瓦・甕は1点ずつ説明する。

1は，出土椀の中で最も小形のものである。口径は14.3cm，器高は5.2cm，内高は4.3cm，底径は5.8cmを測る。しかし色調・胎土・焼成及び形態・手法の特徴は最も平均的である。

2は，口縁部を丸くおさめ，体部外面を指オサエし，貼り付け高台の断面は三角形を呈する。色調は赤褐色から明茶褐色を呈する。

3は，口縁端部をわずかに外反させ，貼り付け高台の断面は三角形，底部は糸切りが明瞭で，明茶褐色を呈した土器である。器壁が極めて薄い。

4は，口縁端部をわずかに外反させ，貼り付け高台の断面は角張って，底部は糸切りである。

5は，口縁部を1度外反させて再び元にもどす。高台の断面は場所によってかなり異なり，台形～三角形を呈する。色調は，内面が暗灰褐色～褐色，外面が茶褐色～灰褐色を呈する。

12は，最も平均的な形をした土器である。わずかに外反する口縁部を持ち，体部は内湾し，貼り付け高台の断面は四角形を呈し，底部は糸切りである。黄白色を呈し，2mm以下の砂を多く含んでいる。

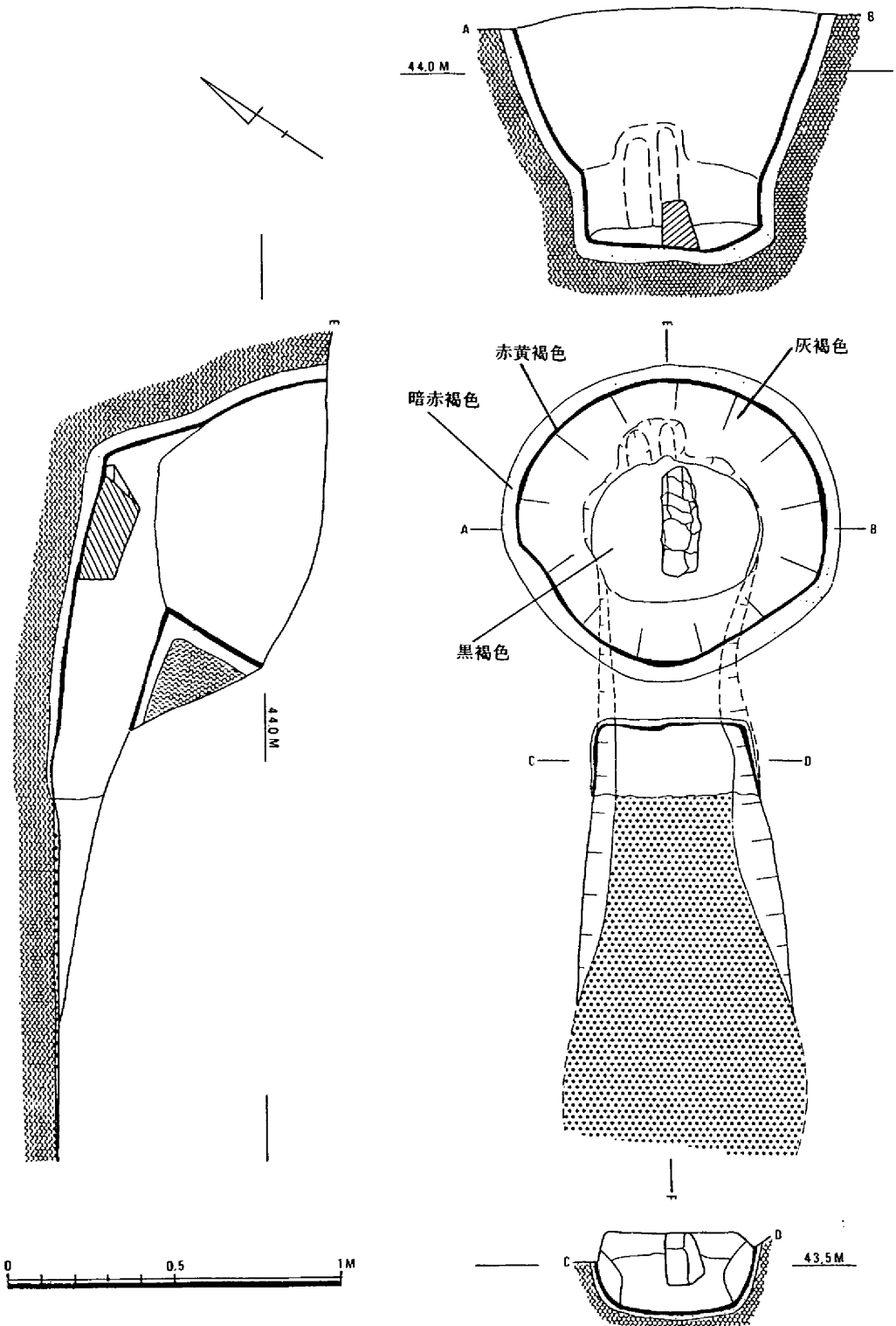


図76　沖の店遺跡1号窯平・断面図（1/20）

48は，口径8.8cm・器高1.6cmを測る小皿である。底部は，やや上げ底を呈し，回転糸切りを行っている。黄白色を呈し，1～3㎜大の砂礫を多く含んでいる。

54は，上げ底を呈し，回転糸切りを行う土師器の杯と考えられる土器の底部片である。黄白色を呈し，1㎜以下の砂粒を多く含んでいる。

55は，凹面に布目，凸面に縄目を持つ平瓦で，二次的焼成を受けて赤褐色を呈し，大きく歪んでいる。3㎜以下の砂礫を多量に含む。上半分と下半分が別個に歪み，色調も異っている。

56は，土師器の甕形土器で，口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。体部はゆるやかに湾曲する。底部は焼成後に丸く開口している。歪みが著しい。口径は平均すると約32cmを測る。

57は，56と同様な口縁を持つ。同じく底部がない。歪みが著しい。二次焼成を受けている。数個の破片にして焼台（陶板）として使用したものと考えられる。口径は平均すると約30cm前後である。

58は，前二者と同じ口縁を持つ。口径は30cm～38cmで平均34cmを測る。底部は焼成後に割られている。これも数個の破片にして焼台に使用したと考えられる。二次的焼成がブロックで異なる。

59は，口縁端部が強くおさえることによって凹面を作っている。底部は焼成後に割られている。口径約36cm・底口径約23cmを測る。3㎜以下の砂礫を沢山含む。ブロックで色調が異なっている。

（浅倉）

表1　1号窯址出土土師器椀法量・色調一覧（単位 cm）

	口径	器高	内高	底径	色調		口径	器高	内高	底径	色調
1	14.3	5.2	4.3	5.8	黄白色	25	16.0	5.9	4.7	6.9	黄白色
2	15.0	5.5	4.2	6.9	赤褐色	26	16.0	5.6	4.4	6.4	黄白色
3	16.0	6.1	5.2	6.8	明茶褐色	27	15.5	6.2	5.2	6.3	淡灰褐色
4	15.4	5.6	4.3	5.9	灰褐色	28	16.0	5.8	4.6	6.5	黄白色
5	15.5	6.2	5.0	6.7	赤褐色	29	16.0	5.8	4.4	7.0	黄白色
6	16.3	6.2	5.1	7.1	黄白色	30	15.0	不明			黄白色
7	15.8	5.9	4.6	7.4	黄白色	31	14.6	5.6	4.5	6.5	黄白色
8	16.5	6.3	5.3	7.4	黄白色	32	16.0	5.7	4.6	6.6	灰褐色
9	16.2	5.8	4.5	6.8	黄白色	33	15.3	5.7	4.5	6.3	黄白色
10	15.6	6.5	4.9	6.5	黄白色	34	15.6	5.5	4.6	6.5	黄白色
11	15.4	6.2	4.8	6.5	黄白色	35	15.4	5.6	4.1	6.5	黄褐色
12	15.1	5.7	4.7	6.5	黄白色	36	14.8	5.8	5.0	7.0	黄白色
13	16.2	6.3	5.3	6.8	黄白色	37	16.4	5.4	4.3	6.6	黄白色
14	16.2	5.5	4.4	6.6	淡灰褐色	38	15.5	6.1	4.8	6.5	黄白色
15	16.0	6.0	5.5	6.6	黄白色	39				6.6	灰黒色
16	15.6	6.2	5.0	6.4	黄白色	40				6.5	黄褐色
17	15.8	6.1	5.0	6.9	黄白色	41				7.0	黄白色
18	15.8	6.3	4.9	6.6	黄白色	42				7.0	灰褐色
19	16.0	6.1	4.5	6.6	黄白色	43				6.6	黄白色
20	15.0	5.9	4.5	6.0	淡灰褐色	44				6.1	黄白色
21	15.7	5.7	4.5	6.7	黄白色	45				6.8	灰褐色
22	16.0	5.6	4.5	7.3	黄白色	46				6.4	淡茶褐色
23	16.0	6.1	4.8	6.0	赤色	47				6.0	黄白色
24	16.0	5.7	4.5	7.3	黄白色		15.7	5.9	4.7	6.6	（平均値）

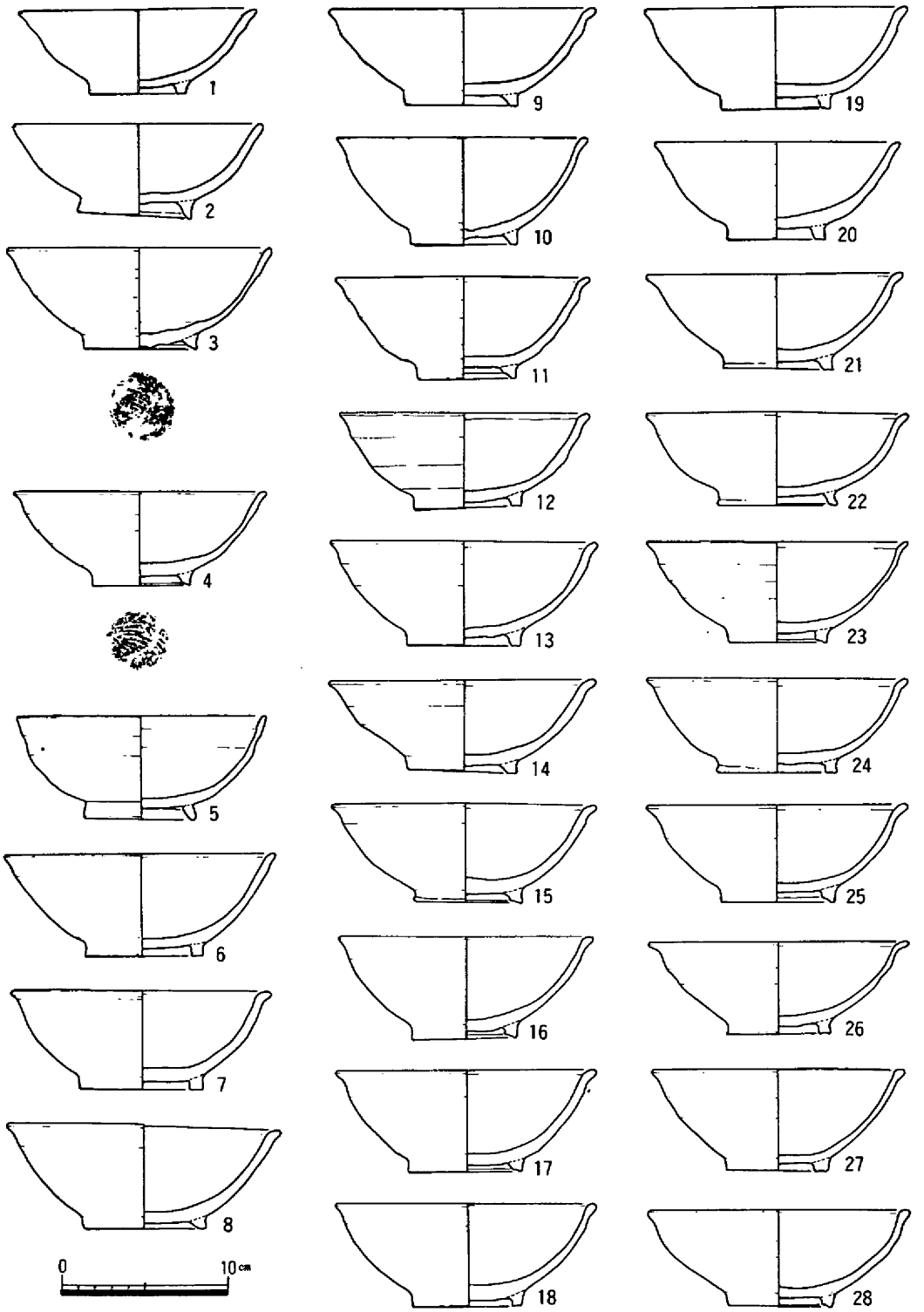


図77　沖の店遺跡1号窯出土遺物　（1）(1/4)

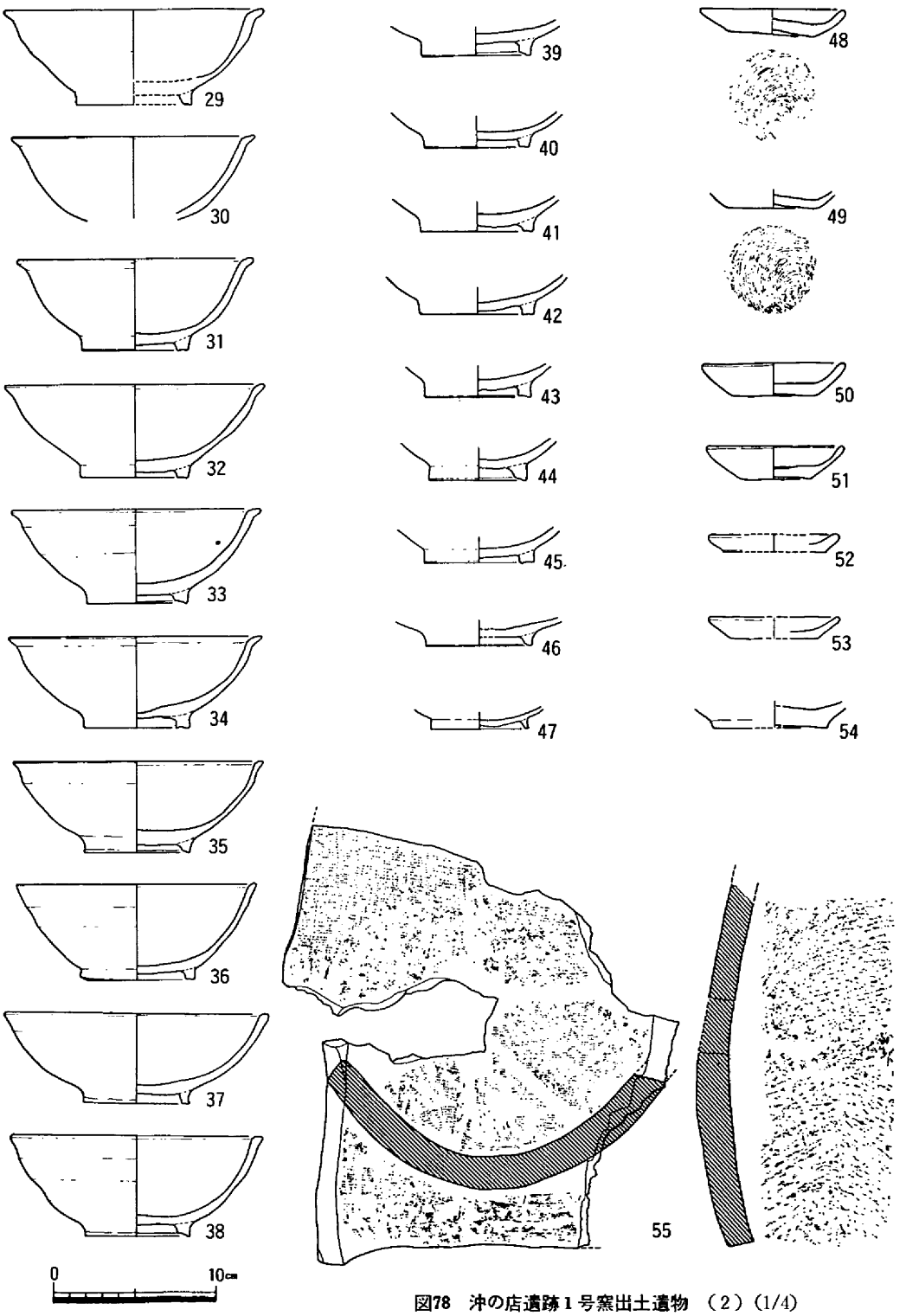


図78　沖の店遺跡１号窯出土遺物　（２）(1/4)

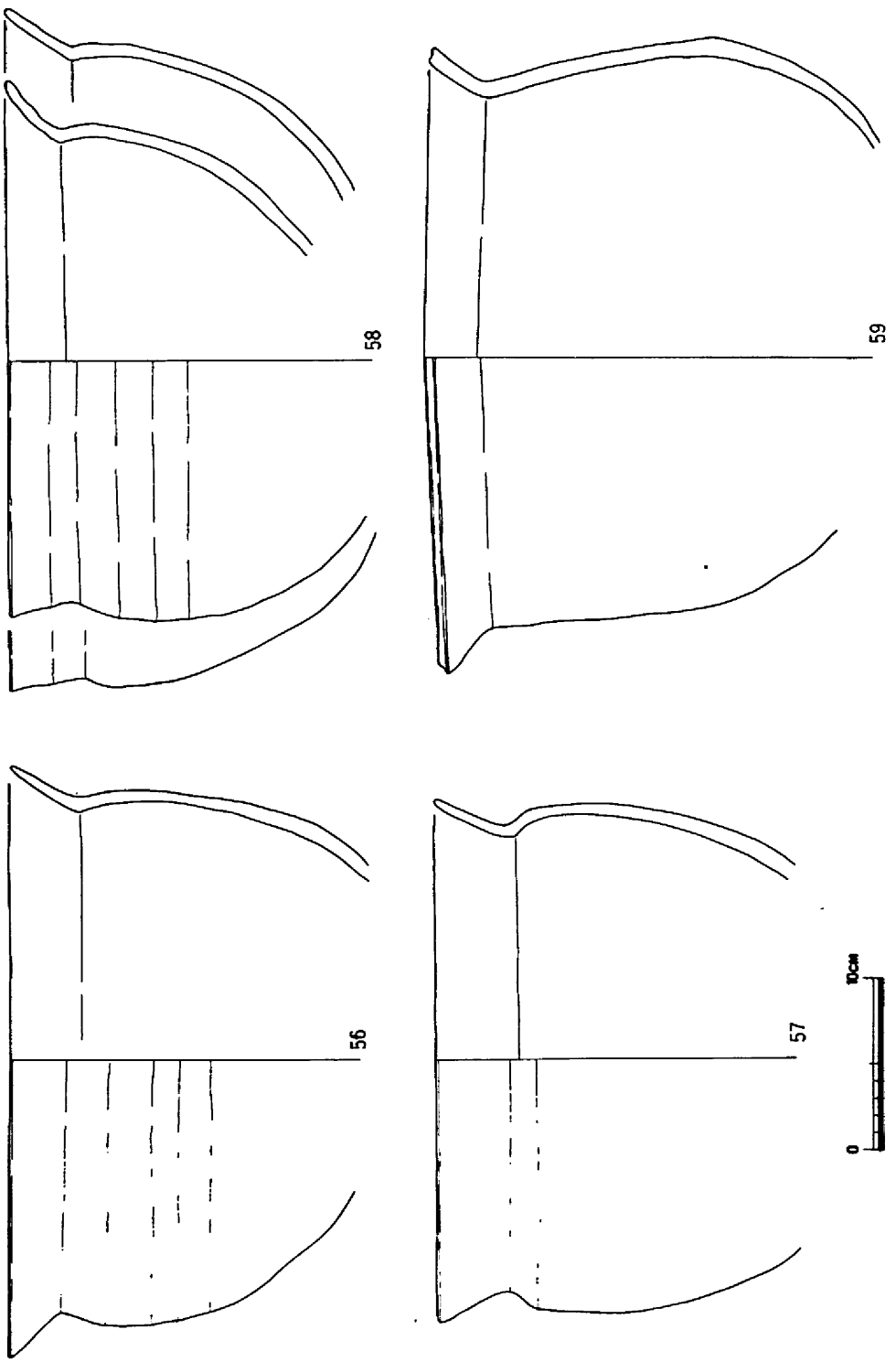


図79 沖の店1号窯出土遺物（3）(1/4)

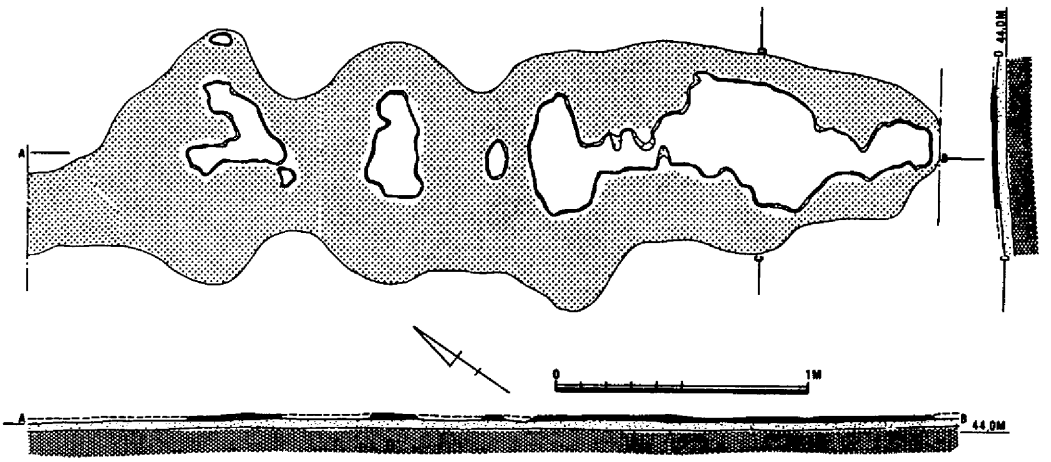


図80　沖の店遺跡２号窯平・断面図（1/30）

（２）　２　号　窯　址（図80）

２号窯址は，１号窯址の西方約10m程離れた所で検出した。トレンチ６で１部確認していたものを北東に拡張して全体を現わしたもので，現存長6.5m，幅約１mを測る。灰褐色に良く焼けた床面が部分的に残存する。その焼けた床面は，厚さ約１cmが赤黄褐色でよく焼け締っていて剝離し易い。赤黄褐色の床面の外辺は暗赤褐色に焼成を受けた砂礫層である。床面の傾斜は6.5mで３cmしか上がらない。ほとんど水平に近い。暗赤褐色に焼成を受けた部分の形は，南側がほぼ等間隔で波状になっている。更にこの遺構からは全く何の遺物も共伴しない。以上のことから横口を持った長大な炭窯の床面のみが残ったものと考えることができる。（註-1）

時期は，熱残留磁気の測定によりA．D．1410±25年という年代を与えられた（註-2）。すなわち15世紀代前半と言うことができる。（浅倉）

（註-1）　和田遺跡の窯状遺構と同じものと考えられる。

（註-2）　和田遺跡ではＡＤ720±20年という実年代が与えられている。

（３）　柱穴群及び土壙

柱穴は，１号窯，２号窯の北方約10m程の所で，高さにして約３m程上方の平坦部に密集して検出された。大きいもので直径40cm・深さ80cm，小さいもので直径10cm・深さ10cmを測る。柱穴のある平坦部は２段に分かれている。２軒が同時に立っていても良いようである。建物にまとめることはできなかった。しかし柱穴の方向性はある。すなわち東西に長く，南北に短い，南向きの建物であった可能性が大きい。土壙は，柱穴群の周辺に２～３個見える不定形のものが同時期のものである。

柱穴内からは，小さな土師器の破片とか明代と思われる青磁の細片とか，古銭が出土している。古銭は，「元祐通宝」（北宋，元祐８年（1093））初鋳，と読むことができる。（浅倉）

図81　古　　銭

沖の店遺跡　考古地磁気調査報告（1980.7.31現在調査）

（Ⅰ）沖の店1号窯

窯底の中央部から試料を採取するのが，普通行われる方法である。しかし，この窯跡は，直径約1mの擂鉢状の形をしており，窯底が小さくて多数の試料採取が困難であったので，窯壁最上部から10個，窯底から4個，焚き口から1個，合計15個の試料を採取した。窯跡が小型の円錐形であるため，地圧による窯壁の変形は無視できると考えられる。

◦測定結果			◦推定年代
平均伏角	55.7°		A.D.1190±60
平均偏角	1.4°	E	図-82上参照
K（信頼度係数）	82.6		
θ_{95}（誤差角）	4.8°		
N（試料数）	12個		

注

測定できぬ試料，及び方向が平均方向とひどく異る試料は省いてあるので，平均をした試料数は12個となった。

（Ⅱ）沖の店2号窯

残存する水平な窯底部（約1m×2m）から，合計14個の試料を採取した。窯底には黒の木炭状のものが残っており，ザクザクとした感じである。

◦測定結果		◦推定年代
平均伏角	43.9°	A.D.1410±25
平均偏角	4.9°	図-82下参照
K	144.3°	
θ_{95}	3.5°	
N	13個	

「1966, Report on Aeromagnetic Survey in Japan」より，沖の店遺跡における磁北を6.3°Wとしている。

1980.8.20　島根大学　理学部

時　枝　克　安

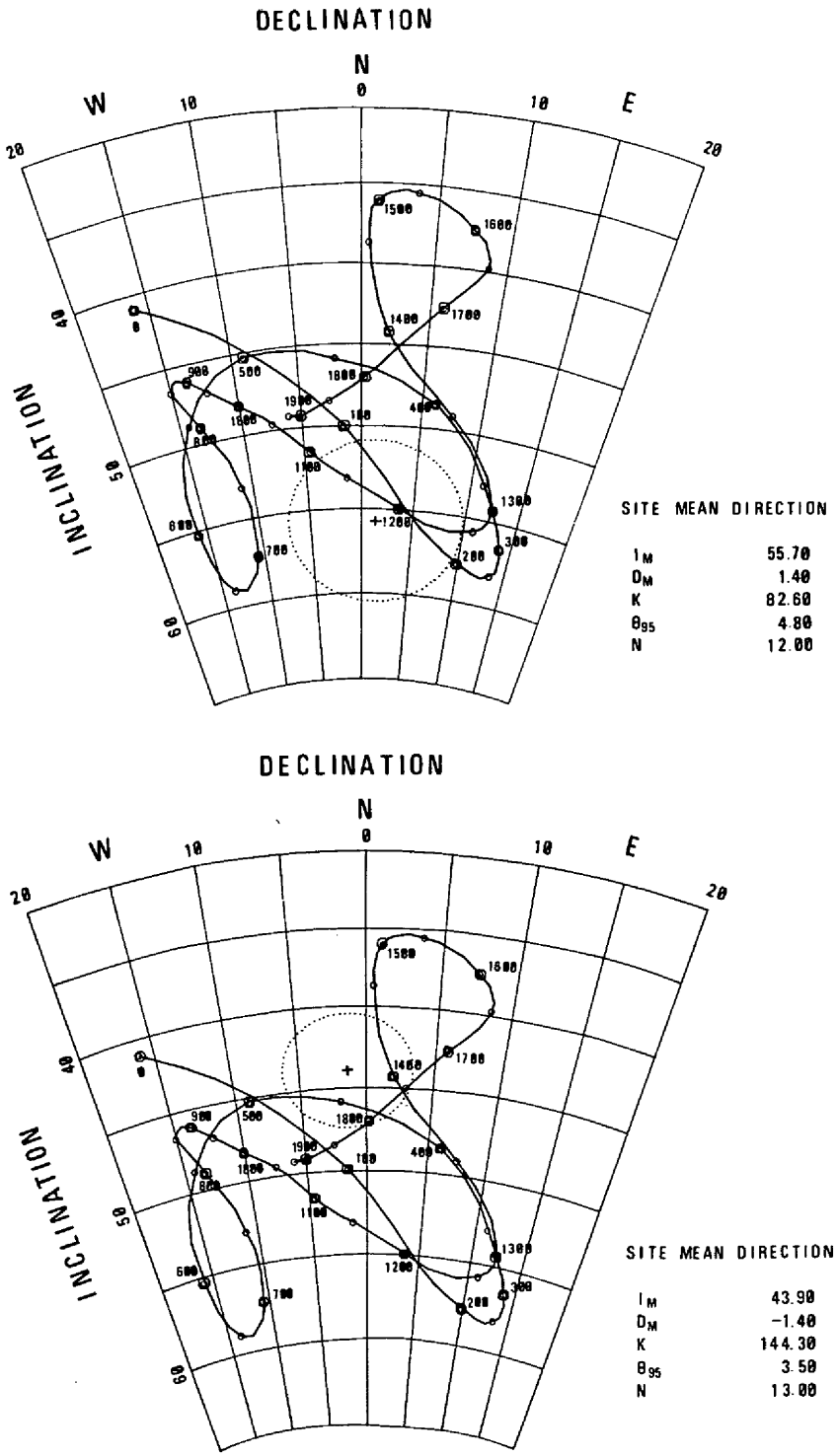


図82　沖の店遺跡1.2号窯址地磁気永年変化図

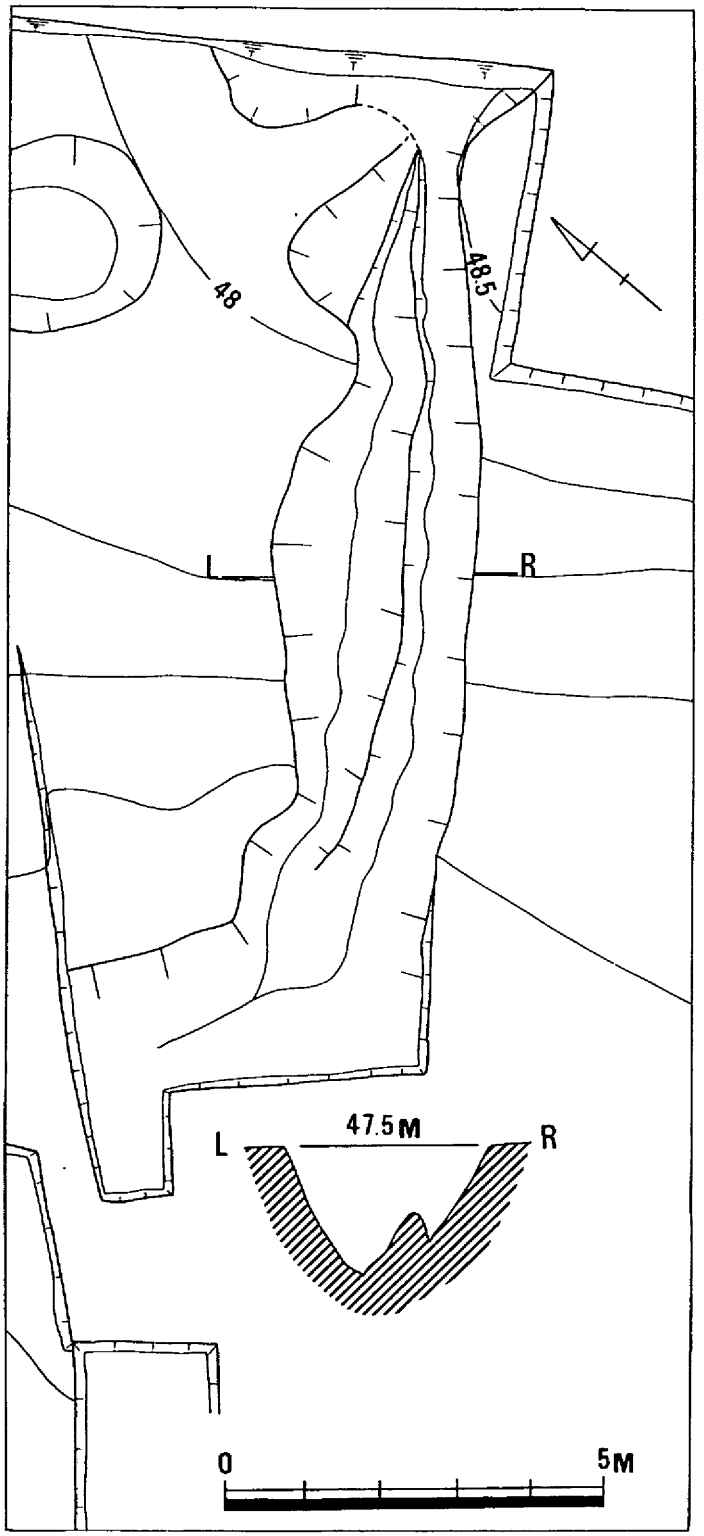


図83　沖の店遺跡２区溝状遺構平・断面図（1/100）

（４）　２区溝状遺構

（図83）

調査区２区とした東南において等高線と直交する形でほぼ北東から南西に走る２本の溝である。北側の一本は等高線の48.5m付近から始まり，最初は浅い20～30cmのU字状を呈し，48m付近から急激に深くなりV字状を呈する。東側の一本は西側と同じ付近から始まるが，北東側にある凹みとつづくかも知れない。そのまま西側のと合流する地点まで少し曲りながらなだらかに下る。等高線47.5m付近での幅2.7m西側の深さ1.7m，東側で1.2mを測る。末端は末広がりに開き自然地形になっている。遺物は西側の溝から大量に出土している。この溝がどういう目的のものかはっきりしない。（伊藤）

（５）　出土遺物

２区溝状遺構および４区包含層から出土した大量の遺物は，一部近世～近代のものが見られたが，そのほとんどは中世に含まれるもので，２区溝内出土遺物と４区出土の土器片が接合できた場合もありほとんど同一の時期の所産と見ることができる。

器種は皿，埦，鉢，擂鉢，鍋，羽釜，甕，少量ではあるが備前焼，中国製輸入陶磁器などが含

まれる。中世土師器はこの数年来精力的に調査が続けられている草戸千軒町遺跡に器種構成が同様の遺構が見られる。詳細な比較は後にゆずるとして，最初に沖の店遺物跡の主な器種の分類を行いながら沖の店遺跡遺物を紹介し，特殊的なものについては別に記述する。

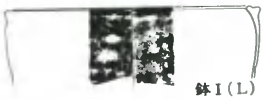
ⅢⅠ．口径7㎝，高さ2㎝前後でいわゆる，小皿と呼んでいるもので，底部を押圧により器形を整えるもの（Aタイプ）と，糸切りするもの（Bタイプ）がある。これが単なる手法の差なのか，時期差になるのかは定かでない。両者共口縁部はなでによる仕上げを行う。

Ⅱ．口径9～10㎝，高さ2～2.5㎝前後で底部は押圧によるもののみで糸切り底は見られない。口縁部は外に強く外反するもの（Aタイプ）とゆるやかに上方にたちあがるもの（Bタイプ）がある。（図84，85）

Ⅲ．口径12㎝，高さ2.5～3㎝前後で大きなものは15㎝を測るものが時折見られる。口縁部はⅡと同じように外に強く外反するもの（Aタイプ）とゆるやかに上方にたちあがるもの（Bタイプ）がある。（図85）

埦　包含層で出土している埦のほとんどは口径10㎝，高さ4～5㎝で体部で内湾し口縁部がほぼ垂直にたちあがる。底部は指で5㎜前後押えている，いわゆるヘソ皿と呼称されているものである。器壁は2～3㎜と非常に薄手である。（図85）

鉢Ⅰ(S)．個体差があるが，口径20㎝，高さ10㎝前後で，口縁部がわずかに内湾し，端部をわずかに内外に拡張する。内面は横方向の丁寧な刷毛調整，外面は縦方向の強い刷毛調整を行っている。（図88，89）



Ⅰ(L)．Ⅰ(S)の大形品で，口径32㎝前後に達するが高さのわかるものは今の所みられない。

Ⅱ．口径24～32㎝，高さ7.6～11㎝と個体差がある。底部から斜め外方に開く口縁部を持つもので，内面は横方向の丁寧な刷毛調整，体部および底部外面は縦方向の刷毛調整を行っている。（図90）

火舎．口径20㎝前後で口縁近くで内湾し，端部は水平面をつくり内側に拡張する特徴をもつ。体部内面は横方向の刷毛調整，外面は格子叩き，縦方向の刷毛調整を行う。体部外面上部に把手を付けるも（図91）

のがある。底部には短い三足持つものもある。

擂鉢．底部から斜め外方に開く，片口を1カ所設け，内面に数条の条線を施すものである。口径は最底28cm，最高43cmと個体差が激しい。

（図92，44）

S．小形品（S）は，口径30cm，高さ12cm前後で大形品（L）は，口径42cm，高さ15cm前後を測る。口縁端部を上下に拡張するものが多い。内側は横方向の刷毛後条線を5～11本の単位で施し，時々横あるいは斜め方向に施すものも見られる。体部および底部外面は縦方向の刷毛調整を行う。大形品の中には一対の取手を付けるものが多い。胎土は須恵質に近いものから土師質のもの，瓦質に近いようなものなどが混在する。

鍋I（S）．球状をなす体部から口縁が外反するもので，口径30cm，高さ15cm前後を測る。内面は横方向の丁寧な，外面は縦方向の刷毛調整を行う。

（図95）

I（L）．I（S）と同形態で，口径50cm，高さ23cm前後である。口縁部のみの破片では焙烙との区別が困難である。

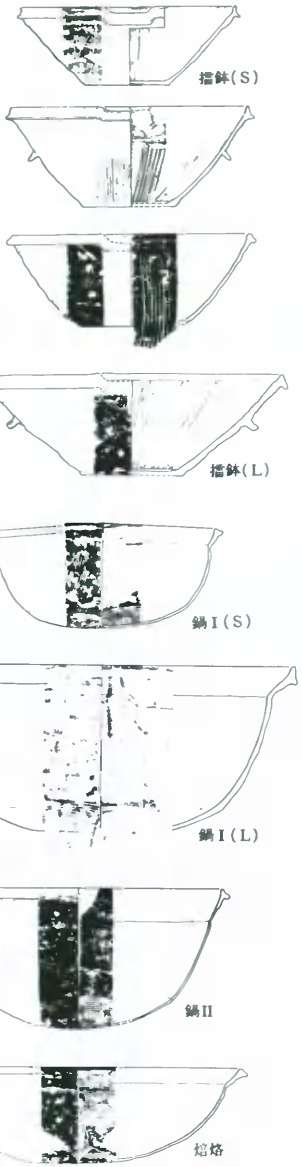
（図95，96）

II．Iとほとんど同様の形態であるが，胎土が黄白色～乳白色を呈する。また口縁部がIのものより長い特徴を持っている。

（図97）

焙烙．口径40cm～48cm，高さ12～14cm前後で，鍋I（L）の器高を低くした形をなし，口縁部のみでは鍋I（L），IIと区別が困難である。

（図95）



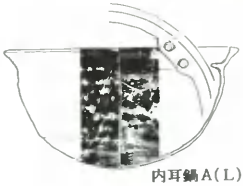
内耳鍋. 鍋Ⅰの内側に一対の把手を付け，上から紐で吊り下げれる様に２個ずつの穴を穿ったものである。口縁部がくの字状を呈するもの（Ａタイプ）と口縁部がほぼ直角に折れ，内耳部分もほぼ水平あるいは一直線状になるもの（Ｂタイプ）がある。両者共小形品（Ｓ）と大形品（Ｌ）がある。Ａタイプ，Ｂタイプは単なる形態差なのか時期差なのかは不明である。

（図98, ～100）

Ｓ．Ｓは口径30㎝前後で，最も小さいものは23㎝，高さは10㎝前後を測る。

Ｌ．Ｌは口径40㎝前後で最大のものは43㎝，高さは15㎝以上を測るものがある。

内耳鍋Ａ(Ｓ)


内耳鍋Ａ(Ｌ)

羽釜Ａ． 口縁下部に球状の体部から内湾する口縁部で一対の穴を穿ったたて方向の釣手をもち，釣り下げられるようにしている。中央部に近い所に幅２～３㎝，厚さ７㎝前後の鍔がつく。口径17㎝，高さ15㎝前後である。

（図101）

内耳鍋Ｂ(Ｓ)

Ｂ． 球状の体部から，ほぼ直立する口縁部を持ち，中央部近くに鍔がつき，その上部に一対の釣手がつく。内面は横方向の刷毛，外面上半部はなで，下半部は縦方向の刷毛調整を行う。

（図101）

内耳鍋Ｂ(Ｌ)

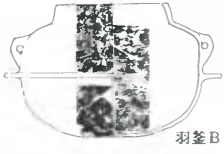
甕（Ｓ）． 体部からくの字状に折れ曲る口縁部をもつ。口径20～30㎝のもので，外面は格子目叩き，内面は青海波文を刷毛状工具で消している。青灰色の須恵質に近いものから褐色あるいは乳白色を呈するものまでを含む。亀山焼の甕と呼ばれて来ていたものである。

（図102）

羽釜Ａ

（Ｌ）． 大形品の口径は40㎝前後である。土師質の大甕は体部から外反しながら，口縁端部を上下に拡張するものが多い。また体部外面は格子目叩きの他に板状工具による縦方向の条線状の調整を行い，内面も横方向の同様の調整を行う。

（図102, 103）


羽釜Ｂ

須恵質のものは，小形品の成形手法と同一である。

以上が主な出土遺物の器種の分類を行ったのであるが，一点あるいは数点出土しているものがあるので，それを紹介し補っておきたい。84図-64，65は高台の付く皿である。接合部は接合を良くするため格子状に線描きを行っている。85図-75，76は鉢あるいは甕になるもので，口縁部すぐ下に雷文，〃状に文様帯が付く。77は急須の注口部に，78は方形の鉢に，79は上面にすすが付着しており，どういう器形になり何に使用されたのか不明である。80はコン

ロのサナ状のものであり，81は立耳の内取手が付く。82は土師質の黄白色を呈した耳皿，84・85は土錘，86・87はこね鉢で片口が付く。86の口径23.5cmで灰白色を呈す播磨産か。87は33cmをはかる。

88は鳥の頭をあしらった造形品で灰色を呈す。

86図-89は，口径7cm，器高9.2cmの土師質の小形壺で，外面は灰黒色を呈し縦方向の内面は黄褐色を呈し丁寧な横方向の刷毛で調整を行っている。90は，台付皿的なもので皿部上面にすすが付着する。91は高台付椀で口径10.6cm，椀部高さ4cm，1cm高台が付く。胎土は灰緑色を呈す。93～96は須恵質～瓦質の碗で口径，器高，手法に至るまで個体差が激しい。97は土師質，98は須恵質の杯で3カ所に足がつく。98は口径8cm，杯部の高さ3.6cmを測る。口縁立ちあがりには2カ所に葉の文様を描く。99は皿状のもので黒灰色を呈す。100～102は取手付きの，煮たり煎ったりするもので，岡山地方ではコウラ(甲羅)と呼ばれているものである。取手に木，あるいは竹を刺し込んで使用する。取手寄りに浅い片口が付く。100，102は破片であるが，101と同じものと見ることができる。101の口径10.5cm，高さ4cm，取手の直径2.5cm，長さ5cm程でほぼ中央に上下に穴を穿っている。外面押圧により内面は丁寧な横方向の刷毛によって調整を行っている。103は一対の取手が口縁上面に付き，注口が付く黒灰色を呈す。104～106は鉢の小型品であるが，先に述べた鉢とは少し胎土が異り黄灰色～黄褐色を呈する。

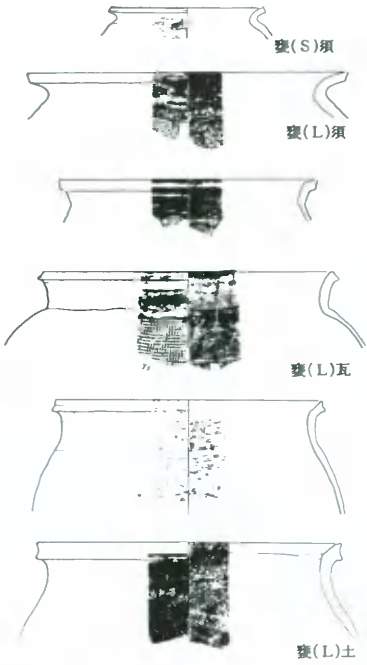


図90-139は筒状に伸びる体部を持つ。140は口径43.2cm，高さ10.5cmの大きな鉢である。外面は縦方向の，内面は横方向の細い刷毛調整を行っている。外面灰褐色，内面淡黄褐色を呈す。

図91-149は火舎に入れているが，口径31cm前後になり外側に幅2.5cm，長さ15cmの取手を持ち2孔を穿っておりむしろ甕になるのかも知れない。また155，156も鉢Ⅰ(L)あるいは甕の底部になる可能性もある。その他に図示できなかったが，かまど形土器一個体分などがある。

図103，271～280は輸入陶磁器類で271は白磁で白色の胎土で，白色を呈す。口径16.5cm，口縁端部は水平になる。272は青磁で淡青色を呈し鎬目文が巡る。273は淡黄緑色を呈する青磁で口縁部外面に雷文さらにその下部に細い棒状の鎬目文が巡る特異なものである。内面はラマ紋と思われるもが見られる。274は灰色の胎土で濁緑色を呈す。275・276は白色の胎土に淡青色を呈する青磁で口径18.5cm，復元器高10cm前後，高台径6cmを測る大形の碗である。全体に厚さ1mm以上の釉がかかる。277は淡緑色を呈し，見込みに花文状の文様が入るが釉ではっきりしない。278は胎土は白色で施釉がかかる

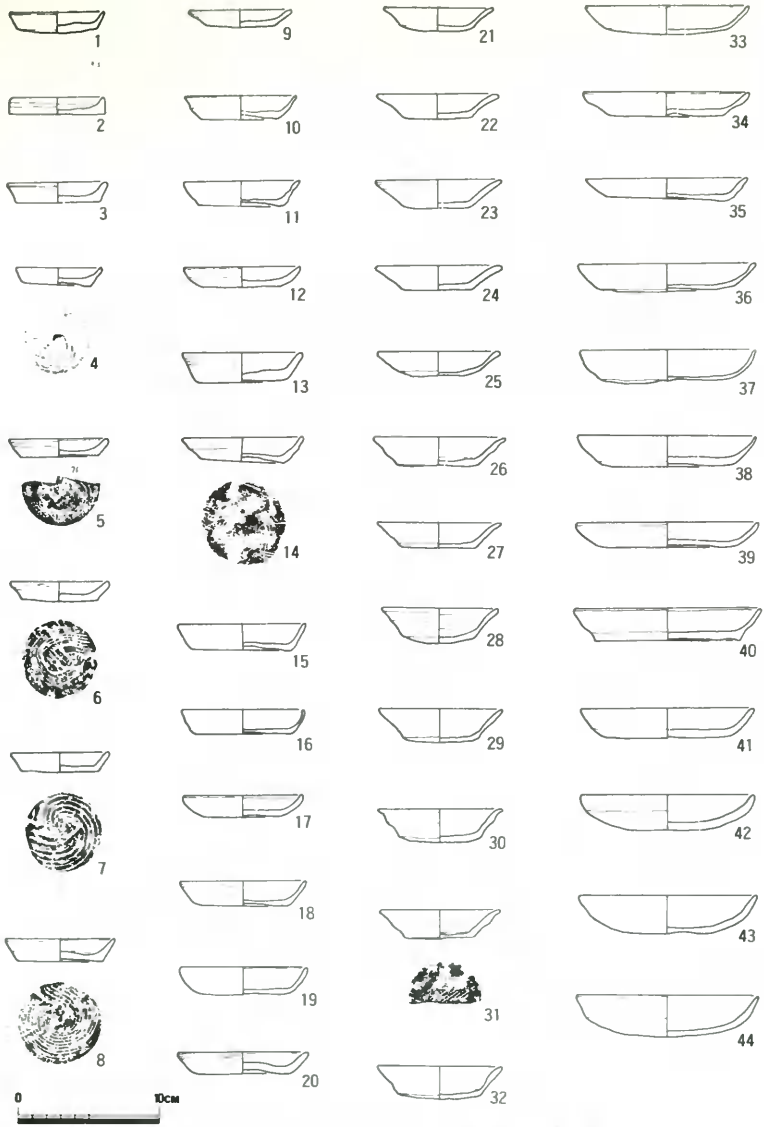


図84　沖の店遺跡2区溝、4区包含層出土中世遺物　(1)(1/4)

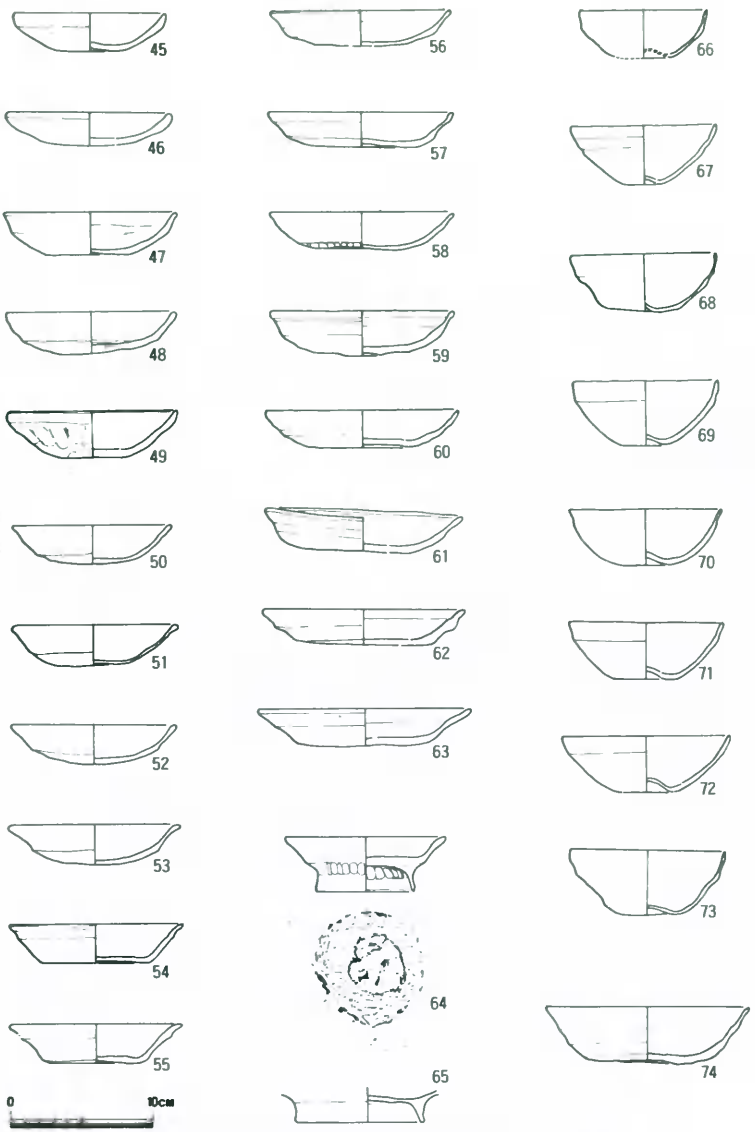


図85　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物　（２）（1 4）

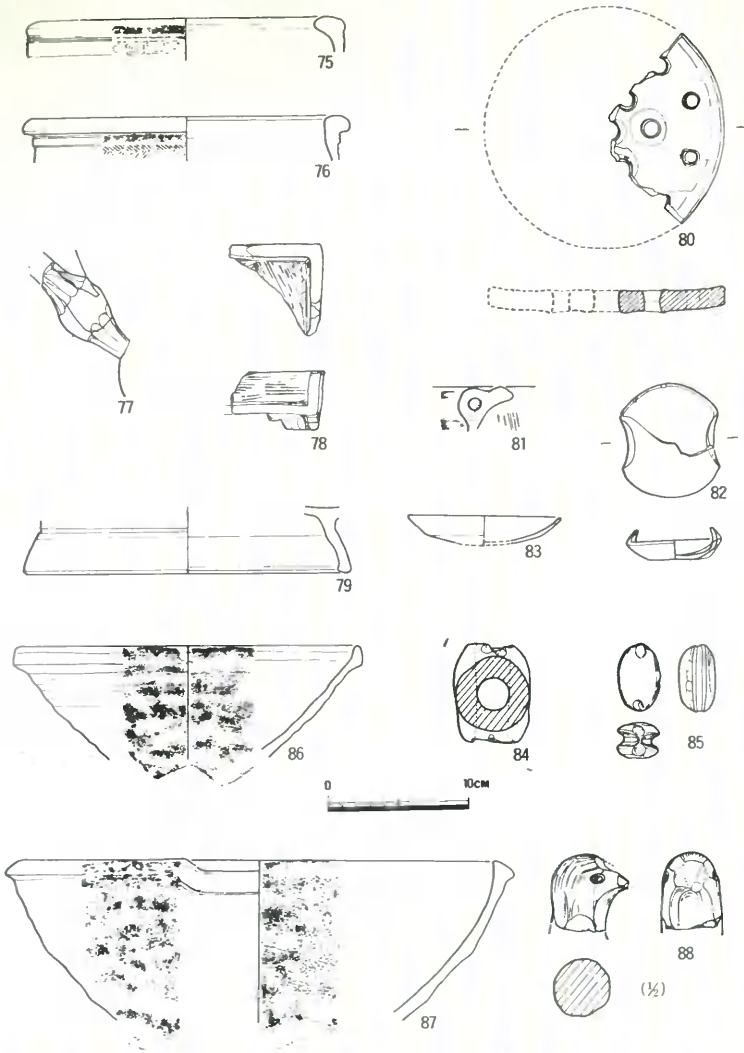


図86　沖の店遺跡2区溝，4区包含層出土中世遺物（3）（1/4）

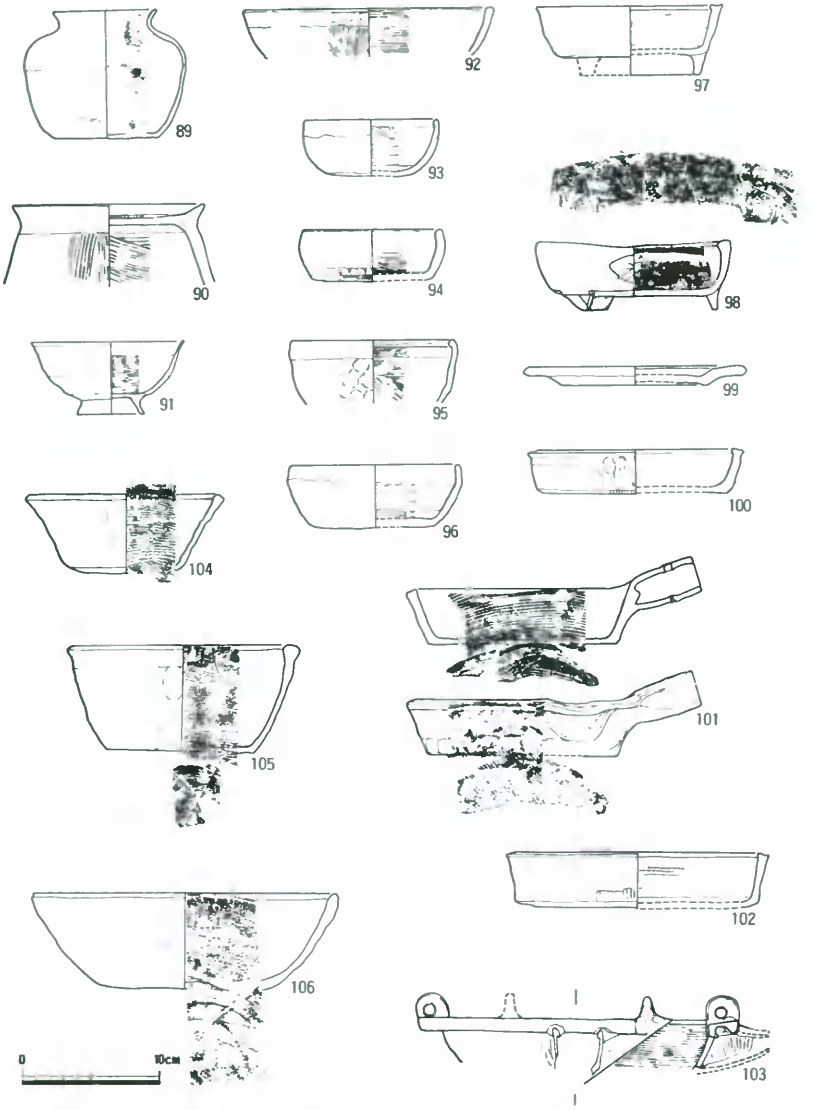


図87　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（４）（1/4）

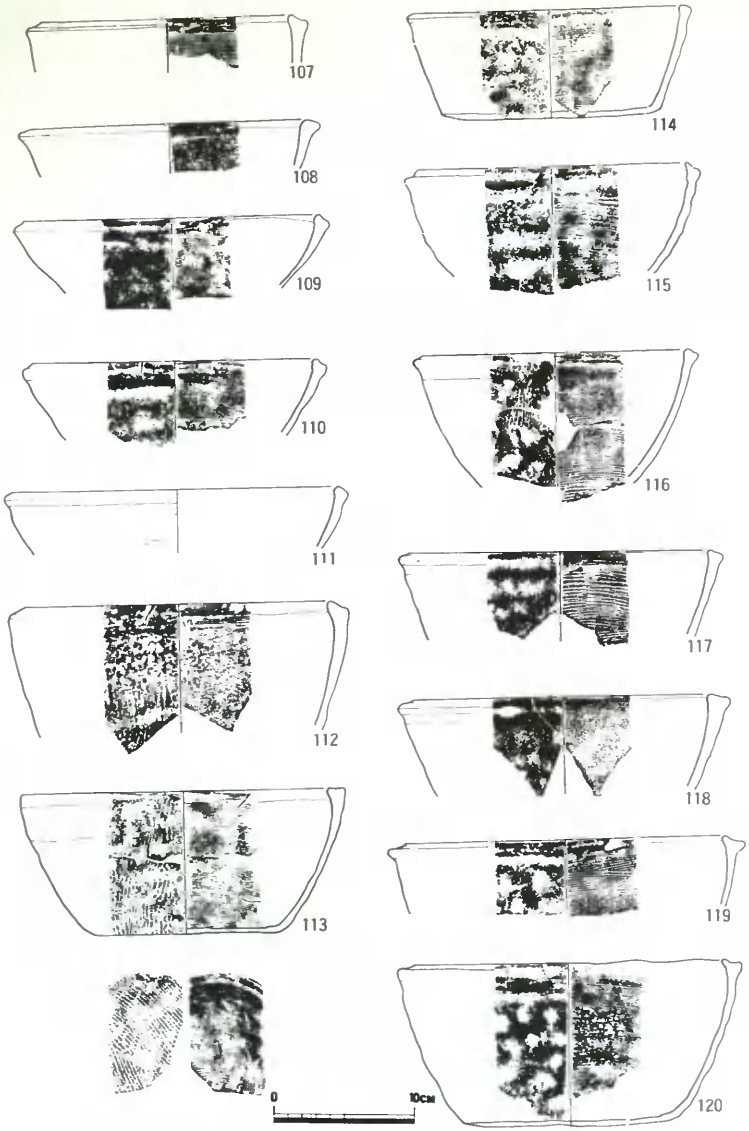


図88　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物（５）（1/4）

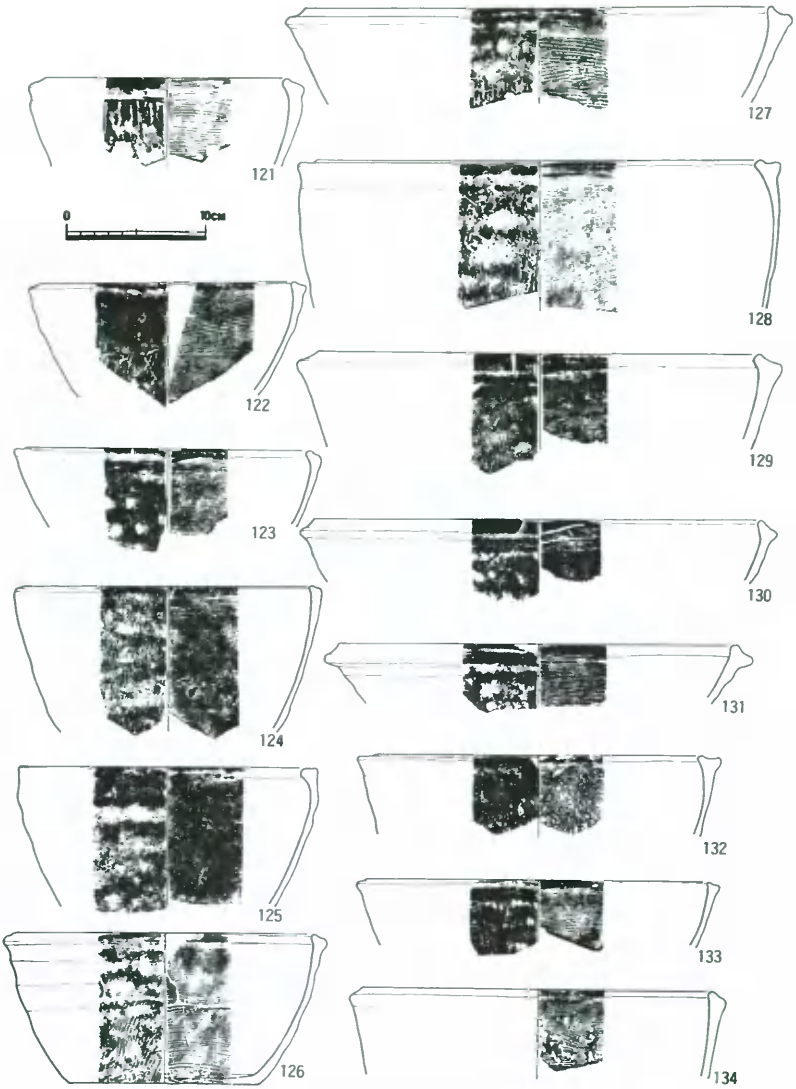


図89　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（６）（1/4）

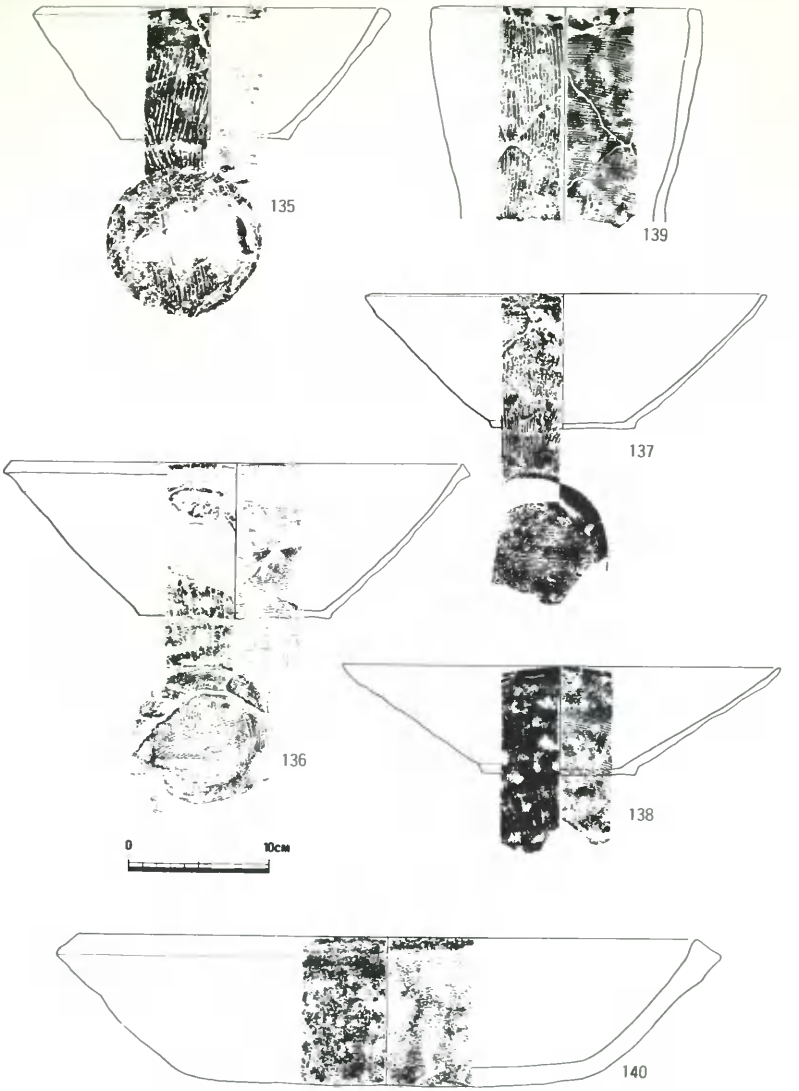


図90　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（７）（1/4）

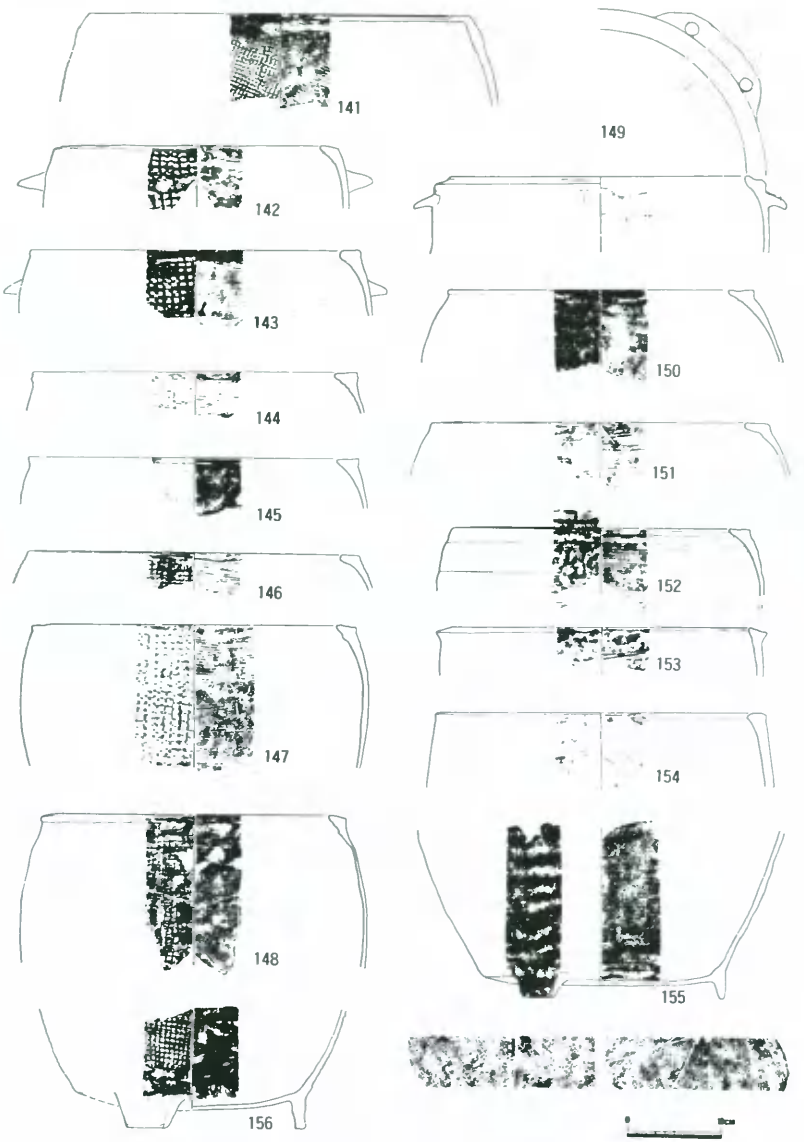


図91　沖の店遺跡2区溝，4区包含層出土中世遺物（8）（1/6）

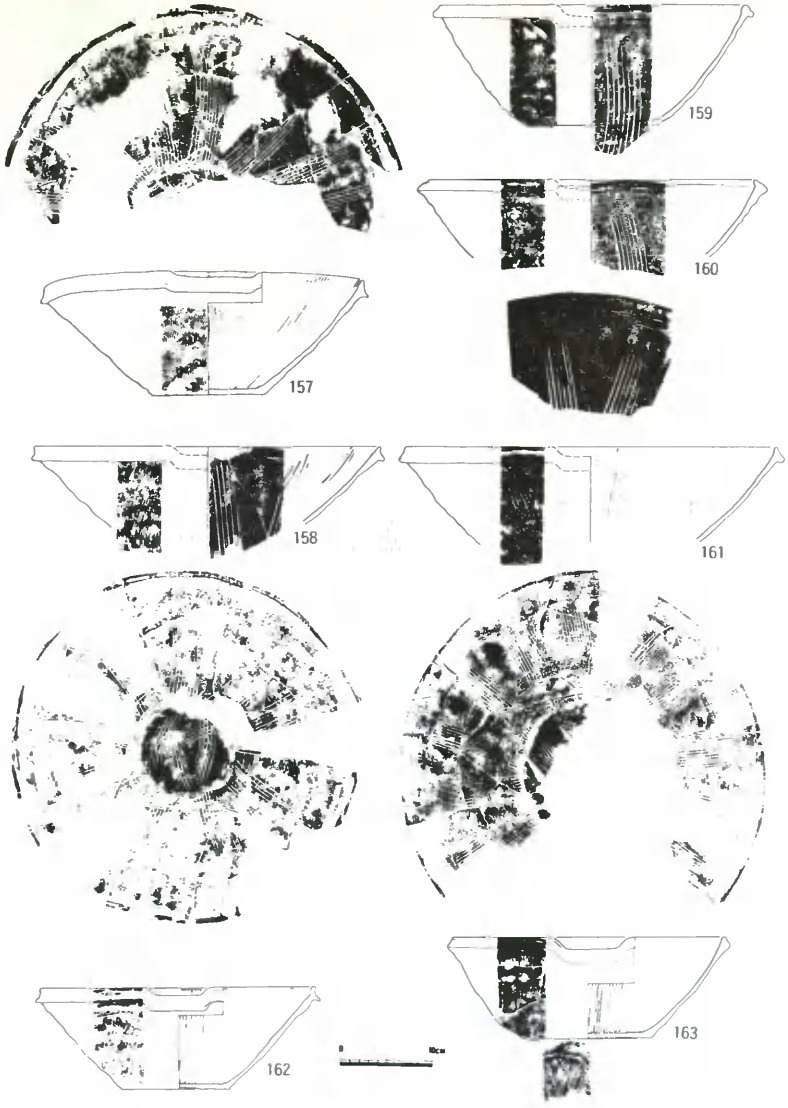


図92　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物（９）（1/6）

天目茶碗である。279も胎土白色で茶～茶褐色を呈する皿で内面に細かい鎬目文状の文様が巡る。両者とも美濃あるいは瀬戸産かも知れない。

図104は備前焼で，281は小形壺の底部で糸切りを行っている。282は口径9㎝前後になる壺で，口縁部はわずかに外に開きながらたちあがり，端部は下に少しつまみ出している。283の底部は282と同一個体と思われる。下端部を一条の篦削りを行う。285は口径14㎝前後の壺で直立する口縁部で端部は折り曲げ玉縁状にしている。287の甕は口径37㎝を測る。口縁部は外に外反し，端部をわずかに折り曲げる。288の甕は口径38㎝を測る。口縁部は直立し端部を折り曲げ玉縁にする。

備前焼はその他にも甕の口縁部，体部，徳利などを図示できなかったが破片が出土している。しかし，擂鉢の破片は一片も見ることが出来なかった。(伊藤)

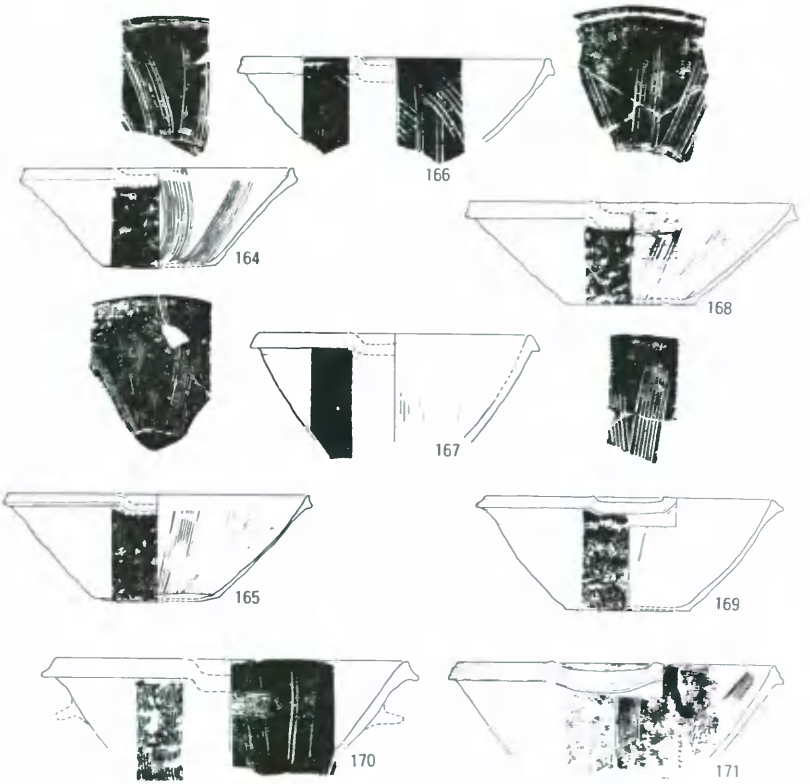


図93　沖の店遺跡2区溝，4区包含層出土中世遺物(10)(1/6)

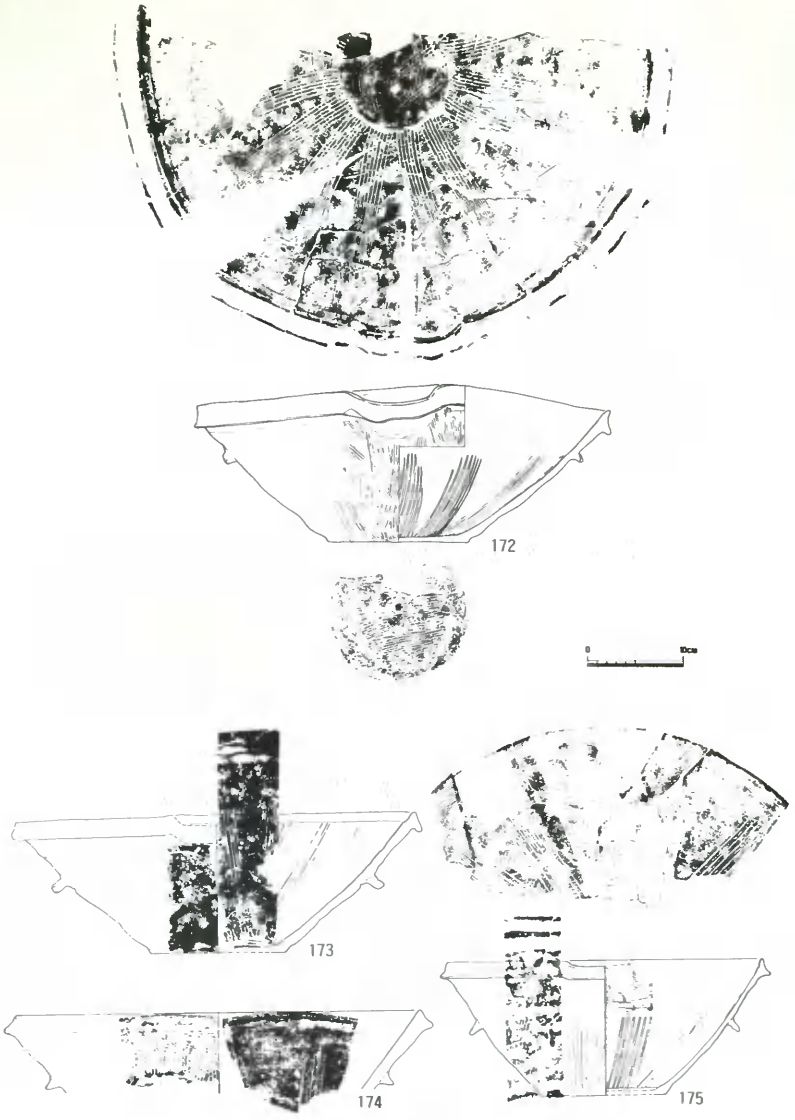


図94　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（1/1）（1/6）

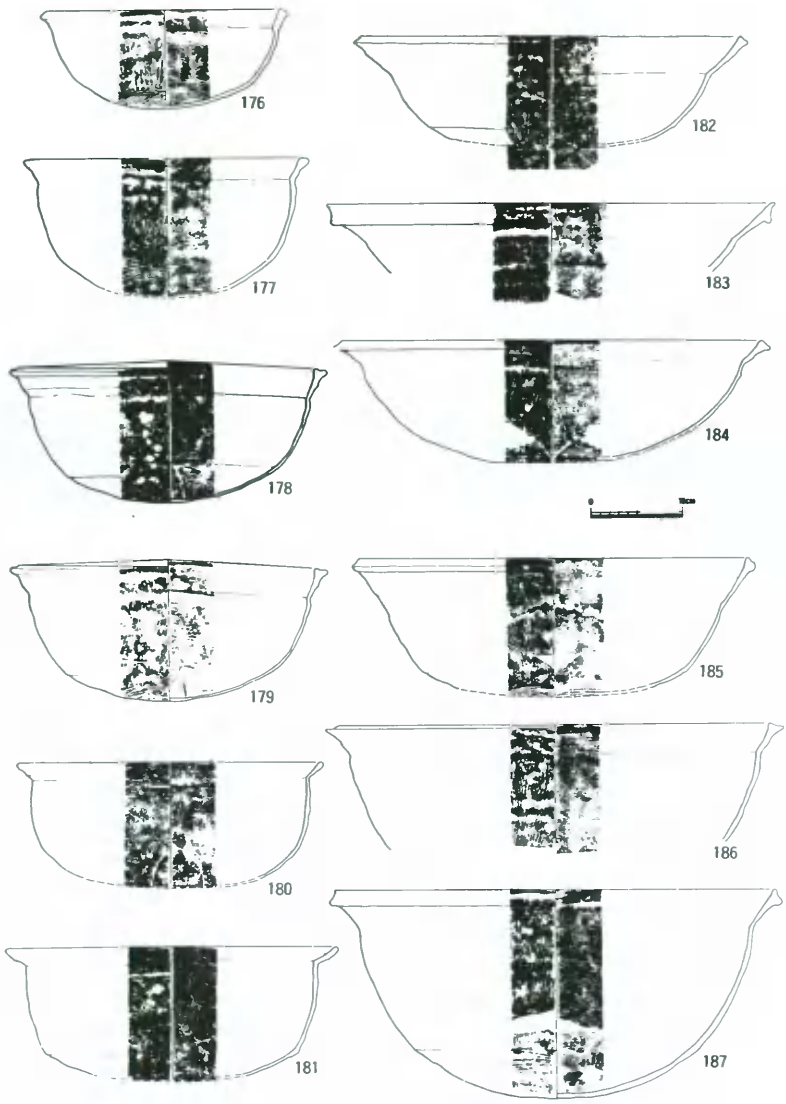


図95　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物（12）（1/6）

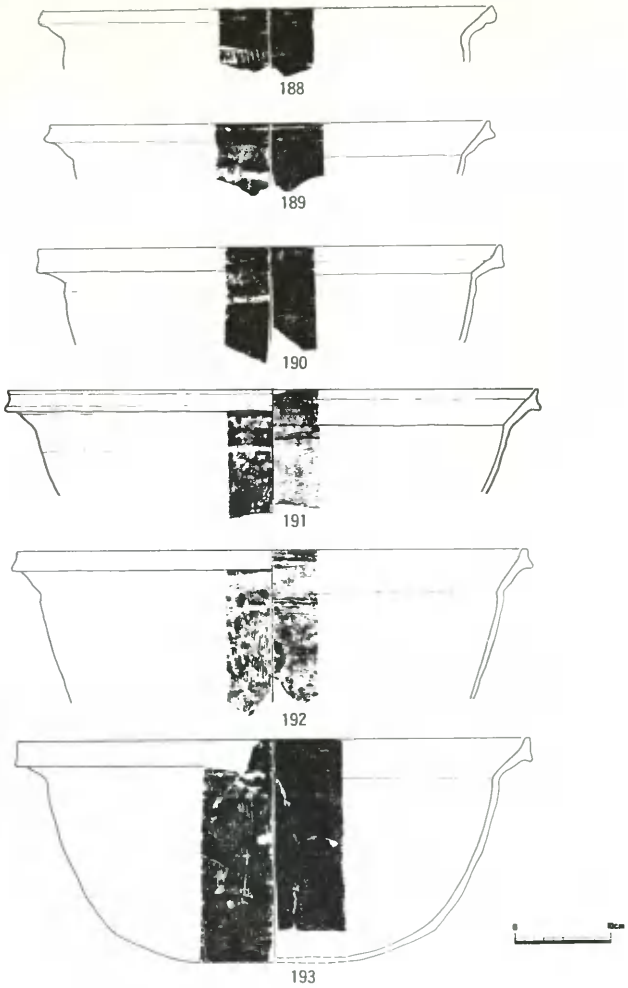


図96　沖の店遺跡2区溝　4区包含層出土中世遺物（13）（1/6）

図97　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物（1/4）（1/6）

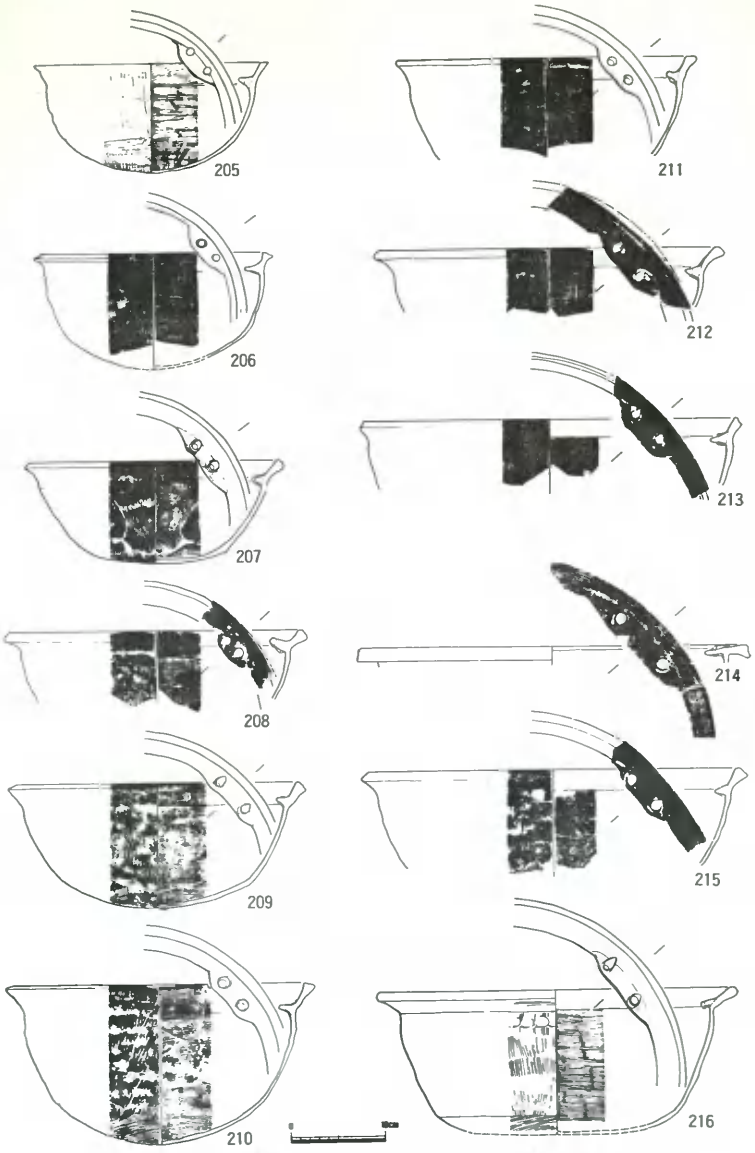


図98　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（1/5）（1/6）

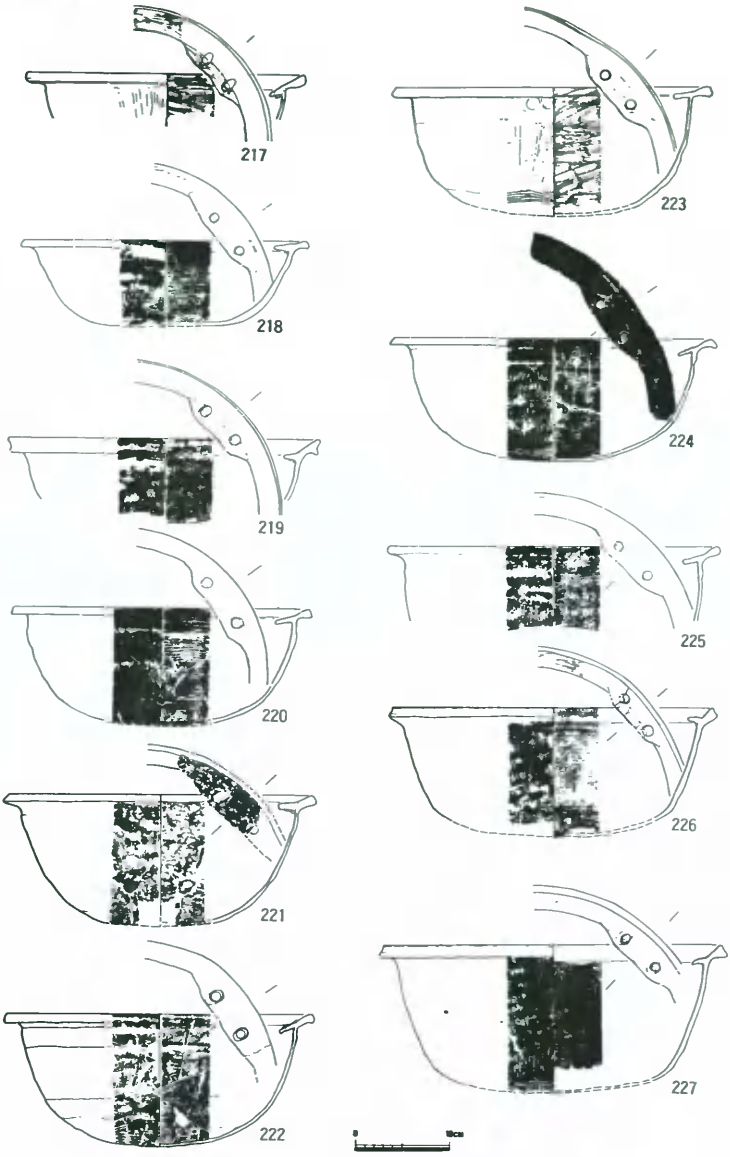


図99　沖の店遺跡2区溝、4区包含層出土中世遺物（16）（1/6）

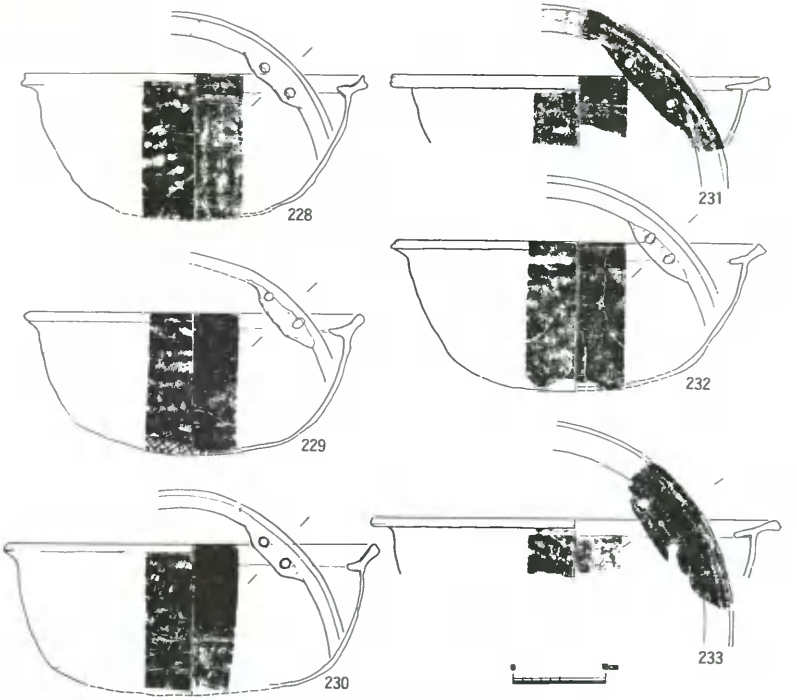


図100　沖の店遺跡２区溝、４区包含層出土中世遺物（17）（1/6）

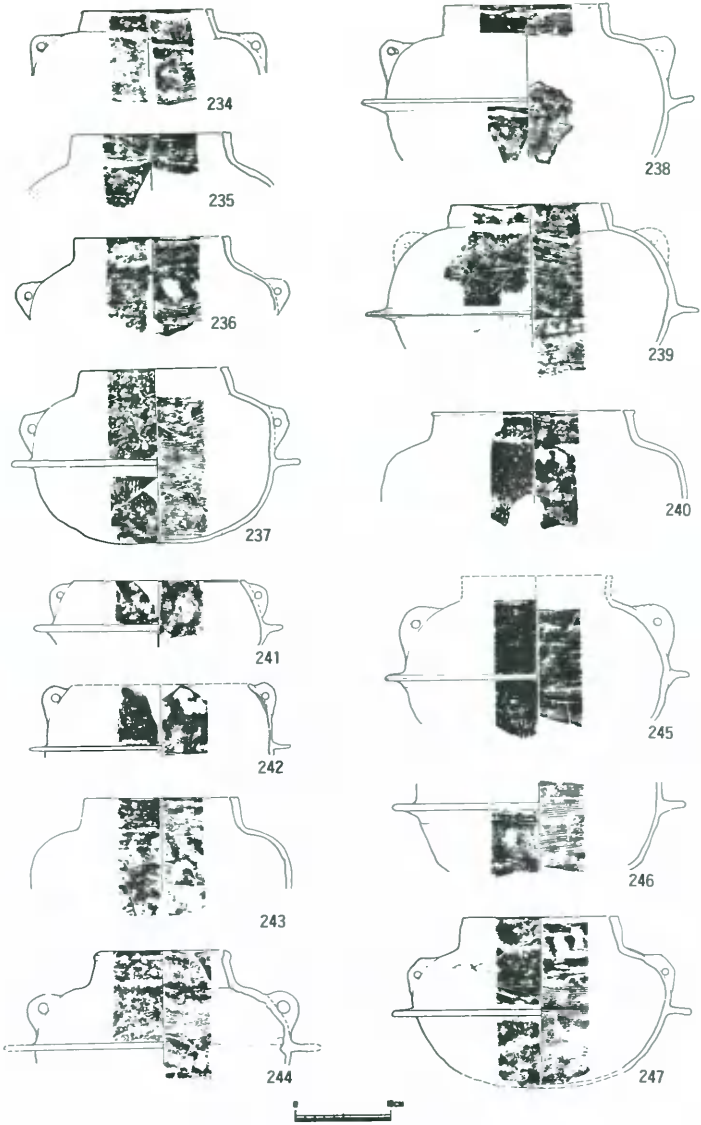


図101　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物（1/8）（1/6）

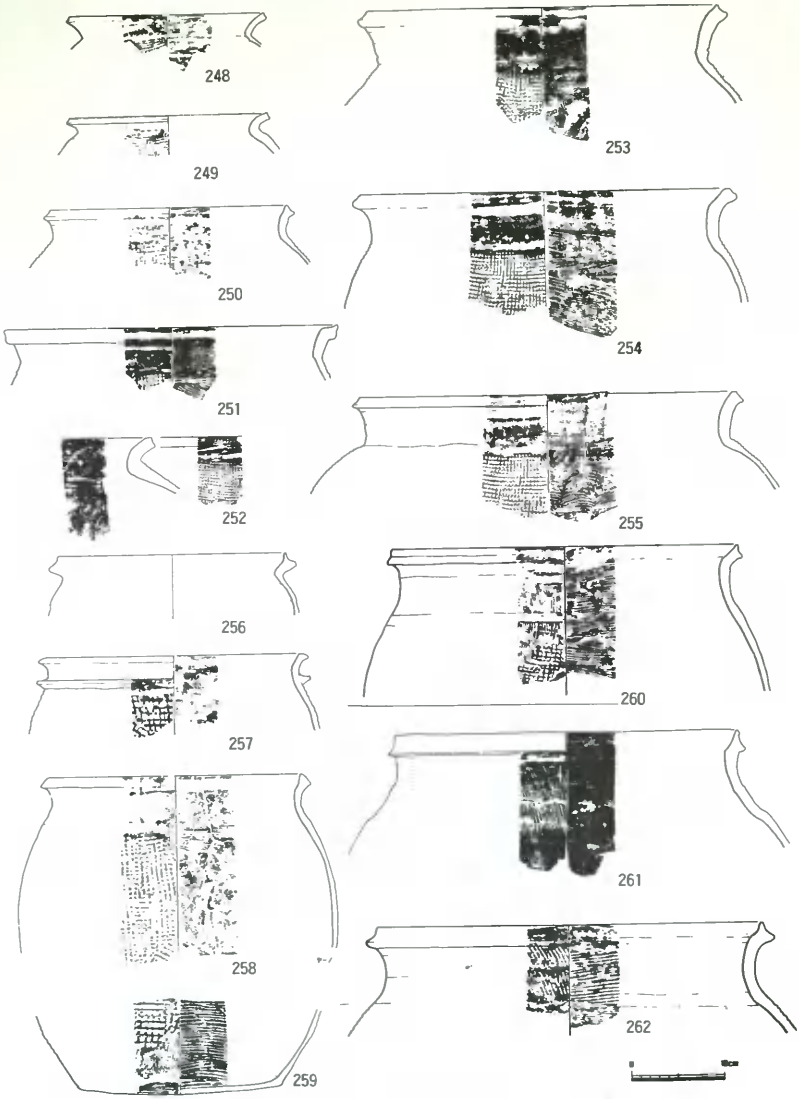


図102　沖の店遺跡2区溝，4区包含層出土中世遺物（19）（1/6）

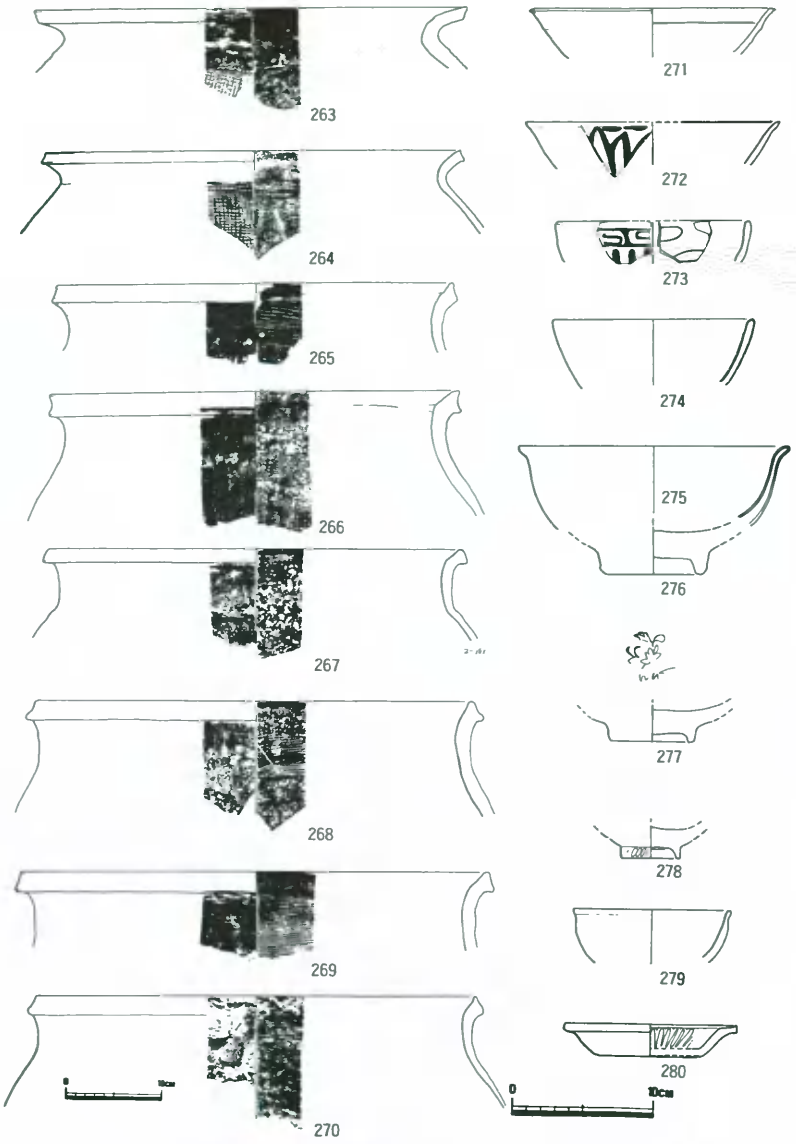
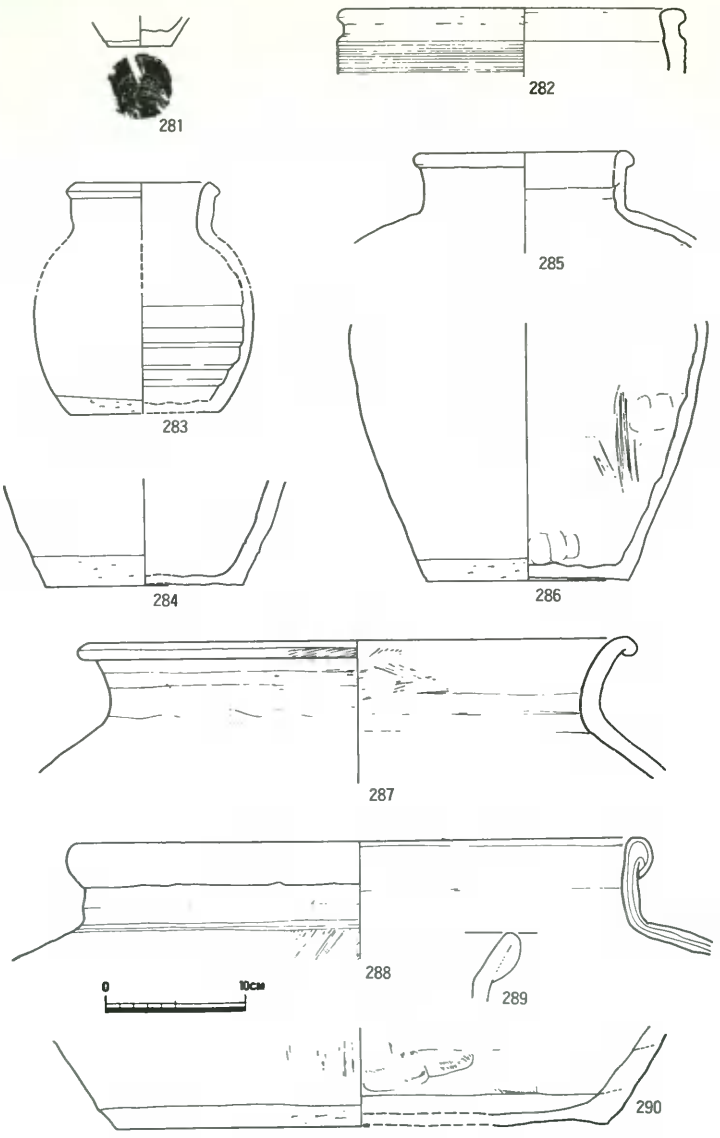


図103　沖の店遺跡２区溝，４区包含層出土中世遺物(20)(1/6)および中国陶磁器(1/4)



104 沖の店遺跡出土備前焼 (1/4)

石　器（図105）

沖の店遺跡からは，弥生時代中期の磨製石斧が１点と，室町時代の石硯１点，中世～近世の砥石４点及び石臼２点の合計８点が出土している。１は，灰褐色を呈する砂岩製の磨製石斧で，両側に２本の凹みが見え，重さは620ｇある。２は，黒色の粘板岩製の石硯で，重さ270ｇある。３は，黄褐色を呈する硬質砂岩製の砥石で，四面を使用し，重さ100ｇ強ある。４は，黄褐色を呈する砂岩製の砥石で，四面使用し，重さ100ｇ強ある。５は黄白色を呈する硬質砂岩製の砥石で，四面を使用し，重さは700ｇある。６は，黄褐色を呈する硬質砂岩製の大型砥石で，二面を使用し，重さは5,200ｇを測る。７は，灰褐色を呈する砂岩製の上臼で，直径約28.0cm・高さ10.5cm・上縁幅3.8cm・上縁高2.6cm

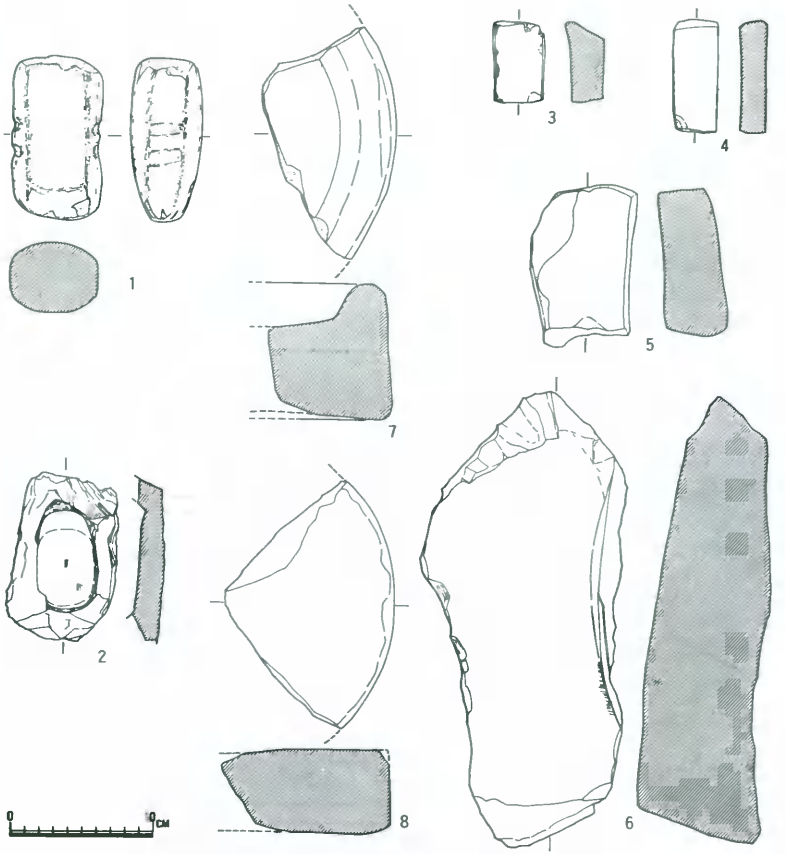


図105　沖の店遺跡出土石器（1/4）

以上・ふくみ0.5cm以上を測り，溝は見えず，横打込穴が見える。8は，灰褐色を呈する集塊岩製の下臼で，直径約24.4cm・高さ5.9cmを測り，溝はない。（浅倉）

（6） 小　　結

1）沖の店遺跡1号窯の問題点

1号窯は，熱残留磁気の測定によれば，A.D.1190±60年という推定年代を与えられた。平安末～鎌倉初頭にあたる。この窯で焼かれた製品は，主として黄白色を呈した土師器の貼り付け高台を持つ椀である。その他にも若干の小皿も焼いていたようである。同時に出土した平瓦と底部の無い甕形土器は，ブロック毎に歪みと色調が違っていることから，製品ではなくて，陶枕とか陶板のように焼き台として使用したものと考えられる。椀の法量は，平均値を示すと，口径15.7cm・器高5.9cm・内高4.7cm・底径6.6cmである。椀の形態は，最も平均的なものは，口縁端部をわずかに外反し，体部はゆるやかに内湾し，高台は貼り付けで断面は四角形を呈する。椀の手法は，口縁部は横ナデ，体部はヘラみがき，底部は糸切りである。色調は，平均して黄白色を呈するが，灰褐色や茶褐色・赤褐色を呈するものも少し見ることができる。ひずみは，一応どの椀も持っているが，ほんのわずかで，最も激しいもの（5）は口径が最大と最小で1cmの差がある。ひび割れをもつものも若干ある。ひずみの大きいものや，ひび割れの激しいものは，おおむね赤褐色～灰褐色を呈する焼きの非常に良いものに限られているようである。すなわち，やはりこの窯では黄白色の軟質の土器を焼くことが目的であったと思われる。土器のひずむのは900度からだと言われている。このことからこの窯では，900度に近い温度まで出ていたと考えられる(註-1)。

この種の中世の窯はどのくらい全国的に発見されているだろうか。まず県内を見てみると，都窪郡早島町で発見されているというが実態は明かでない(註-2)。赤磐郡山陽町教育委員会が発掘調査を行った山陽団地の三蔵畑遺跡で，鎌倉時代に比定できる土鍋を焼いた窯が発見されている。この窯の形態は，残存状態は沖の店と比べると若干悪いとはいうものの，同様形態であって，円錐台形の焼成室と焚き口を持っている。大きさもほとんど同じである(註-3)。次に兵庫県明石市魚住町中尾字中原・何イ原に所在する魚住古窯址群の第38号窯址でほとんど同形・同大の窯が発見されている。兵庫県教育委員会が発掘調査を行ったものである。これは平安時代終末～鎌倉時代初頭とされ，高台が付かない埦(口径15.5cm，器高8.2cm)小皿(口径5cm，器高2cm)のみしか焼成していない(註-4)。更に，北九州市教育委員会の行った調査で，小倉北区金鶏町所在の屏賀坂遺跡において，一回り大きいが，同形式の窯が報告されている，(註-5)。製品も掲載されているが，これを見ると，沖の店1号窯の椀・甕とほとんど同じようである。この報告書では，時期を土師器の形態から，実年代をほぼ11C後半にもとめることができるとしている。その後，同じ窯を上村佳典氏が，若干見直しをされている。その中で更に，北九州市小倉南区葛原一升水所在の一升水遺跡で屏賀坂遺跡検出の窯を一回り大きくした同形式の窯を二基検出していることが報告されている（註-6)。以上すでに，この窯と同種のものは全国で，7例を数えている。

この窯は，それではどのようにして構築されたものであろうか。窯の検出された場所は，畑と畑の

間の大きく段になった畔の直下であり，石垣の直下であった。窯が築かれた時もこのような段状を呈した地形であったと考えられる。屏賀坂遺跡では溝を利用している。それが最も労力を省く方法であったと思われる。まず上方の段に円形の穴を掘り，焼成室を作り，壁・床面を崩壊しないように叩き締める。(叩き締めた痕跡は認めることは出来なかった。)次に，下方から焼成室に向けて，トンネルを開ける。これが焚き口になる。焼成室の床面には，炎を二つに分けて拡散させるために10×35×15㎝角の石を据える。天井部の構造は，全く判らない。焼成中に崩壊したものであれば，天井部の破片なり，何なりが落下しているものであるが，この窯では周辺の砂が堆積していただけである。このことは焼成後，製品を取り出し，御用済となって放棄したものとも考えられる。

焼成はどのようにして行ったのであろうか。屏賀坂では，「土師器を焚口から入れず，焼成部上部から納め，その後焼成部上部を塞ぐ方法として，窯内に落ち込んでいた小礫を使った。土鍋は天井部の煙り出し部として，底部を打ち欠いて使用した。」としている。土師器の窯詰めの方法は，おそらく甕と平瓦を大きくブロックに割り，それらをたな状に並べて焼き台とし，その上に土師器椀及び小皿を重ねる。たなは，魚住古窯址の窯で，石を組合わせてたな状にしている構造が見られる。この窯址のたなの位置は，床面から約20㎝程の所，すなわち壁が垂直から外反に移る位置であろう。窯詰めの後，天井を作るが，その基礎として，前述の甕の破片を使用したとも考えられる。そして，煙り出しであるが，つくる製品によっては特に煙り出しを必要としないという考え方もある(註-7)。

この窯で生産された土師器は，早島式土器(註-8)であるのかどうか。早島式土器と呼ばれているものの実態は，まだはっきりしていない。あえて定義するならば，備前，備中の南部を中心に古代末～中世の遺跡でよく出土する黄白色と～白色を呈する断面三角形の貼り付け高台を有する椀形土器と小皿の組合せの土器ということができよう。そして時期は平安末～鎌倉時代全般にわたる出土例が知られている。これまで早島式土器と呼ばれているものは，一般に口径は15㎝前後で，口縁部は上方に立ち上り，横ナデし，体部は内湾して外面は粗い指オサエを施し，底部はヘラ切りのものが多い。この窯出土の椀は，はっきりした糸切り底であり，貼り付け高台の断面は，四角形であり，口縁は16㎝近い。したがって早島式土器と似ているのは，黄白色を呈し貼り付け高台をもつ椀であるという点であり，地域差，あるいは時期差と見ることができる。少なくともこの窯出土の土師器椀は，小坂という荘園内における窯であって，早島式土器とは形態と異にしている。この地区以外に今の所出土しているのは前述した和田遺跡だけである。極めて少範囲の流通しか行われていないと思われる。そして時期は，熱残留磁気の測定結果を踏まえ，土師器の形態の特徴から考えて，平安時代後半，すなわち12世紀後半に比定したい。(浅倉)

(註-1) 現地を見て頂いた名古屋大学文学部楢崎彰一氏には多くの教示を得た

(註-2) 昭和44年(復刻版)発行の「早島町史」・に写真が掲載されている。またかって水原岩太郎が早島町字魚津小字小松露で発見された窯址出土品をもって名付けた名称である快舟散史「考古行脚」『吉備考古第32号』昭和12年，西川宏氏の教示による。

(註-3) 「三蔵畑遺跡の調査」『岩田古墳群』岡山県山陽町教育委員会 1976

(註-4) 兵庫県教育委員会「魚住古窯址」現地説明会資料 1979 大村敬通氏には資料の提供，教示を受けた記して謝意を表したい

（註-5） 「屏賀坂遺跡」『北九州文化財調査報告書第23集』北九州教育委員会 1977
（註-6） 上村佳典「屏賀坂遺跡の窯について」地域相研究第４号 1980
（註-7） 現在の大原焼の窯を実見した時，妹尾俊男窯で教示を得た
（註-8） 註-2に同じ

２）２区溝および４区包含層の出土遺物について

沖の店遺跡２区溝内および４区包含層を中心にして出土した中世土器群はこれまで県内ではほとんどまとまった形で紹介されたこともなくただ漠然と中世土器として取り扱かわれてきたにすぎない。そしてその生産址とされた亀山焼の実態に関しても不明瞭な点が多く，甕以外の擂鉢，鍋，羽釜類まで焼成していたかどうかも定かでない。先にも少し触れたが，この数年意欲的に発掘調査が進められている福山市草戸千軒町遺跡は諸々の面で中世遺跡調査の先進的役割を果している。この沖の店遺跡の遺物を考える場合に最も近い遺跡であり相似た土器群を構成する遺構もありその辺から，この沖の店遺跡の性格なり，遺物の組合せなどを考えて見たい。

草戸千軒町遺跡で一つの基準となるＳＤ760とされる溝出土の一括遺物がある（註-7）。この溝からは明応２年(1493年)銘の墨書卒塔婆が見られ，これら出土した土器等は15世紀終末の一括遺物として捉え得る好資料である。この一括遺物の器種構成は皿Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，埦Ａ・Ｂ，杯，鉢，擂鉢（土師質・瓦質・備前）鍋ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ，内耳鍋，羽釜Ｂ，かまど，甕（亀山，備前，常滑），瀬戸おろし皿，中国製白磁，青磁などが出土しており，多少異る点もあるが沖の店遺跡の土器群の器種構成と良く似ている。個々の器種を検討して見ると，この段階で小形の皿Ⅰが主流であったものが，皿Ⅱ，皿Ⅲなど中形・大形の皿が出現し杯とされていたものがなくなる。埦は伝統的な高台付埦（Ｂ）の口径が小さくなり粗雑な作りになる。また高台も逆三角形を呈し，畳付けが役に立たず底部が安定しない器形も見られる。沖の店遺跡でも全く同様の傾向で高台付埦はほとんど見られずむしろ底部を押えた埦（Ｃ-ヘソ皿）が主流である。鉢Ⅰ（Ｓ）―(草戸では鍋Ａとされているもの）（註-8）はＳＤ760以外にはＳＥ1261（註-9)から出土し器種構成から草戸Ⅱ期とされこの時期から，存在し続くものであり，中世全般にわたり変化に乏しい器種と思われる。他の鉢類は今の所草戸では見い出すことが出来ない。圧倒的に多く見られるのが鍋類であるが，特徴的な内耳鍋としたロ縁内側に付く取手付鍋はＳＤ760からＡタイプが１点，近世的ＳＧ832から１点のみで草戸では少い器種である。羽釜Ａは先の内耳鍋が出土したＳＧ832から出土している。また羽釜はＳＤ760(1975)，ＳＥ1155(1977)から２個出土している，一緒に出土している皿とともにＳＤ760より新しい傾向と見ることができるものである。ＳＥ1670（1978）のものは瓦質で端正な作りで体部下半部に格子目叩きが見られる。これもＳＤ760より新しい様相を呈している。

以上沖の店遺跡出土の土器群と，草戸千軒町遺跡ＳＤ760との特徴的な遺物を中心に比較を行って見たが，どの器種を取って見てもほとんど同時的あるいはわずかに後出的要素を持っていると見ることができる。

そして草戸では余り見ることができない器種，たとえば鉢類，擂鉢，火舎，内耳鍋，羽釜などがこ

の遺跡のあるいは備中の特徴なのかも知れない。

次に沖の店遺跡出土の備前焼を見てみたい。先にも少し触れたが，壺，甕，徳利などこの時期の器種が見られるにもかかわらず，擂鉢のみが一点も存在しない事である。この前後の時期には草戸千軒町遺跡のみでなく西日本全域といっていい程広く分布する備前擂鉢がこの遺跡では存在せず，焼き締まって須恵質に近い擂鉢から土師質に近く摺れば土が剝れる様な擂鉢まで含め，この遺跡に近い場所で生産されたと思われるものが使用されているのである。ずっと後の18世紀以降になれば，阿坂古墳前庭部あるいは向原遺跡などでも大量ではないが備前焼の擂鉢が出土している。須恵質・土師質の甕などは江戸期まで残っているのに擂鉢は消失しているようである。

次に数は少いが中国製陶磁器を見てみたい。白磁・青磁など古い段階のもの 2～3 含まれているが，そのほとんどが明の青磁であり，雷文青磁は今まで余り見ることの出来なかった雷文下部がラマ式連弁文ではなく，細蓮弁文が続いているもので亀井氏のいう（註-10）A・Bタイプの中間的様相を呈しているものである。

以上沖の店遺跡出土の土器群を草戸千軒町遺跡出土の土器群を中心にして，この土器群の時期的な問題を追求してみた。そして一つの手係りとして草戸千軒町遺跡ＳＤ760の卒塔婆の年代から，13～14世紀代の古いものも何点か含まれているが，中心的な時期は，幅広いが15世紀後半～16世紀前半の所産と考えたい。（伊藤）

（註-7）「草戸千軒町遺跡―第15～17次発掘調査概要―」草戸千軒町遺跡研究所 1975

（註-8） これは器種として鍋とするのは不適当と思われる

（註-9） 「草戸千軒町遺跡―第21～23次発掘調査概要―」草戸千軒町遺跡研究所 1977

（註-10） 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』1980 雷文青磁は和田遺跡Ｂ調査区（図-34-10p. 38）からも小破片であるが１点出土している

(1) 和田遺跡 遠景 左 B－Ⅲ区・中央B－Ⅰ・Ⅱ区・右A区（南から）

(2) 和田遺跡 遠景 左 宮の脇古墳・中央B－Ⅲ区（南から）

図版 2

（1）和田遺跡 A区全景（北から）

（2）和田遺跡 A－Ⅲ区弥生土壙（南から）

和田遺跡 A調査区中・近世遺構及び遺物

(1) 和田遺跡 B－Ⅰ区 弥生土壙墓群（南から）

(2) 和田遺跡 B－Ⅰ区 第1号土壙墓(左)と第2号土壙墓(右)（南から）

和田遺跡 B－1区 弥生土壙墓

(1) 和田遺跡 B－II区 窯状遺構（南から）

(2) 和田遺跡 窯状遺構の熱残留磁気測定資料採集（北から）

(1) 和田遺跡 B－II区(T－10) 柱穴検出状態（北から）

(2) 和田遺跡 B－II区及びB－I区全景（北から）

図版 8

(1) 和田遺跡 B－II区No50 遺物出土状態（北から）

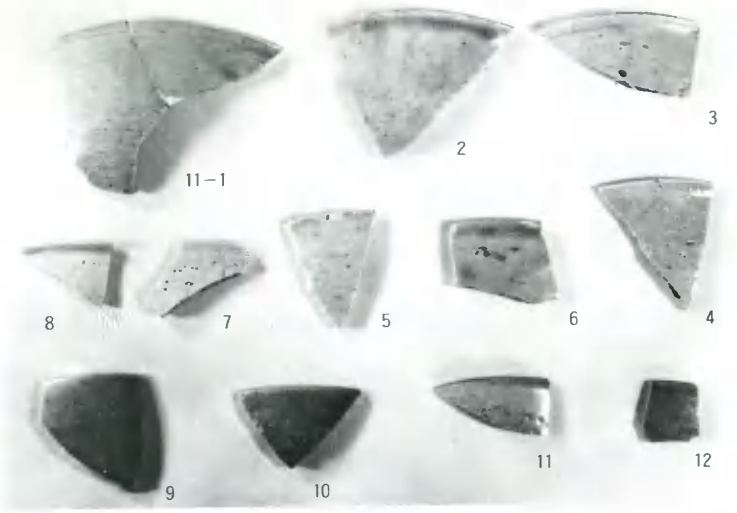
(2) 和田遺跡 B－II区No130 遺物出土状態（南から）

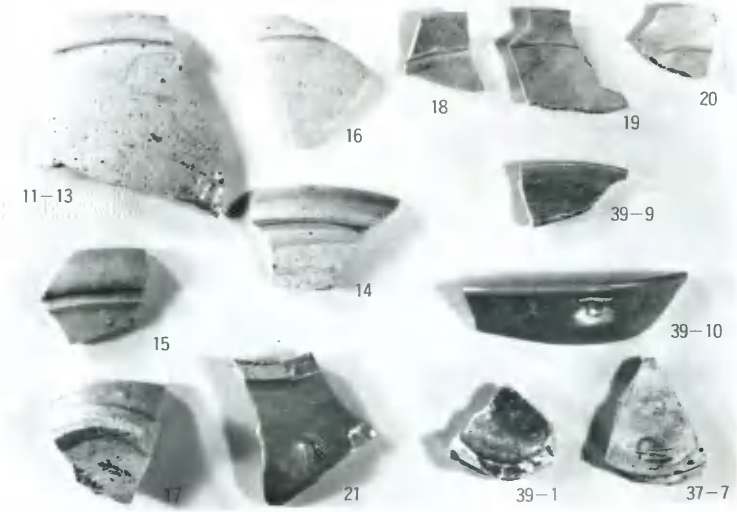
和田遺跡 B調査区 弥生1.2号土壙墓出土遺物

図版10

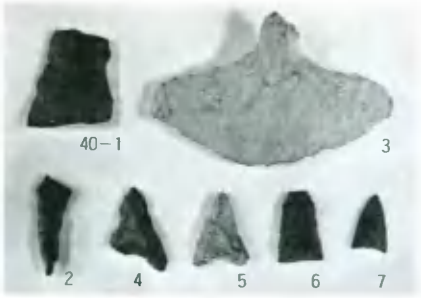
(1) 和田遺跡A調査区 弥生土壙出土遺物

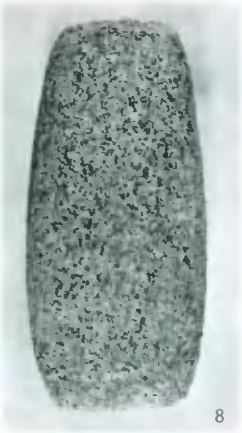
(2) 和田遺跡 出土中世土器

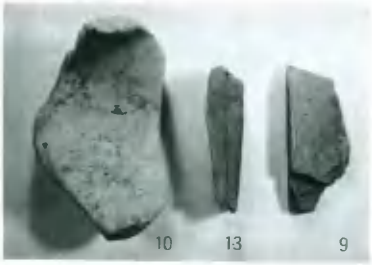


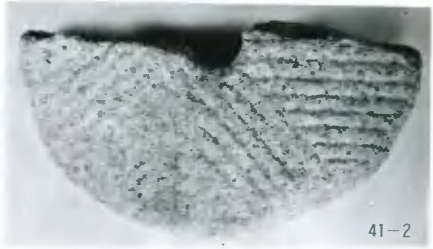


和田遺跡 出土白磁・青磁・緑釉

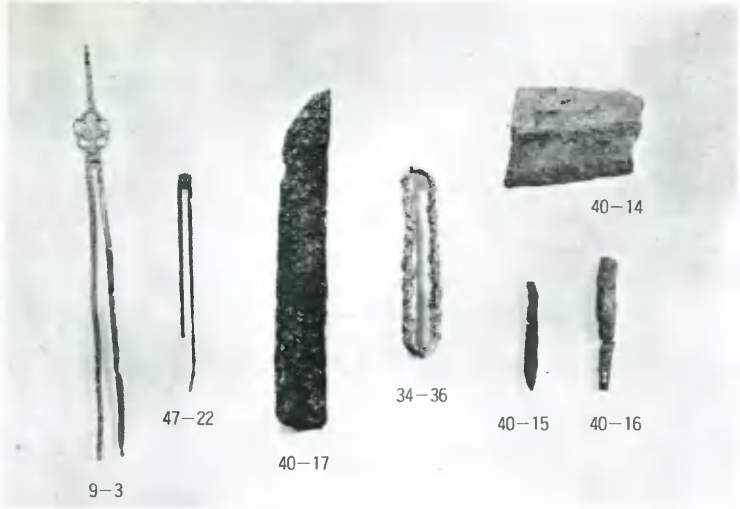




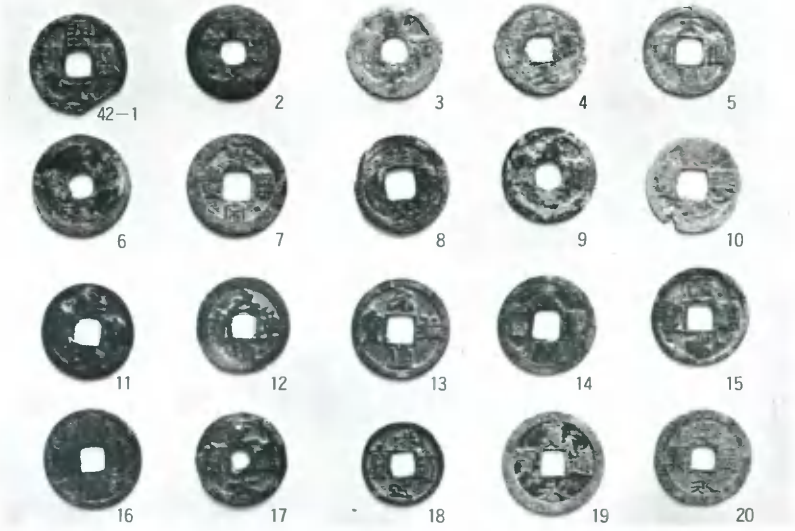




和田遺跡 出土石器



(1) 和田遺跡出土 かんざし・鉄器



(2) 和田遺跡出土 古銭

図版14

(1) 向原遺跡 第1地点全景（南から）

(2) 向原遺跡 第1地点近世土壙（南から）

（1）向原遺跡 尾小見屋敷跡井戸検出状態（北から）

（2）向原遺跡 尾小見屋敷跡井戸掘り方検出状態（北から）

（1）宮の脇古墳 調査前全景（南から）

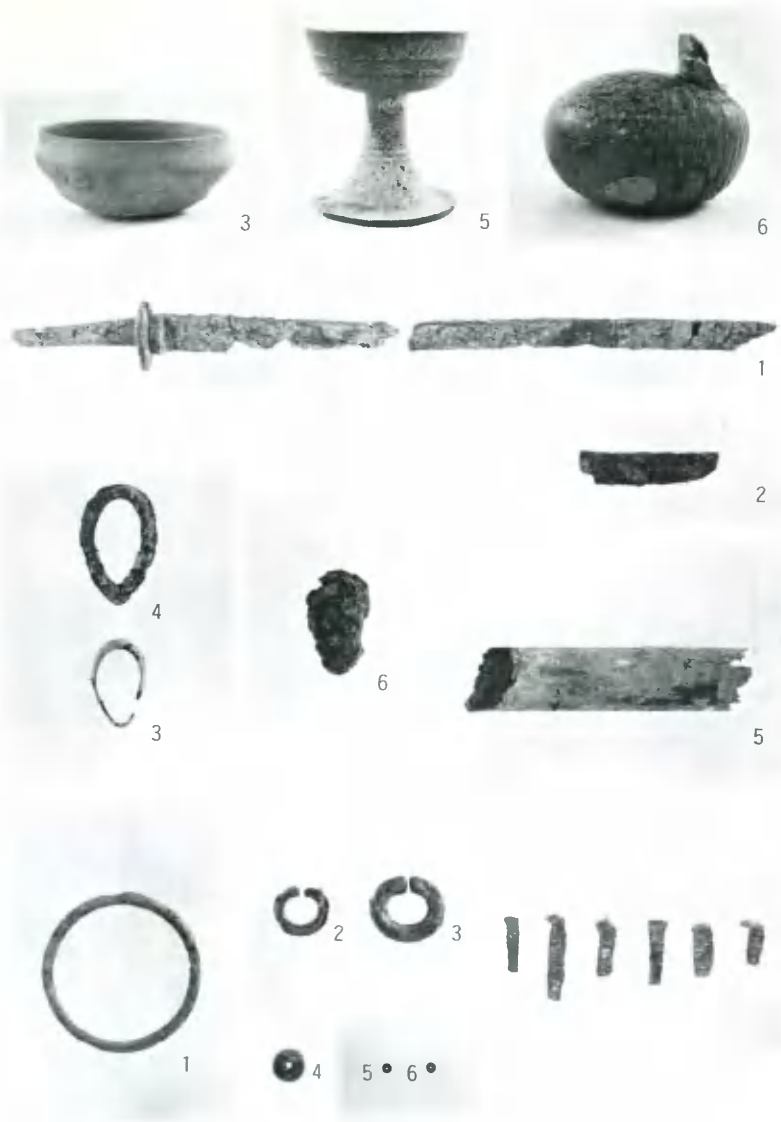
（2）宮の脇古墳 草刈り後全景（南から）

(1) 宮の脇古墳 表土排除後全景（東から）

(2) 宮の脇古墳 遺物出土状態（東から）

(1) 宮の脇古墳 遺物出土状態近接（南から）

(2) 宮の脇古墳 調査終了後全景（東から）



宮の脇古墳 出土遺物

（1）阿坂古墳 草刈り後全景（北から）

（2）阿坂古墳 盗掘凹地（西から）

(1) 阿坂古墳 全 景（南から）

(2) 阿坂古墳 全 景（北から）

図版22

（1）阿坂古墳 全 景（西から）

（2）阿坂古墳 石室内遺物出土状態（西から）

1

2

3

4

9

10

12

5

6

7

8

15

16

17

阿坂古墳 出土遺物(1)

図版24

13

18

19

20

21

1 2 3 4

22

1 2 3

26

河坂古墳 出土遺物(2)

3

4

5

6

7

8

12

16

39

40

21

22

阿坂古墳　前庭部出土近世遺物(1)

図版26

27

14

13

16

31

25

24

28

36

37

阿坂古墳 前庭部出土近世遺物(2)

51

48

39

40

55

56

63

70

69

71

阿坂古墳 前庭部出土近世遺物(3)

阿坂調査区 近世土坑及び出土遺物

（1）小坂東両名散布地 トレンチ調査（東から）

（2）小坂東大畔散布地 トレンチ調査（南から）

図版30

(1) 小坂西沖の店遺跡全景（南から）

(2) 小坂西沖の店遺跡 トレンチ調査（北東から）

(1) 沖の店遺跡 Ⅰ区 調査中（南から）

(2) 沖の店遺跡 Ⅰ区 1号窯検出状態（正面から）

（1）沖の店遺跡 1号窯発掘中（正面から）

（2）沖の店遺跡 1号窯発掘中（左側面から）

(1) 沖の店遺跡 1号窯発掘後（正面から）

(2) 沖の店遺跡 1号窯発掘後（左側面から）

図版34

（1）沖の店遺跡 2号窯検出状態（北から）

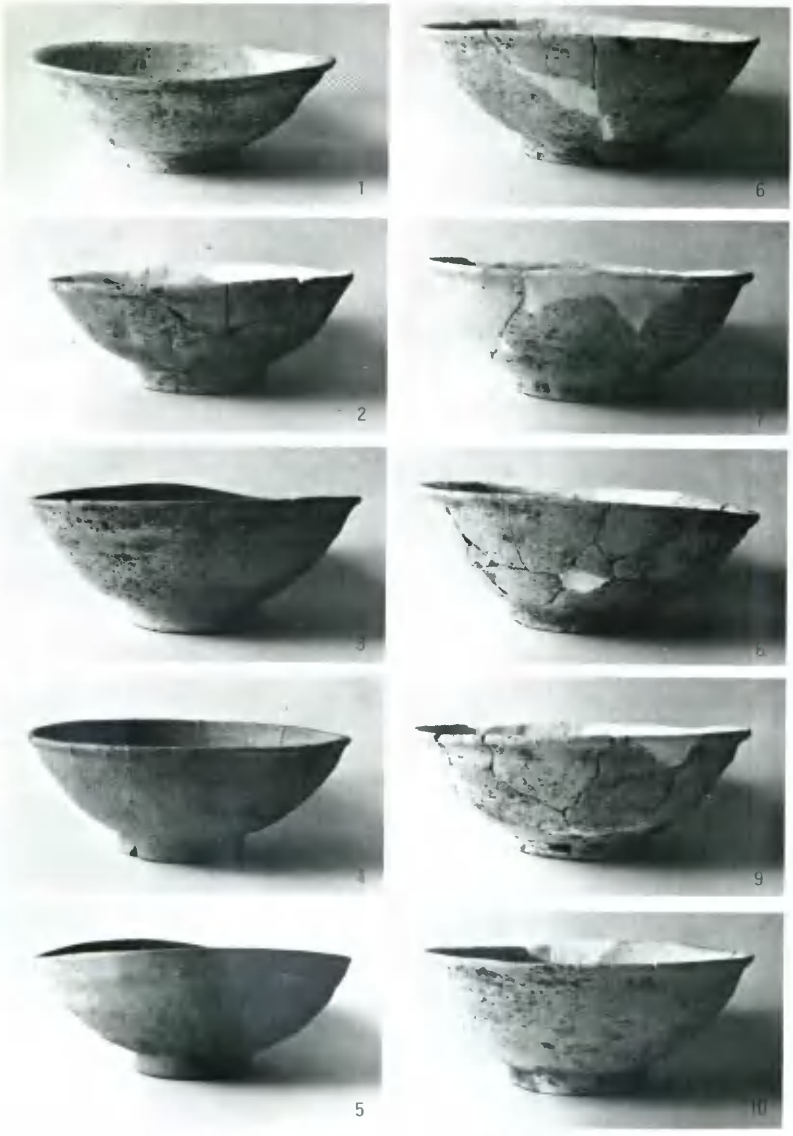
（2）沖の店遺跡 2号窯熱残留磁気測定資料採集（南から）

(1) 沖の店遺跡 柱穴群（北から）

(2) 沖の店遺跡 調査区全景 （南西・正面から）

(1) 冲の店遺跡 2区溝状遺構（東から）

(2) 冲の店遺跡 2区溝内出土土器近接（南から）



沖の店1号窯 出土遺物(1)

11

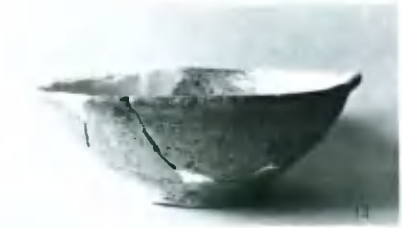
16

12

17

13

18


14

19

15

20

冲の店1号窯 出土遺物(2)

48

48

49

50

55

56

57

58

59

沖の店1号窯 出土遺物(3)

4

11

14

15

16

25

35

36

37

43

45

48

49

50

51

沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(1)

52

65

53

66

57

70

60

68

61

73

63

74

沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(2)

89

98

91

101

64

沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(3)

104

105

113

126

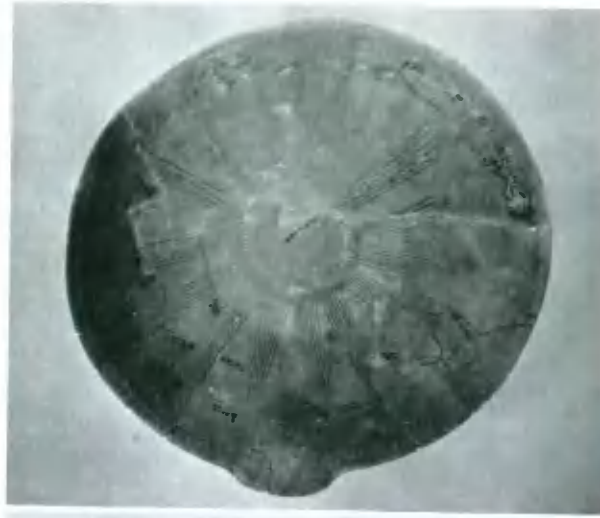
135

137

162

163

沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(4)



沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(5)

176

178

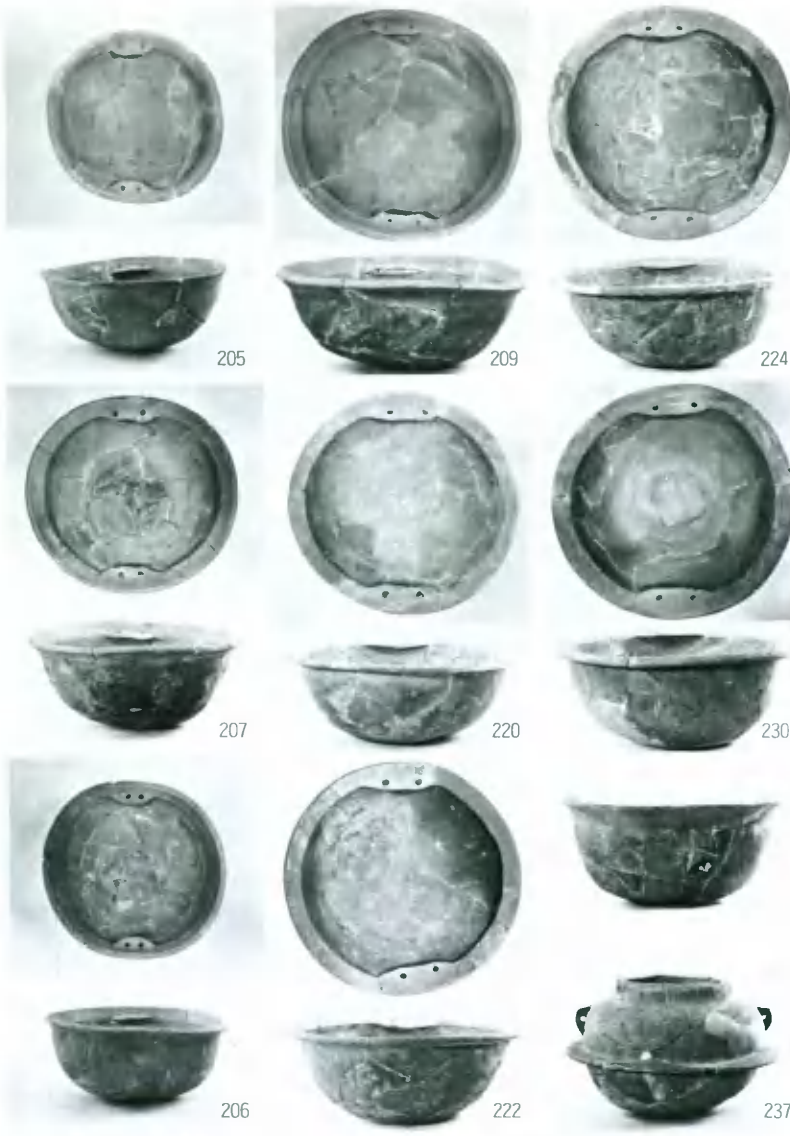
177

179

184

187

193



沖の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(7)

中の店遺跡 2区溝・4区包含層出土遺物(8)

105－1

7

8

3

5

4

2

81－1

2

6

中の店遺跡 出土石器及び古銭

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　42

山陽自動車道建設に伴う発掘調査　2

鴨方町内の遺跡

1981年3月20日 印刷

1981年3月31日 発行

編集　岡山県教育委員会文化課

発行　岡山県文化財保護協会

印刷　山陽印刷株式会社